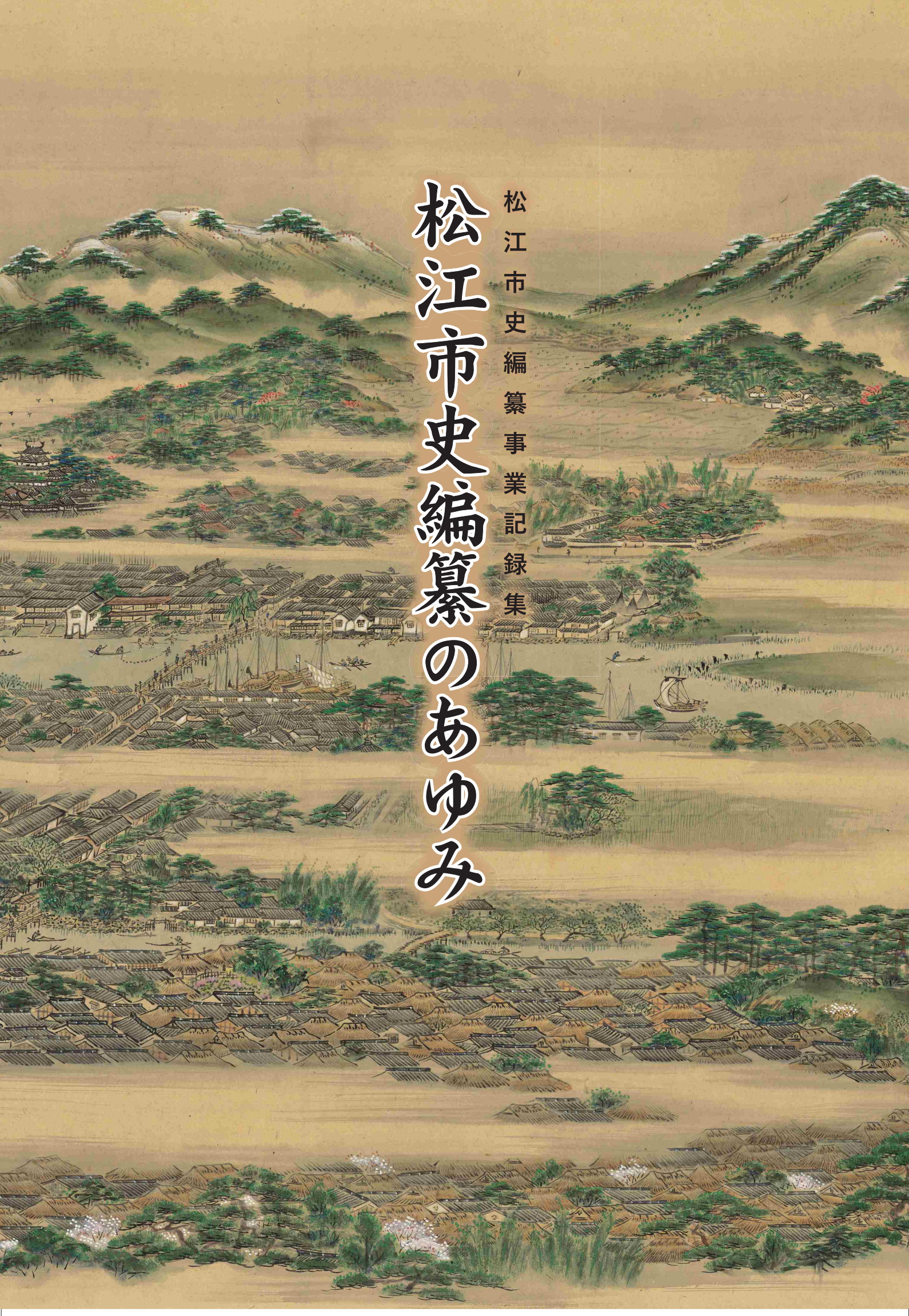
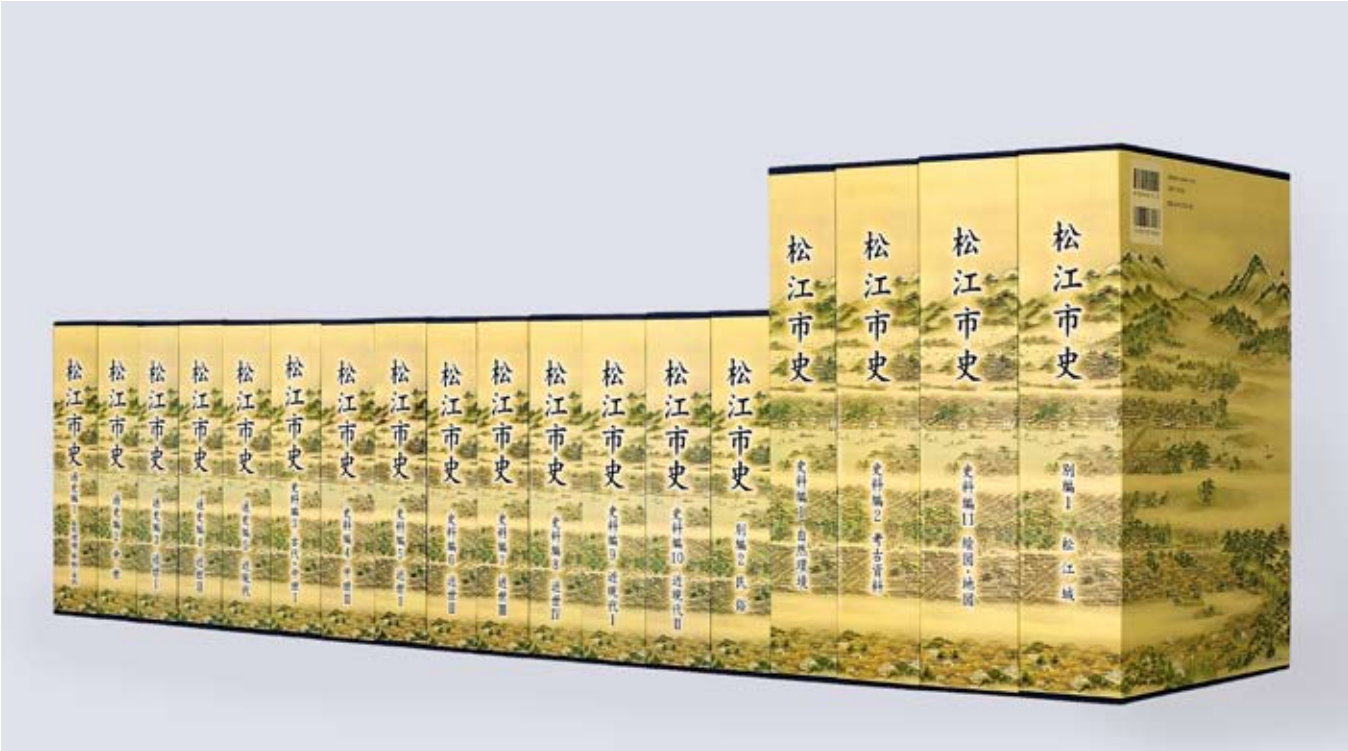


松江市史編纂事業記録集

松江市史編纂のあゆみ

松江市史



『松江市史』全 18 巻

通史編 1 「自然環境・原始・古代」

史料編 4 「中世Ⅱ」

史料編 11 「絵図・地図」

別編 1 「松江城」

付帯出版物

松江市ふるさと文庫など

松江市歴史叢書

松江市文書調査報告書・松江市歴史史料集

発刊にあたって

－松江市史編纂事業を支えていただいた皆様方への御礼－

松江市史編纂につきましては、多くの皆様に 11 年間という長い間、大変お世話になりました。藤岡大拙編纂委員長、井上寛司編集委員長をはじめ、編纂事業に携われた皆様の懸命のご努力に対しまして、深甚なる感謝と敬意を表します。編纂事業の記録集がまとまり、あらためて多くの皆様方のご尽力に感慨をもって振り返っているところです。

初回の松江市史編纂委員会、編集委員会の折には、松江開府 400 年祭の大きな事業として素晴らしい市史を作って行こうと、委員の皆様とともに決意いたしました。また、市史編纂事業という大事業を進めるにあたり、行政側にも大変厳しい心構えが求められました。私どもそれに対して、きちんとお応えできたかは甚だ心許ないところですが、松江市史編纂基本計画に沿って事業は着実に進められ、全 18 巻という充実した市史が完成したところです。

市史編纂事業では、貴重な歴史史料を数多く収集・整理することができました。その過程で、松江城天守の完成年を確定させた祈祷札が見つかったことは大きな出来事であり、これらが決め手となり松江城天守は国宝に指定されました。また、編集委員の皆様を中心に、松江市史講座を連続して開催していただきました。私もマーブル放送で聴講させていただきましたが、先生方には本当に熱心に、松江の歴史を分かりやすく解説していただいたところです。講座内容が映像資料として残っていることも大変有意義なことです。

今回の市史編纂を通じて、松江市の歴史や文化への知見は数段と深くなったと思っております。松江市ではこれからも歴史や文化を生かしたまちづくりを進めてまいりますが、市史編纂での成果はまちづくりの基盤です。

松江市史編纂事業の記録集を発刊するにあたり、市史編纂を支えていただきました関係の皆様方の長い間のご努力に対しまして、市民を代表して厚く御礼を申し上げます。

2020 年 8 月

松江市長　松 浦 正 敬

はじめに

松江市史編纂委員会委員長　藤岡大拙

松江市史が完成した。A5 版 14 冊、A4 版 4 冊、合計 18 巻が並んだ光景は壮観である。明治初期の画家、陶山勝寂の「松江四季眺望図」をあしらった重厚な函におさめられた平均 900 頁余の大冊。自治体史としては、近隣に比をみないほど多巻であるのは、史料編が充実しているからである。

私の経験であるが、そもそも市町村史誌の編纂は、当初の計画通り完成することは、まず皆無である。その理由は一概には言えないが、執筆態勢の脆弱、行政の支援不足などがあげられる。ところが、松江市史編纂の場合は、驚くべきことに、ほぼ計画どおりに進行したのである。毎年開催される編纂委員会で、進捗状況が報告されたが、計画通りに進んでいることに、驚きを禁じ得なかった。

巻数が多く、そして計画通りに完成したとしても、本の内容が薄ければ問題であろう。当市史においては、井上寛司編集委員長を中心に、各部会長の方々が結束し、統一的な理念のもとに編纂作業に邁進された。その理念とは、（１）現段階での研究の最高水準をふまえた叙述。（２）島根縣史の弱点をカバーして、縣史を補完するという立ち位置。（３）できるだけ市民に分かり易い叙述等々であると、私なりに理解しているが、これらの難題はほぼ克服されている。気鋭の研究者を広く動員し、実に 180 余名に及ぶ執筆陣により、計画通り（世間で考えられるよりはるかに早く）完成を見たが、同時に内容的にも現段階で求めうる最高水準のものと確信している。関係者の苦労のたまものである。

事務局の史料編纂課では、執筆の進行にあわせ、定期的な松江市史講座を開催したり、読みやすい松江市ふるさと文庫を刊行するなど、さまざまな方法で、市史研究の成果を市民に提供すべく努力した。

市当局も、決して豊かな財政事情ではなかったが、編纂開始当初の方針を基本的に守って、支援を怠らなかった。編纂課のスタッフも、史料収集、整理などの地道な作業を進め、執筆者を支えた。財政その他でバックアップする市、執筆者の研究を支える史料編纂室 (課)、研究と執筆に専念する執筆者、この三者のコラボが見事に開花した。それが松江市史である。恐らく、今後各方面から高い評価が得られるだろう。

今後は、完成した市史をいかに活用するかが課題である。実は比較的近年、合併以前の町村において、町村誌が作成されている。また、旧市内においても、各町内誌が作成されている。それらは、当該地域の個別具体的な地誌である。今後は市史と各町村誌をうまく活用して、地域における学習活動を展開していただきたいものである。

今、机上に整然と並んだ全 18 巻の堂々たる偉容を見るとき、万感胸にせまって思わず熱いものがこみ上げる。全ての関係者の皆さまに、満腔の敬意を表し、この市史が松江市の発展、ひいては島根県の発展に大いに資することを念じてやまない次第である。

目　次

発刊にあたって
はじめに

第１章　松江市史編纂事業の成果と課題 …… 5
1.はじめに
2.松江市史編纂事業の意義と成果
3.今後に残された課題と留意点

第２章　松江市史ができるまで …… 9
1．新しい松江市史について
2．市史編纂体制の整備
3．市史の構成・出版計画、基礎調査、付帯出版物
4．地域の歴史史料調査（古文書等）
5．人権問題に関わる近世身分呼称等（差別的表現）の取り扱いについて
6．市民のための市史
7．松江市文書館（仮称）の検討と整備構想
8．松江市史編纂事業の継承

第３章　『松江市史』編纂過程をふりかえる　－通史編５「近現代」ができるまで－ …… 37
1．部会
2．通史編の構成
3．出稿から出版まで

【資料１】『松江市史』近現代・通史編執筆要領（改訂版）／【資料2】執筆者による構想レジメ／【資料3】通史編「近現代」スケジュール表／【資料4】史料編纂課事業スケジュール／【資料5】内校を終えた執筆者原稿／【資料6】校正スケジュール進行表（印刷会社作成）／【資料7】執筆者への初校に関するお願い／【資料8】 執筆者への再校に関するお願い／【資料9】近現代史担当者分担別進行表

第４章　松江市史編纂事業の記憶と今後への期待 …… 55
安部己図枝／安部　登／石井　悠／石塚晶子／伊藤康宏／稲田　信／乾　隆明／井上寛司／内田文恵／大矢幸雄／岡崎雄二郎 / 岡部康幸／勝部　昭 / 川岡　勉／河原荘一郎 / 鬼嶋　淳／岸本　覚／喜多村　正／北村久美子／木下　誠／小暮哲也／小林准士／小山祥子／佐藤仁志／佐藤　信／沢山美果子／澤田順弘／宍道正年／高橋真千子／髙安克巳／多久田友秀／竹永三男／田坂郁夫／友森　勉／永井　猛／中井　均／西小克己／西田友広／仁田玲江／能川泰治／長谷川博史／東谷　智／引野道生／福島律子／堀田浩之／松尾信裕／松本岩雄／三宅正浩／村角紀子／森田喜久男／渡辺浩一／和田嘉宥（五十音順）

第５章　写真編 …… 117
1.松江市史編纂事業の始まり（基本計画）
2.松江市史編纂委員会
3.松江市史編集委員会
4.部会長会議
5.専門部会
6.史料編纂課

７. 松江市史、付帯出版物
８. 地域の歴史史料調査（古文書等）
９. 市民のための市史（松江市史講座）
10. 松江市文書館の検討と整備構想
11.『松江市史』完結報告

第６章　資料編 …… 143
【資料１】松江市史編纂基本計画
【資料２】第１回松江市史編纂検討委員会議事録
【資料３】松江市史編纂委員会設置要綱（第１回松江市史編纂員会委員名簿）
【資料４】第１回松江市史編纂委員会議事録
【資料５】松江市史編集委員会設置要綱
【資料６】第１回松江市史編集委員会議事録
【資料７】松江市史文書館（仮称）整備構想
【資料８】松江市史編纂基本計画の実施結果・松江市史講座一覧・松江市史編纂コラム一覧・付帯出版物一覧
【資料９】松江市史編纂体制図
【資料 10】松江市史編纂事務局体制変遷表
【資料 11】松江市史編纂事業全期間における主な活動

松江市史編纂関係者 …… 218

第１章　松江市史編纂事業の成果と課題

松江市史編集委員会委員長　井上寛司

１. はじめに

松江藩の開府 400 年及び松江市制 120 周年を記念して、2009 年度から 10 年間の予定で進められてきた松江市史編纂事業は、2019 年度末を以て無事終了することとなった。

本事業で得た成果をより豊かなものとし、そしてそれらをより有効に今後に活かしていくためにも、本事業が担った意義・成果と今後に残された課題を明確にしておくことは極めて重要だと考えられる。

編集委員会での議論を踏まえながら、私なりの理解に基づいて若干の総括を試みることとしたい。

２. 松江市史編纂事業の意義と成果

主な論点として次の 12 点を指摘することができよう。

①厳しい財政状況の中にあって、松江市長を始めとする松江市当局や市民の皆さまのご理解とご支援により、通史編５巻、史料編 11 巻、別編２巻、計 18 巻という大部な市史の編纂が可能となったこと。

「何のために、どのような市史を作るのか」という、市史編纂の意義と目的については、行政・市民と研究者の３者による事前の協議（「松江市史編纂検討委員会」答申）で確認されたところであるが、行政当局が真摯にその趣旨を受け止め、実行に移すよう努められ、また市民の皆さまも温かくそれを見守り、ご支援いただいたことで、本事業が軌道に乗り、今日を迎えるに至った。関係各位のご理解とご尽力に改めて深く敬意と感謝の意を表したい。

②当初の松江市当局や市民への約束通りに、予定された計画を完遂する運びとなったこと。

子細に見ると、主として財政的な事情から計画の一部を変更したところも認められるが（当初計画した 19 巻の内、指定文化財・建造物などの史料編１巻を削減し、あるいは 2018 年度終了予定を１年遅らせたことなど）、基本的には当初予定した通りに事業を終了する運びになったと評価できる。これは、各専門部会の部会長を初めとする編集・執筆委員や編纂課職員の皆さまのご協力とご努力の賜物であり、改めて深く感謝申し上げたい。

③島根県における初めての本格的な自治体史が完成する運びとなったこと。

ここにいう「本格的な自治体史」とは、次のような諸条件を整えたものをいう。(1) 松江市など当該地域内の悉皆調査と全国的な視野に立った史料の収集活動を踏まえたものであること。(2) 地域住民の目線に立って、地域の側から日本全体や世界を捉え返すとともに、その中に地域を位置付け、地域の持つ全体的な特徴を明確にするものであること。(3) 刊行は、通史編のみならず、その根拠となる史料をまとめた史料編とセットをなすものであること。こうした条件を備えた島根県内の自治体史としては『宍道町史』（通史編２冊、史料編１冊、史料目録２冊）があり、『松江市史』はそれに次ぐものであるが、旧郡域を超える文字通り本格的で大規模な自治体史としては『松江市史』が最初だと評価できよう。

④松江市域内の悉皆的な史料調査によって、多数の新出文書を含む、膨大な文書（絵図等を含む）の存在が確認され、また全国的な視野に立った調査によって、これまた膨大な数の松江・島根地域関係史料（同上）が収集されたこと。

新たに発見された史料の中には、市の文化財の指定を受けたものや松江城国宝化のための決め手となるものなど、貴重なものも多数含まれており、松江市の文化財行政を大きく前進させる重要な役割を担うことにもなった。

⑤本事業を推進するために、東北から九州に至る、約 180 名にも及ぶ全国の研究者に編集委員・専門部会員・執筆者などとしてご参加いただき、学術的にも高いレベルの市史編纂を行うことが可能となったこと。

こうした全国的な規模での各分野の専門研究者とのネットワークの構築は、今後の松江市にとって極めて重要な意味をもつもので、大きな財産でもあると評価することができよう。

⑥以上（とくに③と④）の結果として、島根・松江地域史研究全体のレベルが大きく底上げされ、前進したと評価できること。

とりわけそれが顕著なのは近世史、及び松江城、絵図・地図などの分野だということができよう。

⑦市史の編纂過程を通じて、原始・古代・中世・近世・近現代の各時代、及びそれら全体を通じての松江市域の持つ歴史的な特徴や重要性が明確となってきたこと。

完成された『松江市史』は、「国際文化観光都市」の名に恥じない、その内容を知る格好の案内書としての位置を占めることになったということができよう。

⑧市史の本体のみならず、多様な付帯出版物や、142 回に及ぶ市史講座の定期的開催やシンポジウム、松江市史ホームページ上の松江市史 PLUS・松江市史編纂コラムを初めとする多様な機会・媒体を通して、市史編纂の過程で得られた研究の成果を広く、分かりやすく市民に還元するよう努め、成果をおさめることができたこと。

⑨その結果、本事業の過程を通して、松江市民や島根県民の松江市の歴史に対する興味・関心が大きな高まりを見せ、また松江市に対する愛着も大きな広がりと深まりを見せたと考えられること。

⑩本事業の終了に当たっては、この間に収集されてきた歴史文書と、行政機関などで保管されている現用文書とを合わせて整理・保存・活用するための施設として、新たに「松江市文書館（仮称）」を設立すること、併せてそこでは市史編纂事業を新たな形で継承・発展させていくことが検討され、「松江市文書館（仮称）整備構想」（第 6 章資料 7）が策定されることで、将来への展望と具体的な活動内容・方向性が明確なものとなったこと。

⑪以上のような、本事業全体を成功に導く要因の１つとして、各専門部会の部会長を初めとする編集・執筆委員の皆さまの積極的な本事業へご協力とともに、その活動を下支えする、しっかりとした編纂室体制が整えられ、その機能が最大限に発揮されたことがあること。

一般的にいって、自治体史の編纂室は次のような３つの機能や側面を合わせ持つことが重要と考えられる。(1) 専門的な知識と技術を持って編纂事業を支え、推進する研究補助的な機能と役割。(2) 市民・地域住民の種々の意見や要望をくみ上げ、これを編纂事業に反映する、いわば市民の代表、ないし窓口としての役割。(3) 市民・研究者と行政当局三者間の日常的な連絡・調整や事務的処理、あるいは情報の収集・整理・発信などを含め、編纂事業全体の効果的でスムーズな進展を推進する、編纂事務局としての機能と側面。松江市の場合、宍道町での経験や教訓を活かすことによってこれに関わる高い到達点を示したことは、全国的にも大いに注目されるところといってよいであろう。

⑫以上に指摘した全体が、島根県における自治体史編纂の１つのモデルケースというべきものとして、ここに蓄積されたノウハウが今後島根県史や市町村史の編纂を進めていく際の、かけがえのない重要な共有財産となっていくのは疑いないところと考えられること。

３. 今後に残された課題と留意点

この点において、まず何より重要なことは、最終年度を迎えた本事業を滞りなく完遂するよう努めることにある。同時に、本事業終了後の活動内容を見据え、それに向けた準備を進めるよう心懸けること

も重要である。

今後の活動という点では、とくに次の４点が重要だといえよう。

その第１は、行政と専門家とで協議・検討を進めた「松江市文書館（仮称）」の設立を間違いなく実現すること、そのためにも設立（市庁舎の建て替えとの関連もあって、具体的な内容は現状ではなお未定）と運用に向けた諸準備を滞りなく進めることにある。諸準備という点では、特に次の点が重要となろう。

①松江市史編纂事業が終了する前（2019 年度中）に、歴史文書と現用文書の整理・保存・活用という、文書館の設立を念頭に置いた新しい組織についての検討を進め、文書館の設立にスムーズに移行できるよう、体勢を整えること。

②中・長期的な展望に立ちつつも、市庁舎建て替えまでの当面の間、緊急避難的に仮の中間書庫を設けるなどして現用文書と歴史文書の保存・管理に遺漏がないよう努めること。とくに、市庁舎建て替えにともなう現用文書の移動の間に、その所在が分からなくなる危険性も高まると予測されるところから、それを回避するよう努めることはとりわけ重要となろう。

③総務部など関係部署とも連携しながら、文書館の設立に向けた条例や諸規程の制定に取り組むこと。

④文書保存・廃棄の選択基準や選択方法などについての検討を進めること。(5) 編纂課職員のスキルという点でも、アーキビストの資格取得や必要な研修の受講など、文書館の設立に対応できる条件を整えるよう努めること。

第２に、新設文書館の今ひとつの重要な任務として市史編纂事業の継承と新たな形での発展があることを踏まえ、その具体化に向けた取り組みを進めることも重要である。そしてこの点では、とくに次のことに留意しておく必要であろう。

①松江市域内の悉皆的史料調査（必要に応じて島根県全域及び全国にも対象を広げる）は未だ道半ばであり、引き続き系統的で自覚的な作業を進めていく必要がある。この表記は、前項（意義と成果）第３項と矛盾しているようであるが、古代・中世を除く近世・近現代史、とりわけ近世史分野に関しては、残念ながら未だ初歩的な段階に留まっていると考えざるを得ない。加えて、急激な過疎化と社会全体の流動化の進行の中で、失われゆく歴史資料は跡を絶たず、早急の対応が強く求められている。また、近世・近現代史分野の史料に関しては、史料編としての取りまとめ（解読と活字化）が、同じく大きく立ち後れており、この点の克服も早急に取り組むべき重要な課題といえる。

②これらの新たに収集された史料を用いて、松江地域のさらなる歴史分析（調査・研究）を進めていくことも重要である。そのためにも、客員研究員制度を新設するなどして、市史編纂事業を通して構築された全国の研究者とのネットワークを活かしていくよう努めることも重要となろう。

③ 2019 年度末を以て市史の本体は完成する運びとなったが、その内容を分かりやすく市民に伝えるという点では、未だ多くの課題が残されたままとなっていて、早急にその具体化と実行に努める必要がある。そのために、市史の内容をテーマごとに分かりやすく読み解いた「ふるさと文庫」を初めとする多様な付帯出版物や、同じく多用な形での副読本、あるいは市史の全体を取りまとめた「松江地域史事典」の編纂なども検討の必要があろう。しかし、それらと並んで、あるいはそれ以上に重要だと考えられるのは、市史の内容そのものをより分かりやすく伝える独自の方法を編み出していくことにある。その１つは、市史そのものを用いた学習会で、執筆者によるより踏み込んだ記述内容の説明や、市民の皆さまからの質問に答える形での市史の読み込みなど、独自の新たな方向を追求していくことが求められるであろう。それは、これまで行ってきた「松江市史講座」を新設の「松江市文書館（仮称）」に相応しい形に衣替えし、新たな形で再出発を図っていくこととも密接に連動し合っている。

④以上に指摘した、新設文書館での種々の取り組みは、いずれも「市民・地域住民こそが地域史学習の

主体」との理念に基づいて進められるもので、その理念を目に見える形で具体化していくことも重要となる。上述した「『松江市史』を読む会」を初めとする多様な学習サークルやボランティア活動の組織化など、市民・住民への直接的な学習支援体制の構築が求められるであろう。

第3に、新設の「松江市文書館（仮称）」が既存の松江歴史館や松江市立図書館・松江市まちづくり文化財課（埋蔵文化財調査室を含む）・松江城調査研究室・各種地域資料館、あるいは島根県立古代出雲歴史博物館・島根県古代文化センター・島根県立図書館（郷土資料室）・島根県公文書センターなどとそれぞれどのように機能を分担し、連携し合ってくのか、この点を明確にするよう努めていくことも重要である。また、「松江市文書館（仮称）」は高度で専門的な知識と技術を持つ職員の配置を不可欠とすることに鑑みるならば、将来的には上記以外の島根県や県内他市の専門職員との人的交流なども視野に入れた柔軟な対応なども必要となってくるであろう。

第4に、前項（意義と成果）の最後に指摘したこととも関わって、10年余に及ぶ松江市史編纂事業の全体を記録に止め、事業内容と成果を他の自治体史編纂事業との比較の中で検証しうる材料として全国に提供するとともに、市史編纂事業のノウハウが島根県全体の共有財産となるよう、冊子にまとめておくことは重要である。本書『松江市史編纂のあゆみ』及び、松江市史ホームページ掲載文をまとめた『松江市史編纂コラム』はその一つである。『宍道町史』の編纂後に取りまとめられた『プロジェクト－『宍道町史』をつくった人々と支えた人々－』（2005年3月）も参考となろう。

（2020年1月20日記）

第２章　松江市史ができるまで

１．新しい松江市史について

（１）松江市史編纂事業の始まり

松江市史編纂事業が始まるきっかけは、平成 19 年（2007）4 月から始まる「松江開府 400 年祭」だった。かねてより安部登氏、乾隆明氏ら地元有識者と歴史研究者などの熱心な働きかけもあり、松江開府 400 年祭の基本計画（平成 19 年 3 月 29 日策定）に「松江市史及び松江開府 400 年祭記念誌を編纂する」と盛り込まれた。松江開府 400 年祭の基本計画に掲げられたことで、平成 18 年（2006）度から松江市教育委員会文化財課内で市史編纂の検討が始まったが、所管は市長部局が持つべきという意見も市役所内にはあり、課題は平成 19 年度に持ち越された。

平成 19 年（2007）4 月の松江市人事異動で、文化財課長、文化財課長補佐（係長）の交代があり、具体的な計画と人員体制、予算規模等を文化財課長、補佐を中心に福島律子教育長、友森勉理事とで練り直すこととなった。教育委員会内と市役所内（市長部局）での検討を経て、平成 20 年（2008）4 月の組織改編で文化財課内に史料編纂係が新設され、事業の準備態勢が整った。同年 7 月 4 日には松江市史編纂検討委員会（藤岡大拙委員長）が設置され、同年 10 月 20 日に藤岡委員長から「松江市史編纂基本計画」が松浦正敬市長に答申された（松江市は同日付で行政計画として策定）。この基本計画の策定を受けて、松江市史編纂事業の骨格が定まり、年度内に予算・人員体制の準備が進み、平成 21 年（2009）4 月の組織改編で、係から昇格した史料編纂室が文化財課内に設置され、松江市史編纂事業は始まった。

（２）松江市史編纂検討委員会の設置

平成 20 年 4 月に史料編纂係が新設されると、市史編纂事業の計画作りのための検討会（松江市史編纂検討委員会）を設けることとなった。検討委員会を開催するにあたり、同年 5 月 13 日に専門家として自治体史編纂に豊富な経験のある井上寛司氏と、事務局（文化財課長、文化財課長補佐、文化財課副主任、史料編纂係長、史料編纂係専門官）で、市史編纂の考え方について論点整理の協議を行った。

協議では、①県都である松江市は全国的な学問レベルを見据えた全国に通用する市史を編纂する必要がある。②宍道町史での多様な取り組みを参考に、松江市「誌」ではなく、歴史的な検証を通して未来への方向性を模索する新たな松江市「史」を編纂する必要がある。③通史編だけでなく史料編も編纂する。通史編は執筆者のその時点の歴史解釈であり変わり得るものであるが、史料編は不変なものであり通史編の根拠史料となることから重要である。史料編は一次史料で編纂する必要がある。④執筆にあたり、市史では掲載しきれない詳しい論拠・史料の補筆、市民への市史編纂過程の提示などのために、研究紀要を発行する必要がある。⑤原始古代史、中世史は従前の研究の蓄積がある現状から、それを基本として史料編、通史編を編纂する。⑥島根県の近世史、近現代史の学問状況から全国的な学問レベルとするためには、全国の一線で活躍している研究者に執筆してもらう必要がある。全国から研究者を招くにあたって、骨格は地元の小林准士氏（近世）や竹永三男氏（近現代）が作る必要がある。⑦近世、近現代の史料の量は膨大である。通史編を作成するにあたっては、史料調査と史料編をふまえて編集する必要がある。⑧松江開府 400 年祭の期間であり、歴史資料館（松江歴史館）も整備中であることから、近世史料編の初号は早く出版し市民に関心をもってもらいたい。⑨学問分野ごとに専門部会を組織し、執筆内容・執筆陣を調整する必要がある。⑩市史編纂事業をやり抜くために、経験を有する強力な事務局体制を作る必要がある。ということが話し合われた。協議の内容は教育委員会内での議論を経て、検討委員会に提案する事務局案の原型となった。

第 1 回検討委員会は、平成 20 年（2008）7 月 4 日に開催され、委員として地元有識者委員 5 名（安部

登、乾隆明、岡部康幸、木幡修介、藤岡大拙)、専門委員５名（自然環境・高安克己、原始古代・勝部昭、中世・井上寛司、近世・小林准士、近現代・竹永三男)、行政委員５名（友森勉教育委員会理事、川原良一総務部長、原厚財政部長、森秀雄観光振興部長、杉谷充久教育委員会副教育長)、委員長に藤岡大拙氏、副委員長に井上寛司氏、友森理事が選出された。第１回検討委員会では市史編纂の方針や市史の内容等について検討し、第２回検討委員会（8 月 28 日）では第１回の議論をもとにとりまとめた市史編纂基本計画（素案）について検討し、第３回検討委員会（10 月８日）では第２回の議論をもとに作成した基本計画（案）について検討し、委員会としての答申案が決定した。また、検討委員会に提案する基本計画（案）は、井上副委員長と専門委員からなる小委員会で原案をまとめることとなり、3 回（7 月 25 日、7 月 31 日、9 月 30 日）の開催があった。平成 20 年 10 月 20 日に藤岡委員長から「松江市史編纂基本計画」が松浦正敬市長に答申され、以後、この計画に沿って松江市史編纂事業は実行に移された。（敬称略：第６章資料２参照）

（３）松江市史編纂基本計画（松江市史編纂の必要性と目的、松江市の目指す新しい市史）

平成 20 年 10 月 20 日に松浦正敬市長に答申された「松江市史編纂基本計画」の概要は次のようなものだった。【全文　第６章資料 1】

松江市史編纂の目的

①松江開府 400 年を契機とした大事業として、松江市域における最新の地域史研究の成果を集結させた、県都にして国際文化観光都市である松江にふさわしい「全国･世界に誇れる、史料編に重点を置く『松江市史』」を後世に伝えていく。また、松江歴史館の開館に併せ、松江藩の歴史については重点的に取り組む。

②松江市に関係する歴史史料をこの機会に全国的視野で徹底的に調査･収集･保存･資料化（体系的整理）することで、今後の史料の散逸を防き、その活用を図る。

③時代の変化に対応していくため、地域の過去の歩みを明らかにすることによって、現在を見つめ直し、そこから地域と地域に住む人々の進むべき未来を見とおしていく。

松江市史の編纂方針

【通史編について】

通史編については学問的に信頼されるものであり、最新の歴史学研究の成果を盛り込んだものでなくてはならない。史料編を踏まえて通史編が執筆されるという歴史学の学問的方法（事実に基づいて過去を総括する）をとり、執筆にあたっては、歴史学研究の到達点を踏まえ、現在の学問レベルを反映できる専門家が中心となる。また、松江市域という地域の側に視点を据え、全国的・世界的な視点から見た松江市の持つ地域的独自性を解明すると同時に、松江市の歴史をとおして日本・世界を問い直し、一方で日本・世界の歴史の中に松江市の歴史を位置づけるよう試みる。

【史料編について】

市民が地域に残された史料（資料）を基に地域を見直し、顕彰し、未来を見とおすためには通史編だけではなく、史料編に重点を置く必要がある。この松江市史における史料編には、次の４つの性格をもたせる。

①史料そのものの現在における歴史的総括

現時点で史料の所在を可能な限りくまなく確認し、その史料を活字化して網羅することで、歴史の検証を可能にし、後世へ史料を引き継ぐことができる。そのためには、「史料編」は永久性・普遍性をもたなければならない。

②「通史編」叙述の根拠の明示

「通史編」が歴史的事実に基づき記述されているという根拠を示すものである。

③市民のための歴史研究の基礎資料

原文そのままの史料では一般には難解なため、句読点、返り点等を付し、内容によっては解説などを付ける必要がある。

④松江藩とその時代の歴史の重視

松江開府 400 年を契機に編纂を開始するこの松江市史では、これまで十分な史料調査がされていないため明らかにされてこなかった松江藩の歴史を解明するため、可能な限り多くの史料を掲載する。

【別編について】

松江城といったあるテーマで特筆すべきものは、本編と史料編をあわせた別編として編纂する。

【市民のための市史】

新しい市史は、市民のための市史を目指すものであり、その成果は逐次公開される必要がある。市史編纂事業の終了時には、地域の歴史を活かす観点と、史料保存の意識が松江市民に備わっていることを目標とする。そのためには、執筆者は編纂過程で市民との座談会や講演会等により意見交換や情報提供するなど、市民とともに市史を作り上げる必要がある。なお、学問的なレベルを確保し、歴史的検証に耐えうる市史とするためには、市民に分かり易いものにするとしても限界があるため、市民向けの付帯出版物や松江の将来を担う子供向けの副読本などを出版する必要がある。

市史編纂上の基礎調査と付帯出版物

①基礎調査

市史編纂を行っていくために、次の基礎調査を実施する必要がある。基礎調査の実施にあたっては、史料編纂室が主としてあたる。（記録史料悉皆調査、松江城調査、松江市域での図書出版物調査、石造物調査、建造物調査、戦争体験調査、新聞記事採録調査、統計史料調査、民俗調査、地名･伝承調査、自然環境調査）

②付帯出版物

市史編纂を行っていくために、次の付帯出版物を出版することが効果的である。（松江市ふるさと文庫、松江市歴史叢書（市史研究）、松江市歴史史料集、松江市史副読本、松江市歴史年表・松江市史索引）

出版計画

松江市史編纂検討委員会で検討された出版計画では、通史編 5 冊、史料編 11 冊、別編 3 冊の合計 19 冊、冊子に加えてデジタル化が望ましい史（資）料やデータはデジタル化して CD や DVD などの媒体でも刊行すること、平成 21 年（2009）度から平成 30 年（2018）度までの 10 年計画が予定された。（松江市の財政状況、編集上の都合により数度にわたり出版計画は修正され、結果的に全 18 巻、令和元年 （平成 31、2019）度までの出版事業となった。）

編纂体制の整備

①松江市史編纂委員会　②松江市史編集委員会　③執筆委員会　④史料編纂室

２．市史編纂体制の整備

（１）重層的な編纂体制

平成 21 年（2009）4 月に史料編纂室が設置され、事務的な諸手続きと委嘱予定者の内諾を得て、第 1 回松江市史編纂委員会が開かれたのは同年 6 月 15 日、編纂委員会を受けて第 1 回松江市史編集委員会が開かれたのは同年 6 月 21 日だった。

「市史編纂基本計画」に基づき、市史編纂事業を進めていく体制は重層的な仕掛けになっている。松江

市史編纂委員会、松江市史編集委員会、部会長会、専門部会、史料編纂室（課）（事務局）という、一見複雑であるが、効果的に機能した。編纂委員会は、市民・専門家・行政が一体となって市史を作り上げるために、地元有識者、専門研究者、行政（事務局）で構成され、編集委員会は、市史の編集を行うために各分野の専門研究者で構成し、市史全体の編集、史料（資料）調査・整理の総括を役割とした。部会長会は、編集委員会のもとに置かれた８つの専門部会の部会長（編纂委員会の専門委員）で構成され、部会長は各専門部会の構成員（部会員、執筆者）の選定、担当巻編集のための具体的な企画・立案を役割とした。専門部会は、自然環境、原始古代史、中世史、近世史、近現代史、絵図・地図、松江城、民俗の８つの部会があり、編纂計画に基づく市史各巻の編集を行うため、内容の検討、史料の調査・整理、執筆を役割とした。

松江市史編纂委員会、松江市史編集委員会、部会長会の開催日程は市史編纂事業の進捗に対応するように年間を通してバランスよく組まれており、編纂事業全体の進捗管理や内容調整を行うのに機能した。松江市史編纂委員会、松江市史編集委員会、部会長会、専門部会、史料編纂室（課）が一体的かつ有機的に機能したことは、市史編纂事業がほぼ当初計画通りに終了した大きな要因だったと考える。

（２）松江市史編纂委員会

松江市史編纂委員会は、市史編纂とその成果を市民と共有していくための基本的事項を検討するとともに、編集委員会で編集される市史について市民視点で検証するために、市民、専門家、行政の代表から構成された。市長が委嘱する 15 名以内の編纂委員で組織し、地元有識者、松江市文化財保護審議会会長、自然環境・原始古代史・中世史・近世史・近現代史・民俗・歴史地理（絵図・地図）の専門家、松江市副市長で構成された。委員の任期は２年を基本とし、若干の交代はあったが市史編纂期間中は再任により継続的にお願いした。

平成 21 年（2009）6 月 15 日に開催された第１回編纂委員会は、市民代表として地元有識者５名（安部登、乾隆明、岡部康幸、藤岡大拙）と市文化財保護審議会会長（木幡修介）、専門家代表（専門委員）として自然環境・原始古代史・中世史・近世史・近現代史・民俗の６名（高安克己、勝部昭、井上寛司、小林准士、竹永三男、喜多村正）、行政代表（行政委員）として松江市副市長（小川正幸）が出席し、委員長に藤岡大拙氏、副委員長に井上寛司氏と小川副市長が選出された。初回議題は①松江市史編纂基本計画、②松江市史の構成と出版計画、③松江市史編纂体制、④平成 21 年度事業計画であった。以後、編纂委員会は毎年松江市の予算要求前に開催され、次年度計画と市史編集状況等について慎重な審議が行われた。なお、平成 22 年（2010）度からは副市長が担っていた行政委員は不在となり、事務局である教育長、担当部長、次長、課長（室長）が行政代表として審議に臨むこととなった。（敬称略）

（３）松江市史編集委員会

松江市史編集委員会は、市史編纂事業の具体的な内容の企画・立案・実施、市史の編集、史料（資料）調査・整理の総括を役割とした。市長が委嘱する 25 名以内の編集委員で組織し、委員は編纂委員会の専門委員、編纂委員会が必要と認める各分野の専門研究者で構成された。委員の任期は２年を基本とし、市史編纂期間中は再任により継続的にお願いした。編集委員会には８つの専門部会が置かれ、各巻の編集はほぼ専門部会に委ねられており、編集委員、各専門部会員の選考は、各専門部会の部会長の推薦によった。

平成 21 年（2009）6 月 21 日に開催された第１回編集委員会では、委員長に井上寛司氏、副委員長に小林准士氏が選出され、初回議題は、①第１回松江市史編纂委員会（6 月 15 日開催）の報告（松江市史編纂基本計画、松江市史編纂体制、松江市史の構成と出版計画、平成 21 年度事業計画）、②松江市史各巻の体裁、③史料編「近世Ⅰ」の構成・掲載史料・体裁であった。以後、編集委員会は年度の早い時期の５～６月頃に開催され、その時点の市史編集状況を確認し、当該年度計画と編集上の課題等について

審議が行われた。(第６章資料６参照)

（４）専門部会と部会長会

編集委員会には、自然環境、原始古代史、中世史、近世史、近現代史、絵図・地図、松江城、民俗の８つの専門部会が置かれた。専門部会は、松江市史編纂基本計画に基づく市史各巻の編集を行うため、史料の調査、内容の検討、執筆を役割とした。専門部会員（専門委員）は各分野の編集委員及び部会長が推薦する者で、編集委員を兼ねない専門部会員の委嘱には編集委員会での事前了承を要件とした。また、部会長の判断により、専門部会員の他にも市史の執筆依頼が出来るものとした（執筆者)。松江市史編纂事業では、各巻の編集はおおむね専門部会に委ねられ、部会長には大きな権限と責任が与えられていた。

部会長会は、各専門部会を代表する部会長８名で構成され、編集委員長の招集で随時開催された。編集委員会が年１回の開催であることから、市史編纂中に生じる様々な課題について、編集委員会に代わる審議機関として、また編纂委員会、編集委員会に提案する議題の事前協議機関として機能した。

市史の編集は平成 21 年（2009）４月より始まり、令和２年 （2020）３月に終了した。市史編纂事業全期間を振り返ってみても、松江市史の編集にあたっては、編集委員会、部会長会、専門部会による全体調整、厳しいスケジュール管理等の事業内管理（自己管理）は厳格で、大変有効に機能した。事業初期に生じた出版計画の見直し（後述）以外は、編集方針、執筆内容等についての行政側からの管理（行政管理）は無く、「行政は経費は出すが、編集は専門家を信頼し任せる」という姿勢が貫かれ、専門家と行政との間には強い信頼関係が保たれ続けていた。

（５）松江市史編纂事務局体制と史料編纂室（課）

松江市史編纂基本計画に基づき、市史編纂事業を円滑に遂行していくために、平成 21 年（2009）４月に史料編纂室が設置された。計画どおり短期間で作業を進めていくために、基本計画では史料編纂室に求められた職務として、①市史編纂上必要な事務の実施。②中世、近世、近代文書の悉皆調査とその解読作業。③執筆者の求めに応じた史料収集の補助。④市史編纂が住民とともに進められるような企画（講演会開催、編纂経過報告の発刊等）を松江歴史館とともに実施。⑤市民・住民の代表として「市民のための市史」となるためのチェック機能。とされた。また、これらの職務を実施するために、史料編纂室には市史編纂担当者、及び古文書解読能力を備えた専門職員の配置が必要。ただし、史料編纂室のスタッフのみでは、膨大かつ広範囲にある史料の調査及び解読に限界があるため、史料調査・解読作業の一部をその能力のある外部へ委託する必要性がある。なお、史料の保管や調査・解読作業などが行えるように、史料編纂室には十分なスペースが必要となる。とされた。

具体的には、①市史編纂事業の統括（行政･専門家との連絡調整、事業の進捗管理、重要課題への対応、編纂委員会・編集委員会の運営と情報提供、各専門部会の運営支援、編纂委員・編集委員・専門委員との連絡調整、講座開催･付帯出版物刊行･付帯調査の実施等各種事業の企画と推進など)、②市史の編集・出版（原稿の集約・管理、執筆者と印刷業者との連絡調整、頒布など)、③史料調査・整理、④市史編纂事業の周知（松江市史講座の開催、ホームページ開設、報道・広報・広告対応など)、⑤市民との窓口、⑥事務的機能（予算の管理・執行、その他庶務など）など、事業実施に伴う多様な職務であった。

松江開府 400 年祭の基本計画に掲げられたことで松江市史編纂の検討が始まり、平成 19 年（2007）度から具体的な計画と人員体制を文化財課を中心に教育委員会内で練ることとなった。教育委員会内での綿密な検討を経て、平成 20 年（2008）４月の組織改編で文化財課内に史料編纂係が設置され、係長１名（島根県より派遣)、専門官２名、嘱託職員３名が配属、事業推進の実務・庶務は文化財課文化財係職員が担い、史料編纂係職員は史料調査を先行的に行うこととなった。平成 21 年（2009）４月には松江市教育委員会文化財課内室として史料編纂室が設けられ、松江市史編纂事業が始まるが、その時の編纂室体

制は、室長１名（文化財課長兼務）、主任編纂官１名（嘱託）、専門官１名（嘱託）、専門調査員４名（嘱託）で、文化財課内から副主任１名を張り付けるという応援体制をとっていた。翌 22 年（2010）４月からは文化財課からの応援体制を止め、専任室長（市職員）、専任副主任１名（市職員）が新たに置かれ、専任室長１名、専任事務担当（市職員）１名、専門調査員６名（嘱託）という 10 年間に及ぶ編纂体制の基本が整った。

平成 26 年（2014）４月の組織変更により、史料編纂室が属する文化財課は教育委員会から市長部局（新設の歴史まちづくり部）に移管され、まちづくり文化財課と名称変更された。これに伴い史料編纂室も「松江市教育委員会文化財課史料編纂室」から「松江市歴史まちづくり部まちづくり文化財課史料編纂室」という長い名称に変更された。

平成 28 年（2016）４月の組織変更により、史料編纂室と松江城国宝化推進室（松江城調査研究室と改称）を統合し、史料編纂課が新設された。平成 27 年（2015）８月に松江城天守が国宝に指定されたこともあり、地域の歴史を明らかにする調査・研究のさらなる推進と、国宝化推進を担った「松江城国宝化推進室」の組織改編が求められたことによるもので、史料編纂室を課に昇格させ、松江城国宝化推進室を調査研究組織（松江城調査研究室）に改編し史料編纂課内室とすることとなった。史料編纂課に昇格したとはいえ市史編纂事業を進める事務局員体制（人員）は変わらず、その頃、編纂事業後をにらんだ文書館整備に向けての業務も生じ始めたり、課長の業務量が増えてきめ細かい調整が出来にくくなったり、職員の長期休暇（産休）などに伴う人事異動が重なったりなどし、史料編纂課内も大変な状況であったが、行政的には「室」から「課」に昇格することは相応の理由を要し権限や庁内発言力も拡大するところであり、市史編纂事業に対しての期待や評価が市役所内や市民の間で高まった結果と承知していた。

市史編纂事業を進める事務局員体制（人員）は、22 年（2007）４月に専任室長（市職員）、専任副主任１名（市職員）、主任編纂官１名（嘱託）、専門調査員５名（嘱託）が置かれて以降、国の緊急雇用制度の活用や本庁との連絡（送達便）のための臨時的な増員はあったが、基本的に減員はなく平成 24 年（2012）からの職員体制が最後まで維持された。振り返ってみても、市史編纂事業は多忙であり激務であり、各自のライフサイクルや家庭事情に応じた職員交代や復帰はありつつも、史料編纂室（課）スタッフの誰一人欠けても最終の形にはならなかったと思う。

史料編纂室（課）の執務室は、当初内室として文化財課執務室内にあった。平成 21 年（2009）度は市役所第二別館４階、平成 21 年度７月に松江市環境センター（松江市環境部）２階に移動、執務室に併せて別室で調査室、図書室が確保された。環境部の移転に伴い平成 24 年（2012）10 月に現在の松江市環境センターに移動（松江市学園１丁目 20 番 43 号、文化財課と別置）、平成 28 年（2016）４月には組織改編に伴い内室となった松江城調査研究室執務室を整備した。

史料編纂室（課）では、定期的な室会（課内会議）を開催した。市史編纂事業が始まる前後は、文化財課職員と共同で事業にあたっていたこともあり、議題があると集まる不定期な会議であったが、編纂事業が本格的に稼働するようになると、事業の進め方やスケジュール管理などで議題も多くなり全員参加の日程調整も大変なことから、平成 22 年（2010）頃から曜日と時間を予め決めておく定期的な室会を設けることになった。市史編纂事業の事務局である史料編纂室（課）では、スタッフの専門性に応じた担当部会が室（課）長以下全員に割り当てられ、部会担当者は執筆者との連絡、調査等の調整、編集スケジュールの管理、執筆原稿の督促・点検・入稿・校正手続きなどまで責任を持つという、目標達成型の組織編制を組んでいた。定期的な室会（課内会議）は、忌憚のない議論の中で史料調査や編集経験を共有するという効果があり、最初は本の編集など経験したこともなかったスタッフも、執筆者の性格を

見抜き、周到なスケジュール管理と調査・執筆・校正の補助を苦もなくやり遂げる辣腕の編集者に育っていった。（第３章参照）

「松江市史編纂事業全期間中における主な活動」（第６章資料 11）にあるように、松江市史編纂検討委員会が設置された平成 20 年（2008）から編纂事業が終了した令和２年（2020）３月までに、各種会合、調査、講座の開催等は 1000 回あまりに及ぶ。多い時は編集のために関係者に毎週のように集まっていただき、原稿の調整と内容確認（査読）を行っていた。“編集者は鬼にならなくてはならない”との井上編集委員長の言葉を胸に、時には遅れがちな原稿の催促に、心ならずも厳しい言葉も使わなくてはならない苦しさもあった。

事務局体制の変遷は（第６章資料 10）のとおりである。事務局体制は松江市長を最高責任者とし、２名の副市長、教育長、担当部長・次長、担当課長・室長、史料編纂室（課）職員という構成である。行政組織は人事異動等により属人的には数年単位で変わるものの、事業全期間を通して異動なく務めたのは市長、史料編纂室（課）長、主任編纂官であった。

松浦正敬市長は歴史愛好家としても知られ、松江市ふるさと文庫は全巻読んでおられたと聞いたし、松江市史講座も時折拝聴しておられたようで、講座内容がメールマガジン「だんだんかわら版」などで紹介されることもあった。歴史に造詣が深いため、突然出される歴史系の「質問」や「市長指示」には、しばしば戸惑った。松江市史編纂事業には好意的で、新しい発見や質問事項への調査結果を市長室で説明すると、とても熱心に聞いていただき、楽しく質疑応答をさせていただいた。市史編纂方針の中途変更もなく、「編集は専門家を信頼し任せる」という姿勢が貫かれ、順調に進んだのも、一人の市長の任期内に事業を完結できたことも大きな要因かもしれない。『松江市史』18 巻の市長挨拶（発刊にあたって）の全顔写真も、初巻出版のために平成 22 年（2010）に秘書課から提供された１枚である。

史料編纂室（課）職員の構成は、大まかにいえば、島根県立図書館（郷土資料室）での勤務経験を有する者、宍道町史編纂事業の経験を有する者、退職補充に伴い部会長より紹介があった者などで構成された。県立図書館郷土資料室は、図書、雑誌、新聞、地図、CD、DVD 等、島根県に関する資料を収集・公開する機関で、職員は地域の歴史史料の知識や先駆的な調査方法、人的ネットワーク等についても豊富に持ち合わせていた。史料調査にあたっては、多様な保存状況の史料を限られた時間内で対応する実践的な知識・技術とともに、安藤正人氏ら国文学研究資料館関係者指導による緻密で先駆的な調査・保存方法などが松江市史編纂事業での調査手順の基盤となった。また、事業的には、宍道町史編纂事業での経験は松江市史編纂事業の土台であった。宍道町史編纂事業は平成９年（1997）から平成 16 年（2004）にかけて平成合併前の宍道町で行われた事業で、井上寛司氏（町史編纂副委員長・執筆委員長）、高安克己氏、竹永三男氏、西尾克己氏、小林准士氏には、宍道町史の編纂委員・執筆委員として深く関っていただいており、松江市史編纂事業でもそのまま編纂検討委員・編纂委員・編集委員・部会長として中心的な役割を担っていただいた。編纂・編集体制、住民・専門家・行政による連携、古文書悉皆調査、各種基礎調査、付帯出版物、講座等による情報発信、行政内手続きなど、松江市史編纂事業は宍道町史編纂事業の継承、拡大版だったと言える。市史編纂事業が始まるまでの県立図書館郷土資料室、宍道町史編纂事業という２つの経験を、平成 19 年（2007）度段階での内部検討により市史編纂体制と事務局に組み込めたのは、松江市史編纂事業がほぼ当初計画（松江市史編纂基本計画）通りに進み、成果を収めることが出来た大きな理由であったと思う。

（６）市史編纂事業を支えていただいた多くの協力者

松江市史編纂事業の推進には、市史編纂委員会、市史編集委員会、部会長会、専門部会、史料編纂室（課）という、重層的な仕掛けが効果的に機能した。一方、『松江市史』を作り上げる 10 年余りの過程では、様々

な場面で多くの協力者に支えていただいた。膨大な質・量の史料調査を行う場合、史料編纂室（課）の専門調査員だけでは対応できないので、古文書翻刻等、専門的知識を持つ方に依頼し、パート職員として定期的に通っていただいた。大量の史料撮影も職員で対応できなくなると、島根大学生にアルバイトで撮影をお願いするとともに、写真愛好家である伊藤孝一氏に相談し、（株）江友による撮影業務を委託することとなった。史料調査にあたっては、多くの場合、乾隆明氏（編纂委員）ほか関係の皆様のご紹介・仲介があり、史料所有者とのトラブルは記憶になく、史料の掲載にあたっても所有者には快く承諾していただいた。文書の読みやすさなどについては、安部登氏（編纂委員）や乾隆明氏などに、市民目線でたびたび原稿を読んでいただきご意見を頂戴した。松江市史講座の開催にあたっては、会場においでいただいた受講者（ﾃｷｽﾄ受講含む）は平成 23 年 7 月より令和 2 年 3 月までの 142 講座で延べ約 25、000 人、マーブル放送での受講者はおそらくその数倍だったと思うが、毎回行ったアンケートには市史編纂事業への建設的なご意見や励ましのお言葉をいただいた。紙面では十分書き尽くせないが、市史編纂事業は多くの皆様に支えていただいた。心より感謝を申し上げたい。

（７）市史編集印刷業者の選定と業務

平成 21 年（2009）4 月に設置された史料編纂室としては、松江市史の編集印刷業者の選定は市史編纂事業全体に影響する大きな事務手続きであった。第 1 回配本となる史料編「近世Ⅰ」は平成 22 年（2010）度発刊で準備が進んでおり、入稿から製本まで 5 回の校正を経ると概ね 1 年を要することから、平成 21 年度中には印刷業者の選定を終える必要があった。松江市史編纂事業は宍道町史編纂事業での経験を土台としており、印刷業者選定にあたっても、自治体史、特に史料集の出版実績を持ち、単なる印刷ではなく細かな版組み編集や歴史編纂の社内校正が的確に出来る業者を想定していた。市史編纂事業では多種多様な業務を短期間のうちに適切に進める必要があり、予算や人員に制約がある中では、編集上の補助機能がしっかりした印刷業者を選定することを執筆者である専門家からも強く求められていた。そのため、史料集を含む自治体史編纂に豊富な経験を持つ全国的な大手業者複数を候補として、プロポーザル審査による選定準備を進めていた。ところが、行政内手続きを進めていく中で、全国的な大手業者だけではなく地元印刷業者も参入できるよう、競争入札による業者選定へと変更となった。同時に、平成 20 年（2008）度時点での庁内議論が不十分であったとし、平成 22 年（2010）4 月から 8 月にかけて松江市の行政組織内（庁内）で行われた松江市史編纂事業の見直し作業（小川副市長をトップとする総務部、財政部による編纂計画の抜本的な見直し）により、出版計画を含む松江市史編纂事業の計画変更が行われた。検討の結果、出版計画の変更、事業費総額の縮減に併せ、業者選定の手続きが財政部（契約検査課）を中心に厳密に検討・提示され、それに沿って業者選定は進んだ。

選定手順は、先ず入札事務のために自治体史編纂に豊富な経験をもつ全国的な大手業者（㈱ぎょうせい）に「松江市史編集印刷仕様書・契約書作成業務」を委託し、作成された松江市史編集印刷仕様書は内部検討を経て、松江市史編集印刷仕様書審査委員会（藤岡大拙委員長、井上寛司委員、小林准士委員）で内容審査をしていただき、決定した。この仕様書に基づき入札参加希望業者を募り、実績適合審査にかなった 3 社により入札が行われ、平成 22 年（2010）12 月 10 日に今井印刷㈱松江営業所に松江市史編集及び印刷製本業務を発注することに決定した。

今井印刷㈱は、はじめ史料編を持つ自治体史編纂の経験は少なかったが、編集にあたって幾たびの協議と試行錯誤を重ね、結果的には 3 回の入札（H22、H25、H28）に応札、落札され、松江市史全 18 巻の編集印刷業務を受けていただいた。出版巻を重ねるにつれて社員の校正力が向上したことが実感でき、本の仕上がりは良かった。担当していただいた永見真一氏（現社長）には度重なる無理なお願いや課題に冷静・適切に対応していただいた。

（８）松江城天守創建に関わる祈祷札の発見と事業の安定化

松江市では、「松江開府 400 年祭」の開催をきっかけに、「松江城天守を国宝に」という機運が再び高まっていた。このような中、平成 24 年（2012）5 月 21 日、市史編纂事業の一環として行っていた市内寺社史料調査により松江神社で 2 枚の祈祷札が発見され、「慶長十六年正月吉祥日」の墨書は松江城天守完成年を示す決定的な一次史料となった。この祈祷札は城戸久氏が昭和 12 年（1937）に確認して以来所在不明だったもので、昭和 41 年（1966）に『仏教芸術』に掲載されたことで存在が知られるようになっていた。松江市はこの祈祷札に 500 万円の懸賞金をかけて探していたこともあり、以後、祈祷札の発見は市史編纂事業による地道な調査の成果、と市役所内でも好意的に受け止められるようになった。

地道な調査活動により市民の念願がかない、史料調査の必要性を説明するときに、「祈祷札の発見」は少ない言葉でも理解してもらいやすい好事例だった。

３．市史の構成・出版計画、基礎調査、付帯出版物

（１）松江市史の構成と出版計画の変遷

①最初に計画された市史の構成と出版計画

平成 20 年（2008）10 月 20 日に松浦正敬市長に提出された「松江市史編纂基本計画」では、通史編 5 冊、史料編 11 冊、別編 3 冊の全 19 冊の『松江市史』が予定された。また、出版にあたっては、執筆原稿の締め切りは出版年度の前年度末とすること、通常 1 か年度で自治体史を複数冊出版することは困難であるため、また、印刷・発行を円滑にするため、自治体史の出版実績、歴史の基礎知識や校正能力等が十分にある印刷業者を選定する必要があるとされた。なお､冊子に加えてデジタル化が望ましい史(資)料やデータはデジタル化して CD や DVD などの媒体でも刊行するものともされた。最初に計画された市史の構成と出版計画は次のとおりであった。

［通史編］1 巻「自然環境・原始・古代」、2 巻「中世」、3 巻「近世」、4 巻「近代」、5 巻「現代」

［史料編］1 巻「地質、自然環境」、2 巻「原始・古代」、3 巻「中世Ⅰ」、4 巻「中世Ⅱ」、5 巻「近世Ⅰ」、6 巻「近世Ⅱ」、7 巻「近世Ⅲ」、8 巻「近世Ⅳ」、9 巻「近代」、10 巻「現代」、11 巻「古絵図・地図」

［別編］1 巻「松江城」、2 巻「松江の文化財」（松江市内の指定文化財、建造物、石造物、図書解題等）、3 巻「民俗編」

［最初に計画された出版計画］

平成	［通史編］	［史料編］	［別編］
22 年度		「近世Ⅰ」	
23 年度		「原始・古代」	「松江の文化財」
24 年度		「中世Ⅰ」、「近世Ⅱ」	
25 年度		「中世Ⅱ」、「古絵図・地図」	
26 年度	「自然環境・原始・古代」	「近世Ⅲ」	
27 年度	「中世」	「近世Ⅳ」	
28 年度	「近世」	「近代」	
29 年度	「近代」	「現代」	「松江城」
30 年度	「現代」	「地質、自然環境」	「民俗」

②平成21年（2009）10月改定の出版計画（第1回改訂）

平成 21 年 6 月 21 日に第 1 回松江市史編集委員会が開催され、続いて 8 つの専門部会か設けられ、松江市史の構成及び出版計画について各専門部会を中心に編集上の観点から改めて検討が行われた。その結果、通史編については「近世」を 2 分冊とし、「近代」「現代」を合わせて 1 冊とすること、史料編に

ついては「原始･古代」のうち考古資料を A4 版とする必要から「考古資料」として独立させ、古代（文献史料）は「中世Ⅰ」と合わせて１冊とすること､「古絵図･地図」は「絵図･地図」とすること､「近代」「現代」は「近現代Ⅰ」「近現代Ⅱ」とすること、別編については「松江の文化財」「民俗」の出版年を変更することとなった。平成 21 年 10 月に変更された出版計画は次のとおりである。

［出版計画（第１回改訂）］（斜体は変更部分）

平成	［通史編］	［史料編］	［別編］
22 年度		「近世Ⅰ」	
23 年度		*~~「原始・古代~~考古資料」*	*~~「松江の文化財」~~*
24 年度		「*古代（文献）*・中世Ⅰ」、「近世Ⅱ」	
25 年度		「中世Ⅱ」、「~~古~~絵図・地図」	
26 年度	「自然環境・原始・古代」	「近世Ⅲ」	*「民俗」*
27 年度	「中世」	「近世Ⅳ」	
28 年度	「近世Ⅰ」	*~~「近代~~近現代Ⅰ」*	
29 年度	*「近世Ⅱ」*	*~~「現代~~近現代Ⅱ」*	「松江城」
30 年度	*~~「現代~~近現代」*	「地質・自然環境」	*~~「民俗」~~* *「松江の文化財」*

③平成22年（2010）10月改定の出版計画（第2回改訂）

市史編纂事業は平成 21 年（2009）4 月から実施しているところであったが、平成 20 年（2008）度時点での庁内議論が不十分であったとされ、平成 22 年 4 月から 8 月にかけて松江市の行政組織内（庁内）で行われた松江市史編纂事業の見直し作業により、出版　計画を含む市史編纂事業の計画変更が生じた。

庁内検討による見直し内容は、［発行巻数］19 冊→ 18 冊、1 巻（松江の文化財）を減じる。なお、松江市では過去の記録を整理した史料編 11 巻の発行を計画しているが、今回の市史編纂の狙いはここに重点を置いているので、通史編・史料編とも削減は行わない。［刷部数］2、000 部→ 500 部。更に需要があれば受注者により増刷・販売する。［販売価格］A5 判 1 冊 5、000 円、A4 判 1 冊 7、000 円。いずれも約 800 頁。目録印刷の取りやめ、調査経費等の節減なども実施する。［総事業費について］財政課において事業期間中の事業費を単年度ごとに精査し、総事業費の上限を設定する。［編集、印刷契約について］松江市史の編集印刷業務は、アウトソーシング（外部委託）を活用し、製作経験の豊富な業者に競争入札で発注する。瑕疵責任を明確にするため編集・印刷（印刷は地元業者に配慮）は一括発注とする。編集委員が期待する品質を確保するためには、市史編集業者選定委員会によって具現性のある発注のための「仕様及び契約書」を審査する。仕様書及び契約書は専門業者に委託し作成する。［地元業者への配慮］編集・印刷業務における地元業者への印刷発注、販売・広告・発刊イベント等。というものであった。

平成 22 年の庁内での市史編纂事業見直し作業により、市史出版計画から「松江の文化財」を取りやめること、松江市の印刷部数は一律に 500 部とすること（更に需要があれば受注者により増刷・販売する）、販売価格は A5 判 1 冊 5、000 円、A4 判 1 冊 7、000 円とすること、総事業費の上限を設定すること、編集印刷業務は一括発注とすることが決定した。平成 22 年 10 月に変更された出版計画は次のとおりである。

［出版計画（第２回改訂）］（斜体は変更部分）

平成	［通史編］	［史料編］	［別編］
22 年度		「近世Ⅰ」	
23 年度		「考古資料」	
24 年度		「古代・中世Ⅰ」、「近世Ⅱ」	

25 年度		「中世Ⅱ」、「絵図・地図」	
26 年度	「自然環境・原始・古代」	「近世Ⅲ」	「民俗」
27 年度	「中世」	「近世Ⅳ」	
28 年度	「近世Ⅰ」	「近現代Ⅰ」	
29 年度	「近世Ⅱ」	「近現代Ⅱ」	「松江城」
30 年度	「近現代」	「地質・自然環境」	~~「松江の文化財」~~

④平成26年（2014）10月改定の出版計画（第3回改訂）

近世史部会から史料編の編集が連続しており、通史編執筆に伴う史料の読み込み等のために通史編の出版を延期したい旨の要請があり、また、厳しい財政事情や編集上の都合も生じていたことから、単年度ごとの支出バランス（印刷費、執筆謝金等）と編集状況、編集印刷業者との契約事項（債務負担行為など）を考慮し、関係部会長とも協議しつつ出版計画の見直しを行うこととなった。平成 26 年 10 月に変更された出版計画は次のとおりである。

［出版計画（第 3 回改訂）］（斜体は変更部分）

平成	［通史編］	［史料編］	［別編］
22 年度		「近世Ⅰ」	
23 年度		「考古資料」	
24 年度		「古代・中世Ⅰ」、「近世Ⅱ」	
25 年度		「中世Ⅱ」、「絵図・地図」	
26 年度	「自然環境・原始・古代」	「近世Ⅲ」	
27 年度	「中世」	「近世Ⅳ」	*「民俗」*
28 年度		「近現代Ⅰ」	
29 年度		「近現代Ⅱ」	「松江城」
30 年度	*「近世Ⅰ」「近世Ⅱ」*		
31 年度	*「近現代」*	*「地質・自然環境」*	

⑤平成27年（2015）10月改定の出版計画（第4回改訂）

厳しい財政事情や編集上の都合により、単年度ごとの支出バランス（印刷費、執筆謝金等）と編集状況、編集印刷業者との契約事項（債務負担行為など）を考慮し、関係部会長とも協議しつつ出版計画の見直しを行うこととなった。平成 27 年 10 月に変更された最終の出版計画は次のとおりである。

［出版計画（第 4 回改訂）］（斜体は変更部分）

平成	［通史編］	［史料編］	［別編］
22 年度		「近世Ⅰ」	
23 年度		「考古資料」	
24 年度		「古代・中世Ⅰ」、「近世Ⅱ」	
25 年度		「中世Ⅱ」、「絵図・地図」	
26 年度	「自然環境・原始・古代」	「近世Ⅲ」	
27 年度	「中世」	「近世Ⅳ」	「民俗」
28 年度		「近現代Ⅰ」	
29 年度			「松江城」
30 年度	「近世Ⅰ」		
31 年度	*「近世Ⅱ」*、「近現代」	~~*「地質・*~~自然環境」、*「近現代Ⅱ」*	

以上のように、松江市史の出版は当初計画（松江市史編纂検討委員会で立案された松江市史編纂基本計画）から 4 回の変更を経て完結に至る。初回の変更は平成 21 年（2009）6 月から編集委員会が設置され、

専門部会を中心として現実的な検討が行われた結果の計画変更であった。

2 回目の変更は平成 22 年（2010）に生じた行政側からの変更要請であった。渦中ではとても大変な思いをしたが、結果的には行政組織内（庁内）で行われた市史編纂事業の徹底的な点検と見直し作業を経たことで、以後、行政側から市史の編集方針や内容等に対して特段の意見は無かった。また、財政部による出版計画・総事業費の徹底的な点検を経ていたことや、祈祷札発見などの好印象もあり、松江市の厳しい財政事情の中にあっても、事業費計画（市史編纂総事業費概算）に沿って要求した各年度の事業費は基本的に確保されるという現象となった。また、事業期間を通して、事務局職員の減員も無かった。

一方､3 回目､4 回目の変更は松江市の財政事情や､専門部会の編集上の事情による出版調整（計画変更）である。市史編纂事業と市史出版の着実な進捗につれて行政内の理解は深まっていたが、松江市の財政状況は平成合併後 10 年目あたりから急速に厳しくなり、事業終盤では市の厳しい財政事情と各専門部会の編集事情を両睨みしながらの微妙な出版調整（計画変更）であった。

当初 10 年計画で始まった松江市史編纂事業は、最終的に出版計画を 1 年延長して終了した。事業の当初､「市史の編纂というものは計画通りいかないもの。どうせ予定通りにはならないだろうから、気長にやりなさい」とのアドバイスを意外と多くの方からいただいた。ありがたく受け止めたが､「松江市史編纂基本計画に沿って計画どおり事業を進める事が大切で、基本計画、出版計画は市民と専門家と行政との基本的な約束」という、井上寛司松江市史編集委員長の厳命があった。市史編纂事業に関わっていただいている専門研究者(執筆者)は最終的に約 180 名にのぼったが､市史編纂基本計画に沿った『松江市史』の出版及び基礎調査が出来たのは、史料編纂室（課）が徹底した厳しいスケジュール調整（管理）に沿っていただいた、専門研究者の皆さんの熱意に他ならない。先生方の個性を見抜きつつ、膨大な史料調査や編集作業､事務手続きなどに責任をもって効率的に遂行する史料編纂室（課）スタッフにも恵まれた。

なお､「松江市史編纂基本計画」では、冊子に加えてデジタル化が望ましい史（資）料やデータはデジタル化して CD や DVD などの媒体でも刊行するものともされており､『松江市史』では、史料編「自然環境」、史料編「近現代Ⅰ」、別編「民俗」で必要なデータを DVD 、CD で添付した。

今後、特に史料集の広範囲の利用による「松江研究」の深化を考える場合、市史の販売状況を勘案しながらではあるが、著作権の許す限り出版後 10 年くらいを目途に PDF などでのインターネット上での公開を実施していくことが必要であり、そうなることを願っている。

（２）基礎調査（記録史料悉皆調査、松江城調査、松江市域での図書出版物調査、石造物調査、建造物調査、戦争体験調査、新聞記事採録調査、統計資料調査、民俗調査、地名・伝承調査、自然環境調査）

基礎調査は、市史編纂基本計画に､「市史編纂を行っていくために、次の基礎調査を実施する必要がある。基礎調査の実施にあたっては、後述の史料編纂室が主としてあたる」とされ、市史編纂事業の進捗に合わせ、執筆者と編纂室（課）職員が調査にあたった。市史編纂基本計画に記された調査項目は、粗密はありながら概ね実施し､その成果は史料編､通史編に反映するとともに､松江市歴史叢書（市史研究)､松江市歴史史料集、文書調査報告書としてまとめたものもある。以下、調査の概要を記す。

①記録史料悉皆調査(地域の歴史史料調査(古文書等))＊106､721点の文書調査(令和元年12月現在)

［乙部家等古文書史料調査］乙部家をはじめとする家老、藩士を中心に、松江藩政史上重要と思われる史料の目録作成（7、683 点)。『乙部家等古文書史料調査目録』刊行（H19 ～ 21 国補助事業)。

［松江市内寺社史料調査］承諾いただいた松江市内にある寺社の史料の目録作成（13、065 点)。『松江市内寺社史料調査目録』刊行（H22 ～ 25 国補助事業)。

［市役所・旧町村・公民館・区有文書調査］旧町村・公民館文書の所在確認を実施。『松江市内公民館等所蔵文書調査目録』刊行。区有文書は情報提供のあったところについて、目録作成。市役所（本庁･

総務課蔵）公文書の一部調査。

［松江藩家老三谷権大夫家文書調査］三谷家の蔵には膨大な史料が残されていた（13、366 点）。平成 13 年（2001）度から平成 23 年（2011）度にかけて「仮目録」を作成→三谷家文書は松江歴史館に寄託。平成 24 年(2012)度から松江歴史館での閲覧や展示に活かせるよう、整理作業を実施。『概要調査報告書』刊行（H17.3）。

［その他、個別対応調査］随時、文書等の所在情報の提供を受け、目録作成、写真撮影を実施。『大保恵日記』『新番組列士録』『御産献立控帳』など歴史史料集刊行。

②松江城調査（別編「松江城」等に掲載）

［絵図調査］松江市域に関わる絵図・地図の悉皆的調査を実施。史料編「絵図・地図」、別編「松江城」、「松江市域の絵図・地図目録（市史研究 7）」に掲載。

［富田城及び出雲国内支城調査］富田城や出雲国支配の支城の調査を実施。

［縄張調査］松江城の普請のあり方について、他国との比較研究を含めた調査を実施。

［石垣（構造）調査］他国との比較研究を含めた調査を実施。

［石垣（石材）調査］石垣の石材や産地の調査を実施。

［建物調査］城郭内や城下町の建物について調査を実施。

［考古資料調査］発掘調査成果を踏まえて、他地域との比較研究を含めた調査を実施。

［瓦調査］他国との比較研究を含めた松江城に関する瓦の調査を実施。

［城下町形成期（土木）調査］城下町造成のあり方について、土木学の立場から調査を実施。

［城下町形成期（地質）調査］城下町造成前の景観復元について、地史学の立場から調査を実施。

［文献史料調査］松江城（城下町を含む）に関する各種文献史料掲載記事のカード化、刊本記事をリスト化し、情報を集積。

［松江城伝来資料調査］松江城に関連する伝来資料の調査を実施。

［写真資料調査］松江城に関連する写真資料の調査を実施。

③松江市域での図書出版物調査

［松江市域の図書出版物調査］松江城、松平治郷などに関する刊本調査・目録作成。

④石造物調査

［中世石塔調査］中世を中心に、五輪塔や宝篋印塔の所在確認、実測調査を実施。通史編「中世」、「松江市所在の五輪塔・宝篋印塔一覧（市史研究 5）」等に掲載。

［来待石製石塔調査］近世大名堀尾一族の石塔、市内寺院所在の石塔など来待石製石塔の調査を実施。市史研究等に掲載。

［銘文石碑調査］主な銘文をもつ石碑、墓石塔等の調査を実施。『松江掃苔録』（ふるさと文庫 14）、『松江の碑』（ふるさと文庫 17） 等に掲載。旧版松江市誌掲載の石碑銘文を訓読する調査を実施。

⑤建造物調査

［古建築物調査］古建築物の所在確認、実測調査などを実施。別編「民俗」等に掲載。

⑥戦争体験調査

［戦争体験聞き取り調査］戦争体験者に対し、随時聞き取り調査を実施。

［戦争関連史料調査］記録史料悉皆調査などで調査した史料の中から兵役関係文書、軍事郵便などの戦争に関わる史料の調査を実施。通史編「近現代」等に掲載。

⑦新聞記事採録調査

［新聞記事採録調査］松江などに関する記事の採録・目録作成。島根大学附属図書館、島根県立図書館、

山陰中央新報社などに所蔵されている松陽新報や山陰新聞、島根新聞、山陰中央新報などの採録とデジタル画像化。新聞 PDF ﾃﾞｰﾀ作成。

⑧統計資料調査

［近現代統計調査］近現代の諸統計調査の実施。史料編「近現代Ⅱ」等に掲載。

⑨民俗調査

［民俗調査］松江市域の民俗調査の実施。別編「民俗」等に掲載。

⑩地名･伝承調査

［地名入り松江市域白地図作成調査］松江市域の地名の場所を理解しやすいように、別編「民俗」に掲載する松江市域の地名入り白地図を作成。別編「民俗」等に掲載。

⑪自然環境調査

［古松江潟調査］城下町造成以前に広がっていたとみられる古松江潟の実態について調査を実施。通史編「中世」、別編「松江城」等に掲載。

［地形・地質、気候・気象、生物関係諸調査］松江市域の民俗調査の実施。史料編「自然環境」に掲載。

（３）付帯出版物（松江市ふるさと文庫、松江市歴史叢書〔史研究〕、松江市歴史史料集、松江市文書調査報告書）

①松江市ふるさと文庫

平成 17 年（2005）3 月、旧松江市・旧八束郡内町村の合併によって新松江市が誕生した。合併に先立ち行政内では事業調整が進められ、多くは旧松江市の事業が基準となる中、「ふるさと文庫」、「歴史史料集」、「歴史叢書」は宍道町の事業を継承することとなり、合併後は松江市教育委員会から発行することとなった。

松江市ふるさと文庫の第 1 号は、宍道･木幡家文書を素材とした小林准士先生の『お殿様の御成り』で、松江市教育委員会宍道分室で作成されたものである。前身となった宍道町ふるさと文庫について、平成 17 年の市町村合併直後に「山陰中央新報」文化欄用に執筆した記事で紹介する。

【ふるさと文庫についての紹介記事】身近な歴史素材を住民の手に－宍道町ふるさと文庫での試み－

地域の歴史を明らかにし、歴史的資源を今と未来に活かしていくことは、住民はもとより行政にとっても重要な課題である。宍道町教育委員会（合併により松江市教育委員会）に職を得たことをきっかけに、地域史の調査と出版活動、民間歴史グループへの支援等に取り組むことができた。取り組みの一つであった「ふるさと文庫」シリーズの概要を紹介したい。

『歴史史料集』、『歴史叢書』、『宍道町史』など、旧宍道町教育委員会では住民向けの出版事業に力を注いできたが、最初に取り組んだのが「宍道町ふるさと文庫」シリーズである。教育委員会にいると、普段の活動の中から多くの情報が寄せられてくる。その情報を組織や担当者個人の中で貯えておくのではなく、積極的に住民に還元しようとしたのが最初のきっかけだった。歴代教育長にも事業の趣旨にご理解いただき、適切なアドバイスと叱咤激励をいただいた。

編集にあたっては（1）読みやすい（2）内容が正確である（3）手に入れやすいということを考えた。読みやすさは、小学校高学年以上でも読めるよう、難しい漢字や固有名詞にはできるだけルビをふるように心がけるとともに、文体は敬体をとった。手に入れやすさについては、Ａ５サイズで 50 から 60 頁、頒布価格を 500 円に設定し、公共施設や書店などにも置き、希望者に販売できるよう心がけた。

平成 17 年（2005）3 月までに 21 冊を発刊したふるさと文庫シリーズだが、最初の一冊「宍道湖の漁具・漁法」（平成元年・1989）は宍道蒐古館で展示した宍道湖漁労具の民俗資料集として計画していたものを、住民が手軽に

読めるものにしてはという木幡修介氏（八雲本陣記念財団理事長）のアドバイスで、体裁を現在のブックレットスタイルに改めた。折りしも、宍道湖淡水化問題という地域課題と遭遇し、刷り上げた冊子 300 部が約一月で完売した思い出がある。

当初は文化財担当職員として執筆を行ったが、やがて専門の先生方に執筆をお願いし、歴史や自然など、地域の身近なテーマを題材とし、大切な内容を分かりやすく伝えることに配慮いただいた。時には誤植等の指摘もあり、編集者としての力不足を感じたが、読者からは概ね好意的に受け止めていただいたと思う。無理な注文に快く応じていただいた執筆者の方々、シリーズを支えていただいた住民の皆さん、息長く事業を見守っていただいた行政関係者には改めて感謝を申し上げたい。

さて、地域の歴史を明らかにしていく活動は、単に過去の事象を記録に留めるのみならず、歴史的背景に立脚した現在に視点をおき、地域に住む住民自らが将来を見据えるという活動を伴うところに、その重要性がある。

（松江市教育委員会宍道分室長稲田信）

松江市ふるさと文庫の理念は、宍道町ふるさと文庫と変わらない。しかし、テーマ選びには違いがある。宍道町の場合、内容は自然環境、歴史、民俗、学校での副読本と幅広いのに対し、松江市の場合、ほぼ近世、概ね松江城下町域内での歴史を中心とする内容に絞られている。宍道町では、地域素材への知識と意識の底上げが主眼であったのに対し、新松江市では、松江市の中核地である城下町域での歴史に絞り、知識と意識を底上げすることが主眼だった。松江開府 400 年祭、松江市史編纂事業、松江城国宝化の推進、歴史館開館の動きとも連動させていた。 市史編纂事業が進むと、編纂事業での成果を分かりやすく伝えるために、市史執筆者にもふるさと文庫を執筆していただくようになったが、充実した内容を記述するために頁数も 100 頁を超えるようになっていた。そこで、20 号を過ぎたころから、執筆者には白黒版で 100 頁程度とカラー版で 50 頁程度の、ほぼ同経費の二つのスタイル（内容充実か読みやすさか）から選択してもらう方法を取り入れた。

「松江市史編纂基本計画」の行間にあるように、『松江市史』には当初から『島根県史』に代わるものとの意識があり、史料選定にあたっては松江市域に留まらず、出雲国、松江藩領を念頭に置いている。同時に、松江市史編纂事業の様々な取り組みが、広く周辺地域に影響することも意識にある。ふるさと文庫は資料さえ整えば比較的容易に短時間で執筆でき、最近ではインターネットを利用した製本も簡単にできるようになった。ふるさと文庫→歴史史料集→歴史叢書→自治体史という、出版物を通して地域の歴史を明らかにしていく手順を踏まえれば、松江市行政の枠を超えて「ふるさと文庫」類の普及にも力を注ぐ段階でもある。

②松江市歴史叢書（市史研究）

『松江市ふるさと文庫』がふるさと松江市の歴史・文化を分かりやすく解説することを、また『松江市歴史史料集』が地域の基礎的史料をテーマ別に網羅し、地域史研究の便に供すること目指すのに対し、『松江市歴史叢書』は松江市に関わる歴史事象の調査・研究成果を適宜集めて発刊するものである。市史では掲載しきれない詳しい論拠・史料の補筆、市民への市史編纂過程の提示などのための研究紀要として、平成 19 年（2007）から発刊された。

初号は、堀尾氏の菩提寺である京都・妙心寺春光院に伝えられた文献史料、石造物についての調査・研究成果を特集し掲載した。平成 21 年（2009）4 月から松江市史編纂事業が始まると、毎年刊行する「市史研究」として、市史編纂事業で進めている調査・研究の論考、史料紹介、編纂事業の経過報告などを掲載した。前もって「市史研究」に投稿しておくと、市史本体を執筆するのに大変役立つという意見もあり、執筆者には積極的に投稿を呼び掛けていた。

③松江市歴史史料集

松江市に関わる歴史研究が深まる中で、市内でも地域の歴史を学習する活動が多様な場面で繰り広げられ、これまで活字化されなかった貴重な史料の利用も求められるようになってきた。松江市歴史史料集は、『松江市史』史料編だけでは掲載できなかった貴重な歴史史料を適宜集めて発刊するものである。

市史編纂事業期間中には、「大保恵日記」、「新番組列士録」、「御産献立控帳」を史料集と刊行した。松江市指定文化財である「大保恵日記」全四冊を記した人物は「太助」という松江白潟の和多見新屋に勤めた人物である。一冊目（文政９年～天保７年）は和多見新屋が経営難に陥り、主人一家の生活と店の経営を絶えず心痛しつつ、神仏に祈り、金策に奔走する太助の日々が綴られている。また、太助一家の困窮や借家も追い出されるなどの困難な様子も記述されている。この四冊の日記には、日々の太助自身の記録、心情吐露にとどまらず、江戸時代後期の松江の天候・自然・災害・事件・世相・信仰・人々の日々の営み・暮しぶりも活写されており、庶民の姿が描かれた貴重で稀有な史料といえる。「新番組列士録」は、松江藩士（列士）のうち新番組列士の職員録・人名録ともいえるもので、家の系譜、格式、職名、石高だけでなく、養子、婚姻、災害対処等、様々な角度から藩士の生活を知ることができる。既刊の「松江藩列士録」全６巻（島根県立図書館刊）とともに松江藩を研究する上で重要な基礎史料の一つといえる。「御産献立控帳」は、松江藩江戸屋敷で出産という慶事に関わる人達へ提供される食事の献立と、大奥内で贈答される品々を記録した史料である。記録を書いた人物は松江藩士小田九蔵で、小田家は江戸屋敷で四代にわたって料理方を勤めた。記録は寛政３年（1791）から文化２年（1805）のもので、松平治郷の子弟が相次いで誕生した時期であった。料理の献立にとどまらず、治郷（不昧公）研究や、松江藩の大奥の様相を知る上で貴重で稀有な史料といえる。

４．地域の歴史史料調査（古文書等）

松江市域の歴史史料を将来にわたって保存・活用していくために、市史編纂事業の基礎調査として記録史料悉皆調査（地域の史料調査（古文書等））を重点的に進めてきた。寺社や公民館、個人宅等で未整理・未公開のまま所蔵されている史料もあり、編纂課から依頼したり、所蔵者から相談があったりと、調査は様々な状況で行われた。

松江市史編纂基本計画では、史料編纂室の職務として「中世、近世、近代文書の悉皆調査とその解読作業」、「執筆者の求めに応じた史料収集の補助」などが示され、これらの職務を実施するために古文書解読能力を備えた専門職の配置が必要とされた。この認識に基づき、専門調査員には採用にあたって古文書解読能力を備えていることを求めており、市史編纂事業当初から古文書悉皆調査は史料編纂室（課）専門調査員の大きな業務であった。

松江市内公民館所蔵文書調査を平成 19 年（2007）度から先行的に行った。公民館には昭和時代の編入・合併前の公文書（村役場文書等）が残されている場合があり、これは松江市の歴史公文書であるとともに、近現代の貴重な史料である。平成 22 年（2010）度から平成 25 年（2013）度にかけては松江市内寺社史料調査を実施し、旧松江城下内の寺院、神社について悉皆的な調査を行った。また、区有文書、家別文書等については情報提供を受けた段階で調査を行った。以下、その折の調査方法について紹介する。

①所在確認調査

・公民館所蔵史料の所在確認調査は、平成 19 年 10 月に館長会で調査依頼（調査票による概要調査）を行い、所在が確認できた公民館と連絡を取り、専門的調査を行った。
・旧松江城下内の寺院、神社については、聞き取りと調査票による概要調査を行い、所在が確認できた寺院、神社と連絡を取り、専門的調査を行った。

・区有文書、家別文書等については、聞き取りや様々な情提供により所在が確認できた場合、所蔵者と連絡を取り専門的調査を行った。

②専門的調査の手順

〔予備調査〕

・事前の所在確認調査により史料の所蔵が確認された場合は、所蔵者のご了解を得て、専門調査員が史料の保管状況、種類、分量、虫損等の状態など、詳細調査のための概要を現地で確認する。

・史料数がそれほど多くなく、所蔵者のご了解を得て借用が出来る場合は、借用手続きを経て史料編纂課（施錠が出来る付属の史料調査室）へ慎重に移動する。

・所蔵者のご意向や史料数などにより、現地での調査をお願いする場合は、概ねの調査日数を想定して、調査日の調整を行う。

〔詳細調査〕

・調査場所の確保・・・史料を借用した場合は、施錠が出来る史料調査室で保管し、調査量に応じた部屋を確保して詳細調査に取り掛かる。現地での調査をお願いする場合は、調査用の一室を提供いただき、詳細調査に取り掛かる。

・現状の記録・・・史料を取り出す前に、保管されている状況を撮影して記録する。保管方法にも所蔵者の意図や理由があり、これも重要な情報となる。

・大番号をつける・・・段ボール箱などに入っている場合は各箱に、書架などにある場合は棚の一列などのまとまりごとに番号を付ける。

・史料の掃除・・・ほとんどの史料は一度も開かれず数十年、数百年を経ており、保存環境によっては湿気、虫食い、鼠のなどによる大きな破損が見受けられる場合もある。たいていは虫の糞やホコリにまみれているので、まず史料の掃除が必要になる。生きた虫が出てくることもあり、被害が広がらないよう死滅させる必要がある。

・子番号をつける・・・一点ずつの史料に番号を付ける。元あった状態を崩さず順に史料を取っていくことを原則としているが、場合によって内容ごとに仕分けする。番号は古文書に影響の少ない中性紙を細長く切ったものに鉛筆で番号を記し、史料に挟み込むようにする。

・目録作成・・・ 松江市史編纂事業では、史料目録作成のためにパソコンを活用した。「Microsoft Excel」を利用し、表形式に表題、内容、年代、作成者・宛先、形態・点数、寸法などを入力する。

・写真撮影・・・借用史料の閲覧は限られた時間内のことであり、また、原史料を度々開くことは史料に負担をかけることから、借用史料は写真撮影で記録を残すことを基本とした。平成 20 年頃にはデジタルカメラの性能も上がり、カメラも比較的安価で購入できるようになっていたことから、市史編纂事業では古文書等の史料撮影には最初からデジタルカメラで撮影し、画像データをハードディスクに保存するようにしていた。デジタル画像はマイクロフィルムなどに比べ新しい技術のために将来的な信頼性に不安はあるが、マイクロフィルムに比べて経費が安く、コピーも簡単にできることから、市史執筆者への史料提供には大変役立った。写真撮影は当初専門調査員が行っていたが、やがて撮影量が増えると追いつかなくなり、市史編集作業も忙しくなったことから、撮影業務を株式会社江友（伊藤孝一社長）に外注したり、学生アルバイトに依頼するようになった。

・史料を保存するための処置・・・ 破損状況等により、必要に応じて中性紙封筒や薄様紙で包むなど保護を行う。元の木箱等が史料の保存上適当である場合は戻し、適当でない場合は中性紙文書箱へ移し替える。

・史料の返却と寄贈・寄託・・・調査が終了した史料は、所蔵者の意向によっては松江歴史館、史料

編纂課で寄贈・寄託を受けたが、それ以外は所蔵者へ返却した。史料を返却する場合は、保存箱の外面に、「歴史史料等の保存に関するお願い」とした依頼文を添付し、今後の史料の保存管理が適切に行われるように配慮した。

・いずれの史料調査でも、目録作成を基本としたが、 特に松江市内公民館所蔵文書調査や松江市内寺社史料調査等では、『松江市文書調査報告書』として目録を製本し、関係機関等に配本した。調査方法、目録仕様の一例として、松江市教育委員会 2014「松江市内寺社史料調査目録」『松江市文書調査報告書　第２集』の凡例を記しておく。

松江市内寺社史料調査目録凡例

１.調査の方法

①保存状況の記録化

1）所蔵者からの聞き取り調査（史料の伝来、保管場所、整理の経緯等）。

2）現状の記録（写真撮影、文章記録）。

②調査の手順

1）各箱ごとに現状を写真撮影で記録化する。

2）各箱に箱番号を付ける。

3）各箱内の史料に通し番号を付ける。

4）目録作成の後、史料一点ごとに写真撮影を行う。

２.目録での表記の方法・項目について

①「而」「ニ」「者」「茂」「江」などは原文のままに記した。

②「ゟ」「ゝ」等は「より」「して」と仮名で表記した。

③虫損・破損、解読できなかった文字などは□や［　　］で示した。

④目録の項目

箱番号…調査時点で所蔵されている箱ごとに番号を付けた。箱がない場合、および一箱に収納されている場合は付けなかった。

仮番号…箱の上部から史料を取り出すなど、原則として現状をできるだけ反映した番号を仮番号とした。雑然と収納されている場合などは、形態・年代・内容等で仮仕分けを行い仮番号を付けた。番号は袋や束ごとに一つの番号を付け、その中の史料一点ごとに枝番号を付けた。但し、一点ごとの記録が必要でないと判断した場合（領収証やはがきの束など）は、一括して一つの番号とし「形態・数量」の蘭に点数を記した。

例）　箱(箱)２　－　14(袋)　－　１(束)　－　５(一点ごと)

表題〔仮題〕（内容）…原表題があれば記し、原表題がない場合や、原表題だけでは内容が分からない場合（例として「覚」、「奉願口上之覚」など）は、〔　　〕に仮題を付して史料の性格が分かるようにし、更に必要に応じて（　　）に詳細な内容を記した。

年代・西暦…年の分かるものは干支を省略した。推定年代は（〇〇年か）などとした。

作成→宛先…作成者や差出人を記し、宛先がある場合は→で示した。花押・印および様・殿などの

敬称は省略した。

形態・数量　…以下の通り形態および数量を記した。

一紙文書：竪紙・切紙・継紙・折紙（いずれにも該当しない場合は「状」など適宜）

その他：竪帳・横帳・横半帳・綴・巻子・折本など

近現代史料：罫紙・綴・罫紙綴・冊子・簿冊・写真・はがき・賞状用紙・ガリ版刷・青焼・印刷物・図面など適宜

寸　法…縦×横を cm で記した。

備考…文書の一括状況、包紙の有無および内容、端裏書の内容、破損状況、貼紙など。

その他…番号の付け間違えによって欠番が発生した場合は「欠番」と記入した。過去帳など個人の私的な情報に関わる内容のため削除した場合は、目録の欄外にその旨を記した。

３.史料の保存について

①破損状況等により、必要に応じて中性紙封筒や薄様紙で包むなど保護を行った。

②元の木箱等が史料の保存上適当である場合は戻し、適当でない場合は中性紙文書箱へ移し替えた。箱には各々防虫剤を投入し、所蔵者へは１年ごとの入れ替えをお願いした。

③中性紙保存箱へは外面に下記の記録カードを添付した。

歴史史料等の保存に関するお願い

文書

この史料は、下記のとおり調査・整理いたしました。

調査日：　　年　月　日

調査者：　松江市歴史まちづくり部史料編纂課

撮　影：　未撮影・撮影済（撮影日：　　年　月　日）

防虫剤投入：　　年　月　日

史料は、後世に時代の姿を伝える貴重な文化財です。

しかし、これらは常に散逸の危険をはらんでいます。今後とも所蔵者の皆様による丁重な保管をお願い申し上げます。防虫剤については、取替えをお願いいたします。

なお、史料についての問い合わせやご質問がありましたら、松江市歴史まちづくり部史料編纂課までご連絡ください。　℡（0852）55-5388

（2019 年版記録カード）

５．人権問題に関わる近世身分呼称等（差別的表現）の取り扱いについて

松江市史において、人権問題にかかわる近世身分呼称等（差別的表現）の取り扱いについては、市史編纂を進めるうえで慎重に進めていくことを行政内でも申し合わせていた。最初に、井上編集委員長、小林編集副委員長、竹永近現代史部会長、史料編纂室、人権同和教育課での事前協議を経て、平成 21 年（2009）10 月の編纂委員会において、次の基本方針を確認した。

[松江市史編纂における人権に関わる問題についての基本方針] ①これまでの歴史上に存在した人権侵害や社会的差別等について、これを歴史的事実の問題として真正面から受け止め、それから目を

そらさない。②これらの問題を克服し、解決する立場に立ち、そうした視点から厳密な歴史的分析や考察を行う。③その具体的な記述に当たっては、誤解を与えることのないよう、十分に慎重な配慮を行う。

平成22年 (2010) 5月の編集委員会において、第1回配本となる史料編「近世Ⅰ」の凡例に記載する近世身分呼称等（差別的表現）の取り扱いについて協議し、詳細については部会長会で議論することとなった。同年8月の部会長会において、史料編「近世Ⅰ」掲載の凡例記載案について再協議し、基本方針と「史料は史料として掲載する」方向を確認し、発行責任者である松江市としての意志決定が必要であること、また、「近世Ⅰ」の出版が迫っていることから、早急に対応していくことが必要であると話し合われた。

この部会長会での議論を経て、教育委員会理事、文化財課長、史料編纂室長の3名は、先の基本方針に基づき、史料は史料として掲載する方向を松江市として意志決定する必要があると確認し、「近世Ⅰ」の実例に即して教育長への詳細説明、総務部人権同和対策課との協議、総務部長との協議、両副市長との協議、市長との協議を進めていくことを確認した。教育長からは、「今回の市史は史料を中心とするものであり、史料中の近世の身分呼称はあくまで史料として掲載していくものである。必要な史料の全体や部分を削ることはできないと思う。責任は私と市長がとる。松江市教育委員会の方針としては、平成21年（2009）10月に編纂委員会で確認した内容でよいと思う。」との認識を示してもらった。市長からは、「松江市史の基本的考えとしてはそれでよい。隠すなどの史料の改ざんは出来ない。」との認識を示してもらった。この一連の行政内協議を経て松江市としての意志決定がなされ、以後出版した松江市史各巻については、「松江市史編纂における人権に関わる問題についての基本方針」や史料編「近世Ⅰ」など既刊の史料集での事例に沿いつつ、人権同和対策課との協議を経て出版するという手続きを取ることとなった。

６．市民のための市史

松江市史編纂基本計画では、「市民のための市史」として、「新しい市史は、市民のための市史を目指すものであり、その成果は逐次公開される必要がある。市史編纂事業の終了時には、地域の歴史を活かす観点と、史料保存の意識が松江市民に備わっていることを目標とする。そのためには、執筆者は編纂過程で市民との座談会や講演会等により意見交換や情報提供するなど、市民とともに市史を作り上げる必要がある。なお、学問的なレベルを確保し、歴史的検証に耐えうる市史とするためには、一般市民に分かり易いものにするとしても限界があるため、市民向けの付帯出版物や松江の将来を担う子供向けの副読本などを出版する必要がある。」とされた。この方針に基づき、松江市史講座の開催、ホームページ開設、報道・広報・広告対応、松江市ふるさと文庫（付帯出版物）の発刊などを行った。

（１）松江市史講座

松江市史講座は、乾隆明氏が中心となり運営されていた「松江藩講座」を引き継ぐ形で、平成23年（2011）7月より始まった。

「松江藩講座」は、松江歴史館（平成23年開館）の開館と歴史館での継承を念頭に置いた講座で、講師・演題の選定等の企画、連絡調整、当日の司会進行を乾氏がほぼ一人で行い、松江市立図書館事業の一つとして事務局と会場（総合文化センター内）を松江市立図書館がもっていた。講座内容を山陰中央新報社が新聞掲載し、マーブル放送（山陰ケーブルビジョン株式会社）が講義内容を放映するスタイルも確立していた。「松江藩講座」は回数を重ねるにつれ参加者が拡大する人気講座となり、歴史館が開館する

頃には駐車場や会場の関係で歴史館では収まり切らないほどに成長していた。

松江市史講座の開催に先立ち、平成 22 年（2010）5 月 15 日には松江市総合文化センター・プラバホールで「『松江市史』シンポジウム～歴史の中に私たちの未来を見つけます～」が松江藩講座として開催され、総合司会として乾隆明氏、基調報告「今なぜ『松江市史』の編纂なのか」には井上寛司松江市史編集委員長、パネルディスカッション「松江の歴史像を探る」にはコーディネーターとして岡部康幸、パネリストとして勝部昭、井上寛司、小林准士、竹永三男の各委員が関わっている。松江市史講座が企画されると、「松江藩講座」を引き継ぎ、松江市史編纂委員である乾隆明氏に司会をお願いする流れが出来ていた。

市史編纂事業も平成 22 年度後半頃になると、事業当初のあわただしさも一段落し、行政組織内（庁内）で行われた編纂事業の抜本的な見直し作業も終わり、市史各巻の構成・大まかな執筆分担も出来つつあったことから、覚悟を決めて「市史講座」開催に本腰を入れる段階になっていた。平成 23 年（2011）3 月 28 日の部会長会では「市史講座について」が議題となり、井上寛司編集委員長からは次のような開催要項が配られ、そのまま決定した。

「松江市史講座」開催要項　　2011.3.28 井上寛司

①松江市史編纂事業の一環として、「松江市史講座」を開催する。

②本講座は、平成 23 年（2011）7 月から『松江市史』の編纂が完了する平成 30 年（2018）年度末まで、原則として毎月 1 回、松江市立中央図書館を会場として開催する。

③本講座開催の主たる目標を次の 3 点に置く。

1）市史編纂のための調査・研究を通じて明らかとなった事柄の一端を、広く市民の皆さまに報告することによって、市民の皆さまに松江市の歴史についての理解を深めていただくと同時に、市史編纂事業へのご理解とご協力をお願いする。

2）講師を務める松江市史編集・執筆委員の皆さまには、各部会での検討を踏まえ、市史通史編・別編に記述すべき内容を整理していただくとともに、聴衆である市民の皆さまからの疑問・質問、あるいは反応などを見ながら、市民にとってより身近で、理解しやすいものとなるよう、記述内容の精選を進めていただくための一助とする。

3）各報告の内容を踏まえ、各部会間の調整、すなわち各部会協同で一貫した内容の市史の編集ができるよう、全体としての調整に努める。

但し、本講座運営の観点から、必要に応じて松江市史編集・執筆委員以外の方にご報告をお願いすることもあると考えられ、その場合には、上記 3 点と異なり、講座としての多様性の確保と市民からの多様な要請・要望に応えることが主たる目標となる。

④以上の趣旨に基づき、本講座の企画･運営は編集委員会（部会長会議）の責任において行うこととし、コーディネーター乾氏及び山陰中央新報社岡部氏との協議を通してその具体化を図るものとする。

⑤本講座では、編集・執筆委員の皆さまの調査・研究の進捗状況を勘案しながら、しかし年間を通したテーマ設定とストーリーも必要と考えられるところから、可能な限り年度ごとに松江市の持つ重要な歴史的諸特徴をテーマとして掲げ（〔水の都･松江〕〔地域政治の拠点･松江〕〔地域経済の拠点･松江〕〔出雲文化の拠点・松江〕など）、それに即して講師を選定していく方向で検討を進めることとする。

⑥同時に、聴衆である市民の皆さまのご意見・ご要望を積極的に受け止める体制を構築することも必要なので、講座開催時にアンケート用紙を配布してご意見・ご要望をお聞きするほか、別途そのた

めの検討を編集委員会（部会長会議）において行なうものとする。

⑦これらの検討結果を踏まえ、各年度の年間計画は、年間テーマと各月の講師名・演題などを合わせ、前年度末までに策定し、事前に広く案内できるように努めることとする。

⑧本講座は、山陰中央新報社とマーブル放送（山陰ケーブルビジョン株式会社）の協力を得て進めていくこととし、講師の皆様には、報告に先立って2週間前までに（時間厳守）、1400字以内（写真1点を添える）で報告内容の要旨をまとめていただき、それを「山陰中央新報」に掲載し、事前の宣伝を兼ねるものとする。また、講座終了後は、マーブルテレビを通じて、広くその模様を放映していただくこととする。

⑨以上の趣旨に基づき、平成23年度は「水の都・松江」をテーマとして、7月から3月まで計9回を開催することとし、その具体的な内容を次のように定める。（以下略）

この要項に基づき、松江市史講座は毎月1回・土曜日開催を原則とし、平成23年（2011）7月2日（土）より始まった。当初、『松江市史』の編纂が完了する平成30年（2018）度末までの開催を予定したが、市史編纂事業の1年間延長により、最終回は令和2年（2020）3月21日（土）であり、1回も休講することなく、講座数は142講座を数えた。

講座の周知の一つとして、各講師により1400字程度で執筆いただいた講座内容を「山陰中央新報」文化欄に毎回掲載していただいた（平成31年（2019）3月まで）。また、マーブル放送（山陰ケーブルビジョン株式会社）により録画された講座内容は、後日、松江市域を中心に広く放映され、多くの熱心な視聴者に恵まれて好評だった。放映画像は、山陰ケーブルビジョン株式会社と市立図書館の配慮で、市立図書館閲覧コーナーで視聴できるようにしていただいた。ちなみに、最終回の講座（令和2年3月21日）は、新型コロナウイルス対策のために公開を中止せざるを得なかったが、「完結シンポジウム・松江市史の完成と松江の未来へ」と題して8名の部会長が松江市史の成果と課題を討論する締めくくりの講座であったため、予定した会場・開催時間で録画し、1週間後にマーブル放送で放映していただいた。

開催要項に「市史講座の企画・運営は編集委員会（部会長会議）の責任において行う」とあるように、講師の選任は各部会長にお願いし、講師の皆さんには部会長の頼みとあって快く？お引き受けいただいた。受付記録によれば、会場においでいただいた受講者（ﾃｷｽﾄ受講含む）は平成23年7月より令和2年3月までの142講座で延べ約25、000人、マーブル放送での受講者はおそらくその数倍だったと思う。

市史講座では、講義前の時間を利用して適宜松江市史編纂事業の進捗状況を報告し、地域の歴史を明らかにしていくことの重要性について受講者と市民の皆さんのご理解とご協力をいただけるよう努めていた。毎月開催、9年近くの市史講座を始めるにあたっては、講座担当者として長丁場となる講座の事前諸準備と開講日の対応に覚悟を決めて臨んだが、振り返れば全ての講座を受講することで受講者の皆さんとともに松江の歴史を幅広く深く学ぶことができたのは幸いだった。途中、体調を崩されたこともあったが、乾隆明氏には司会進行を最後まで務めていただいた。深く感謝したい。

（2）ホームページの開設

松江市史編纂事業のホームページは、平成22年（2010）5月15日の「『松江市史』ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ」、翌16日の「松江市史合同部会（市史編集委員会）」の紹介記事から始まった。以後、「史料編纂室（課）ニュース」、「松江市史刊行のお知らせ」、「その他刊行物のご案内」、「松江城ここに注目」、「ふみのしるべ」、「松江市史講座」、「松江市史PLUS（プラス）」、「松江市史編纂コラム」、「松江市史編纂活動状況」などの独自企画のほか、「松江市史編纂基本計画」、「市史編纂だより（市報松江に掲載）」、「松江市通信（市報松江に折込み配布）」、「松江市文書館（仮称）整備構想」なども掲載した。

「松江城ここに注目」では、松江市が松江城天守の国宝化を目指す中で、松江城の最新の情報を連載した。「ふみのしるべ」では、市史編纂事業にとって基礎となる市域の歴史を記した書物を紹介した。「松江市史講座」では、講座の内容や予告を掲載した。「松江市史 PLUS（プラス）」では、通史編をさらに楽しく読んでもらえるように、本編に盛り込めなかった内容を執筆者に追記いただき掲載した。「松江市史編纂コラム」では、市史編纂や史料調査の日々の作業の中でのちょっとした発見やこぼれ話を紹介するために、市史執筆者や史料編纂室（課）職員の記事を掲載した。なお、「市史編纂コラム」に掲載された記事の中には、松江市史の参考文献として引用されたものや、報道機関に取り上げられて全国版の新聞記事になったものなどもあり、市史編纂事業終了に伴い製本を望む意見も多く聞かれた。そこで、令和元年（2019）12 月記事までの掲載内容そのままを『松江市史編纂コラム』として製本し、記録として図書館、市内の公民館等に配布した。

（３）報道機関等での報道・広報・広告対応

市史編纂検討委員会が開催された平成 20 年（2008）より事業が終了する令和 2 年（2020）3 月までに、新聞、テレビ等により、各種会議、市史等の刊行、市史講座、歴史情報などを記事として紹介していただき、確認できる範囲で約 500 件を数えた。市報松江では、「市史編纂だより」、「松江市史新刊紹介」、「松江市史十年のあゆみ」などを掲載した。また、松江市史の出版に合わせて新聞広告を掲載する場合もあった。多くの報道機関で松江市史関連事業を取り上げていただき、市史編纂事業の趣旨、内容、経過等を市民の皆さんに広くお伝えすることができた。

７．松江市文書館（仮称）の検討と整備構想

（１）「松江市文書館（仮称）整備構想」の策定

平成 31 年（2019）3 月 28 日、松江市文書館（仮称）検討委員会井上寛司委員長より松浦正敬松江市長へ「松江市文書館（仮称）整備構想」が答申された。松江市はこの答申書を同日付で行政計画（構想）として策定し、文書館整備への想いは現実的な構想として行政スケジュールの俎上に乗った。

整備構想は、1. 整備構想策定の趣旨、2. 整備構想の位置付け、3. 松江市文書館（仮称）の基本理念、4. 松江市の公文書管理体制の見直し、5. 松江市文書館（仮称）の施設と運営、6. 松江市文書館（仮称）整備の推進にあたって、からなる。

「1. 整備構想策定の趣旨」では、松江市役所の公文書の保存と管理体制の見直し、松江市域の歴史史料（古文書等）の調査・保存と活用、文書館整備の必要性と整備構想について記す。「2. 整備構想の位置付け」では、この整備構想を「共創・協働のまちづくり」を基本姿勢とし、公文書の管理に関する法律等の趣旨を踏まえ、松江市総合計画（2017 － 2021）に資するものと位置付ける。「3. 松江市文書館（仮称）の基本理念」では、松江市での文書館の役割、松江市文書館（仮称）の基本目標、松江市文書館（仮称）の基本機能を示し、松江市が目指す文書館の基本的な姿勢を示す。「4. 松江市の公文書管理体制の見直し」では、文書館における歴史公文書の保存・利用を円滑に行うために、現在の松江市公文書管理体制の見直し（目指すべき方向）を列記する。「5. 松江市文書館（仮称）の施設と運営」では、施設のあり方、施設の規模、設置場所、施設構成、管理運営体制などに踏み込む。「6. 松江市文書館（仮称）整備の推進にあたって」では、関連計画の策定と例規等の整備、市史編纂事業の終了時期を念頭に置いた文書館整備（体制整備）などに言及する。

（２）整備構想策定に至る経緯

①松江市史編纂委員会、編集委員会、部会長会議での議論

松江市史編纂事業では、事業が始まる前から市史の印刷出版のみを目的とするのではなく、市民と進

める文化運動（事業後には地域に歴史を見る眼が備わっていることなど）や、松江に関する歴史史料の徹底的な調査・保存に取り組む指向性を持っていた。専門家だけでは対応できない膨大な近世、近現代文書類の調査については、史料編纂室（課）の専門調査員の雇用要件として地域の歴史史料の解析能力（古文書解読、歴史の知識など）を求めることで対応した。事業事務を担う史料編纂室（H20 史料編纂係→H21 史料編纂室→ H28 史料編纂課）の組織名称が「市史編纂室」ではないことも、市史編纂事業後も史料調査や歴史編纂が継続して取り組めるよう考えられていた。地域の歴史を明らかにしようとする松江市史編纂事業は、当初から「松江市史編纂基本計画」に記された 10 年計画の出版事業と、事業期間のみでは終わらない継続性も念頭に置く事業だったのである。

松江市史編纂事業の終了後についての議論は、4 つの部会（原始古代史、中世史、絵図・地図、民俗）が市史の出版を終え、全 18 巻の半数が出版される平成 26、27 年頃から始まった。事業もおおむね峠を越えて終結が見通せるようになり、井上委員長を始め、部会長の大半に市史編纂事業後に思いを致す余裕が出た頃であった。部会長会議では、「松江市史編纂事業後について」が議題となり、平成 26 年（2014）度松江市史編纂委員会（H26.10.9 開催）では井上編集委員長より「松江市史編纂事業基本計画の実施状況と今後の課題」が報告された。報告中に、「**[5. これらの諸活動を支える人的保障と組織的な体制整備]**

市史編纂事業終了後は、諸課題をすべて松江歴史館に集中・統合し、担わせる方向（市史編纂事業と松江歴史館との組織的・機能的統合）も考えられ、従来は漠然とそのように考えられてきた。しかし、それとは異なるいま一つの方向も考えられるのであって、今後の松江市にとって後者の方がより有効で、意義のあるものと評価できよう。〔根拠〕1）市史編纂事業が担ってきた、そして市史刊行終了後も引き続き継承・発展　させることが必要な、展示を主要な任務とする松江歴史館では十分にカバーできないもの。無理にこれを統合しようとすれば、松江歴史館そのものの機能低下と衰退を招くことにもなりかねない。2）むしろ松江歴史館や文化財課と並ぶ別の組織として立ち上げ、機能させることにより、これら 3 者が相乗効果的に機能を拡大し、安定的に発展していくことも可能となる。3）島根県内では未だ設置されていない文書館なども含め、「歴史を活かした町づくり」行政の全般にわたる、将来を見通した検討も今後の重要な課題であり、その有機的な一環を構成する問題として、改めて慎重な検討を進めていく必要があるといえよう。」とあり、問題提起がなされた。ここに文書館の整備構想につながる嚆矢がある。

この問題提起に対し、平成 27 年（2015）5 月 31 日開催の松江市史編集委員会において、藤原松江市歴史まちづくり部長は、「**松江市の組織機構にかかわることなのでお約束はできないが、歴史館の展示機能とは別に〔史料の収集と調査・研究・啓発・情報発信〕の機能は継続して持ち続ける必要があると、歴史まちづくり部として認識しているので、島根県や先進的な市町村の取り組みを参考としつつ、組織機構の中での体制の整備を働きかけていきたい。**」と回答しており、行政側でも博物館である松江歴史館とは別に史料の収集と調査・研究・啓発・情報発信機能を継承する考えを検討し始めていた。

平成 28、29 年頃になると、行政内で検討され始めた現用公文書関連の議論に対応し、部会長会議でも、「松江市史編纂事業後について」の意見交換が続いた。平成 29 年（2017）度松江市史編纂委員会（H29.5.21 開催）では、井上編集委員長より「松江市史編纂事業の今後の課題」が報告され、その中で、「**[1. 収集された史料の保存・公開・活用 .〔課題 1〕→公文書館の建設]　1）市史編纂事業の過程を通じて、松江市民を始めとする多くの皆さまのご協力を得て、膨大な数の史料の存在を確認し、写真撮影を行うとともに、その内の一部は史料編などの形で翻刻し、公開してきた。 2）今後は、これらの史料が散逸することのないよう、適切な形での保存に努めるとともに、同じくそれらを適切な形で広く公開・活用できるよう、条件を整える必要がある。 3）このうち、保存に関しては、編纂課や松江歴史館に寄贈・寄託された以外に、なお 3 つの大きな文書群が存在することに注意しておく必要がある。（a、史料調査の終**

了後いったん所蔵者のもとに返却したが、公的機関で保存するのが望ましい、もしくは所蔵者自身が強くそれを望んでいるもの。b、各地の公民館などで保管されている区有文書や旧役場文書など、然るべき正規の公的機関で保存するのが望ましいと考えられるもの。c、市役所や学校などの各種公的機関で保管され、すでに文書発給から30年以上が過ぎるなど、然るべき別の公的機関に場所を移して保存を図るべきもの。）4）これらの膨大で多様な文書群を的確に整理し、保存・公開・活用を図っていくためには、それに相応しい独自の公的機関として松江市独自の文書館を立ち上げることが不可欠と考えられる。5）上記の内、すでに一定の調査が終了しているａ・ｂと異なり、ｃに関しては保存か廃棄かの選別から作業を始めなければならず、またその検討対象となる公文書の量が膨大であるところから、それらを一時的に保管し、選別作業を行うための場所を別途確保することが必要となる。」とある。平成31年（2019）3月に策定される「松江市文書館（仮称）整備構想」の土台となる議論が、平成28、29年頃には、専門家代表からなる部会長会議だけではなく、歴史まちづくり部長、次長ら市幹部も参加する松江市史編纂委員会、編集委員会の場でも既に行われていた。

②市行政内での議論

松江市の公文書を所管する総務部総務課から、公文書の管理について史料編纂室に相談があったのは平成27年（2015）7月のことだった。平成合併から10年が経過し、合併前の旧町村役場文書について現在の支所職員では内容が分からず、保存年限を過ぎても廃棄できず困っている、市史編纂を通して歴史的な公文書の取り扱いに慣れた史料編纂室で保存文書と廃棄文書を評価・選別してもらいたい、というものだった。他方、合併前後に保存すべき旧役場文書がいつの間にか廃棄されたという噂も仄聞していたので、保存措置の一環として、約半年余り歴史公文書の観点から編纂室の3名（稲田・小山・内田）が目録により交互に評価・選別し対応することとなった。ある支所に出向いた折に、「こんな文書も残すのか」とお叱りを受けたこともあったが、文書保存に一定の役割を果たし、旧町村役場文書の保存実態を俯瞰するよい機会であった。何より、史料編纂室（課）3名が市の歴史公文書の評価・選別を経験したことで、松江市での公文書管理の現状・課題なども理解でき始め、市史編纂事業を経験した職員は地域の歴史史料だけではなく、経験を積めば歴史公文書管理にも携われるという意識へとつながった。この頃になると、市史編纂事業後をにらみ、井上編集委員長からも公文書館等を設けた先進地事例の情報収集と職員のスキルアップについて度々指摘を受けはじめていた。（平成28年6月24日には2名〔和田、高橋〕が鳥取県立公文書館を視察）

平成29年（2017）3月には、公文書館・文書管理について市行政幹部（副市長、総務部長、同部次長、歴史まちづくり部長、同部次長他）と市史編集委員会代表（井上編集委員長、竹永近現代史部会長）で意見交換の場が設けられ、地域の歴史史料や歴史公文書の保存管理の重要性と、先進地事例の情報収集の必要性について確認しあっている。同時に平成29年（2017）度は、市史編集委員会や編纂委員会でも前述のように「市史編纂事業後の収集された史料の保存・公開・活用→公文書館の建設」が議題となり、史料編纂課では視察などを通して先進地事例の情報収集に一層努めるようになった。（平成30年〔2018〕2月6、7日には2名〔小山、村角〕が山口県文書館・山口市史編さん室を視察、同年2月7、8日には1名〔稲田〕が松本市文書館を視察）

平成30年度には、総務部と歴史まちづくり部で頻繁に部長クラスの協議が行われ、現用公文書の実情把握と「松江市文書館（仮称）検討委員会」開催に向けて準備が進んだ。また、史料編纂課からは文書館でのアーキビスト養成のために小山副主任が国立公文書館研修（アーカイブズ研修Ⅰ）に参加した。（令和元年（2019）度には、史料編纂課から村角紀子専門調査員が、総務課から藤川祐介調整監が国立公文書館研修（アーカイブズ研修Ⅰ）に参加した。）

また、史料編纂室（課）では市史編纂事業に合わせて地域の歴史史料（古文書等）を調査・整理し、所有者から寄託、寄贈の希望があれば、平成 23 年（2011）に開館した松江歴史館の収蔵庫で保管する手続きをとってきた。ところが、平成 27 年（2015）7 月の松江城天守の国宝指定にあわせて、松江歴史館収蔵の松江城天守祈祷札などが国宝附に指定され、松江歴史館は一躍国宝収蔵館となった。そこで、松江歴史館では資料収蔵方針を明確にし、24 時間空調により保存環境を整えている収蔵庫で保管すべき資料を優先的に収蔵していくこととなった。量的に多い、公民館資料など近現代公文書は、温湿度管理の優先度が低い資料として受け入れが困難な状態となった。そのため、松江市歴史まちづくり部としても、24 時間空調による温湿度管理の優先度が低い歴史史料（古文書等）の保存については、松江歴史館と並ぶ別の組織として文書館を立ち上げ、機能させる必要が生じていた。

③松江市議会での議論

折しも、いわゆる「森友学園問題」に関連して国の公文書管理の在り方が問われるような出来事も生じたことで、松江市議会でも松江市の公文書管理について関心が高まっていた。平成 30 年（2018）9 月 11 日には市議会で公文書館についての質問（吉儀敬子議員）があり、総務部長より公文書館の整備構想を今年度中に策定したい等の答弁を行っている。翌平成 31 年（2019）3 月 1 日には同市議会で再び公文書館についての質問（三島伸夫議員）があり、総務部長より、平成 31 年度中に公文書管理条例を作成したい旨等の答弁を行っている。

④松江市文書館（仮称）検討委員会の開催

①松江市史編纂委員会・編集委員会・部会長会議での議論、②市行政内での議論、③松江市議会での議論が織り成すように進む中、第 1 回松江市文書館（仮称）検討委員会が開催されたのは、平成 30 年 10 月 19 日である。議題は、1）松江市における公文書と地域に所在する歴史史料（古文書等）の数量的現状、2）公文書管理と文書館のイメージ、3）文書管理改善スケジュール（案）、4）意見交換、である。第 2 回検討委員会は、同年 12 月 20 日、議題は、1）研修会「鳥取県立公文書館の取り組み」、2）第 1 回の論点整理と新庁舎建設計画について、3）「松江市文書館（仮称）整備構想（案）」の審議、である。第 3 回検討委員会は、平成 31 年 2 月 4 日、議題は、「松江市文書館（仮称）整備構想（案）」の審議で、この審議で検討委員会の答申内容が決定した。平成 31 年 3 月 28 日、松江市文書館（仮称）検討委員会井上寛司委員長より松浦正敬松江市長へ整備構想が答申され、松江市は同日付で行政計画（構想）として策定した。（松江市文書館（仮称）検討委員会の議事録と配布資料は松江市ホームページ http：//www１.city.matsue.shimane.jp/bunka/matsueshishi/　に掲載、「松江市文書館（仮称）整備構想」は同ホームページの他、『松江市歴史叢書 13（市史研究 11）にも掲載』）

８．松江市史編纂事業の継承

（１）松江市文書館（仮称）

松江市史編纂事業の終了後についての議論は、前述のように、4 つの部会（原始古代史、中世史、絵図・地図、民俗）が市史の出版を終え、全 18 巻の半数が出版される平成 26、27 年頃から始まった。数年間に及ぶ部会長会議・編集委員会・編纂委員会での議論、行政内での議論を経て、市史編纂事業が終了するちょうど 1 年前、平成 31 年（2019）3 月 28 日に「松江市文書館（仮称）整備構想」が策定され、松江市史編纂事業で進めてきた「地域の歴史史料（古文書等）の調査・保存と活用」については、松江市文書館（仮称）に引き継がれることが松江市の行政計画（構想）に明示された。

松江市史編纂事業の成果は、今後、各種関係機関や研究者などによる活用、地域振興や観光振興などでの直接的・間接的な活用が期待されるが、編纂事業での様々な経験、史料の調査・保存と活用、執筆

者等関係者とのネットワーク確保などは、整備構想に基づき、今後整備が進むであろう松江市文書館（仮称）に引き継がれることとなっている。史料編纂課からは、平成 28 年（2016）より先進地視察や国立公文書館研修（アーカイブズ研修）に職員が計画的･継続的に参加しており、市史編纂事業の継承とともに、松江市文書館（仮称）の運営を支える人財として期待されている。

なお、軌を一にしたように、島根大学では令和元年（2019）度に学術研究院人文社会科学系（アーカイブズ学）の教員採用が行われ、アーカイブズ学に関わる講義・演習・実習・特別研究の指導、共通教養科目及び大学院修士課程の授業・院生指導が行われることとなった。

（２）松江城調査研究室

市史編纂事業の契機となった「松江開府 400 年祭」の期間中に、「松江城天守国宝化推進」の機運が高まった。当時の状況を反映して、市史編纂事業では計画段階から編集委員会に専門部会の一つとして松江城部会を設け、「松江城」を近世史の一部ではなく別編 1 冊とする出版計画を立て、予算的にも「松江市史編纂事業費」とは別に「松江城調査研究事業費」を組むという、やや特別扱いの体制を組んでいた。平成 28 年（2016）4 月の組織変更により、史料編纂室と松江城国宝化推進室（松江城調査研究室と改称）が統合し、史料編纂課が新設されたことにより、史料編纂室と松江城国宝化推進室がそれぞれ行っていた「松江城の調査研究」は緩やかに統合していった。松江市史編纂事業で取り組んだ「松江城の調査研究」は、史料編纂課内室である松江城調査研究室の事業と統合することによって、段階的に継承されたのである。

平成 30 年（2018）3 月に別編「松江城」が刊行されると、平成 30 年 4 月から西尾克己松江部会長に松江城調査研究室に着任いただいた。平成 31 年（2019）3 月には松江城調査研究委員会（松江城の学術研究委員会、初代委員長に西和夫氏）の抜本的改編が行われ（天守国宝化を念頭に置いた調査研究体制→世界遺産登録を念頭に置いた多分野にわたる調査研究体制）、松江城調査研究委員会委員として松江城部会員数名にお入りいただいた。松江城部会での経験は松江城調査研究室と松江城調査研究委員会で継承されることとなったのである。松江城調査研究室の職員は、松江城の調査研究事業に計画的・継続的に参加しており、市史編纂事業の継承とともに、松江城をシンボルとする松江市の文化財行政を支える人財として期待されている。

（第２章文責　稲田信）

第３章　『松江市史』の編纂過程をふりかえる

― 通史編５「近現代」ができるまで ―

本章では、『松江市史』編纂過程の実際を、最終巻である通史編５「近現代」を例にふりかえっておきたい。

１．部会

（１）近現代史部会

近現代史部会は、編集委員５名と事務局（史料編纂課の近現代史担当者）で構成した。編集委員を務めたのは以下の方々である。

- 竹永三男部会長（島根大学名誉教授）
- 伊藤康宏委員（島根大学学術研究院農生命科学系教授）
- 居石正和委員（島根大学法文学部教授→広島修道大学法学部教授）
- 能川泰治委員（金沢大学人間社会研究域歴史言語文化学系教授）
- 鬼嶋　淳委員（佐賀大学教育学部准教授）

編纂事業開始当初より、年２～４回の部会を開催し、編纂スケジュール、各編集委員の調査・執筆進捗状況の確認、編纂方針・執筆内容の検討などを定期的に行うこととした。また、県外在住委員にはこの部会での来松日程に合わせ、年１・２回程度、地域での史料調査を実施していただいた。

通史編５「近現代」の体裁、および編集にあたって部会で決定した事項は以下の通りである。

①体裁

頁数：900 頁（口絵カラー８頁）

判型：A5 縦組（50 字× 17 行＝ 850 字）、９ポイント

②執筆要領【資料１】

③構成（通史編の構成については「２．通史編の構成」に詳述する）

④サンプル原稿の作成

通史編「近現代」は、項目ごとに執筆者が細かく分かれるため、内容の重複や認識のずれが生じる恐れがあった。そこで各編集委員には、平成 27 年度（2015）の第４回部会から順次、サンプル原稿の作成をお願いした。

⑤章･節担当者の設定

前述の④のような編集上の課題から、各章･節に担当者を置くこととした。担当者の役割（責任と権限）と分担内容、各章・節担当者は以下の通りである。

- 担当する章・節を通読し、内容上の重複、洩れ、齟齬を検討する。
- 上記の不具合について「調整案」を作成し、近現代史部会会議に提示する。
- 部会の協議に基づいて「調整方針」を確定し、当該執筆者に提示する。
- 節担当者は担当節を全章にわたって通読する。
- 部会長は全ての章を通読する。

〈章担当〉

章	担当	
序章	竹永	竹永
第一章	竹永	
第二章	伊藤	
第三章	能川	
第四章	鬼嶋	
終章	竹永	

〈節担当〉

節	担当
第一節	竹永
第二節	伊藤
第三節	鬼嶋
第四節	竹永
第五節	能川

⑥原稿提出の期限と方法

・期限

項目執筆者……平成 29 年（2017）9 月 30 日

編集委員　……担当項目が多いため、3 段階に分けて提出とする

第 1 回　平成 29 年 9 月 30 日

第 2 回　平成 30 年 3 月 31 日

第 3 回　平成 30 年 9 月 30 日

・提出方法　……原稿はワード・エクセル・一太郎で作成し、全てデータで提出する。

⑦校正について

校正については「３．出稿から出版まで」「（３）校正について」に詳述する。

（２）執筆者会議

通史編の項目を立てるにあたり、編集委員以外にそのテーマに関する先行研究者がいる場合、別途、その項目のみを担当する外部執筆者（以下、項目執筆者）を依頼することとした。項目執筆者に対して部会決定事項の連絡、原稿の修正等のお願いをする場合は、依頼した各編集委員が窓口となった。項目執筆者は最終的に 20 名となった。

これら執筆者全体に『松江市史』編纂計画や統一事項等を周知するため、平成 26 年（2014）12 月 20 日と平成 28 年（2016）8 月 19 日の 2 回にわたり、通史編の「執筆者会議」を開催した。

①第１回執筆者会議

平成 26 年 12 月 20 日、松江市総合文化センター 2 階において開催した。この会議では、『松江市史』全体の編纂計画、通史編の統一事項、近現代編の項目、編纂スケジュール、謝金など執筆にあたって必要な事項を説明した。

②第2回執筆者会議

平成 28 年 8 月 19 日、松江市環境センター 2 階会議室において開催した。これは、項目執筆者の提出期限（平成 29 年 9 月末）まで約 1 年となったことから、確定した執筆要綱の周知をはかり、通史編の構成および変更点を説明するために、また、編集委員と項目執筆者が互いの執筆内容を大まかに把握するために開催した。

項目執筆者には、あらかじめ構想レジュメ【資料 2】の作成をお願いしておき、当日はこれに沿って 1 人 5 分程度で発表していただいた。

２．通史編の構成

（１）各章の時代区分

本巻では、松江市域の近現代史を以下の四期に区分し、それぞれに一章を充てることとした。

第一期…明治 4 年（1871）の廃藩置県から明治 22 年（1889）の「市制及町村制」の施行・明治の町村合併前まで（第一章）

第二期…「市制及町村制」の施行と明治の町村合併から昭和 5 年（1930）の昭和恐慌の勃発と翌年の満州事変まで（第二章）

第三期…昭和恐慌・満州事変（昭和 6 年）から敗戦を挟んで戦後の町村合併の前（昭和 23 年）まで（第三章）

第四期…昭和 23 年（1948）から昭和 35 年（1960）に至る戦後の市町村合併から平成 23 年（2011）に現在の松江市が成立するまで（第四章）

なお、この区分では通例と異なり、戦時・戦後を第三章で一括している。これは敗戦と戦後改革の画期的意義を軽視したためではなく、戦時・戦後の体験を一貫したものとしてとらえることを編集委員が意図したものである。

第五章は「終章」とし、時期や分野を限定せず包括的に叙述するべき四つのテーマ（人口、災害、原子力発電所、宍道湖・中海の干拓淡水化事業）を取り上げた。

また、巻頭に「概観」を、各章の最初に「この時期の概観」を設定した。終章については特に、これが『松江市史』全巻の最終章にあたり、通史編全体が一つの「地域史の到達点」であること、また、今後、松江市の将来像を考える参考として利用されることを念頭に置き、ここのみ「はじめに」と「おわりに」を設けることとした。

（２）各節の主題

各章は以下の五つの節で構成し、各節に共通の主題を設定した。節は２項目以上となるようにした。

第一節…政治と行政の動き
第二節…地域の産業・経済と交通
第三節…人々の暮らしと文化、社会運動、地域福祉
第四節…学校教育・社会教育と文化・芸術・観光
第五節…〔特論〕松江市域を特徴付ける事項

（３）各項目について

長期にわたる編纂の過程で、当初の計画からいくつかの項目の削除や統合・新規立項があり、最終的に巻全体で五章五節あわせて 83 項目となった。各項目の詳細は「通史編『近現代』スケジュール表」【資料 3】の通りである。このスケジュール表は概ね２週間に１回開催した史料編纂課の課内会議で毎回配付し、課内全員で進捗状況の情報共有を行った。なお、課全体の進行状況についても課内会議で「史料編纂課事業スケジュール」【資料 4】を配布し、市史編纂事業全体の進捗状況の情報共有と編集に関する意見交換を図り、史料調査項目等について経験の積み重ねによる編集の知恵（編集作戦）を徹底的に話し合った。

３．出稿から出版まで

（１）執筆者からの原稿提出

各執筆者からの原稿の提出期限は前述の１．（1）⑥の通りである。ただし、大量の項目を担当した編集委員の中には諸事情により第３回の期限に執筆が間に合わないものもあったため、最終的な提出期限は平成 31 年（2019）３月 31 日とした。

（２）入稿前の内校

『松江市史』では、正式な入稿をする前の段階で「内校」を行った。これは、執筆者から提出された原稿データをプリントアウトして印刷会社に渡し、熟練した校正担当者の眼で表記・語句の統一事項を前もって厳しくチェックする作業である（ただしここで見られるのは本文のみで、図表・写真・参考文献は含まれない。熟練担当者の名をとり、福原チェックと呼んでいた）。

『松江市史』全巻の編集・印刷製本業務を担当した今井印刷株式会社では、入稿前の内校担当者は１名のため、全章を一度には見られないとのことだったので、原稿データが揃った章・節から順不同で三回に分けて提出した。分量やタイミングにもよるが、返却まで２週間～１か月程度の期間を要した。

内校を終えた原稿には、修正を要する点や疑問点などが青ペンで全体に書き込まれている【資料 5】。

これを執筆者へ返却し、朱字で回答をお願いした。あわせて、節担当の編集委員は節の全原稿を通読し、文体や用語の統一を図るよう各執筆者に依頼した。執筆者が朱入れを終えて再提出された原稿については、他巻では事務局で修正内容をデータに反映する場合もあったが、本巻では作業時間の短縮のため、入稿の際に原稿データと再提出原稿をとりまとめて印刷会社へ渡し、初校ゲラへの反映を依頼した。

（３）入稿

内校、節担当者・執筆者の修正が終わり、事務局で体裁を整えた原稿から印刷会社へ入稿した。入稿は令和元年（2019）6 月 28 日から開始し、１～２週間に一度のペースで順次進め、8 月 23 日の 5 回目で全章の入稿を終えた。

入稿の形態は、①原稿データ（本文・図表・画像データ）、②再提出原稿（プリントアウトに内校・回答朱入）である。この時点では順序は問わず、データの揃った章、または節単位で入稿した。データの準備が間に合わない写真や図表等については、見込みで枠線等を入れておいてもらうようにし、揃い次第、追加入稿した。初校ゲラが出るまでには、1 か月程度の期間を要した。

（４）校正

今井印刷株式会社より、同年 7 月 31 日に「進行表」が提示された【資料６】。以後、校正スケジュールは修正を含みつつ、この進行表に沿って動いていった。

校正ゲラは印刷会社から基本的に 3 部（正本 1 部、副本 2 部）、前回返却したゲラ（初校の場合は提出内校紙）とともに届けられる。副本は執筆者への送付用に使用し、修正を朱字で書き込んで返却していただく。正本は、副本に書き込まれた執筆者の修正とあわせて事務局で気づいた修正をフリクションなどの赤ペンで清書し、印刷会社へ返却する。なお、校正ゲラには、印刷会社の校正担当者が社内校正の際に見つけた誤字や疑問なども鉛筆で書き込まれているため、それへの回答も重要である。また、前回の校正が確実にゲラに反映されていることを確認する作業も必要となる。

なお、これまで『松江市史』では全巻の共通事項として、執筆者による校正は「原則三校まで」としていたが、本巻は担当者が細分化されていることもあり、「項目執筆者の校正は再校まで、編集委員は三校まで」と部会で決定した。しかし、実際には三校までに編集委員の眼が全体に及ばなかった不安もあり、編集委員には四校まで校正をお願いすることとなった。五校は竹永部会長と事務局で、念校（PDF 校）は事務局で行った。

執筆者には、①校正紙、②前回の校正ゲラ、③お願いの添書【資料７・８】、④返信用梱包材一式（返信用レターパックライト封筒・ゆうパック着払い伝票貼付封筒など）を、レターパックライトやゆうパックで送付した。また、見落とし防止や再確認の時間節約のため、印刷会社から届いた校正ゲラにあらかじめ事務局が緑ペンで疑問点などを書き込んでからお送りした。

初校の段階では、入稿順に分割された状態でゲラが届けられる。再校段階でややまとまってくるが、まだ分割された状態であり、巻全体の校正ゲラが揃うのは概ね三校の段階である。このため、章・節をまたいだ表記・語句の統一事項の確認作業が本格的にできるのは三校以降となった。

①初校

初校ゲラの第 1 回分は 7 月 31 日（返却期限:9 月 6 日）、第 2 回分は 9 月 2 日、第 3 回分は 9 月 9 日（返却期限：ともに 10 月 4 日）に印刷会社から届けられた。返却期限を考慮し、編集委員・執筆者の校正期間はそれぞれ 8 月 20 日と 9 月 26 日に設定した。竹永部会長と伊藤委員に対しては、各々が依頼した項目執筆者の原稿についても通読をお願いした。

なお、事前に印刷会社から、これまでの他巻の出版経緯を踏まえ、「修正作業は校正を重ねるごとに減っていくようにしてほしい」との要望があった。このため、各執筆者への初校送付にあたり、原稿の大

幅な加筆・修正・削除は初校段階で済ませていただくようお願いする文書を同封した。【資料７】。

初校返却後、事務局では手分けをし、ルビ一覧・口絵・年表を作成するとともに、参考文献のとりまとめを行った。ここでは「分担別進行表」を作成し、各自がどのようなスケジュールで動くかを確認できるようにした【資料９】。それぞれの詳細は以下の通りである。

ちなみに、本巻巻末に掲載する「執筆分担」についても初校返却段階で入稿した。通常は「松江市史編纂関係者名簿」等と同時期に三校前後で入稿するものだが、今回は項目執筆者から所属機関への業績報告に必要との声があり、再校で確認していただくため前倒しでの入稿となった。

・ルビ一覧

ルビ（振り仮名）は、各項目のみに登場する用語については執筆者が個別に入れるが、難読語句や人名・地名については、巻全体で基準を統一して入れる必要がある。このため、五十音順にしたルビ一覧表を事務局が作成した。なお、他巻では「節」単位の初出箇所に入れたが、本巻では「項」単位の初出に入れることとした。

・口絵

口絵は全部で８頁あり、冒頭に巻全体を代表するような図版を１頁分、次に見開きになる図版を２頁分、第一章から終章まで章順に５頁分とし、本文との対応を重視しつつ、分野が偏らないよう１頁に１～４枚程度写真を配置するようにした。図版選定は編集委員が行い、事務局が収集にあたった。部会で一旦掲載が決定した図版でも、解像度の高い画像データが入手困難であったり、後になってより適切な写真が見つかったりと、何度かレイアウトの変更が必要だったが、最終的に、人物・風景・史料、モノクロとカラーをバランスよく組み合わせた口絵となった。

・年表

本巻巻末に掲載する「近現代史年表」の作成にあたっては、初校段階で各執筆者に年表に掲載すべき事項の選定をお願いし、初校ゲラの該当箇所にマーカーを引いていただいた。また、松江市域の一般的事項や国内・県内の重要事項については、別途、中学校歴史教科書の近現代史年表、過去の松江市年表、地元紙に掲載される十大ニュース等をベースに、西尾克已松江城部会長と稲田信次長が選定した。これらを統合した後、竹永部会長と事務局で取捨選択の作業を重ね、語句や表記を統一し、全体を 15 頁程度に収まるようにまとめた。

・参考文献一覧

参考文献は、各執筆者が原稿提出時に挙げた書誌情報のリストに、本文に記載されたものを事務局で補足した上で分類した。近現代は史資料の形態が多岐にわたるため、分類方法は部会で検討の上、以下のように決定した。

〔１〕史料原本　〔２〕自治体史　〔３〕事典・辞典　〔４〕図書・論文　〔５〕逐次刊行物　〔６〕ウェブページ

さらに、終章の「宍道湖・中海の干拓淡水化事業」の参考文献については、この主題を継続的に考えていくための史資料の記録、かつ総合的な情報提供の場と位置づけ、あえて上記に分類せず一括で〔７〕とし、本巻で直接参照したものだけでなく、関連する重要な文献についても示した。

②再校

再校ゲラは令和元年（2019）10 月 31 日に全章一括で届いた。印刷会社への返却期限が 11 月 22 日だったことから、執筆者が事務局へ戻す期限は 11 月 15 日に設定した。遅延等により、印刷会社への返却は 11 月 27 日・12 月 2・4 日となった。あわせて、前述のルビ一覧・口絵・年表を順次入稿した。

再校では、「索引掲載事項」にマーカーを引いていただくよう、執筆者に依頼した。また、執筆者ごと

の担当項目別の「参考文献」（当初執筆者が挙げた書誌情報を事務局で整え、図表・写真・本文中で挙げられたものを全て拾ったもの）を同封し、不足している書誌情報や修正を朱書きし、あわせて掲載不要と思われる項目の削除をお願いした【資料８】。

再校の返却後、図版が確定したものから、所蔵者・出版元への掲載許可申請を始めた。

③三校

三校ゲラは令和元年 12 月 16 日に一括で届けられた（口絵・年表については初校）。印刷会社への返却期限が年明け 1 月 7 日だったため、執筆者が事務局へ戻す期限は 12 月 24 日に設定した。三校は、全章を竹永部会長と伊藤委員が通読し、疑問点などを各執筆者に問い合わせていただいた。

三校は年末年始にかかったために確認作業が予定通り進まず、印刷会社へは 1 月 7 日・10 日・16 日の三回に分けて返却した。ここで巻頭に掲載される松江市長の「発刊にあたって」、巻末の関係者名簿・参考文献一覧を入稿し、あわせて目次作成を始めてもらうよう印刷会社に依頼した。

④四校

四校ゲラは、三校返却時に入稿したもの・口絵の色校も含め、1 月 24 日に届いた（参考文献については初校、口絵・年表は再校）。前述のように、編集委員による校正は通常三校で終了としていたが、三校段階でも大幅な修正・変更があったこと、事務局が校正した際に疑問点が出たことから、四校でも校正をお願いした。

なお、再校・三校の段階では、執筆者が校正を終えた副本を事務局で正本に清書しながら校正をした際に新たな訂正・疑問点に気がつき、再度執筆者に照会しなければならないという場面もあった。このため四校では確実に校正を進めるために先に事務局がゲラに目を通し、修正や疑問点などを緑色のペンで書き込んでから執筆者へ送付し、それへの回答を含めて校正していただく、という方法を取った。この作業は時間を要し、印刷会社への返却期限は 1 月 31 日だったが、全ての原稿を返却し終えたのは 2 月 4 日となった。四校の返却の際に、索引データを入稿した。

⑤五校・念校（PDF校）

印刷会社から当初示された進行表より予定が大幅に遅れたため、校正の度に次回スケジュールを確認した。四校返却の際、五校の返却期限は令和 2 年 3 月 6 日、念校（PDF 校）は 3 月 10 日に届いて翌日までに確認し回答、納品日は 3 月 30 日と決定した。その後、同時進行していた通史編「近世Ⅱ」とのスケジュール調整により、念校は 3 月 9 日到着、回答期限が 10 日となった。

五校ゲラが事務局に届いたのは 2 月 25 日だった。参考文献は再校、口絵・年表は三校となるが、本文と合わせて最後の校正となった。また、校正紙とは別に、印刷会社担当者が索引作成の際、表記のゆれに気づいた部分等に付箋を貼ったコピーもいただいた。

五校の校正にあたっては、竹永部会長には 2 月 27 日、3 月 2 日、3 日に史料編纂課へ詰めていただき、事務局が確認を終えたゲラから順次目を通していただいた。五校の段階では、索引の頁数採録が既に終了しているため、頁数がずれるような修正はできない。このため、字数調整を重ねての修正となった。

念校は、メールで PDF のみが届き、事務局には印刷会社に提出した五校ゲラが戻らない。そこで、返却前に五校ゲラ全体をスキャンして PDF を作成し、あわせてカラーコピーをとっておいた。念校はこれとつきあわせて事務局のみで校正を行った。五校での訂正の反映確認と、誤字脱字の確認をし、校了となった。納品は予定どおり、令和 2 年 (2020)3 月 30 日だった。

（第 3 章文責　近現代史担当　高橋真千子・村角紀子）

【第３章資料１】『松江市史』近現代　通史編執筆要領（改訂版）

一　趣旨

この要領は、『松江市史』の通史編の執筆について、必要な事項を定めるものとする。

ここに定めるもの以外については、部会ごとに定めるものとする。

二　本の体裁

１　判型　　Ａ５判
２　頁数　　９００頁
３　段組　　縦１段組 〔また、本文以外の体裁は別途〕
４　字数・行数　５０字×１９行（１頁８５０字）
５　字の大きさ　13 級（９ポイント相当）
６　字の書体　　リュウミンＬ

三　書式

縦書きを原則とする。ただし、統計・図表・地図（絵図）など特に横書きを必要とするものを除く。

四　本の構成

１　口絵
２　発刊にあたって
３　凡例
４　目次（小見出しも載せる。ただし、頁は項または節に振る。（体裁は別途））
５　本文（自然環境、原始古代、中世、近世、近現代の各分野の最初に「はじめに」を設け、時代の概観を行う。また、「はじめに」に併せて、必要に応じて「略年表」を設ける。）
６　参考文献一覧（体裁は別途）
７　関係者一覧
８　年表（体裁は別途）
９　索引

五　本文の構成

本文全体を章・節・項に区分し、項の中でそれぞれの内容ごとに小見出しをつける。

ただし、項については、必ずしも全部の節に設ける必要はない。

なお、目以下については、部会ごとに定めるものとする。（体裁は別途）

章：改丁。冒頭に扉をつけ、裏からはじめる。

節：改頁。

項：改行。

小見出し：段落上部に原則１２字以内（原則１行６字以内の２行書き）のタイトルを記載。また、 小見出し一つ当たりの執筆分量は１～２頁を目安とする。（見開き１頁に２つか３つの小見出しを目安に）

六　表記（文体・用字・用語等）

１　記述は、平易な口語体とする。〔例：～である。〕
　なお、「～だ。」という表現は「～である。」とする。
２　漢字は、原則として、「常用漢字表」（平成二十二年十一月、内閣告示第二号）および「人名用漢字別表」（昭和五十六年法務省令第五十一号別表第二）に従う。
３　固有名詞、歴史的名辞等で難読のものには、平仮名でルビをつける。
４　仮名遣いは、「現代仮名遣い」（昭和六十一年七月、内閣告示第一号）に従う。
５　送り仮名は、「送り仮名の付け方」（昭和四十八年六月、内閣告示第二号）に従う。
６　地名・人名・役名等の名詞を並列させる場合は、中黒点（・）を使用する。
　〔例：伊藤博文・山縣有朋〕
７　個数を示す「箇」、「ケ」、「カ」は、すべて「か」に統一する。
　〔例：三カ月→三か月〕
８　漢字の反復記号は使用する。仮名文字の反復記号は使用しない。
　〔例：人人→人々、かゝる→かかる〕
　ただし、引用文中は原文のママとする。

9　その他、表記の統一にあたっては、原則として印刷業者が行う表記の統一基準（別紙例参照：概ね一般社団法人共同通信社編『記者ハンドブック第一二版』〔平成二十四年八月十七日刊〕に従う）。ただし、最終的な判断は執筆者に委ねる。

七　執筆細則

1　敬語・敬称

文中の人名には、敬語・敬称は使用しない。

2　地名

（1）歴史的な地名を表す場合は、その時代に用いられたものを使用し、その下に現市町村名等を（　）で付記する。県外は県単位までとする。

〔例：「嶋」と「島」〕

（2）外国地名の表記については、(財）教科書研究センター編著「新地名表記の手引」（平成六年四月十日刊）に従う。

3　人名

（1）人名は、広く使われているものを用いる。必要に応じてその下に（　）で、号・通称等を示す。

〔例：「龍」と「竜」〕

（2）外国人の姓名の表記は、外国の地名表記の原則に準ずる。

4　年齢

年齢は、原則として数え年で表す。

5　地図記号

地図記号は、特殊なものを除き、国土交通省国土地理院発行地図記載のものによる。

6　数字

①漢数字を用いるが、必要に応じて算用数字も使用する。

②万・億・兆の単位は用いるが、原則として、十・百・千の単位語は使用しない。

〔例：二兆五四二億三四万八三〇〇円〕

③概数には、読点を使用する。〔例：二、三人〕

④小数点以下の数字のある場合は、中黒点（・）で示す。〔例：一・五倍〕

⑤数量の幅を示すときは、波形記号（～）等を用いる。〔例：三〇〇～三〇六点〕

⑥次のような場合は、算用数字を用いる。

ア　横書きの場合

イ　写真・図版・表等の番号

ウ　その他、通例として算用数字を用いる必要がある場合

7　度量衡

①度量衡の単位は、「㎝㎞㎡」などの組み文字で記す。

②％は「㌫」、気温は「℃」で記す。

③旧来の度量衡の単位を使用する場合は、（　）内に適宜メートル法を注記する。

8　分数

分数は「三分の一」、「二〇分の一」と記す。

9　ページ

ページは「頁」等と記す。

10　年号・年月日

①日本年号を用い、その下に（　）で西暦を入れる。ただし、西暦を入れるのは、適宜目安となるところだけとする。なお、近代（明治）以降は西暦を用い、その下に（　）で日本年号を入れることもある。〔例:一九二六年（昭和元)〕

②明治五年十二月二日以前は陰暦を用い、その後は陽暦とする。

③年月日及び世紀の表示には原則として十を使用する。ただし西暦には使用しない。

〔例：一九四〇年（昭和十五)、二十世紀〕

11　図・表・写真

①図・表・写真は、原則として章ごとにそれぞれ一連番号と表題をつける。

②図・表は、作成の際に使用した文献・資料名または提供者等を注記する。

12　注記

注記の必要がある場合、できるだけ簡潔に記し、本文中の当該部分の下に（　）で入れるが、長いものは（　）を開いて本文として記述する。なお、典拠を注記する場合は文字級数を下げて入れる。

13　引用文

①史料の原文を本文中に引用する場合には長文にわたる引用は避ける。引用史料は「　」で括り、引用が三行以上に及ぶ場合には二字下げで引用する。

②引用文に（前略）（後略）は原則不要、中略は（中略）とする。

③漢字・カタカナ混じりの史料は、カタカナをひらがなに改める。

14　史料編収録史料を引用する場合の取扱いについて

史料編収録史料は史料編の典拠を注記して、原文や読み下し文をそのまま引用することはなるべく避ける。

15　典拠

（1）『松江市史』の既刊本を典拠とする場合

遺跡の場合は「考古○○（遺跡番号）」、史料の場合は「古代○○（史料番号）」「中世Ⅰ○○（史料番号）」などと注記する。なお、資料集成など遺跡番号や史料番号が振られていない部分を典拠とする場合は「考古○○頁」のように巻名と頁数を注記する。

〔例（絵図地図・図 64）（民俗第一章第一節第一項）（松江城第七章第二節第一項）（通・近世Ⅰ二章五節）（史・近世Ⅳ五章 52）（史・近現代Ⅰ「島根県歴史」450 頁）（史・近現代Ⅱ二章 23）〕

（2）図書・論文等を典拠とする場合（※どうしても典拠を明示する必要がある場合のみとする）

編著者名（姓のみ）（複数名の場合は「○○ほか」とする）と発行年を注記する。ただし、同姓の執筆者がいる場合は姓・名ともに記し、同一執筆者に同年の論文が複数ある場合は刊行年の後にａ，ｂを附す。

〔例：（石母田　一九八八）、（小林達雄　一九九六）、（内田融　一九八四ａ）〕

（3）広報・逐次刊行物を典拠とする場合には、紙名・刊行年とする。ただし新聞・官報は月日まで記載する。

〔例（「山陰新聞」一八八六年十一月二十三日、「大阪朝日新聞（山陰版）」一九二四年二月十五日）〕

（4）郷土誌・自治体史は書名と巻号を記す。

〔例『乃木郷土誌』、『松江市誌』、『新修松江市誌』、『新修島根県史』史料編五〕

（5）聞き取りを典拠とする場合は、（○○○○氏談）と簡潔に注記することを原則とする。聞き取り年月日は、史料上特に必要な場合を除いて記載しない。

（6）括弧内に括弧がある場合、以下のように表記する

①「　」の場合　「……『　』……」

②（　）の場合　（……〔　〕……）

16　法令等の取り扱い

原則として、公布の日でとる。

（付則）

1　この要領は、平成 26 年 3 月 9 日に開催された松江市史部会長会議を踏まえて修正した。

2　この要領は、平成 30 年 2 月 18 日に開催された松江市史近現代史部会を踏まえて修正した。

3　この要領は、令和元年 5 月 18・19 日に開催された松江市史近現代史部会を踏まえて修正した。

【第３章資料２】　項目執筆者による構想レジュメ

2016.8.19 会議用メモ（山本志乃）

第４章　松江市域の再出発

第２節　高度経済成長以降の地域産業の変遷

５．魚と花の行商

（１）恵曇の魚行商

【内容】

・船→バス→自家用車（交通手段の変遷）

・得意先の継承と開拓（売り手側）

・都市住民の増加と魚食文化の日常化（買い手側）

・行商からのイノベーション（漁協女性部の商品開発）

【資料・調査】

・収集済み文献：山本弘『恵曇の魚行商人』1998 年
恵曇の今昔を記録する会『恵曇の今昔』2004 年
鹿島町誌編纂委員会『鹿島町誌』1962 年

・聞き取り調査：2015 年 5 月 1 日　青山幸子さん
2015 年 7 月 29 日　青山敦子さん
青山フミエさん、青山操さん、渡部百枝さん

・今後の予定：2016 年 8 月 20 日　山本弘氏に聞き取り（午前）、青山幸子家（午後）

【課題】

・行商を迎え入れてきた側（得意先）の聞き取りは可能か？

（２）大根島の花の行商

【内容】

・生業の変遷と花卉栽培の登場（行商の背景）

・クサバナから牡丹苗へ（行商の展開）

・花売りの旅（近隣から全国へ）

【資料・調査】

・収集済み文献：中国地域社会研究会『八束村誌』1956 年
まつえ女性史を学ぶ会『花見てごさっしゃい』2011 年
島根県企画室『大根島の実態調査』1955 年
関西学院大学地理研究会『大根島』1981 年（部分）←全文入手希望
ほか、島根大学農学部関係の論文など

・聞き取り調査：2011 年 10 月より、八束町波入にて聞き取り調査を継続中
門脇貞子さん、門脇恵美子さん、門脇貴代子さん、渡部タマエさん、
門脇一美さんなど

・今後の予定：2016 年 8 月 21 日　門脇貞子家と由志園（門脇恵美子さん）を訪問

【課題】

・行商の旅の実態について、記録を入手することは可能か？

【第３章資料３】　通史編「近現代」スケジュール表

（令和元年 12 月）

章	節	担当者	項	担当者	提出	図表	備考	予定頁数	提出頁数	初校出	初校戻し	再校返却	再校戻し	2019年 11-12月	2020年 1-3月
	口絵（カラー）	事務局						8	8.0			11/15〆切	12/2	再校一括 10／31出 ↓ 11／27戻（ルビ反映、参考文献入稿、年表入稿、口絵入稿）	四校・色校 1／8出 ↓ 1／17戻（索引入稿）
	発刊にあたって							1	1.0						
	目次							25	25.0						
	凡例							2	2.0						
概観		竹永			○	○	第5稿	8	8.5	8/30	10/4	○	○	三校 12／9出 ↓ 12／23戻	五校 2／12出 ↓ 2／21戻（索引含む）、PDF校 2／27、2／28校了
第1章（竹永） 近代松江市域のはじまり	この時期の概観	竹永			○		第2稿	4	3.4	8/30	10/4	○	○		
	第1節 明治維新後の町・村・浦の足どり	竹永	①廃藩置県から一八八四年戸長管轄区域の拡大まで	居石	○		図版なし	8	18.0	9/9	10/15	○	○		
			②松江市域の自由民権運動	竹永	○	○		8	8.0	8/30	10/8	○	○		
			③松江出身の民権家・高橋基一の生涯とその立憲主義論	竹永	○	○	明治新聞雑誌文庫ポジスキャン	8	9.0	8/30	10/7	○	○		
	第2節 地租改正から殖産興業へ	伊藤	①地租改正の実施過程とその担い手	矢野	○	○		10	13.5	8/30	10/4	○	○		
			②老農と農事改良	内田和	○	○		10	10.0	8/30	10/4	○	○		
			③漁業場区と水産業振興	伊藤	○	○	改訂版提出	8	9.0	8/30	10/4	○	○		
			④殖産興業	矢野	○	○		10	10.3	8/30	10/4	○	○		
	第3節 暮らしの中の伝統と開化	竹永	①風俗の矯正、徴兵令と住宅建築の変化	竹永	○	○	再提出、タイトル変更	8	9.5	8/30	10/7	○	○		
			②神仏分離、神社神道と教派神道	喜多村	○	○		10	12.0	8/30	10/4	○	○		
	第4節 私塾と私立学校	竹永	①私塾から私立学校へ	内田融	○	○	3項目に再編、改訂	10	5.0	9/9	10/4	○	○		
			②渡部寛一郎と私立中学修道館	内田融	○	○			6.0	9/9	10/4	○	○		
			③松操高等女学校と戦前・戦後の私立学校	内田融	○	○		8	4.0	9/9	10/4	○	○		
	第5節〔特論〕 松江の外の松江	能川	①同郷会と同郷人雑誌	竹永	○	○	タイトル変更	8	10.0	8/30	10/7	○	○		
			②東京出雲学生会・島根県協会と在京の松江出身者	竹永	○	○	岸清一写真再入稿	8	7.0	8/30	10/4	○	○		
第2章（伊藤） 近代松江市域のあゆみ	この時期の概観	竹永			○			4	4.4	8/30	10/7	○	○		
	第1節 松江市と町・村の誕生と発展	竹永	①一八八八年、島根・秋鹿・意宇三郡の町村合併	居石	○	○	図版確定	8	18.3	9/9		○	○		
			②市制施行と松江市の誕生	竹永	○	○	代理執筆	8	6.3	9/9	10/7	○	○		
			③初代松江市長・福岡世徳市政の展開	竹永	○	○	改稿、一部2-1-2へ移動	8	10.3	7/31	9/6	○	○		
			④高橋義比市政・高橋節雄市政の展開	能川	○	○		8	8.0	7/31	9/6	○	○		
			⑤松江市における水道敷設	大矢	○	○	移動の可能性あり	10	11.0	7/31	9/6	○	○		
			⑥克堂会と憲克倶楽部	竹永	○	○	改訂	8	8.1	7/31	9/6				
			⑦市長候補選任をめぐる紛糾と松江市の地域政治構造	竹永	○	○	改訂		10.0	7/31	9/6				
			⑧司法の近代化と松江裁判所の設置	居石			削除	8							
	第2節 湖海と陸の産業の近代化	伊藤	①農業問題と農業団体	谷口	○	○	改訂版提出	10	12.0	7/31	9/6	○	○		
			②森林・林業と製炭業	井口	○	○	改訂版提出	8	9.0	7/31	9/6	○	○		
			③明治漁業法と漁業組合	伊藤	○	○		8	9.0	7/31	9/6	○	○		
			④松江商業会議所と商工業	伊藤	○	○		8	12.0	7/31	9/6	○	○		
			⑤水運から鉄道へ	松下	○	○	調整確認、返却済み	10	11.0	7/31	9/6	○	○		
	第3節 市民と村民の暮らしと活動	鬼嶋	①松江の「静かな」米騒動	能川	○	○	図版指定	8	9.0	8/30	10/4	○	○		
			②社会運動の高揚	竹永	○	○	福田・山根・戸谷写真○	8	12.0	8/30	10/8	○	○		
			③地域社会のデモクラシーと平等	竹永	○	○	第三版提出	8	12.3	8/30	10/7	○	○		
			④社会事業の展開	鬼嶋	○	○	表2点、写真3点指示あり	8	10.6	8/30	10/4	○	○		
			⑤宝満山と鉱害問題	能川	○	○	図版指定あり	8	7.0	8/30	10/4	○	○		
	第4節 学都松江と地域の文化	竹永	①官立松江高等学校の開設と地域	竹永	○	○	島根大学の開学補訂	8	11.5	8/30	10/8	○	○		
			②漢詩文化と政党政治―若槻礼次郎・渡部寛一郎と松江	竹永	○	△	1節から移動・タイトル変更 若槻礼次郎写真×	8	7.6	8/30	10/7	○	○		
			③近代松江における松平治郷（不昧）の顕彰	工藤	○	○	改題	5	12.5	8/30	10/4	○	○		
			④ラフカディオ・ハーンと松江	内田融	○	○		10	11.0	9/9	10/4	○	○		
			⑤桑原羊次郎とその美術工芸研究	村角	○	○		8	10.2	8/30	10/4	○	○		
	第5節〔特論〕 県都・軍都と「模範村」	能川	①第一次桂太郎内閣の府県廃合計画と松江市長の対応	竹永	○	○		8	10.0	7/31	9/6	○	○		
			②歩兵第六十三聯隊誘致と陸軍記念日祝賀行事	能川	○	○		8	9.0	7/31	9/6	○	○		
			③日露戦争後の地方改良運動と「模範村」	竹永	○	○	次項目を小見出しで追加	8	11.5	7/31	9/6	○	○		
			④一九二〇年代の「模範村」	竹永	○	○	削除	8	7.2	7/31	9/6				
第3章（能川） 戦時・戦後の松江市域	この時期の概観	竹永			○	○	島根新聞再撮影○	4	4.0	8/30	10/4	○	○		
	第1節 松江市と町・村の戦時と戦後	竹永	①石倉市政期の都市基盤整備事業と観光	能川	○	○		8	9.0	8/30	10/4	○	○		
			②松江市の都市計画	中野	○	○	2章1節から移動	10	13.0	8/30	10/4	○	○		
			③松江市域における総力戦	能川	○	○	3-3-②再分離、大手前通り撮影○	8	9.0	8/30	10/4	○	○		
			④敗戦・無条件降伏と松江騒擾事件	竹永	○	○	島根新聞再撮影○	8	7.2	8/30	10/4	○	○		
	第2節 昭和恐慌・戦時経済から戦後経済改革へ	伊藤	①昭和恐慌と地域経済	板垣	○	○		10	10.3	8/30	10/4	○	○		
			②戦時下の統制経済	伊藤	○	○	改訂版提出	8	9.0	9/9	10/4	○	○		
			③戦後の経済改革	伊藤	○	○	改訂版提出、改題	8	8.0	9/9	10/4	○	○		
			④戦後の農地改革と農協の誕生	中間	○	○		10	9.6	8/30	10/4	○	○		
第3章（能川） 戦時・戦後の松江市域	第3節 戦時の宗教・社会と戦後の暮らし・文化	能川	①第二次大本事件	竹永	○	○		8	12.7	9/9	10/4	○	○		
			②戦時厚生事業の展開	鬼嶋	○	○	復活、改題	8	8.0	9/9	10/4	○	○		
			③市民の暮らしと戦争被害	鬼嶋	○	○	図版指定あり、改題	12	14.0	9/9	10/8	○	○		
			④地域文化運動の高揚	鬼嶋	○	○	図版指定あり、改題	16	13.0	9/9	10/8	○	○		
	第4節 学校と地域の戦争	鬼嶋	①学徒勤労動員と学童疎開の受け入れ	能川	○	△	森脇家文書再撮影	6	8.0	7/31	9/6	○	○		
			②神国大博覧会と支那事変博覧会	能川	○	○		8	8.0	7/31	9/6	○	○		
	第5節〔特論〕 出征兵士と銃後の市民	鬼嶋	①日清・日露戦争と市民	能川	○	○	図版指定あり、題検討中	8	8.0	7/31	9/6	○	○		
			②満州事変～アジア・太平洋戦争と市民	能川	○	○	図版指定あり、題検討中	8	8.0	7/31	9/6	○	○		
第4章（鬼嶋） 現代松江市域のなりたち	この時期の概観	竹永			○		4-2-①「高度経済成長と長期振興計画」1頁分追記	8	6.0	8/30	10/4	○	○		
	第1節 現代松江市の誕生	竹永	①戦後の市町村合併と一市八町村の成立	竹永	○	○	代理執筆	8	10.6	9/9	10/4	○	○		
			②二十一世の市町村合併と現代松江市の誕生	竹永	○	○	代理執筆	8	4.0	9/9	10/4	○	○		
	第2節 地域産業の再編	伊藤	①農業の近代化と農業構造改善事業	中間	○	○		10	10.0	7/31	9/6	○	○		
			②水産業の民主化と再編	伊藤	○	○	改訂版提出	8	13.0	7/31	9/6	○	○		
			③商工業の変貌	伊藤	○	○	改訂版提出	12	12.0	7/31	9/6	○	○		
			④平成の広域合併前後の都市部と農漁村部の就業環境	保永	○	○	移動、削減依頼	10	17.0	7/31	9/6	○	○		
	第3節 暮らしの変化と地域の運動	能川	①朝鮮戦争・再軍備と地域の運動	鬼嶋	○	○		8	10.0	9/9	10/15	○	○		
			②新生活運動と地域の民主化	鬼嶋	○	○		12	12.0	9/9	10/15	○	○		
			③高度成長と暮らし・教育・文化	鬼嶋	○	○		12	15.0	9/9	10/15	○	○		
			④地域保健衛生活動の展開	鬼嶋	○	○		12	12.0	9/9	10/15	○	○		
	第4節 戦後の教育・文化の展開	竹永	①公民館活動と社会教育・「地域づくり」	鬼嶋	○	○		15	12.5	9/9	10/15	○	○		
			②民藝運動の展開と継承	吉儀	○	○	改訂、改題	10	14.0	9/9	10/4	○	○		
			③国際文化観光都市の指定と観光振興	工藤	○	○		12	13.0	9/9	10/4	○	○		
			④文化財保護行政と埋蔵文化財の保存	勝部	○	○	西尾・岡崎先生補足、表追加、小見出し調整	10	11.0	9/9	10/4	○	○		
	第5節〔特論〕 都市と農漁村の変貌	鬼嶋	①旧松江城下町の堀割と水路の変遷、六つの橋が結ぶ橋南と橋北	大矢	○	○	1節から移動	8	10.0	7/31	9/6	○	○		
			②郊外における住宅団地の造成	能川	○	○		8	8.0	7/31	9/6	○	○		
			③魚と花の行商	山本	○	○	3節から移動	10	14.0	7/31	9/6	○	○		
終章 私たちの松江―これまでとこれから		竹永	はじめに	竹永	○		財政のあゆみ1.2頁追加	8	4.0	9/9	10/4	○	○		
			①松江市域の人口―明治から現代まで	廣嶋	○	○	本文、表提出	10	10.0	9/9	10/4	○	○		
			②水害と火災	能川	○	○		8	8.0	9/9	10/4	○	○		
			③中国電力島根原子力発電所	竹永	○	○	提出	8	15.2	9/9	10/4	○	○		
			④宍道湖・中海の干拓・淡水化事業	徳岡	○	○	改訂、再統合	20	23.0	9/9	10/4	○	○		
			⑤おわりに―松江市域の近現代史の特徴と課題	竹永	○	○	部会長確認済	8	8.0	9/9	10/4	○	○		
	参考文献一覧	事務局					石塚担当（＋ルビ）	20	20.0						
	市史編纂関係者名簿							2	2.0						
	執筆分担						高橋担当	2	4.0						
	協力者一覧							5	5.0						
	写真提供者一覧							2	2.0						
	年表						高橋担当	20	20.0						
	索引						9/19、竹永Tと手順協議	25	25.0						
	奥付							2	2.0						

【第３章資料４】　史料編纂課事業スケジュール

		主担当〔仮〕 （　）内は総括や予算執行など	10月			11月			12月			1月			2月			3月			4月		
			上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
主要行事等																	2/21 不昧公研究会						
松江市史編纂委員会・編集委員会・部会長会議																							
	編纂委員会・編集委員会（年1回）	稲田次長・小山・白名														2/14 編纂委員会							
	部会長会議	稲田次長・小山・白名																					
松江市史専門部会関係																							
	自然環境	小山 （稲田次長・白名）																					
	近世史	北村・内田 （稲田次長・小山・白名）						11/24 部会															
	近現代史	村角・高橋 （稲田次長・小山・白名）				11/3・4 部会																	
	松江城	稲田次長・石塚 （小山・白名）		11/10 部会																			
	原始（考古）	稲田次長																					
	古代	稲田次長																					
	絵図・地図	稲田次長																					
	民俗	内田（稲田次長）																					
	中世史	石塚（稲田次長）																					
書籍製作・出版関係																							
	編集印刷業務委託(その３) （平成28～31年度発刊分）	小山 （稲田次長・白名）																					
	通史編4「近世Ⅱ」 （平成31年度初旬発刊）	北村・内田 （稲田次長・小山・白名）	校正・印刷																				
	通史編5「近現代」 （平成31年度発刊）	村角・高橋 （稲田次長・小山・白名）	校正・印刷																				
付帯	松江市歴史叢書13 (市史研究10号)	稲田次長 （小山）	入札準備	業者決定・入稿	校正・印刷																		
	松江市ふるさと文庫２４（中井均著）・２５（梶谷光弘・田野俊平著）	稲田次長 （小山）	入札準備	業者決定・入稿	校正・印刷																		
	松江市歴史史料集 （大保恵日記）	内田 （稲田次長・小山）	嘉永５年分校正中　　６・７年分も内容調整中																				
	松江市歴史史料集 （断絶帳）	北村 （稲田次長・小山）	断絶帳 翻刻完了（5/5冊）→校正へ			抜取帳も史料集作成が望ましい。今年度以降、撮影して翻刻へ。																	
	松江市歴史史料集 （松江藩日誌）	内田（岩上） （稲田次長・小山）	版組⇒内田さん校正　今年度末～来年度初め完成予定　解説を検討中																				
	給帳（陶澤家・県図書）	北村（飯田） （稲田次長・小山）	翻刻は終了、今後校正作業へ（130 ～ 140P 程度）																				

		主担当〔仮〕 （　）内は総括や予算執行など	10月			11月			12月			1月			2月			3月			4月		
			上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
広報・啓発関係																							
	市史販売ﾘｰﾌﾚｯﾄ等	小山 （稲田次長・白名）																					
広報・啓発関係																							
	市史講座	稲田次長・内田 （小山・白名・岩根）		10/19PM			11/16PM			12/21PM			1/18PM 山本			2/15PM 大矢			3/21PM シンポ				
	ホームページ（史料編纂課）	村角 （稲田次長）	コラム（小山）	コラム（北村） コラム（勝井）																			
史料調査・整理・保存関係																							
調査	史料調査員業務管理	内田・北村・村角・高橋	大谷さん・岡本さん：○○史料、○○家史料																				
	学生業務管理	村角・高橋	池田さん：○○氏新聞スクラップ目録作成																				
	○○家文書整理	北村・内田 （稲田次長・小山）																					
	その他文書調査	内田・北村・村角・高橋																					
	○○薬局調査																						
	雑賀公民館調査																						
	普門院調査		ご住職より依頼あり　※喜多村理子先生３箱調査（終了）　H30/7/10 借用 ※以前目録化したものも、目録と原物の対象作業が必要→撮影																				
	○○家新聞スクラップ		目録作成（池田さん）																				
	○○家文書（約30箱）		解説文：9月中旬に法瀬氏報告済																				
	○○家（雑賀町）文書			10/30 調査				11/25 史料借用済　　大谷さん・岡本さん目録作成へ															
	新聞検索調査	内田・石塚・岩根	昭和 25 年分終了、昭和26 年９月 26 日の３面まで終了→今後の探録の仕方を再検討し、石塚さん継続中																				
	不昧関係文献史料調査	小山・内田・石塚	文献収集：刊行物・石塚さん　　不昧公研究会関係史料解読：飯田さん解読中　岩根さん（○○寺不昧書状）入力																				
整理・保存	データ管理	小山	共有フォルダの整理をお願いいたします																				
	史料管理・保管	北村・内田・村角																					
	調査用具管理	石塚・小山・白名																					
	図書管理	石塚・内田	江友依頼予定：①○○家史料　②○○院文書１・２　③○○家絵図　④○○家文書（残り） ※歴史館蔵の「道程記」を 12/19 借用後すぐに撮影																				
	史料撮影（業者・学生）	北村・村角・小山・白名																					
その他																							
	歴史館関連事務	稲田次長・小山																					
	その他庶務	小山・白名・岩根 （稲田次長）																					

【第３章資料５】内校を終えた執筆者原稿

2-1-3

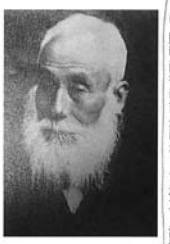
第七項

第二章　近代松江市域のあゆみ　第一節　松江市と町・村の誕生とあゆみ

初代松江市長・福岡世徳市政の展開

戦前の松江市長と初代市長福岡世徳の経歴

地方自治法施行以前の松江市長とその在任期間を、中国地方の県庁所在都市および日本海側の城下町都市である金沢市と比較すると松江市長の特徴がはっきり見て取れる（〈表１〉）。すなわち、一八八九年（明治二十二）の「市制」施行から一九四七年（昭和二十二）の「地方自治法」施行までの五八年間の市長の実人数を比べると、松江市はわずか五人で、金沢の一一人、岡山・鳥取の一二人、広島・山口の一七人と比べて格段に少ない。これは、敗戦直後に市長になって地方自治法施行前の二年弱の短期間務めた熊野英と一期四年で退任した高橋節雄（本節②参照）を除けば、初代の福岡世徳が四期一二年、続く高橋義比が三期一四年、石倉俊寛が四期一六年といずれも長期にわたって市長を務めていたためである。



【図１】初代松江市長福岡世徳（北堀町・福岡家所蔵）

福岡世徳（〈図１〉）は、嘉永元年（一八四八）に松江藩士・吉田蔵六の子として生まれ、福岡家に婿として迎えられて松江藩の砲術士を務めた。廃藩置県後は島根県の役人、小学校の教員を経て代言人（弁護士）となり、立憲自由党系の山陰自由党に属して自由民権運動に参加し、山陰自由党の機関紙として創刊された『山陰新聞』の印刷長を務めた。また、一九一一年（明治四四）の市長退任後は、一九一二年（大正元）から一九一四年（大正三）年まで立憲政友会所属の衆議院議員を一期務めた後に政界を引退し、一九二七年（昭

【表１】「市制及町村制」（明治21年法律第一号）下の中国５県県庁所在市・金沢市の市長在任期間（1889～1947年）

年	月	松江市	鳥取市	岡山市	広島市	山口市(C-町)	金沢市
1889	明22	福岡世徳	岡崎正兵衛	志賀直道	浅野長勇	山根正次郎	福田義方
1890	23		田中政春	新江清清	→ 浅野	→ 江村	
1891	24						
1892	25			小宮安武			長谷川保治
1893	26				長谷川芳之		
1894	27				→ 長谷川		
1895	28					渡辺賢吉	
1896	29						長谷川芳之
1897	30						
1898	31						
1899	32						
1900	33						
1901	34		大野福治				渡辺政矢
1902	35			岡市智			
1903	36						
1904	37		尾崎武久			大石誠一郎	
1905	38					→ 田口	
1906	39		綾部直蔵		渡辺徳一		
1907	40						
1908	41				→ 田口正太	田口正太郎	
1909	42				長谷川芳之		田口一郎
1910	43	高橋義比					
1911	44					竹内弘次郎	
1912	大1						
1913	2						
1914	3				大石誠一郎		
1915	4				→ 渡辺	→ 松江	
1916	5		西尾 誠		長谷川芳之	長谷川芳之	
1917	6			中山寅			長谷川誠
1918	7						
1919	8		→ 浜田				熊谷太郎二郎
1920	9						
1921	10				佐藤信安	三宅勝七	
1922	11						相良 彰
1923	12		山田英太郎	蒲生義次郎	八重竜起		
1924	13	高橋節雄					
1925	14						
1926	昭1		綾部喜一				
1927	2					八木宗一郎	
1928	3	石倉俊寛		守屋信之助		八木宗一郎(31日)	
1929	4				長谷川正次	小田切大輔	吉川一太郎
1930	5						
1931	6					小田切	
1932	7					→ 中村	
1933	8			岩佐市二郎	青山光一	中村良平	川原 一
1934	9				横山金太郎	森重武治	
1935	10						浜崎八郎次郎
1936	11						
1937	12			時本秋雄			
1938	13				横尾喜太		
1939	14		原一美美				
1940	15			国吉友次郎			
1941	16						
1942	17				長谷新吉		
1943	18		高月哲二				
1944	19			竹内 亀		山口(C-町) → 田口	
1945	20	勝部 真		橋本貞二郎	長谷川誠	原 一武雄	武谷愛太郎
1946	21						
1947	22						
首長人数		5人	12人	7人	5人	17人	11人

注：（ ）＝職務取扱・職務管掌・市長代理等
◎山口町は、1929年4月10日市制施行

出典：松江市＝上田喜太郎・時津静一郎編『松江市誌』（松江市／1941年）
山口市＝山口市史編集委員会編『山口市史』（山口市／1983年）
金沢市＝橋本智雄編著『近代日本の地方都市　金沢／城下町から近代都市へ』（日本経済評論社／2005年）
岡山市・鳥取市・広島市＝各市役所ウェブサイト所掲「歴代市長一覧」により作成

注1：
注2：

- 2 -

和二）一月三十日に八〇歳で亡くなっている。その政治的立場は、自由民権運動以来、自由党―立憲政友会に身を置く一貫したものであった。

福岡世徳の選出

「市制」の下では、市長は市民による公選ではなかった。「市制」第五十条は、市長は有給吏員とし、任期は六年（一九一一年から四年）で、内務大臣が市会に命じて候補者三人を推薦させ、天皇に上奏してその裁可を得て決定すると規定していた。

市長候補を選ぶ市会議員の選挙方法は、「市制」第十三条で規定された。それによると選挙人を三級に分けて納税額の多い順に並べ、選挙人の納税総額の三分の一を収める上位の選挙人を一級、次の三分の一を収める納税者を二級、最後の三分の一を収める納税者を三級とし、人口五万人未満の松江市の市会議員定数三〇人を各級ごとに一〇人ずつ割り振って、それぞれの級ごとに選挙を実施するのである。また、被選挙人は、所属の等級にかかわらず、三級の中のどの級から選出されてもよいとされた（第十三条）。従って、高額納税者、当時では大商人や都市地主は、所属する等級から僅かな得票数で確実に議員を選出できるとともに、営業・土地所有・社会的関係によって影響力を持つ下位の等級の選挙人の支持を獲得することで、議員になることが可能であった。

【表２】は、「市制」の規定に基づいて、一八八九年四月二十八日から三十日の三日間、三級から一級の等級別に実施された市会議員選挙の結果を示したものである。岡崎運兵衛らが三級から、佐藤喜八郎や三島佐次右衛門らが二級から選出されており、議員の居町別の内訳でも、竪町四人、白潟本町三人、天神町三人、末次本町二

- 3 -

【表２】第一回市会議員選挙の当選者と議長・参事会員

	氏名	得票	居町	
三級当選議員	岡崎運兵衛	434	竪町	議長
	笠本武一郎	375	末次本町	参事会員
	浦政宗太郎	363	西茶町	
	原 周蔵	358	竪町	
	向阪 弘	356	寺町	
	桑原太郎＊	343	末次本町	
	加田得一郎	338	末次町	議長代理者
	岡本金太郎	300	外中原町	
	坂本良郎	264	松江分	
	松浦六右衛門	262	八軒屋町	
二級当選議員	長尾義勝	200	北堀町	
	佐藤喜八郎	175	白潟本町	参事会員
	長谷川芳之助	169	御町	参事会員
	三島佐次右衛門	167	白潟魚町	
	毛利色弥	166	右横町	
	青山寛三郎	150	竪町	
	山本豊一郎	137	雑賀町	
	中村千次郎	133	雑賀町	
	高城種八	131	松江分	
	原田禎蔵＊	130	殿町	
一級当選議員	茂島大造	88	雑賀町	
	横川隆之助	81	和多見町	
	松本取次郎	78	寺町	
	山内伝助	74	天神町	
	丸島新四郎	72	竪町	
	川岡清助	72	天神町	
	岡崎捨太郎	71	竪町	
	佐藤文之助	70	天神町	
	原 文助	70	白潟本町	
	園山伊助	67	白潟本町	

出典：『山陰新聞』1889年4月29日、5月2日より作成
注：＊原田禎蔵は、落合時秀（雑賀町）と同数となるも「市制」第25条より年長者の原田が当選

人、白潟魚町・西茶町・苧町各一人など、旧藩以来の大商人が居住する町から過半数の議員が選ばれていることが分かる。また、族籍別では士族は一〇人で平民が二〇人、居住地別では橋南が二一人で橋北は九人と報じられていた（『山陰新聞』一八八九年五月四日）。このように、最初の市会は、各町の有力商人・資産家が中心になっていたが、そのことを反映して、初代の議長に選ばれたのは竪町の岡崎運兵衛であった。岡崎家は平田木綿の商人で、竪町・白潟の年寄・大目代などを務めた。慶応三年（一八六七）に高橋家から養子に入って岡崎家を継いだ運兵衛は、山陰自由党の幹事長を務めるなど自由民権運動に参加し、公選民会の県会議員となり、『松江新聞』を発刊するなど、政治・言論界で活動し、帝国議会の開設にともなって島根県最初の衆議院議員の一人となった（『松江市誌』）。

福岡世徳は、このような構成の市会で市長の第一候補に選ばれたが、彼は市会議員ではなく、旧松江藩士の代言人であった。また、助役に選ばれた雑賀町在住の高橋義比は、安政三年（一八五六）生まれで、広島師範学校に学んだ後、安来小学校教師を経て島根県に出仕し、島根・秋鹿・意宇郡書記を務めていた。この後一九一一年

- 4 -

【第３章資料６】校正スケジュール進行表（印刷会社作成）

松江市史編纂室	様	書名	松江市史　通史編●　近現代	概要	丸山上製本｜A5判　約900頁　●●部　表紙箔押し・箱あり	2023/7/31 更新	佐藤

6月			
松江市史編纂室様			今井印刷
1日	土		
2日	日		
3日	月		
4日	火		
5日	水		
6日	木		
7日	金		
8日	土		
9日	日		
10日	月		
11日	火		
12日	水		
13日	木		
14日	金		
15日	土		
16日	日		
17日	月		
18日	火		
19日	水		
20日	木		
21日	金		
22日	土		
23日	日		
24日	月		
25日	火		
26日	水		
27日	木		
28日	金	入稿①	
29日	土		
30日	日		
31日	月		

7月			
松江市史編纂室様			今井印刷
1日	月		
2日	火		
3日	水		
4日	木		
5日	金		
6日	土		
7日	日		
8日	月		
9日	火		
10日	水		
11日	木		
12日	金		
13日	土		
14日	日		
15日	月		
16日	火		
17日	水		
18日	木		
19日	金		
20日	土		
21日	日		
22日	月		
23日	火		
24日	水		
25日	木		
26日	金		
27日	土		
28日	日		
29日	月		
30日	火		
31日	水	初校（1）＋入稿②	

8月			
松江市史編纂室様			今井印刷
1日	木		
2日	金		
3日	土		
4日	日		
5日	月		
6日	火		
7日	水		
8日	木		
9日	金		
10日	土		
11日	日		
12日	月		
13日	火		
14日	水		
15日	木		
16日	金		
17日	土		
18日	日		
19日	月		
20日	火		
21日	水		
22日	木		
23日	金	入稿③	
24日	土		
25日	日		
26日	月		
27日	火		
28日	水		
29日	木		
30日	金		
31日	土		

9月			
松江市史編纂室様			今井印刷
1日	日		
2日	月	初校（2）＋初校戻り①	
3日	火		
4日	水		
5日	木		
6日	金		
7日	土		
8日	日		
9日	月	初校（3）	
10日	火		
11日	水		
12日	木		
13日	金		
14日	土		
15日	日		
16日	月		
17日	火		
18日	水		
19日	木		
20日	金		
21日	土		
22日	日		
23日	月		
24日	火		
25日	水		
26日	木		
27日	金		
28日	土		
29日	日		
30日	月		
10月	火		

※

松江市史　通史編●　近現代　No. 2

10月			
松江市史編纂室様			今井印刷
1日	火		
2日	水		
3日	木		
4日	金	初校戻り②③	
5日	土		
6日	日		
7日	月		
8日	火		
9日	水		
10日	木		
11日	金		
12日	土		
13日	日		
14日	月		
15日	火		
16日	水		
17日	木		
18日	金		
19日	土		
20日	日		
21日	月		
22日	火		
23日	水		
24日	木		
25日	金		
26日	土		
27日	日		
28日	月		
29日	火		
30日	水		
31日	木	再校（一校）	

11月			
松江市史編纂室様			今井印刷
1日	金		
2日	土		
3日	日		
4日	月		
5日	火		
6日	水		
7日	木		
8日	金		
9日	土		
10日	日		
11日	月		
12日	火		
13日	水		
14日	木		
15日	金		
16日	土		
17日	日		
18日	月		
19日	火		
20日	水		
21日	木		
22日	金	再校戻り（一校）＋ルビ校校	
23日	土		
24日	日		
25日	月		
26日	火		
27日	水		
28日	木		
29日	金		
30日	土		
31日	日		

12月			
松江市史編纂室様			今井印刷
1日	日		
2日	月		
3日	火		
4日	水		
5日	木		
6日	金		
7日	土		
8日	日		
9日	月	三校	
10日	火		
11日	水		
12日	木		
13日	金		
14日	土		
15日	日		
16日	月		
17日	火		
18日	水		
19日	木		
20日	金		
21日	土		
22日	日		
23日	月	三校戻り	
24日	火		
25日	水		
26日	木		
27日	金		
28日	土		
29日	日		
30日	月		
31日	火		

1月			
松江市史編纂室様			今井印刷
1日	水		
2日	木		
3日	金		
4日	土		
5日	日		
6日	月		
7日	火		
8日	水	四校＋口絵色校	
9日	木		
10日	金		
11日	土		
12日	日		
13日	月		
14日	火		
15日	水		
16日	木		
17日	金	四校戻り＋さくいん入稿	
18日	土		
19日	日		
20日	月		
21日	火		
22日	水		
23日	木		
24日	金		
25日	土		
26日	日		
27日	月		
28日	火		
29日	水		
30日	木		
31日	金		

※

松江市史　通史編●　近現代　No. 3

2月			
松江市史編纂室様			今井印刷
1日	土		
2日	日		
3日	月		
4日	火		
5日	水		
6日	木		
7日	金		
8日	土		
9日	日		
10日	月		
11日	火		
12日	水	五校（さくいん含む）	
13日	木		
14日	金		
15日	土		
16日	日		
17日	月		
18日	火		
19日	水		
20日	木		
21日	金	五校戻り	
22日	土		
23日	日		
24日	月		
25日	火		
26日	水		
27日	木	PDF校	
28日	金	●　校　了	
29日	土		製版
30日	日		
31日	月		

3月			
松江市史編纂室様			今井印刷
1日	日		
2日	月		印刷
3日	火		印刷
4日	水		印刷
5日	木		印刷
6日	金		製本
7日	土		製本
8日	日		
9日	月		製本
10日	火		製本
11日	水		製本
12日	木		製本
13日	金		製本
14日	土		
15日	日		
16日	月	●　納　品	
17日	火		
18日	水		
19日	木		
20日	金		
21日	土	（シンポジウム）	
22日	日		
23日	月		
24日	火		
25日	水		
26日	木		
27日	金		
28日	土		
29日	日		
30日	月		
31日	火		

4月			
松江市史編纂室様			今井印刷
1日	水		
2日	木		
3日	金		
4日	土		
5日	日		
6日	月		
7日	火		
8日	水		
9日	木		
10日	金		
11日	土		
12日	日		
13日	月		
14日	火		
15日	水		
16日	木		
17日	金		
18日	土		
19日	日		
20日	月		
21日	火		
22日	水		
23日	木		
24日	金		
25日	土		
26日	日		
27日	月		
28日	火		
29日	水		
30日	木		
31日	金		

5月			
松江市史編纂室様			今井印刷
1日	金		
2日	土		
3日	日		
4日	月		
5日	火		
6日	水		
7日	木		
8日	金		
9日	土		
10日	日		
11日	月		
12日	火		
13日	水		
14日	木		
15日	金		
16日	土		
17日	日		
18日	月		
19日	火		
20日	水		
21日	木		
22日	金		
23日	土		
24日	日		
25日	月		
26日	火		
27日	水		
28日	木		
29日	金		
30日	土		
31日	日		

※

【第３章資料７】　執筆者への初校に関するお願い

2019 年 8 月 6 日

『松江市史』通史編５「近現代」にご執筆いただいた先生方へ

松江市史近現代専門部会　竹永三男　伊藤康宏

『松江市史』通史編５「近現代」の初校に関するお願い

前略、ご免ください。先には、『松江市史』通史編５「近現代」の原稿をご執筆・ご調整いただき、ありがとうございました。篤く御礼申し上げます。頂戴しました原稿は、表記等について「通史編５近現代」全体としての統一を図るため今井印刷の内校に付し、その結果を担当編集委員・史料編纂課事務局の手で確認しました。

以上の作業を経て、先日来、順次入稿しましたが、この度初校が出来てまいりました。就きましては、初校をお届け申し上げますので、次の諸点をご確認いただいた上、ご返送いただきますよう、お願い申し上げます。ご多忙の中、また貴重な夏期休業期間中に校正のお願いを申し上げまして恐縮ですが、来春３月に確実に刊行するためには必須の日程を組んで作業を進めていますので、返送期限を厳守していただきますよう、お願い申し上げます。

（１）初校のご返送期限と再校のお届け予定について

＊初校のご返送〆切は、　８月２０日（火）　とさせていただきます。内校原稿とあわせて同封の返信用レターパックにてご返送下さい。なお、8 月 20 日のご提出が難しい場合は、その旨、事務局までご連絡いただきますよう、お願い申し上げます。＊再校の発送は、１１月初旬　を予定しています。

（２）初校での確認事項について

①大幅な訂正・加筆・削除等は、初校でお済ませいただきますよう、お願いします。
執筆者校正は、原則として再校までとさせていただきます。

②史料を引用しておられる箇所は、表記・刊行年・掲載頁数などについて、必ず原典校正をお願いします（史料編「近現代Ⅰ」「近現代Ⅱ」からの引用は事務局で校正します。そのほかは必ずご自身でご確認をお願いします）。
　なお、漢字・カタカナ交じり史料については、読みやすさを考慮し、漢字・ひらがなに改めて掲載することとしています。

③史料編「近現代Ⅰ」「近現代Ⅱ」掲載史料を参照している箇所には、事務局で、該当する史料番号を入れております（例：史・近現代Ⅱ第三章６　など）。番号に間違いや記載漏れがないか、改めてご確認下さい。

④図の記載事項、表の数値、写真のキャプションなどにつきましても、校正をお願いします。

⑤内校担当者・編集委員・事務局で、「執筆要領」「統一案」に基づいて表記・語句、句読点の位置、出典表記等を統一・調整させていただいた箇所があります。同封の内校原稿（青字：印刷所内校、赤字：編集委員、緑字：事務局）をご参照の上、元の表記を特段に希望される場合は、初校該当箇所にその旨を記載して下さい。

（３）「年表掲載事項」の選定について

通史編「近現代」では、巻末に「松江市域の近現代史年表（仮題）」を掲載します。この年表には、全国・島根県・松江市域の共通事項とともに、本書各項目の重要事項を採録します。そこで、ご執筆の先生方に、初校段階でご担当項目から、５～１０項を目安　に「年表掲載事項」の選定をお願いします。初校ゲラで、「年表掲載事項」に相当する箇所に、お手持ちのマーカーで目印をお願いします。その際、①「必ず掲載すべき項目」は赤系のマーカー（ピンク、オレンジなど）、②「紙幅に余裕があれば掲載したい項目」を青系のマーカー（水色、黄緑など）でお示し下さい。選定いただいた項目は、事務局でエクセル形式の年表に統合し、編集委員が全体を確認します。先生方には後日、語句の確認などをお願いします。

（４）「参考文献」について

「参考文献」は、最終的に巻末に著者名五十音順で一括掲載します。現在、全体の整理を進めており、今回お届けする初校ゲラには含まれておりません。再校発送の際、ご担当項目別に別紙でお届けします。

（５）再校以降の流れ

①執筆者校正は、原則として再校までとさせていただきます。

②但し、特別な事情で三校をご自身でご希望の先生は、再校を戻していただく際に、その旨お知らせ下さい。

③三校以降は、編集委員・事務局の責任で五校まで進めてまいります。

④「索引」作成の際、追ってご確認をお願いする場合もありますので、ご対応いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。
校正ゲラをお届けする時期がご公務等と重なる場合もあるかと思いますが、何卒ご協力いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

【第３章資料８】 執筆者への再校に関するお願い

2019 年 11 月 5 日

『松江市史』通史編５「近現代」にご執筆いただいた先生方へ

松江市史近現代専門部会　竹永三男　伊藤康宏

『松江市史』通史編５「近現代」の再校に関するお願い

前略、ご免ください。先には、『松江市史』通史編５「近現代」の初校をご確認・ご調整いただき、ありがとうございました。篤く御礼申し上げます。ご返却いただきました初校は、史料編纂課事務局の手で整え、順次印刷会社へ返却いたしましたが、この度再校が出来てまいりました。就きましては、再校をお届け申し上げますので、次の諸点をご確認いただいた上、ご返送いただきますよう、お願い申し上げます。ご多忙の中、校正のお願いを申し上げまして恐縮ですが、来春３月に確実に刊行するためには必須の日程を組んで作業を進めていますので、返送期限を厳守していただきますよう、お願い申し上げます。

（１）再校のご返送期限と再校のお届け予定について

＊再校のご返送〆切は、　１１月１５日（金）　とさせていただきます。初校原稿とあわせて同封の返信用レターパックにてご返送下さい。なお、11 月 15 日のご提出が難しい場合は、その旨、事務局までご連絡いただきますよう、お願い申し上げます。

（２）再校での確認事項について

①大幅な訂正・加筆・削除等は、初校でお済ませいただきますよう、お願いしています。また、執筆者校正は、原則として再校までとさせていただきます。

②史料を引用しておられる箇所は、表記・刊行年・掲載頁数などについて、必ず原典校正をお願いします（史料編「近現代Ⅰ」「近現代Ⅱ」からの引用は事務局で校正します。そのほかは必ずご自身でご確認をお願いします）。なお、漢字・カタカナ交じり史料については、読みやすさを考慮し、漢字・ひらがなに改めて掲載することとしています。

③史料編「近現代Ⅰ」「近現代Ⅱ」掲載史料を参照している箇所には、事務局で、該当する史料番号を入れております（例：史・近現代Ⅱ第三章６　など）。番号に間違いや記載漏れがないか、改めてご確認下さい。
また、本文の記述・史料を『新修島根県史』（通史編・資料編）および松江市域（松江市・旧八束郡各町村）の自治体史（『松江市史』各版、『八雲村史』、『宍道町史』等）から引用しておられる箇所には、出典名のあとに該当ページまたは章節を記入してください。但し、当該自治体史の全般を参照された場合には、書名のみで結構です。

④図の記載事項、表の数値、写真のキャプションなどにつきましても、校正をお願いします。特に写真の出典がまだのものが多いため、再校でご確認・ご記入をお願いします。

⑤内校担当者・編集委員・事務局で、「執筆要領」「統一案」に基づいて表記・語句、句読点の位置、出典表記等を統一・調整させていただいた箇所があります。同封の内校原稿（青字：印刷所内校、赤字：編集委員、緑字：事務局）をご参照の上、元の表記を特段に希望される場合は、再校該当箇所にその旨を記載して下さい。

（３）「索引」について

通史編「近現代」では、巻末に五十音順で索引を掲載します。
索引掲載事項にマーカーをお引きいただき、読みにくい語句にはふりがなをふっていただきますようお願い申し上げます。

◎何項目取っていただいても構いませんが、ページ数の関係で削減される場合がありますので、その旨ご了承ください。

お送りいただきました索引記載事項は事務局でとりまとめ、編集委員が全体を確認します。後日、事務局より語句の読み方をお伺いすることがございますのでご対応お願いいたします。

（４）「参考文献」について

初校の際にお伝えしましたとおり、別紙にて、ご担当項目別の「参考文献」を同封しております。当初先生方が挙げられた書誌情報を事務局で整理したほか、図表・写真・本文中で挙げられたものを全てひろっております。不明なところをグレーで網掛けをしてありますので、不足している書誌情報や修正を朱書きでご記入していただき、また不要と思われる項目は削除していただいた上お戻しください。

（５）執筆分担表について

巻末に掲載予定の「執筆分担」表を添付いたします。ご確認いただきますようお願い申し上げます。

（６）再校以降の流れ

①（２）①にもありますように、執筆者校正は、原則として再校までとさせていただきます。

②但し、特別な事情で三校をご自身でご希望の先生は、再校を戻していただく際に、その旨お知らせ下さい。

③三校以降は、編集委員・事務局の責任で五校まで進めてまいります。
校正ゲラをお届けする時期がご公務等と重なる場合もあるかと思いますが、何卒ご協力いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

【第３章資料９】近現代史担当者分担別進行表

通史編「近現代」進行表　　2019年9月20日改訂

9月		本文	参考文献	年表	ルビ	口絵	索引
1日	日			(9/2、高橋さん復帰)			
2日	月	初校②出	入稿原稿整理				
3日	火				ルビ開始		
4日	水				(事務局一括)		
5日	木	初校②発送		選定依頼②			
6日	金	初校①返却					
7日	土						
8日	日	(9/8～14、竹永T不在)					
9日	月	初校③出					
10日	火	初校③発送		選定依頼③			
11日	水						
12日	木						
13日	金						
14日	土						
15日	日						
16日	月						
17日	火						
18日	水						
19日	木						
20日	金						
21日	土						
22日	日						
23日	月						
24日	火						
25日	水						
26日	木	初校②③先生方〆切		項目入力			
27日	金		修正反映				
28日	土						
29日	日	(9/29～10/4、竹永T不在)					
30日	月						

10月		本文	参考文献	年表	ルビ	口絵	索引
1日	火						
2日	水						
3日	木						
4日	金	初校②③返却				関係者名簿・執筆分担入稿	
5日	土						
6日	日						
7日	月					口絵候補選定	
8日	火					仮レイアウト案作成	
9日	水						
10日	木						
11日	金						
12日	土						
13日	日						
14日	月						
15日	火						
16日	水						
17日	木						
18日	金						
19日	土						
20日	日						
21日	月						
22日	火						
23日	水						
24日	木						
25日	金						
26日	土						
27日	日						
28日	月						
29日	火						
30日	水						
31日	木	再校一括出					

1 / 3 ページ

11月		本文	参考文献	年表	ルビ	口絵	索引
1日	金						
2日	土						
3日	日	第2回近現代史部会					
4日	月		書式確定	全体確認		口絵確定	
5日	火	再校発送	項目別に発送	選定者に確認		索引マーカー依頼	
6日	水			(必要な場合)			
7日	木				掲載許可申請		
8日	金						
9日	土						
10日	日						
11日	月						
12日	火						
13日	水						
14日	木						
15日	金	再校先生方〆切	修正反映				索引項目入力
16日	土						
17日	日						
18日	月	再校統合					
19日	火						
20日	水						
21日	木						
22日	金	再校返却(ルビ反映)					
23日	土						
24日	日						
25日	月						
26日	火						
27日	水						
28日	木						
29日	金	参考文献・年表・口絵入稿					
30日	土						

12月		本文	参考文献	年表	口絵	索引
1日	日					
2日	月					
3日	火					
4日	水					
5日	木					
6日	金					
7日	土					
8日	日					
9日	月	三校(参考文献・年表・口絵初校)出				
10日	火	事務局反映チェック＋素読				
11日	水	竹永T、伊藤T　全体＋索引項目チェック				
12日	木					
13日	金					
14日	土					
15日	日					
16日	月					
17日	火					
18日	水					
19日	木					
20日	金					
21日	土					
22日	日					
23日	月	三校返却				
24日	火				協力者一覧ほか入稿	
25日	水					
26日	木					
27日	金					
28日	土					
29日	日					
30日	月					
31日	火					

2 / 3 ページ

1月		本文	参考文献	年表	口絵	索引
1日	水					
2日	木					
3日	金					
4日	土					
5日	日					
6日	月				索引チェック反映	
7日	火					
8日	水	四校(参考文献・年表再校、口絵色校)出				
9日	木	事務局チェック				
10日	金	竹永Tチェック				
11日	土					
12日	日					
13日	月					
14日	火					
15日	水					
16日	木					
17日	金	四校返却、索引入稿				
18日	土					
19日	日					
20日	月					
21日	火					
22日	水					
23日	木					
24日	金					
25日	土					
26日	日					
27日	月					
28日	火					
29日	水					
30日	木					
31日	金					

2月		全体
1日	土	
2日	日	
3日	月	
4日	火	
5日	水	
6日	木	
7日	金	
8日	土	
9日	日	
10日	月	
11日	火	
12日	水	五校(索引含む)出
13日	木	事務局チェック
14日	金	竹永Tチェック
15日	土	
16日	日	
17日	月	
18日	火	
19日	水	
20日	木	
21日	金	五校返却
22日	土	
23日	日	
24日	月	
25日	火	
26日	水	
27日	木	PDF校
28日	金	校了
29日	土	

3月		全体
1日	日	
2日	月	
3日	火	
4日	水	
5日	木	
6日	金	
7日	土	
8日	日	
9日	月	
10日	火	
11日	水	
12日	木	
13日	金	
14日	土	
15日	日	
16日	月	納品
17日	火	
18日	水	
19日	木	
20日	金	
21日	土	シンポジウム
22日	日	
23日	月	
24日	火	
25日	水	
26日	木	
27日	金	
28日	土	
29日	日	
30日	月	
31日	火	

3 / 3 ページ

第４章　松江市史編纂事業の記憶と今後への期待

安部已図枝（松江市史編纂委員）…… 56
安部　登　（松江市史編纂委員）…… 57
石井　悠　（元史料編纂室職員）…… 58
石塚晶子　（史料編纂課専門調査員）…… 59
伊藤康宏　（松江市史編集委員、近現代史部会）…… 60
稲田　信　（史料編纂課長）…… 61
乾　隆明　（松江市史編纂委員）…… 62
井上寛司　（松江市史編纂委員会副委員長、編集委員会委員長、中世史部会長）…… 63
内田文恵　（史料編纂課主任編纂官）…… 65
大矢幸雄　（松江市史編纂委員、編集委員、絵図・地図部会長）…… 67
岡崎雄二郎（松江城部会専門委員）…… 68
岡部康幸　（元松江市史編纂委員）…… 69
勝部　昭　（松江市史編集委員、原始古代史部会長）…… 70
川岡　勉　（松江市史編集委員、中世史部会）…… 71
河原荘一郎（松江城部会専門委員）…… 72
鬼嶋　淳　（松江市史編集委員、近現代史部会）…… 73
岸本　覚　（松江市史編集委員、近世史部会）…… 74
喜多村　正（松江市史編纂委員、編集委員、民俗部会長）…… 75
北村久美子（史料編纂課専門調査員）…… 76
木下　誠　（元史料編纂室主任）…… 77
小暮哲也　（自然環境部会専門委員）…… 78
小林准士　（松江市史編纂委員、編集委員会副委員長、近世史部会長）…… 79
小山祥子　（史料編纂課副主任）…… 80
佐藤仁志　（自然環境部会専門委員）…… 81
佐藤　信　（松江市史編集委員、原始古代史部会）…… 82
沢山美果子（近世史部会専門委員）…… 83
澤田順弘　（自然環境部会専門委員）…… 84
宍道正年　（元史料編纂室専門官）…… 86
高橋真千子（史料編纂課専門調査員）…… 87
髙安克已　（松江市史編集委員、自然環境部会）…… 88
多久田友秀（近世史部会専門委員）…… 89
竹永三男　（松江市史編纂委員、編集委員、近現代史部会長）…… 90
田坂郁夫　（松江市史編纂委員、編集委員、自然環境部会長）…… 92
友森　勉　（元松江市教育委員会理事）…… 94
永井　猛　（民俗部会専門委員）…… 95
中井　均　（松江城部会専門委員）…… 96
西尾克已　（松江市史編纂委員、編集委員、松江城部会長、原始古代史部会）…… 97
西田友広　（松江市史編集委員、中世史部会）…… 99
仁田玲江　（松江市史編纂委員）…… 101
能川泰治　（松江市史編集委員、近現代史部会）…… 102
長谷川博史（松江市史編集委員、中世史部会）…… 103
東谷　智　（松江市史編集委員、近世史部会）…… 104
引野道生　（松江市史編纂委員）…… 105
福島律子　（元松江市教育委員会教育長）…… 105
堀田浩之　（松江城部会専門委員）…… 107
松尾信裕　（松江城部会専門委員）…… 108
松本岩雄　（原始古代史部会専門委員）…… 109
三宅正浩　（松江市史編集委員、近世史部会）…… 111
村角紀子　（史料編纂課専門調査員）…… 112
森田喜久男（原始古代史部会専門委員）…… 113
渡辺浩一　（松江市史編集委員、近世史部会）…… 114
和田嘉宥　（松江城部会専門委員）…… 115

※五十音順。氏名の横に市史編纂事業での所属、文末に現在あるいは編纂事業終了時の役職等を記した。
　執筆者の文章表現を尊重し、全体調整は最小限とした。

安部己図枝
松江市史編纂委員

歴史に残る松江市史編纂にかかわって

11年という長きにわたり編纂事業を進められた皆様に敬意を表します。

一市民として、この松江市史編纂委員の任命を賜り、大変光栄に思うと同時に、私で良いのだろうかと大変危惧いたしました。

しかし各専門部会の先生方や事務局の皆様のご努力で、計画的に淀みなく完成に至ったことに感銘し、その過程に少しばかり関わらせていただいたことを誇りに思います。全国的に見ましてもこれだけの大容量で市史を作っているところは少ないと思います。この市史は、博物館学芸員という私の立場で見ましても、地域の調べたいことを多岐に知りえる貴重な資料です。

初めのころは、冊子として大きさも量もあり、この膨大な資料をどう活用するのか、置く場所も考えて広く知っていただく方法は？、データ化してどこからでも見れるようにしては？等々思っていましたが、この市史は書籍であるからこそ意味があると考えます。今や紙の必要性のない時代になってますが、書籍でないと残らない情報も多くあります。この「記録」した市史は必ずや後世に役立つ礎になることでしょう。

稚拙な感想で申し訳ありませんが、私は「松江市ふるさと文庫」を大変読みやすくて気に入っております。ちょっと読んでみたいと手にした時、 固有名詞にフリガナ付きで読みやすく、かつ分かりやすく郷土の歴史を知ることができました。小学校や公民館の図書室で、どなたにでも読みやすくとても良い本であると思っております。

もう一つ、市史において今後新しい情報が出たときに、追加あるいは修正等が出てくることもあるでしょう。その情報の対応については、今後必要な予定として考え、準備しておくことをお勧めします。最後に数多くの松江市史講座を開催された実績は、多くの市民の皆様により関心を持っていただくきっかけとなったことでしょう。ご苦労も多くあったことと思いますが、今後のさらなる発展を期待いたします。

（安部榮四郎記念館学芸員）

安部　登
松江市史編纂委員

市史編纂事業に参加して思うこと

松江市はこれまでに市誌を３回刊行している。『松江市誌』（昭和 16 年）、『新修松江市誌』（昭和 37 年）、『市制施行 100 周年記念松江市誌』(平成元年) がそれで、いずれも 1,800 ページ前後の１冊本である。

松江開府 400 年記念事業の一環として、平成 21 年（2009）４月に始まった今回の『松江市史』の編纂は、通史編５冊、別編２冊、史料編 11 冊、計 18 冊の大著である。最新の研究成果に基づき、全国各地の研究者 180 人が執筆を担当し、令和２年（2020）３月に完成した。とかくこのような事業では遅延しがちであるが、計画通り 10 年余で刊行できたのは驚異に値する。

松江市史編纂検討委員として参加し、市民の目線で文章の読みやすさなどについて原稿を読む機会を与えられたことは、私にとって大変有意義なことであった。

この編纂作業中に松江神社から祈祷札２枚が発見された。これによって松江城の完成年が慶長 16 年（1611）であることが実証され、それが松江城国宝の決め手となった。市史編纂委員会でも松江城部会が設けられ、「松江城」を近世史の一部ではなく、別編の１冊とする出版計画が立てられたことは大きな意味をもつものであった。

『松江市史』別編１「松江城」（A4 版）は約 1,000 ページ (3.6kg) の大作である。口絵の国宝松江城天守、祈祷札、天守内部、松江城と周辺、松江城石垣など 16 ページにわたる写真を見るにつけ、おのずと本文へと引きつけられる。

本文は城郭施設だけでなく、城下町の造成、城下の都市と建築、地下に眠る城下町、歴史遺産としての松江城、松江城下町遺跡、絵画資料、文献資料、写真資料など多岐にわたっている。特に 128 ページにわたる写真資料は、松江城と市域の変遷を理解するのに有効である。

また付帯出版物として、『松江城研究』、『松江城天守学術調査報告書』、『松江城調査研究集録』、『松江市歴史叢書』などが刊行され、松江城への知見を得るのに役立っている。

このたびの編纂で「松江市年表」の刊行が期待されたが未刊となり、一市民として残念に思う。平成元年刊行の『松江市誌』では「松江市年表」(72 ページ) が刊行されており、松江市の変遷を知るうえで大変に役立っている。

市民のための市史という観点から、「松江市史講座」が企画された。この講座は執筆者が研究成果を分かりやすく伝えるもので、通算 142 講座、受講者は約 25,000 人に及んだと聞く。私も毎回参加を楽しみにしていた。

また、『松江市ふるさと文庫』は現在 25 号まで刊行されており、市史を補足する市民むけの解説書として好評である。継続して刊行されることを望むものである。

松江市内の小学校６年生を対象とした「松江城授業プロジェクト」は、松江城と松江歴史館を舞台として実施されており、松江城と松江市の歴史を理解するうえで有効な学習体験である。これにより、郷土松江を愛する情感が育つことが期待される。

いま全国的に、城郭の再建や修復がおこなわれている。松江城の威容を示すために、大手門の復元を切に望むものである。

（元松江郷土館館長）

石井　悠
元史料編纂室職員

当時、思っていたこと

２年間にわたり、『松江市史』　史料編２「考古資料」編纂のお手伝いをさせていただいた。当初は、軽く考えていたが、やがて、それまで行ってきた発掘調査報告書作成と大いに異なることに気づいた。

発掘調査では、遺構や遺物を最良の形で検出すること以外に、報告書の内容を考えながら進めることが肝要と思っていた。写真は、遺跡の遠景・近景、遺構や出土遺物の全体･部分の撮影のみならず、縦･横両型のものを撮る等々、その場に応じたものを心掛けるようにしていた。図面作成についても報告書作成のことが常に頭にあった。報告書に遺跡全体を語らせる必要があった。

市史は、考古専門部会で掲載する内容がほぼ決められていたし、大勢の執筆者がそれぞれ既刊の報告書をもとに要領よく書かれた原稿を１冊の本にすればよいことで、楽なものと呑気に構えていた。

ところが、原稿がなかなか集まらない、催促しても届かない等々で、執筆予定者と相談の上、小生が書いたものも何点かあった。文章表現や書かれている内容量も各人各様であった。執筆者の意図を損ねないように、一般市民が読めるような易しい文章に書き替えることも求められた。原稿に使用された写真・図面のチェックも重要な仕事であった。執筆者の原稿だけで市史はできない。口絵写真・遺跡の位置図・遺構の模式図 (部分の名称)・用語解説その他諸々の内容追加が必要であった。全体のレイアウトを考えてきれいな物にしたかった。各ページのレイアウトも大切で、文章と図面・写真を連携するような配置にしないと、読者は読むのが大変で、小生のような者は途中で放り投げてしまう。

仕事が進む内に、いろいろなアイディアが寄せられ、採用されることになる。市史編纂の終わり近くになって、付録を作成することになった。その内容に、「主な松江考古学関係文献一覧」と「松江市域埋蔵文化財調査報告書一覧」を入れることになった。これが大変な仕事であった。

こんなこと、小生一人でできる訳がない。史料編纂室全員の助けを借りながら行った。編集を終えると、大きな仕事をやりとげたという感慨にふけったことを思い出す。

石塚晶子
史料編纂課専門調査員

松江城部会を担当して

史料編纂課では、『松江市史』全18巻編纂事業のために、全国から各専門分野の先生方にご協力いただきました。私が担当した松江城部会は、平成30年３月に刊行された『松江市史』別編１「松江城」の刊行のために約15人の先生で構成されていました。部会員の先生方の他に執筆者、協力者など８人以上の方々に関わっていただきました。

私が史料編纂課（平成27年度まで史料編纂室）に勤務したのは、平成25年４月からです。平成25年度は松江城部会にとっては、大きな変化の年でした。

部会長として松江城部会を牽引してこられた山根正明先生がご都合によりおやめになり、西尾克己先生に代わられました。また、松江城・松江城下町の調査研究が進み、松江城部会内の専門グループ編成が「城郭史グループ」「文献･歴史地理･建築グループ」「土木史グループ」に変わりました。また､別編１「松江城」の内容を充実させるために、章立ても本編第１章から第７章、資料編第８章から第13章に分かれました。その後松江城部会は、調査・研究を着々と進めていきました。

先ほど松江城・松江城下町の調査研究が進んだと述べましたが、具体的な成果の一部を上げてみたいと思います。

「松江城下町遺跡」の発掘調査が平成17年度から開始されたことによって、松江城下町について様々な発見がなされ、松江城下町造成以前から現在にいたる様子が明らかになってきました。松江市内の古文書悉皆調査の中では、平成24年に松江城天守完成時の祈祷札が再発見されました。また、ボーリング調査等によって『島根県史』（島根県史編纂掛1930年）などで伝承されてきた松江城下町造成の信憑性についての検証がなされました。この他にも様々な調査研究がなされ、様々な成果がありました。このように松江城・松江城下町の調査研究が着実に進められたことによって、平成27年７月に松江城天守が国宝に指定されました。松江城天守の国宝指定によって別編１「松江城」もA4サイズ900頁の予定を急遽、1,000頁に増やして内容を充実させることにしました。

編集を担当した私はスケジュールの過密さが心配で、夜眠れない日々が続きましたが、それ以上にご執筆いただきました先生方におかれましては、お忙しい中さぞご負担をおかけしたことと思います。時には校正期間が１週間という無理をお願いすることも何回もありましたが、１つの原稿も欠けること無くご返却いただきましたことは、編集担当として先生方に本当に感謝しています。

また、松江城部会では専門分野が多岐にわたっていましたので、別編１「松江城」の校正に関しては、査読検討委員会を開催して校正等についてご検討いただきました。査読検討委員会は、西尾克己松江城部会長、和田嘉宥文献・歴史地理・建築グループ長、河原荘一郎土木史グループ長、岡崎雄二郎専門委員の４人の先生方と事務局で構成され19回の査読検討委員会を行いました。別編１「松江城」の刊行には査読検討委員会の４人の先生方のお力を抜きにしては語れません。

別編１「松江城」が刊行された翌年の令和元年10月20日に最後の松江城部会が開催されました。松江城部会では、松江城・松江城下町についての調査検討はまだ始まったばかりで、別編１「松江城」の刊行がその始まりであるという認識で一致し、松江城部会は閉会しました。

松江城部会は終了しましたが、松江城・松江城下町の調査は今後も続きます。今後は松江城調査研究室に引き継がれていきます。今年は、松江城天守国宝５周年記念ということで、松江歴史館の展示や、国宝記念セレモニーが予定されています。今後の松江城研究に期待していきたいと思います。

伊藤康宏
松江市史編集委員、近現代史部会

近現代・産業経済の成果と積み残した課題

市史編纂事業最終盤の２年間は、 史料編「近現代Ⅱ」と通史編「近現代」の編集作業が慌ただしく同時進行となった。そのため両巻の内容について吟味する作業が時間切れに終わった感は拭いきれない。一例を挙げると、第一章第二節三「漁業場区と水産業振興」（通史編「近現代」72 頁他）で取り上げた「鮒」の漢字の読みが最後まで分からず本文にふりがなを付すことができなかった。しかし最近、別の史料を読んでいる際、「アマサギ」と記されているのを発見し、遺憾に思ったこと等。それでも第１章、第２章については専門的に取り上げてきた経緯もあり、比較的時間を費やして新しい視点と史料をもとに叙述できたと思っているが、第３章、第４章については関連史料の発掘と検討・叙述が時間切れで充分に踏み込めなかった点等の課題が残った。ともあれ２巻の史料編に基づいて廃藩置県から現代の松江市成立までの 140 年間を、４つの時期区分に沿って産業経済、とりわけ水産業分野をはじめて通史として概観し、その歴史的特徴を再確認できた点が最大の成果と思っている。以下、2，3 の成果と課題を挙げておきたい。

【地元紙と地元商工団体機関誌のデジタル化･データベース化の期待】

近現代史料の調査収集における最大の成果は島根県立図書館及び島根大学附属図書館に所蔵されている地元紙（山陰中央新報、前身紙を含む）のマイクロフィルムのデジタル化であろう。近現代の史料編･通史編ではこの一部の記事の活用に止まった。今後は著作権問題の解決を図った上で残りの記事のデジタル化及び記事検索可能なデータベース化と所蔵先での公開・閲覧利用が望まれる。それによって新聞記事を活用した自治体史から多角的な地域史へと研究の展開が期待できよう。

松江商業会議所（松江商工会議所の前身）は設立当初から機関誌を発行している。現在所蔵確認できている雑誌は『松江商業会議所報告』第１号（1895 年６月）及び『松江商工彙報』第１号～第 83 号（松江商業会議所発行､1910 年７月～ 1927 年 12 月）､『同』第 111 号～第 115 号（松江商工会議所発行、1933、34、39 年）で、島根県立図書館（内藤正中文庫）に保管されている。市史の近現代史料編・通史編ではこれら史料を活用した。今後は機関誌記事のデジタル化・データベース化が早急に行われ、松江商業（商工）会議所研究さらに近現代松江の商工業の特徴が読み解かれていくことを期待する。

【島根県公文書センター所蔵の県庁漁業文書のデジタル化･データベース化の期待】

島根県公文書センター所蔵の県庁漁業文書は全国的に見ても傑出した公文書である。内容は「漁業場区」（1873 年～ 1902 年）計 60 点と「漁業免許」（1903 年～ 1949 年）計 73 点で､両者あわせると「漁業権」関係文書が計 133 点､それに漁業団体文書として「漁業組合」（1887 年～ 1943 年）計 75 点と「水産業組合他」（1885 年～ 1948 年）計 14 点、全体として合計 222 点が簿冊形式で保管されている。市史では史料編近現代Ⅱ、通史編近現代において数点の利用に止まった。漁業権や漁業組合の変遷を長期的に、地域的に把握できる点でもたいへん貴重な史料群であるので、このデジタル化･データベース化が図られ、これら史料の活用を通して近代日本漁業史研究の進展に期待が持たれる。

（島根大学学術研究院農生命学系教授）

「漁業地区」「漁業免許」「漁業組合」
島根県公文書センター所蔵

稲田　信
史料編纂課長

松江市史編纂事業を振り返って

令和２年(2020)3 月 31 日午後、今井印刷の永見真一氏から『松江市史』通史編「近世Ⅱ」を受け取り、長年お勤めいただいた内田文恵さん、北村久美子さん、石塚晶子さん、白名悦子さんを史料編纂課からお送りすると、私の中での市史編纂事業はひとまず終了した。

平成 17 年(2005)3 月の松江・八束市町村合併により、私は宍道町職員から松江市職員となった。宍道町では宍道町史編纂事業を平成 16 年秋に終えたところだったが、平成 19 年(2007)4 月に市教育委員会宍道分室から同文化財課に着任すると、ちょうど「松江開府 400 年祭」が始まり、同基本計画に盛り込まれていた松江市史編纂事業の立ち上げが待っていた。同時に、合併時に宍道町の事業を継承した『松江市ふるさと文庫』『松江市歴史叢書』の編集なども待っていた。

松江市文化財課に着任し最初に感じたことは、市役所内外からの市文化財行政への冷ややかな視線だった。が、そのことは、当時の福島律子教育長、友森勉理事から繰り返し語っていただいた市史編纂事業に対する強い期待感につながっていたと思う。平成 19 年４月は、井上寛司先生が大阪工業大学を退任され、再び松江に居を移し中世史研究に邁進され始めた時でもあった。

振り返ってみると、松江市史編纂事業のあゆみは私の松江市での仕事とほぼ重なっている。松江市史編纂検討委員会が設置された平成 20 年(2008)から事業の終了まで、本書「市史編纂事業全期間における主な活動」にあるように、委員会、部会、調査、講座などが矢継ぎ早に展開し、多くの皆さんに市史編纂事業に参加いただき支えていただいた。いくつもの偶然や幸運にも恵まれたのだろうが、延べ 200 名を超える関係者、事務局員の誰一人欠けても最終の形での完結にはならなかったと思う。

私は、編纂委員会、編集委員会、松江市史講座、松江市ふるさと文庫、松江市歴史叢書(市史研究)などを担当として受け持ち、調整がつく限り、室(課)長としてほぼ全ての専門部会会議に参加させていただいた。また、原始古代史部会、絵図・地図部会、松江城部会の担当として、史料編「考古資料」、史料編「絵図・地図」、別編「松江城」の編集に関わらせていただいた。事業の前半は８つの専門部会が同時に動いており、土曜日・日曜日もないほどに、とにかく忙しかったが、研究者の皆さんの熱い議論を拝聴し、書籍編集や講座開催に携わることで、松江市の歴史を幅広く楽しく学ぶことが出来たのは、とても幸運だった。

この記録集の編集が進む中、新型コロナウイルスの災禍が見通せず、生活だけでなく社会、経済にも不安と沈滞ムードが広がっている。令和２年２月 15 日の市史講座は予定通り開催できたが、翌３月 21 日の最終講座は感染対策のために中止となり、録画によるテレビ放映となった。４月になると松江市内でも感染者が確認され、緊張感が広がり様々な感染症対策に追われ始めた。会議の開催や県外出張もできなくなり、在宅勤務ほか自宅にこもる生活が増え、職場の景色も暮らしの様も一変した。明けない夜はないが、これから社会の様々なシステムが大きく変わっていくと予想され、その始まりの始まりに松江市史編纂事業は終了したのである。

松江市史編纂事業に関わって 10 年余り、市役所内外からの市文化財行政への視線は確実に暖かくなった。今後とも松江市では、市民の皆様とともに松江市の過去・現在・未来を確認し合う事業として、歴史史料の収集と刊行物を通しての情報発信に努める必要がある。不透明な時だからこそ、『松江市史』の呼びかけにもあるように、歴史の中に地域の夢、地域の未来を見つけていくことが大切だと思う。

あらためて、松江市史編纂事業に関わっていただいた全ての皆様には、心より感謝申し上げます。

（松江市歴史まちづくり部次長、史料調査課長、松江城調査研究室長）

乾　隆明
松江市史編纂委員

松江市史講座が果たした役割

私は市史講座が始まる以前から、市立図書館で「開府四百年松江藩講座」の司会を続けていた。これは私個人が企画したもので、池橋達雄先生に相談相手になって頂いた。また山陰中央新報の文化部長と相談して講座の原稿を持ち込み、学芸記事「松江藩の時代」シリーズとして月一回連載を続けた。すると受講者も増加し、マーブルテレビが講座の様子を録画放映してくれるようにもなった。

その番組をご覧になった井上寛司編集委員長から、「松江市史も乾さんがやっておられる方式でやりたいが、どうだろう」とのお話を頂いた。自分一人で講師の人選を行って苦労していたので渡りに船、会場も受講者も新聞連載もマーブルでの放映ももとのままに、題名だけを「松江藩講座」から「松江市史講座」に改めた。事務局である史料編纂課が万全の体制で運営してくれるので、私は司会として大相撲の呼び出し役を果たすだけとなり、肩の荷が下りたようになった。新聞連載「松江藩の時代」は二冊の書籍「松江藩の時代」「続・松江藩の時代」となり、松江市史の呼び水を果たしたと思う。

松江市史講座が始まると、毎回 130 ～ 150 人ほどの熱心な受講者が集まり、全く減少することがなかった。事前に出した講師の記事内容によって客層が変わるのが興味深かった。平成 23 年 7 月より令和 2 年 3 月までの 142 講座で講師の数はシンポジウムなど複数講師の場合もあり 150 人余り、会場においでの直接の受講者は約 25,000 人、マーブルは全市をネットしているので、おそらくその数倍の市民が受講していただいたと思う。市史講座は松江市史編纂事業を広く市民に知ってもらうために大きな役割を果たしてくれた。

市史講座は、多くの市民にわかりやすく歴史研究の最先端情報を届けるのが趣旨である。事前の新聞記事も市史本体の記述も、ガチガチの学術論文ではなく、市民を意識した語りかける文体とまではいかなくとも、少なくとも各界各層の市民が理解しやすい記述になったのではないかと思う。

これからの歴史まちづくりをめざす松江市民に、その判断の元となる資料として、使い続けられる市史であってほしいと願っている。

（松江市文化財保護審議会委員）

井上寛司
松江市史編纂委員会副委員長、編集委員会委員長、中世史部会長

中世史部会としての活動を振り返る

従来、島根県内の自治体史では、多くの場合中世史分野は一人、多くても二人で執筆するのが一般的であった。また、分量的にもごく限られたスペースを充てられるのが一般的であった。こうした様々な不十分さや問題点を克服すべく、『松江市史』（以下、本市史と称す）では、史料編２冊と通史編１冊を中世史分野に充て、この事業を推進するための組織として、中世史の専門部会（以下、中世史部会と称す）を設けることとした。

中世史部会は４名の編集委員（部会長井上と川岡勉・長谷川博史・西田友広の各氏）と原慶三氏の５名で構成し、中野賢治（織豊期通史）・山根正明（中世城館）・西尾克己（中世考古）・永井猛（中世文学）・的野克之（中世仏像）の各氏に分担執筆者として加わっていただき、また部会事務局を福井将介氏に務めていただくこととした。

中世史部会を上記の５名編成としたのは、通史編「中世」を次のようなものにしたいと考えたことによる（その内容がより鮮明となるには若干の時間を要したが）。すなわち、全体をタテ糸とヨコ糸になぞらえ、政治史を中心とする通史（平安末・鎌倉期、南北朝・室町期、戦国期）と分野別（経済・社会・宗教文化）の記述の組み合わせとすることである。

中世史部会では、まず最初に事業全体の基本方針・概要とスケジュール及びそれぞれの任務分担について協議・確認を行った後、早速史料編の編集に取りかかった。松江市域内及び全国的な視野に立った史料の収集と、様式を定めてのデータ入力、綱文の作成と原本校正、及び史料解題の作成など。これらを任務分担に基づく個別作業と合同での調査・検討会の組み合わせによって進めることとし、史料の収集・データ入力等では京都府立大学大学院の皆さまにも一部ご助力いただいた。

2009年６月から始めた史料編の編集作業は、2012年度の史料編「中世Ⅰ」、2013年度の史料編「中世Ⅱ」の刊行をもって終了したが、これに先立ち、通史編分担執筆予定の皆さまには、入校予定の史料原稿をお示しして、執筆準備を進めていただいた。専門部会員を含め、通史編の編集に本格的に着手したのは2013年度からである。中世史部会での報告や市史講座での講演などを通して、各自の執筆内容の確認と調整を行うとともに、分担執筆予定の皆さまにも、同様の方法で内容確認と調整を進めていただいた。2016年度末に刊行された通史編・中世がその集大成であり、これを以て中世史部会の活動は基本的に終了した。

ただし、史料編に関しては、その後に遺漏史料の存在が判明したこともあって、2019年度の『松江歴史叢書12（市史研究10）』に補遺編としてそれらをまとめて報告した。また、市史の本体とは別に、よりわかりやすい形で研究内容を紹介する方法の一つとして『松江市ふるさと文庫』があることから、2013年に長谷川博史氏に「中世水運と松江」を執筆していただいた。

以上のような中世史部会としての活動をその成果（史料編Ⅰ・Ⅱ、通史編など）と合わせ改めて整理してみると、いくつかの注目すべき論点を指摘することができる。

その第１は、島根県内の自治体史では、専門分野を異にする中世史の研究者が分担・共同し、トータルな形で史料編・通史編の編集・執筆を行うのはこれが初めてだということである。そもそも、当初から史料編と通史編をセットで刊行する方針を掲げて編纂に着手すること自体が、（全国的には当たり前であるにも関わらず）島根県内では『宍道町史』に次ぐ二例目であり、実質的には本市史がその本格的な事例の最初ということになる。

その結果として、第２に、質と精度の高い（博捜・解読）史料編の作成が可能となったことが指摘できる。本市史では、先の方針に基づいて松江市域内の悉皆的調査と全国的な視野に立った史料調査を並行して行い、本編（史料編Ⅰ・Ⅱ）で2216点、補遺編（市

史研究で）71点、合わせて2300点近い中世史料の存在を確認することができた（他に、市域内に所在するが松江市と直接関係のない史料110点を附録として収録した）。

松江市域内にある中世文書で最大の分量を誇るのは神魂神社・秋上家文書で、他の五社と合わせ、すでに村田正志氏によって『意宇六社文書』として翻刻されている。今回、これらの文書についても改めて悉皆的な原本調査を行い、同書の誤りや不十分さの訂正を行った。また、これらの調査によって、以下のような新出文書を確認することができた。

安部吉弘氏所蔵文書、雨森文書、今井家文書、円成寺文書、奥原家文書、乙部家文書、神魂神社文書（『意宇六社文書』非収録）、華蔵寺文書、古曽志家文書、多久和文書、土屋家文書、平林家文書、本庄熊野神社文書、宮川家文書、売布神社文書

同じく、島根県外の所在や影写本・謄写本であることなどから一般にはあまり知られていない史料を翻刻し、広く活用できるようにした。その主なものは次の通りである。

青木家文書、阿羅波比神社文書、安国寺文書、家原家文書、恵曇神社文書、熊野神社文書（『意宇六社文書』非収録）、京都大学・朝山文書、迎接寺文書、清安寺文書、成相寺文書、末次家文書、東京大学史料編纂所・松浦文書、吉岡文書

第3に、通史編に関しては、それぞれの学問分野の最先端の研究成果を踏まえた考察・叙述が可能となったことが指摘できる。自治体史の編纂にとって、これは当然のこととはいえ実際には極めて困難で、本市史のように専門分野を異にする研究者の共同作業によって初めて可能となることを改めて確認しておく必要があるといえよう。加えて、通史編「中世」で1冊（800ページ）が確保され、余裕ができたこともあって、一般に最も理解が困難とされる中世社会独自の構造や特徴の概要を提示することも可能となった。

平安末・鎌倉期や南北朝・室町期及び戦国期それぞれの中央と地方との政治権力構造のあり方、あるいは公家・武家・寺社など異なる政治社会勢力間の関係やその歴史的変容、また荘園制社会の仕組みとその変容、商品流通構造の仕組みと実態、宗教構造や世界観・価値観のあり方とその変容など、これらはいずれも従来の県内自治体史ではほとんど触れられることのなかった問題で、極めて重要な意味を持つといえよう。

第4に、時系列による通史叙述と横断的な分野別叙述との組み合わせによって、中世松江市域の持つ多面的な歴史の実態及びその時間的な変容の概要が、それも全国的・世界的な視野に立って解明されたことは、とりわけ重要だと考えられる。

具体的には次の2点が指摘できよう。1つは、中世府中や出雲国惣社が存在するなど、少なくとも鎌倉末・南北朝以前のいわゆる中世前期には出雲国の政治的中心としての位置を占めていたことである。いま1つは、水運が基幹的交通手段となったこともあって、山陰地域最大の潟湖（中海・宍道湖）に位置する流通拠点として、美保関と白潟が西日本海地域の中でとりわけ重要な位置を占めたことが指摘できる。近世松江藩成立の歴史的前提や背景もこれらのことを踏まえて読み解いていく必要があるといえよう。

これらの成果や前進面と同時に、今後に残された課題も少なくない。1つには、史料の収集がなお十分でないことである。未活字史料や全国の自治体史（とくに市町村史史料編）の検索、さらには旧松江市居住者で他府県に転居された方々の追跡調査も未だ手つかずのものが少なくない。これらの課題を一つ一つ克服していくことが重要となろう。

2つには、地域史分析をさらに高め、深めることである。もともと時間的制約と厳しい字数制限の中で行われた通史編の執筆であるから、考察や叙述に種々の限界や不十分さが認められることは改めて指摘するまでもない。これらの点を含め、松江市域の歴史像をより豊かなものとするよう努めていくこと

は、今後に残された重要な課題だといえよう。

３つには、上記の点とも関わって、市民の皆さまにより深く、より正確に松江市の歴史をご理解いただくための独自の手立てを、今後考えていかなければならないことである。「市史を読む会」や多様な形での副読本の刊行などの検討が必要となろう。

以上、ここに至るまでの経過を振り返るとき、多忙な公務と種々のご予定を抱えながら、諸作業の締め切りや期限を厳守するなど、部会員や執筆分担の皆様方の主体的で積極的なご協力とご支援を得られたことはまことに幸いであったと、感謝の念で一杯である。事務局福井氏の献身的なご尽力にも感謝申し上げたい。本当にありがとうございました。

（島根大学名誉教授、大阪工業大学名誉教授）

内田文恵
史料編纂課主任編纂官

ワンチームの団結・目的に向かって

平成 19 年 (2007)12 月のことでした。松江工業高校の図書室で新年の準備をしていた 25 日、校長と事務長から急な呼び出しを受けて、校長室で聞かされた話は全く青天の霹靂でした。松江市が市史を編纂するのでその準備のため、県から出向という形で松江市教育委員会の文化財課へ行かないか、年明けには返事が欲しいとの話でした。県立図書館から松江工業高校へ転勤してから３年、私は退職まで１年を残すのみの時期でした。

市史編纂に関わられること、それは、県立図書館に在職中から公文書、古文書古記録など歴史史料の保存や、島根県史の編纂、そして松江市に新しい市史が作られなくてはいけないなどと折に触れて公言していた私でしたので、不安と気後れで心は乱れましたが、今まで司書として学んだことが役に立つかもしれない、一歩踏み出してみようと思いました。

そして、平成 20 年 (2008)4 月 1 日、史料編纂係長との任命を受けて松江市史編纂にかかわることとなりました。翌年 3 月 31 日に県職員を退職しましたが、その翌日から市の嘱託として市史編纂を共有目的として、共に歩む同僚（専門調査員）たちとの日々が始まりました。

爾来 11 年、令和 2 年 (2020)3 月 31 日に、全 18 巻の最後の巻である通史編「近世Ⅱ」が搬入され、長く座っていた机を整理し、課内の状況が変わるのを見てこみ上げる感慨は深いものでした。

主力の仕事である市史編纂の終了はもちろんですが、それに付随して 12 年間実施し続けた市域と、時には市域外の寺社や公民館、個人宅の史料調査・整理・保存の活動、市史編纂のための翻刻、収録しきれなかった貴重な史料の活字化などの作業から離れる寂しさと同時に、共通目的を持ってこれらの仕事を献身的に勤めてきた事務局員の人たちの顔が浮かびました。

全巻完成の日を共にできなかった山根正明さん・

沼本龍さん・福井将介さん・和田美幸さん・居石由樹子さん、それぞれが担当分野の発足時期から中盤にかけて、手探り状況の中、決められた巻を順次確実に毎年発行するという、厳しい出版計画をこなすのに大変な日々でした。そのような最中でも、史料の中から金の卵を見つけることが出来ました。その最大な物はやはり「祈祷札」の発見でしょうか。居石さんと私と稲田次長が松江神社の木札調査でのことでした。この棟札に懸賞金が出ていることを後で教えてくれたのは福井さんでした。赤外線での調査が終わると、すぐにこの祈祷札二枚の解読を皆で行いました。私が箒で埃を払い、雑巾で拭いた棟札は次に見たとき、白布の上に白手袋で大切に扱われる文化財になっていました。

市史編纂の中で、どの分野の先生も求められるのは基本史料・原本でした。二次、三次の出版物ではいけないのです。そのため、原本、原文書を私たち全員が見極め、探し出す知識とセンスがなければなりませんでした。膨大な史料の中から適切な史料を先生へ提供すること、これは誰でもできることではなかったのです。『松江市史』はこのようなことをこなせる専門調査員がそろったことで完成したのです。

それに、史料編纂室に配置され、まったくそれまでと異なった仕事でしたでしょうに一緒に働いた小田恵さん、岩町紀子さん、西村裕美さん、白名悦子さん達事務系の方々、備品の調達や作業で出かける時にはエレベーターのないビルの階段を重い作業道具を持っての上げ下ろし、それを車に搬出入しなくてはなりませんでした。この時も全員一緒でした。部会の前には準備で大わらわの担当者を助けられる事務局のサポートがなかったら市史編纂の成功や大量の史料の整理目録作成作業はできなかったでしょう。

サポートというより主力で目録作成や、保存作業、史料の翻刻に携わってもらい、最後まで助力をしてくれた大谷令子さん、岡本久美子さん。初期の目録作成、史料の項目抽出作業では松本美和子さんと森田ルミさんがいました。庁外で翻刻作業に従事してもらった飯田美奈子さんや加納善子さんなど多くの人の手助けがあり、それになにより、有能な全国から参加してくださった先生方の力と多くの人の思いが、チームとして、何度かおとずれた市史編纂の危機を乗り越え、無事市史が完成したのだと思う今です。

大矢幸雄
松江市史編纂委員、編集委員、絵図・地図部会長

絵図・地図編纂の方向性

私が地理学を学ぼうと思ったのは、高校の地理の時間に地形図の判読を通して斐川平野の集落立地を学んだのがきっかけであった。地図は人間の生活舞台を描いたもので、それぞれの時代に生きた人々の暮らしや自然との闘いなど多くの情報が含まれていることを知った。

私は、市史編纂事業がスタートして約１年遅れて絵図・地図部会を引き受けることとなったため、暗中模索の中で「手本となる刊行物をさがす」、「多くの絵図情報の入手と目録の作成」を当面の目標とした。その結果、『金沢市史』「絵図・地図編」に接して掲載された絵図の多様性、記述内容の学問的レベルの高さなどにおいて、これに匹敵ないしこれを超える絵図・地図編を編纂することを松江市の目標とした。

目録の作成作業は、たまたま私が松江市立図書館に勤務していた関係で、松江藩に関わる絵図・地図史料の掲載された書籍類を悉皆的にめくり、その情報をエクセルデータとして入力し所蔵館の確認を行った。結果的に約 1000 枚の絵図・地図目録が作成できた。部会のメンバーには、全国的視野で研究されている先生方が含まれていることもあって、前述の目標達成に大いに協力ご支援していただいたと思っている。

全国的な調査（絵図・地図編参照）と並行して地元の所蔵館や個人宅の調査を行うなかで、県外所蔵では寛永 10 年「出雲国図」（東京大学南葵文庫蔵）、島根郡の「各浦絵図」（岐阜県図書館蔵）、464 ケ村の村絵図を含む「各郡村絵図（明治大学蘆田文庫蔵）などを見つけ、地元でも「出雲国海防図」（根岸タカ子家蔵）、「松江城及城下古図」（三谷健司家蔵）を含む多数の絵図を見つけることができた。また市史編纂の情報が市民に浸透していくなかで、個人所有絵図の新たな情報をいただき、絵図・地図編の発行を終えた今でも提供は続いている。今回のような大量の情報収集と入手は、松江市史の編纂事業なくしてはあり得なかったと思う。

編纂事業と並行して、部会の委員は市史研究や学会誌などを通じて多様な研究成果をまとめ発表してきた。例を挙げれば、地元絵師が作製したと思われる絵図の全国的な評価、城下町絵図の GIS（地理情報システム）手法による武家地の空間的・時系列的な把握と研究の拡大、全国的な人や物の動き（客船帳など）や城下町と農村部の物流（輪切絵図など）のデーター化などその一部である。

絵図・地図編の編纂を通じて、多様な絵図からは当時の農民や商人、職人、奉公人、下級武士、上級武士など女性を含む名前とともにそれぞれの生活状況や景観などを垣間見ることができた。松江市では平成の合併以降、各公民館単位で地域に密着した「街歩きマップ」が作製されている。これらも市史編纂事業で得られた情報に加えられて、人間の生活舞台で「人が見える」新たな遺産として後世に伝える義務があると思う。

終わりに、編纂事業を支えたのは、松江の歴史的史料が全国に散逸しながらも残っていたこと、撮影・印刷・描画などの技術的ネットワークが市内に存在していたこと、などは松江藩ないし出雲地方の伝統・文化の高さによるものと県外の研究者から評価されたのは嬉しいことである。

最後に、部会委員および編纂事務局とのスムーズな連携も大きな支えとなったことを感謝するものである。

（元島根県立浜田高等学校校長）

岡崎雄二郎
松江城部会専門委員

難渋した調査と大いなる刺激、そして解明すべき謎

私が松江城部会の専門委員になったのは、平成25年度からである。私の分担は、城内の発掘調査の成果を書くのが主であったが、編集内容を聞いてみると、天守内に展示してある木製銅板張鯱や鬼瓦、石塔、鉄製品など伝世資料は全く取り上げられていなかったので、これらも取り上げていただくことになった。

伝世資料は、昭和25～30年度の天守全面解体修理の際、取り外された鯱などで、展示保存してあるものばかりであった。天守内部は暗いので困惑したが、国宝化推進室（当時）の卜部室長の配慮でスタンド式の強力ライトが使えることになり、大変助かった。展示してあるガラスケースの傍らで実測したが、観光客が通るルート沿いにあるため、「何をやっておられるんですか？」としょっちゅう質問されて困った。しまいには「現在実測調査中」という紙を置いて作業を続けた。観光客は、高さ２ｍを超す大きな鯱を間近で見たり、天守内では珍しい大井戸を覗いて感嘆の声をあげていた。

城内の発掘調査は、昭和47年度から開始されたが、調査報告書が未刊行のものが多かった。そこで史料編纂室の稲田室長（当時）の計らいで、『松江市歴史叢書（市史研究）』に調査の概要を掲載させてもらうことになった。出土した瓦や陶磁器の水洗いからの整理作業が続いた。松江市の秋鹿収蔵棟や㈶松江市教育文化振興事業団母衣事務所、加賀事務所の部屋を宛てがってもらい、他の考古資料と共に整理、執筆作業を行ってきた。「史跡松江城の発掘調査」というシリーズでこれまで、（１）米蔵跡などの調査概要を（３）までまとめることが出来たのは一つの成果であった。

執筆の過程で気が付いたことは、昭和の大修理の際、修理事務所嘱託の須田主殿氏が松江城や天守に関わる膨大かつ貴重な史料を、情報収集し、借用し、絵図類は絵の得意な方に模写を依頼し、瓦類は拓本を採られるなどして、稿本に残しておられることである。当時の修理工事報告書の予算が限られ、詳細な調査記録が掲載されなかったため、別途松江市で刊行してほしいという願いを込めて、原稿に認められたものである。今は失われて確認できないものも多数ある。私たち調査員は大いに参考にすることができた。また新たな謎も含まれている。この稿本はぜひ刊行して公開すべきである。

また、松江藩政時代の美術工芸品も個人所有を含め多数伝世されているのだが、市史編纂当初はこれをまとめる研究者がいなかったので、取り上げられなかったと聞いている。しかし、近世松江の芸術文化には、目を見張るものがあり、松江歴史館の学芸部門も充実されてきているので、ぜひ将来１冊の本にまとめてもらいたいものである。

私は地元松江の発掘調査担当者として事実関係は述べてきたが、いかんせんその全国的な位置づけ、あるいは意義ということになると疎いままであった。今回、県外の委員である我が国の城郭研究の各分野の第一人者の皆様方と意見交流や共同調査を行う中で、汎日本的かつ学術的な刺激を受けることが出来たのは、大いなる収穫であった。今まで井の中の蛙であったことを大いに反省し、これからも、松江城の真実と謎の解明に注進していきたい。

（元松江市教育委員会文化財課長）

岡部康幸
元松江市史編纂委員

金字塔の市史、幅広い活用を

新型コロナウイルスに戦々恐々の日々が続くなか、『松江市史』全18巻が完結したのはまさに快事であった。書店店頭で最終配本となった通史編の「近世Ⅱ」「近現代」の2冊を求め、その重さを実感した。思わず全巻の重さも想像し圧倒された。書棚に並んだ全18巻は壮観である。市史完結に向け11年間にわたって注がれてきた関係者の労苦に深甚な敬意を表したい。『松江市史』全18巻は質、ボリュームともに県内市町村史の金字塔となった。

必要があって別編2「民俗」のページをめくっていた時のこと。「伝染病と信仰」の項目でふれられていた木野山信仰に目が留まった。1879（明治12）年、全国的にコレラが大流行し、島根県にもまたたく間に病魔が広がった。島根県（当時は鳥取県も含んでいた）の患者数は3317人、死者は2149人にも上った。致死率65％。この時、鳥取県西部から島根県東部にかけて急速に信仰を広げたのが木野山神社だった。

詳細は市史を見ていただきたいが、木野山神社は岡山県高梁市に鎮座する。コレラ封じの神さんとして、松江市域では34地域にも勧請されている。多くが死に至ったコレラ。見えない細菌に対する当時の庶民の恐怖心が伝わる。医学や科学がほとんど進んでいなかった時代に、見えない細菌への恐怖を信仰によってはらいのけようとした。ひたすら信仰にすがった当時の庶民の姿が思い浮かんでくる。

今、コロナ禍の渦中にいる身には、この先行事例が切実な思いとして伝わってくる。明治前期、コレラ封じを願った木野山神社信仰に対し、現代の私たちは医学と科学の力でコロナ封じを果たそうとしている。

コロナ禍克服の日を、私たちはどのようにして迎えるのであろうか。暮らしはどうなるのだろう。そんな時、松江市民の相談相手となってくれるのが新しい『松江市史』である。市民共通の財産として新市史を幅広く活用したい。

《本格的な松江市史編纂の意義は「温故知新」に尽きるのではないか。過去を知ることで未来の羅針盤を得るとともに、よりよい未来を獲得するために過去の歴史を掘り起こす。今回の市史編纂事業は松江市の輝かしい未来を照らし出す、と確信しています。》2010年3月号の「市報松江」に市史編纂委員の一人としてこんな短文を寄稿した。委員としては初期のわずかな期間しか務めなかったが、ほとんど遅れることなく計画通りに刊行される市史の一冊一冊を購入し、その都度、一読者としてエールを送ってきた。

今、市史の完結によって松江市は未来への確固たる羅針盤を獲得した。そこにはいろいろな壁に直面した時、振り返って参照すべき歴史が記されている。くめど尽きない知の源泉がそこにある。

新市史では特に史料編が充実している。この史料を活用した新しい研究の出現も楽しみだ。たくさんの新知見が盛り込まれている通史編も、新視点での研究により増補・改訂を忘れてはならない。常に生きのいい市史であるために、市史を進化させる試みはぜひとも市民で共有したい。

市史編纂を通じて、市史講座や松江市ふるさと文庫の刊行など多角的な啓発活動が行われた。この試みも見事だった。多くの市民の目が市の歴史に向けられた。そんな中で悲願の松江城国宝化が実現したのは、決して偶然ではない。修史事業と軌を一にして松江城の新研究が進展、国宝化に結び付いた。その新研究が『松江市史』別編1「松江城」に結実している。

何よりもこの立派な市史が末長く流通することを要望したい。難しいことではあるが、新しい読者に対し常に入手可能な市史であるように、在庫管理を忘れないでいただきたい。当然、電子書籍化も検討課題となるだろう。可能ならば、全巻にわたる索引作成もお願いしたい。いつでも手の届くところにあって、誰もが利用しやすい、市民のための市史であり続けてほしい。

（元山陰中央新報社論説委員）

勝部　昭
松江市史編集委員、原始古代史部会長

松江市史編纂事業と原始古代史部会について

松江市史編纂事業が始まるきっかけは、平成19年(2007)から始まる「松江開府400年祭」だったと記憶しています。私は長年島根県の文化財行政に携わるとともに、松江市文化財保護審議会委員を務めていた関係から、平成20年(2008)に松江市史編纂検討委員会が設けられると、委員として委嘱されました。専門家だけではなく、乾隆明さんら地元の有識者、友森勉さんら松江市役所幹部の皆さんたちとともに議論を重ね、その年の秋に「松江市史編纂基本計画」がまとまりました。この基本計画により、10年間に及ぶ松江市史編纂事業の実施が決定し、平成21年(2009)4月から事業が始まると、私は微力ながら原始古代史部会長という大役を引き受けることとなりました。

第1回松江市史編纂委員会が開かれたのは、平成21年6月、続いて第1回編集委員会も翌週には開催されました。ひとたび計画が立ち上がると、これまでの松江市のスピード感とは異なり、計画内容が次々と具体的に展開していくので、気が焦るとともに、原始古代史部会をどのような人員体制で整えたらよいかについて、とても気を配りました。

原始古代史部会は、市史編集委員会内に設けられた8つの部会の一つで、さらに専門性から、考古専門部会と古代専門部会に分けることとしました。考古専門部会は、西尾克己氏、丹羽野裕氏、山田康弘氏、松本岩雄氏、平石充氏、古代専門部会は、大日方克己氏、佐藤信氏、平石充氏、野々村安浩氏、森田喜久男氏にお願いしました。

さて、原始古代史部会では、史料編「考古資料」、史料編「古代」、通史編「自然環境・原始・古代」の編集を担当いたしました。松江市史は、「松江市史編纂基本計画」に沿って事業を進めることが井上寛司編集委員長の厳命であり、出版計画では時代の古い順に編集し、次の時代につなげることになっていました。原始・古代史の執筆・編集は、トップランナーとして準備の時間もない中で編集作業に入り、短時間で執筆をしていただくこととなります。普段は心優しい事務局職員の方も、最初の巻を遅らせるわけにはいかず、厳しい編纂スケジュールを組んで、厳しい原稿督促をしてくださいました。

第1回原始古代史部会は平成21年6月21日に開催されました。出版計画では、史料編「考古資料」は平成23年度、史料編「古代」は平成24年度、通史編「自然環境・原始・古代」は平成26年度の出版です。市史のボリュームと、内容の正確性を考慮すると、原稿入稿から5～6回の校正を経て完成まで概ね1年はかかります。つまり、史料編「考古資料」にいたっては､最初の部会から2年もかけずに、A4 版約840頁余りの原稿を集め、写真・図版を用意し、全体調整を行ってから、印刷所への入稿原稿としてまとめなくてはなりませんでした。そして、資料分析の時間もないまま、通史編の執筆へと向かわなくてはなりませんでした。

記録によれば、史料編「考古資料」が出版された平成24年3月までに、考古専門部会の開催は50回あまりに及びました。多い時は、毎週勤務後に部会員の方々に集まってもらい、原稿の調整と内容確認(査読)を行ったことを思い出します。事務局員として編集を担当いただいた石井悠氏、木下誠氏のご苦労も大変なものでした。それでも、松江考古学120年の集大成として、蓄積された膨大な考古学の情報が史料編の1冊としてまとまり、松江市域の考古資料を俯瞰することができるようになった意義は大きいと思います。

なお、忙しかった編集作業の合間に、自分たちが記憶をなくさないうちに松江市史では書けなかった様々な考古学の思い出を記録しておこうと、誰彼となく話が持ち上がり、平成30年(2018)には『出雲考古学のあゆみ』を発刊することが出来ました。

スケジュールに追われながら、薄氷を踏むような緊張感あふれる編集の苦労も、今では懐かしい思い

出です。

最後になりますが、「松江市史編纂基本計画」では、市史を補う付帯出版物の発刊が記されています。付帯出版物の一つ『松江市ふるさと文庫』では、通史編の執筆者である池淵俊一氏に「古墳時代史から見る古代出雲成立の起源」、大日方克己氏に「出雲に来た渤海人」というタイトルで執筆いただきました。いずれも市民の皆さんに好評と聞いています。

松江市史編纂事業が予定通り完了し、多くの成果を挙げられたことに、関わった一人として大変うれしく、また、事業を支えていただいた多くの方々に深くお礼を申し上げます。

川岡　勉
松江市史編集委員、中世史部会

松江市史編纂事業に関わって感じたこと

私事になるが、私は松江の旧城下町の一番南に位置する雑賀町で生まれた（先祖は天神町で書籍商を営んでおり、通史編５近現代には市会議員を務めた曾祖父の川岡清助の名前が何度か出てくる）。『新修松江市誌』が自宅の本棚にあり、松江を離れるまでにこの本を何度かめくったことを思い出す。市史編纂事業に関わり、故郷の歩みを客観的に見直す機会が得られたのは、私にとって誠に感慨深いことだった。

私の子ども時代の遊び場は、城下町の南を画する床几山と山腹に広がる洞光寺の墓地であった。そこからの眺めは、西に宍道湖、東に嵩山を望み、北に松江の市街地、その向こうには北山山地が横たわるという空間であり、その閉じられたスペースが世界の全体であるかのような感覚を抱いて育った。それゆえに、高校を卒業して静岡にある大学に進学した時、いつもどんよりと曇った松江の町と、光あふれる開放的な静岡の町が、同じ空気でつながっているとは信じられない思いがしたものである。

編纂事業に関わって感じたのは、松江は独特の個性ある歴史をたどりながらも、それは決して閉じられた空間ではなく、外の世界と密接につながっているという「発見」であった。自分の担当した中世でも、市内各地に分布した荘園や国衙領は中央の諸権門に接続しているし、寺院や神社は本末関係や宗教イデオロギーを通じて中央の寺社勢力と結びついている。中世の松江地域が日本海水運や中海・宍道湖の内海水運を通じて外の世界と深くつながっていたことも、最近の研究において明らかにされてきた事実である。

鎌倉幕府が守護・地頭を設置する中で、出雲にも諸国から武士が入り込んでくるが、とくに近江源氏の佐々木一族の勢力浸透が目につく。室町期の守護である京極氏も佐々木氏の一族であり、近江に勢力をもつ一方で、京都の高辻京極に屋敷を構えて出雲を統治した。その流れを引く尼子氏も出自は近江であり、京極氏の代官として出雲に入国し、戦国期に強

大化した。出雲の中世史は、京都や近江との関わりを抜きに語ることはできないのである。私の子ども時代の遊び場であった洞光寺も、もとは尼子氏が広瀬の富田城下に建立した寺院であり、寺に伝わる尼子経久画像には京都大徳寺の住持が賛を付している。

こうしてたどってみると、当たり前のことながら松江の歴史は日本の歴史の一部をなしていることが分かる。閉鎖的な土地感覚を抱いていた私にとって、この「発見」は新鮮な驚きであった。しかし、これは松江において地域の風土に根ざした個性的な歴史が展開したことを否定するものではない。むしろ、地域の歩みと全国的な社会の動き、そのどちらも捨象することなく、両者の絡まり合いを描き出すところに、私は歴史の醍醐味を見出す。自分と深い関わりをもつ自治体史の編纂は、そういう視点の大切さを改めて教えてもらう機会となった。

今回の松江市史の編纂事業では、水準の高い強力な編纂事務局の方々に支えていただいた。そこには、島根県における学問研究や文化活動の到達点が反映しており、それが全国に通用する県随一の自治体史の編纂を可能にしたものと思われる。松江で育った自分にとって、それは甚だ誇らしいことであり、編集委員長の井上寛司氏、史料編纂課長の稲田信氏をはじめ、地元に根付きながら歴史研究・歴史実践に携わってこられた方々に対し感謝の念に耐えない。

松江市史は多様な角度から地域の歴史の特質を浮かび上がらせているが、これは歴史研究のあり方そのものの変化、すなわち政治史中心のスタイルから、地域史を重視し、人間の生存環境や人々の多彩な生活の営みに着目する方向へと歴史を見る目が変わりつつあることと深く関わっている。そして、地域の歴史を生き生きと描き出す作業は、歴史研究のあり方をさらに豊かなものへと発展させるに違いない。この事業の遺産は文書館の設立という形で継承されることになるが、松江市史が切り開いた地平が今後さらに広がりをみせていくのを期待してやまない。とりわけ、県都における本格的な自治体史の誕生が、新たな島根県史の編纂事業へとつながっていくことを強く願望するものである。

（愛媛大学教育学部教授）

河原　荘一郎
松江城部会専門委員

松江城下町土木史の執筆にあたって

2010年9月に第1回目の松江城部会が開催される少し前、前松江城部会長の山根正明氏から土木史グループ長を依頼された。城下町の造成過程を土木工学の観点から調査解明することが任務であった。土木工学科は島根大学にはなかったから指名されたのであろう。2000年から松江高専で勤務していたが、大阪府出身で松江の土地勘があるわけではなかった。建設機械、締固め、落石といった地盤に関する研究はしていたが、松江平野の地質や土質をほとんど知らなかった。しかし、2017年度末発刊でまだまだ先のことなので何とかなる、名医よりホームドクターになりたい。そんな気持ちでこの機会に地域貢献できればと軽く考えて引き受けた。

堀尾氏は改易されたとは言え、土木工事に関する一次史料はないのが一般的である。城下町の土木工事に関してはフィクションが含まれる物語や伝承しかなかった。松江城のある亀田山と松江北高校のある赤山の間にあった宇賀丘陵を開削し、その土で田町や中原町を埋め土したと『島根県史』には記述がある。そこで、松江城下町遺跡・亀田山・赤山からの土試料の採取、松江平野の土質ボーリングデータの収集をお願いした。当時、大手前通りの拡張に伴い松江城下町遺跡の発掘調査が行われていたのが幸運であった。亀田山（城山稲荷）と赤山の砂は同じで、黄色い細砂でできており、掘削が容易に可能であった。したがって、『島根県史』前半部にある宇賀山の開削は真実である。一方、その土を城下町の埋め土に使用したという後半部は虚実である。南田町の自然堆積土と母衣町の築城時の埋め土が物理的に一致することが分かったときには感激した。堀溝の掘削土が埋め土に使われたのである。また、城下町東端（昭和橋）に堀尾期城下町絵図に描かれた土手が本当にあり、土手の下には大阪狭山池で使われた敷葉工法が使用されおり、しかも地下水面下にあったため枝葉が当時の茶色緑色のままであったこと

も驚きであった。その反面、宇賀丘陵の掘削土の約半分は二之丸下ノ段の造成に使われたが、残り半分の土の行方は分かっていない。三之丸には使用されていないので、中曲輪・荒神櫓・南櫓の地盤にでも使われたのではないか。今後の調査研究が待たれる。

土質ボーリングデータの収集では、松江平野の下水道・教育機関等のデータがたくさん集まった。緯度経度や孔口標高を地理院地図より読み取る作業およびデータ入力は、主に専攻科の学生が行った。雑賀町の造成が遅れた原因の解明については、発掘調査が行われていなかったので土質ボーリングデータが役立った。土質ボーリングデータは、電子化して史料編１「自然環境」の DVD に収録してもらった。今後の利活用・拡張を期待する。また、大学の先輩に誘われて地盤工学会の研究委員会に加わり、土質ボーリングデータを使用して 250㍍格子の地盤モデルを作成し、web 上のジオステーションで公開した。全国 33 都市のひとつ、中国地方では広島市についで２番目であった。

城下町遺跡の土質試験結果が 2013 年３月発行の『松江城研究』２号に掲載され、この成果はよく引用された。これ以外の発表でも面白い研究と言われたことが多く、地盤工学会中国支部「地盤と建設」では招待論文に採用された。また、松江城部会の全国の城郭史・考古学・建築史・地質学の研究者との交流も楽しかった。部会は日曜日の午前中にあることが多いので、前日の夕食会では大阪万博の話でよく盛り上がった。執筆段階になると毎月のように査読検討委員会もあった。部会員は私より少し年配の方が多く松江市史完成に合わせるかのように定年を迎えられた（その後もそれぞれの専門で活躍されている）。私は 10 頁しか執筆できなかったが、本当に松江市史ができてよかった。市史講座にも短い時間であったが２回出演させてもらった。何とか大役を果たせたという達成感があるとともに、もう松江城部会はないのだという一抹の寂しさを感じる。

（松江工業高等専門学校環境・建設工学科教授）

鬼嶋　淳
松江市史編集委員、近現代史部会

歴史史料を継承していくということ

私は、現在佐賀で暮らしている。松江市史に関わることとなり初めて松江に足を運んだ。私の役割は、いわば「外」から松江市の近現代を考えることであり、他の自治体史編纂の経験を生かすことであった。こうした立場から、11 年間の松江市史編纂事業を振り返ってみたい。

私は松江市史編纂に関わりながら、松江は歴史を大切にしている町であると感じていた。松江市には他地域（私が自治体史編纂に関わったことがある地域）と比較して、史料が良好に残されていると思う。それは二つの点からである。一つは、実際に史料が残り保存されているという意味であり、もう一つは、史料を調査・保存・継承する担い手が多様に存在するという点である。

近現代史部会では、旧役場文書と公民館所蔵文書の悉皆調査を行った。私は、東出雲支所のように書庫に大量の行政文書がきちんと整理されて残されていたり、本庄公民館や生馬公民館のように旧村の史料が大量に保存されていたりする現場を目の当たりにした。それは偶然残されていたわけではなく、地区の住民が保存してきたものである。現在、自治体によっては、旧町村の史料が合併などを契機に失われていることを考えれば、松江での事例は決して当たり前のことではない。

市史を執筆する過程で私は、市史編纂室のスタッフに大変助けられた。「外」からだと分からない人間関係から辿った史料発掘や、大量の史料整理は、他の自治体史ではなかなか見られないほどの作業量であったと思う。また、地域住民の方からは貴重な史料を提供していただいた。100 回以上の市史講座が開催されたが、私は３回担当した。2012 年には「戦時期松江の保健衛生と医療」と題して、保健婦活動を取り上げた。2015 年には「戦後松江の公民館と新生活運動」と題して、1950 年代から高度経済成長期の保健医療運動、公民館活動を取り上げた。

2018年には「敗戦直後の松江における人びとの暮らし」について報告した。毎回、地域住民の方から質問をいただき、加えて史料の提供をうけた。松江で生活していない私にとって、体験談や提供していただいた当時の史料は、執筆の際に大変役に立ちありがたかった。当然のことながら、史料は自然と残っているわけではなく、人によって継承されていくものである。松江市史の編纂には、市史編纂に関わるスタッフと地域住民からの協力が大切であることを実感した。

市史編纂事業のなかで残念であったことは、戦後松江の市政を分析できなかったこと、個人文書や各種団体史料を網羅的に収集・分析できなかったことであった。確かに地域の歴史を考えていく際に、公文書が重要な史料であることは間違いない。しかし、地域は行政側だけでなく住民が創りあげてきたものでもある。私は、メインにはならなかった人びとの構想や行動は、全面的に反映されなかったとしても地域の歴史に影響を及ぼしてきたと考えている。個人文書や諸団体の史料は、行政側とは別の視点で地域の歴史を明らかにする可能性をもつ。そういった史料は、文書だけではなく、インタビューや聞き取りという方法で収集する必要があるかも知れない。

松江市史の編纂は、松江市文書館設立構想へとつながった。市史編纂過程で収集した史料を継承していく場が開設される予定であるという。大変素晴らしいことである。ぜひ行政文書だけでなく、個人文書や各種団体が所蔵する史料、さらに文書だけでなく、地域住民にインタビューを実施するなど、積極的に松江の歴史史料を調査・収集していただきたいと思う。こうした史料が収集され、検討が積み重ねられた先に、地域住民による新しい「市史」が誕生するのではないか、と想像している。

今回の松江市史編纂で重要な役割を担っていたのは、執筆者と地域住民をつなぐ編纂課スタッフの存在であったと思う。今後、松江の歴史史料をどのように継承していくかを考えたとき、文書館・文書館スタッフに課せられた役割はとても重要である。

（佐賀大学教育学部准教授）

岸本　覚
松江市史編集委員、近世史部会

幕末・維新の松江藩とその豊富な史料群
- 松江市史編纂に参加して -

幕末・維新期という大きな変革期のなかで、松江藩をいかに描くのか（叙述するのか）というのが私の課題であった。実は、一般にイメージされるような「薩長土肥」中心、幕府VS「雄藩」あるいは「佐幕」VS「勤王」などといった構図のなかで松江藩を「生き生きと」記述するのは極めて困難である。もっと、違う視点や方法を模索しなくてはならなかった。

松江藩については、山口県文書館（毛利家）や鳥取県立博物館（鳥取池田家）・岡山大学付属図書館（岡山池田家）などと異なり藩政資料がほとんど残っていない。幕末の藩政を描くためには、かなりの部分『松平定安公伝』（1934年）、『松江市誌』（1941年）に依拠せざるを得ない現状が出発点としてあった。しかしながら、本編纂事業の特色は、こうした藩政資料の少なさによる状況を覆すぐらいの史料収集を継続的に実施していた点にあると言えるだろう。個人的には、こうした松江市の誇る史料収集と公開成果を活用したことに今回の市史編纂の特徴があると考えている。この立ち上げに盡力された先生方・スタッフや史料収集に協力された市民の皆様にあらためて敬意を表したい。以下、思い出すままに、幕末・維新期の特徴を四点ほど記しておきたい。

まず、藩政資料に匹敵するような藩主家・家老家の膨大な文書群「月照寺文書」（月照寺蔵）・「三谷家文書」（三谷家蔵）などには、藩政上層部の意思決定のあり方をさぐる重要なやりとりが多数残されていた。雨森謙三郎（精翁）をはじめとした主要なメンバーが重要であることはすでに知られていることであったが、具体的にどのような活動をし、その歴史的な意味についてはほとんど触れられていなかった。これらの史料編纂活動のなかで得られた知見から、幕末の京都・大坂・福井・松江などで雨森がどのような立場で活動し、松江藩の意思決定をつくっていったのかが明らかになった。これは、今後幕

末中央政局における「周旋方」のあり方を考えていくうえでも重要な示唆を与えるものである。

次に、先人が集積してきた資料である「旧藩事蹟」（雲州松平家文書・国文学研究資料館蔵）、「旧島根県史編纂資料　近世筆写編」（島根県立図書館蔵）などの再活用も重要な作業であった。また、少なからぬ武家資料の充実も著しい。「雨森家文書」「根岸家文書」（いずれも松江歴史館蔵）、「桃家資料」（島根県立図書館蔵）など豊富な史料は、変革期の武家の具体的なあり方を教えてくれるものである。幕府・藩・武士解体のプロセスが、政治や軍事などを含めてどのように推移していったのかを改めて問い直すことを可能にするものであった。

次に、在方や町方の資料群も充実していた。「池尻家文書」「木幡家文書」そして「瀧川家公用控」「大保恵日記」「中倉家文書」などは、翻弄される幕末・維新期の経済・生活・文化・社会・宗教などの記述にはなくてはならないものであろう。

最後に、松江藩士が派遣された京坂警衛や、戊辰戦争での秋田方面、隠岐諸島である。これらの地域での活動は、今後更なる調査が必要であろう。今回の編纂事業では、「吉城家文書」（松江歴史館蔵）、「志立家文書」（松江歴史館蔵）や個人蔵の「羽州」（秋田方面）の出兵記録などの新出史料をもとにして記述してみた。松江藩内だけでは記述できない複雑な経緯と紛争やそれに伴う様々なトラブルなどを一つひとつ明らかにしていくことが松江の歴史に向かい合っていくことであることを実感した。

以上、これだけの史料蓄積と、その継続性を後世の市民に財産としていかに残していくかが大きな課題のように思う。松江市の講座で話ししたとき、熱心な市民の方が多いことに驚かされたが、こうした歴史や文化継承の意識を幅広く共有している松江ならではの記録保存と公開が必要であろうと思う。

（鳥取大学地域学部教授）

喜多村　正
松江市史編纂委員、編集委員、民俗部会長

民俗から見える松江の地域性

民俗というのは、日々の生活を営む中で、人々が伝統的に受け継いできた諸習俗の全体を指す語である。民俗それ自体が歴史というわけではないが、歴史的変遷、歴史的集積の上に今日の民俗があると言って良いだろう。今回の松江市史編纂事業を通して民俗を見ると、松江という地域の持つ地域的特性がいくつか浮かび上がってくる。

松江地域の特徴となっている代表的な民俗のひとつが、歳徳神の祭礼行事である。この行事は、松江市域の全域にわたって分布していることが実証づけられた。トシトコさんという方言名も共通して持たれており、新年の行事として、トンド焼きの行事と一体化しているのも松江地域の特徴である。

鹿島町古浦や御津では、歳徳神の神輿の渡御はムラを挙げての祭礼であり、年間を通じての最大の行事となっている。一般的にはこの祭礼は、島根半島地区で現在でも盛大に祝われているが、かつては松江南部の農村地帯でも新年を代表する行事であった。しかし、宍道町伊志見や横見、田根等々、近年になって歳徳神の宮練りは行われなくなった。それでもほぼ全てのムラには歳徳神の宮庫は残されており、新年の行事としてムラの人々が参拝に訪れている。松江の城下町でも、多くの町内の一角には宮庫が祀られている。かつての賑わいは見られないが、石橋町や末次本町では現在でも歳徳神の宮練りが行われている。明治の頃までは、町の辻に宮宿として屋台を組み立て、町内の子供たちがこの宮宿に籠って鼓を叩くというのが、松江の町の風物詩であった。この正月の歳徳神の宮練りを継承したのが鼓行列で、松江の現在を代表する行事になっている。

このように歳徳神の祭礼は、松江市の全域に認められる民俗であるが、実は、弓ヶ浜半島や米子市の農村部でも新年の行事として行われている。出雲から伯耆の一部にかけての地域的特徴として位置づけられるので、ここからひとつの生活圏が想定される

のではないだろうか。

他方、松江市域内における民俗の地域差も認められる。ここでは、島根半島部と南部農村部との対象をその事例としてあげておきたい。

島根半島部のムラ(村落)は、「一村一部落」と表現される御津に典型的に見られるように、一般的に集居村が多く、一極集中的な構造がその特徴である。例えば、ほとんどの氏神はこのムラを単位に祀られているといって良いだろう。それに対して八雲町、忌部町、玉湯町等々の南部農村部では、散居村が卓越しており、一つの大字は複数のムラの連合体という形態をとっている。その結果、ムラとしての機能が多極化するという傾向にある。玉湯町(大字)大谷を例にとると、大谷第四地区(第四部落)がムラに相当し、この範囲で公会所を持ち、会長などの役員を選出している。第四地区として独自に婦人会を組織し、歳徳神も独自に祀っている。しかし、氏神の日速神社を奉祀する単位は、四～七地区の連合組織である。また、大谷全体(一～七地区)で自治会を組織しており、共有林を管理しているのもこの組織である。このようにムラの機能が多重化するのを特徴としている。

また２つの地域を比較した時、古い習俗が残されているのは島根半島側である。例えば島根町北浦には、大晦日に氏神詣でをする際に豆撒きをするという習俗が現在でも見られるが、以前にはもっと広く行われていた行事ではないかと推測される。鹿島町御津にはカシラブンという階層が近年まで生きており、歳徳神の宮練り行事は、東西に別れたカシラブンたちが中心になって差配していた。以前の出雲地方では、ほぼ全域的にカシラブンという階層が存在していた。しかし南部農村地帯では、戦後になってこのような階層意識はほとんど消滅してしまっているのが実体である。

（島根大学名誉教授）

北村久美子
史料編纂課専門調査員

松江市史編纂事業の記憶と今後への期待
- 近世史部会 -

平成23年4月から松江市史料編纂課で近世編(史料編4冊、通史編2冊)の担当として関わらせていただきました。古文書の収集・整理等には長く携ってきましたが、編集業務は未経験でしたのでかなり戸惑いがあり、暗中模索の9年間でした。

近世史部会の執筆者の方々は小林先生はじめ21名で、地元だけでなく東京・関西・中国・九州の大学等にお勤めの30～40代(編纂開始当時)の若い方々が多く、多忙なお仕事を抱えてのご参加でした。

部会担当としては先生方のご多忙ゆえに、原稿の遅れが心配の種でしたが、発刊の日程は決まっており、こちらから発信するメールは締め切りのお願いばかりという印象が強く残っています。

多忙の中でも、年3・4回は土日の1泊2日で部会が開かれ、直に話し合われる親密な交流がありました。部会では集中して話し合いが持たれ、時に厳しく適切な意見が交わされ、歴史研究の世界を垣間見た思いでした。

部会の合間、短い滞在時間の中で松江の町を知りたいと､江戸時代の城下図とあまり変わらない橋北･橋南の市街を徒歩で移動・散策され、史料に出てくる近隣の旧村へ車を乗り合わせて巡見(調査)も行われました。

担当の役目として懇親会の準備がありましたが、遠方からいらっしゃる方々をどこにご案内するのか悩みました。京店、白潟本町、伊勢宮町、寺町等、史料に出てくる地名での会食はお気に入りでしたが、もっと松江らしい所へと思いながら、実際は経済的かつ近場で行うことが多く、少し心残りを感じています。

史料収集については、松江藩の近世関連のものは以前からまとまった藩政史料や町方史料が少ないことが言われてきましたが、今回の市史編纂でもやはり大きな課題でした。

そこで島根県立図書館や島根大学附属図書館、松江歴史館等、地元の所蔵史料を改めて調査され、執筆者の方々により県外の史料保存機関の松江藩関係史料も調査されました。また、史料編纂課で調査途中であった旧家老家史料調査や市史編纂に合わせて行われた松江市内の家文書調査、寺社所蔵史料や公民館所蔵史料の調査が行われました。市史編纂中であることを知り、史料の所在情報をいただく事もありました。これらの史料の目録作成により新しい史料が発見され、執筆に活かされました。

調査と市史執筆の時期が同時進行であり、調査中に新史料が見つかって、辛うじて執筆に間に合ったということもありました。

今回の市史編纂では主として地元史料が使用されましたが、今後は江戸や大坂等、他の地域の松江藩関連の史料調査や情報収集ももっと必要になると思われます。

一方、タイトルだけでは内容の分からない史料を利用するため、膨大な数の「御用留」(村々への通達や藩への願書等、公用文書の控)等はさらに編年の詳細目録を整備し、内容把握が可能となり、新たに分かったことも多く、執筆に反映されました。

また、「御用留」や公私の「日記」類等は同じ史料を執筆分野により、政治・経済、庶民生活、女性の生活等、異なる視点で捉えられ、近世編全体で活用されています。

市史編纂終了後もこれらの史料を基に引き続き執筆者の方々により、様々な分野・テーマで史料の検証・分析が進められ、新たな発見があるのではと期待が膨らみます。

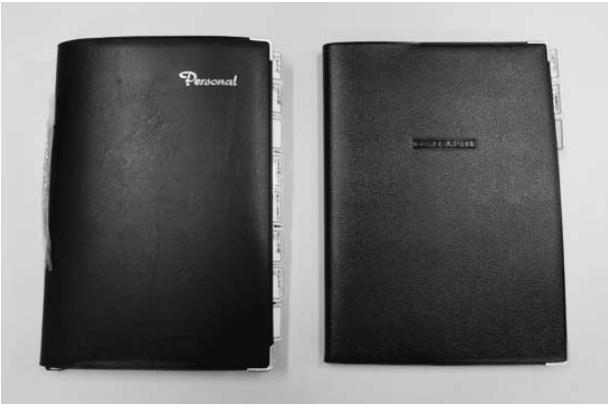
他地域の例では自治体史刊行後、活動も終了するところが多く見られますが、幸い松江市では「文書館」構想が進められています。将来の「新松江市史」や新たな知見の集約・発信の場として、ぜひ情報収集、史料調査、目録作成、保存整備等が継続して行なわれ、松江市民の共有財産である史料を護り活かしていかれるよう願っています。

木下　誠
元史料編纂室主任

松江市史編纂前半期の思い出
- 史料編纂係の新設から通史編１「自然環境・原始・古代」の発刊まで -

平成20年４月１日の組織改編により、松江市史編纂事業の立ち上げを目指して、松江市教育委員会文化財課内に史料編纂係が新設されたが、島根県から派遣された係長が１名（内田文恵氏）、専門官２名（山根正明氏、宍道正年氏）、嘱託職員３名という実務的には脆弱な体制であり、当時文化財課文化財係職員であった私や課長補佐の稲田信氏（現歴史まちづくり部次長）がその実務や庶務を支援するように決まっていた。稲田氏も私も宍道町史編纂の経験があったからである。とにかく、そこから通史編１「自然環境・原始・古代」の発刊までの７年間、私は松江市史編纂事業に直接携わることとなった。

今、手元には「松江市史編纂ノート」と題した忘備録が２冊ある（写真）。市史編纂という長期間にわたる事業を振り返るときがくると意気込んで記録したノートだ（しかし、日記もろくに続かない私の性格から、この「松江市史編纂ノート」は松江市史編纂基本計画策定までの２冊目で終わってしまった）。松江市史編纂事業立ち上げ時の関係者の思いが詰まっているこのノートから往時を振り返りたい。まず、松江市史編纂事業には欠かせない井上寛司先生と事務局が初めて会合したのが平成20年５月13日であった。実質はここから松江市史編纂事業が始まったといえるだろう。話し合いの内容は本書の



2冊の松江市史編纂ノート

第２章で書かれているが、ここで議論された松江市史編纂方針が市史編纂終了まで貫かれて実現されたことは、事務局員だけでなく、編纂委員、編集委員、専門委員、執筆者に至るまで、きちんとこの方針を理解して共有し、協力していただいたおかげだろう。当時の事務局員として、改めて、皆様に感謝を申し上げたいと思う。

また、平成20年７月４日に開催された第１回松江市史編纂検討委員会では、都合により欠席された地域有識者の乾隆明委員から、①硬派の市史を作るべき（史料に立脚した、後世の批判に耐え得る市史）、②読みたくなる史料集を（リード・解題を工夫）、③易しい啓蒙書を（市民の理解）、というメッセージが示された。それを受けて、専門家だけでなく市民も末永く活用できる市史にという視点も、松江市史には取り入れられていったと思う。

さらに、この第１回松江市史編纂検討委員会では、市史編纂の目的を、①史料を調査・保存し、後世に伝えること、②市民に地域を学んでもらい、地域に誇りを持ってもらう文化運動であること、としている。市史の出版は完了したが、市史編纂の目的達成には、これからその真価が問われることになる。

そのほか、私は、史料編２「考古資料」と、通史編１「自然環境・原始・古代」の原始・古代部分の編集を担当した。井上寛司先生からは編集を担う事務局員はある意味「鬼」にならないと計画通り刊行できなくなり、編纂事業全体へ影響を及ぼすと言われた。通史編１「自然環境・原始・古代」は通史編の中で最初に刊行する巻であったため、予定通りの発行を目指して、執筆者の皆様には執拗な原稿催促を行った。大変ご迷惑をおかけしたが、おかげさまで松江の原始・古代を語るうえで欠かせない市史が予定通り完成し、その後の松江市史編纂の道筋ができたと思う。末筆ながら深く感謝申し上げる次第である。

（松江歷史館主幹（学芸係長））

小暮哲也
自然環境部会専門委員

松江市史専門委員（自然環境部会）としての活動を振り返って

私は、『松江市史』史料編１「自然環境」の出版に、2015年（平成27年）から専門委員および執筆者として関わった。私は2013年11月に島根大学総合理工学部地球資源環境学科（現地球科学科）へ赴任したが、2014年に自然環境部会長の田坂郁夫先生（当時島根大学法文学部教授、現島根大学名誉教授）より，地形学の専門家として松江市史専門委員への就任を依頼された。

本格的な執筆作業は2015年度後半から始まった。私の担当は第１章「地形・地質」の第１節「地形」である。割り当てられた分量は本文、図表合わせて28ページだった。史料編の主旨の一つが、「史料そのものの現在における歴史的総括」とされ、「現時点で史料の所在を可能な限りくまなく確認し、その史料を活字化して網羅することで、歴史の検証を可能にし、後世へ史料を引き継ぐことができる。そのためには、『史料編』には永久性・普遍性を持たなければならない」ことを要求された。したがって、「地形」とは本来急速に変化するものではないのでその永久性・普遍性はある程度担保されると思われるが、執筆時点での松江市の地形を客観的に記す必要性を感じた。そこで執筆にあたり、私は松江市の地形を山、河川、平野・湖沼、海岸の４つに分け、それぞれの地形の現在の状態・状況を数値で表すことを心掛けた。2000年台に入ると様々なデータのデジタル化が急速に進み、データの取得から分析・表示まで全てコンピューター上で処理されるようになった。それは地形学の分野でも同様で、過去から現在まで、測量技術や地理情報システム（GIS）の進歩により人類は地表面の形態を詳細に把握できるようになった。日本における詳細な地形データは国土地理院を中心に公開されており、本史料編でも最新の測量データを用いて図表の多くを作成した。技術の進歩はこれからも続き、今後人類がより詳細な地形データ

を取得できることは確実である。そして松江市の地形変化を振り返るとき、2015 年あるいは 2016 年当時の状況を知るために本史料編が参照されれば、執筆者として幸せである。

冒頭で述べたように、私は 2015 年から松江市史に関わったが、市史編纂事業は 2008 年度から 2019 年度末まで 11 年間にわたり実施された大事業だった。松江市教育委員会文化財課内で市史編纂の検討が始まったのは、松江開府 400 年祭を翌年に控えた 2006 年度だという。通史編 5 巻、史料編 11 巻に別編 2 巻を加えた計 18 巻の『松江市史』であるが、松江市史には掲載されない専門的な内容は、『松江市ふるさと文庫』をはじめとした付帯出版物を通して公開されている。また、「市民のための市史」を目指すために執筆者が市民へ情報提供する「松江市史講座」が、2011 年度から 2020 年 3 月まで全 142 回開催された。田坂先生からお話をいただいた際には、自分がこのような壮大な出版計画に参加するという認識は全くなかった。自然環境部会に出席し編集状況等を話し合う中で他部会の状況や通史編編纂時の苦労話等を耳にし、事業のスケールの大きさに気付いていった。自然環境部会では、田坂先生、高安克己先生（島根大学名誉教授）、佐藤仁志先生（松江市文化財保護審議会委員）、澤田順弘先生（島根大学名誉教授）たちの豊富な知識・経験に圧倒され、事務局の稲田信氏、小山祥子氏、内田文恵氏による編集、管理、運営力に毎回感嘆させられた。こうしたメンバーの中で、恐らく全国の自治体を見渡しても質・量ともトップクラスと思われる松江市史の編纂事業に参加できたことは私自身にとって大きな財産であり、大変感謝している。この場をお借りして、関係諸氏に厚く御礼申し上げる。

（島根大学総合理工学部地球科学科助教）

小林准士
松江市史編纂委員、編集委員会副委員長、近世史部会長

近世部会の活動と今後の課題

松江市史全 18 巻のうち近世は史料編全 4 巻、通史編 2 巻の計 6 巻と全体の 3 分の 1 を占めている。このため 11 年前に編纂を開始した直後に史料編「近世Ⅰ」の編集が始まってから、通史編「近世Ⅱ」を 2020 年 3 月刊行するまでの間、絶え間なく編纂に従事していたことになる。これらの刊行を成し遂げるには、史料編纂課(室)を拠点にして、松江市域内外の史料の所在確認、所蔵が確認されたお宅から預かった古文書の整理とその目録作成、史料の撮影、整理し終わった史料のうち史料編や通史編に利用されそうな史料の翻刻などが必要であった。これらは編纂課の職員やアルバイトの方々の力がなければ到底できなかった事業であり、この場を借りて厚くお礼申し上げたい。

こうした調査事業によって、乙部家や三谷家をはじめとする松江藩の家臣であった家や、月照寺、普門院、千手院などの寺院、売布神社や阿羅波比神社などの神社の古文書の目録が作成されるとともに、島根県立図書館によって『松江藩列士録』が活字化されたことなどは、通史編の執筆に当たって大いに役に立った。また列士録だけでなく、松江城下の町人である新屋太助の「大保恵日記」など活字化された史料の多くはパソコン上で検索可能であったため、膨大なデータの中から関係する情報を比較的簡単に得ることができた。こうした史料の電子データは今後も活用可能なはずなので、ぜひ一般にも利用できるように取り計らっていただきたいところである。

さて通史編の編集、執筆に当たっては紆余曲折があった。原稿が期限内に執筆されないことは自治体史編纂の場合よくあることであるが、今回の市史編纂ではそれだけでなくやむを得ず執筆分担の変更を迫られた部分もある。当初の分担とは異なって新たに執筆をお引き受けいただいた執筆者の皆様にはこの場を借りて改めてお礼申し上げる。

但し今振り返ると、私の執筆分担案自体にあっ

た詰めの甘さから市史として取り上げるべき事項で洩れてしまったものもあった。たとえば西吟と月感という僧侶による西本願寺教団の争論を幕府が裁いた事件で、月感が松江藩に預けられるにいたったことは松平直政の事績に絡めて叙述すべきであったし、朝鮮人漂流民の松江藩領への漂着や、七類浦権市、三保関清蔵の海外への漂流などについても盛り込むべきであった（年表には挿入した）。また松江藩に仕えた森為泰という歌人・国学者の旅日記は大変興味深い内容であるにもかかわらず紹介できなかった。さらに和歌と俳諧については取り上げたものの狂歌については触れることができていないし、相撲に関する叙述では陣幕に触れていない。そのほか左吉兆についても藩主催のそれについて叙述できなかった。このように本来であれば取り上げたほうがよかった事項がまだまだあると思われる。いずれ何らかのかたちで補足したいものである。

編纂後の課題も多い。まず継続的な史料の所在調査、史料整理と目録作成、松江市文書館（仮称）等での公開体制の構築が望まれる。編纂事業では武家文書や寺社文書については文化庁の補助事業によってかなり調査できたが、町方、村方の家文書の多くには及んでないからである。また重要な史料で未翻刻のものもまだまだあるので、引き続き史料集の編纂が必要である。松江藩の法令集で未翻刻なままである「温故録」（島根大学附属図書館蔵）の外、存済館御用留類（島根県立図書館蔵）、松江藩儒であった桃家の資料（同前）、特にその当主の日記などがまず思い浮かぶ。

それから市史講座のシンポジウムでも述べたように、市民の方々や学生の皆さんなどが知りたいことを調べる際に使用できる手引き書、入門書のような本ができると、専門的な研究者以外の方々を巻き込んだ歴史調査が可能になると思われる。市史で明らかになった松江藩政の仕組み、とくに町方や村方支配の仕組みを踏まえた調査法の解説や、そもそもどのような文書が存在するのかなど古文書学、史料学的な観点からの解説があることによって、特定の事柄を調べて明らかにするには、どこの家のどのような史料を見ればよいのかが分かるようになるであろう。今後の事業継続について期待したい。

（島根大学法文学部教授）

小山祥子
史料編纂課副主任

松江市史編纂を市民の財産へ

令和２年３月、全18巻に及ぶ『松江市史』の刊行が終了した。最後の発刊となった通史編「近世Ⅱ」、「近現代」の２冊を史料編纂課の皆と受け取ると、しばし感慨深い思いに浸った。

市史編纂基本計画が策定された平成20年10月当時、私は松江市歴史資料館整備室で嘱託職員として勤務していた。平成23年３月に開館を控えた松江市歴史資料館（仮称）（後に松江歴史館として開館）の展示準備に携わっており、西島太郎氏（現・松江歴史館主幹、松江市史近世史部会員）とともに日々展示内容の検討や展示業者との協議に明け暮れていた。

歴史資料館開設準備のため、平成17年４月に最初に松江市の学芸員として着任されたのは、現在は大正大学教授となられた佐々木倫朗先生（松江市史近世史部会員）だった。その後、平成20年３月まで勤められることになるのだが、「松江藩の時代」を中心に据えた資料館の常設展示準備を進める中、常に言っておられたのが「松江市は基礎的な史料調査ができていない」ということだった。そのような状況下、限られた時間で組み立てる常設展示はどうしても旧来の研究内容に即したものにならざるを得ず、それでも少しでも新しい知見をと、史料調査や解読を行っていた。後任となった西島氏も同様の考えで、もともとの展示案に新たな項目を付け加える等、少しずつ新たな史料も加えた展示をと工夫しつつ、開館の準備を進めていた。市史編纂が始まったのは、そうした時期であった。

資料館整備室の職員として参加した第１回の松江市史編纂委員会において、井上寛司先生から「史料編に重点を置いた市史の編纂」、「松江の歴史研究を底上げする」などのお言葉を聴いたとき、ようやくここからがスタートなのだ、と高揚感がこみ上げたのを覚えている。

その後、人事異動により平成27年４月から史料

編纂室（平成 28 年 4 月から史料編纂課）に配属され、市史編纂の中枢に置かせてもらえたことは、私にとって何よりの贅沢であった。膨大な史料調査の蓄積を間近で見られるとともに、史料編纂室の諸先輩方の専門知識や市内のみならず県外の先生方の研究に触れることができる環境は、大変恵まれたものであった。担当した自然環境部会では、専門外の私は先生方にお任せすることばかりではあったが、初めて知る地質・気象・生物の壮大な世界はとても興味深く、視界が開ける思いをすることばかりだった。そして、史料編「自然環境」の編集にあたり、数多くの執筆者の先生方に出会い、かかわりを持たせていただけたこと、一冊の市史の刊行に携われたことは、とても大きな財産となった。

松江市史編纂は完結した。この 11 年の成果をどう活かすか、ここからが新たなスタートである。18 冊の市史は確かに大きな成果だが、その内容を市民の皆さんに伝え、さらには松江市の未来の糧としなければならない。松江市は平成 31 年 3 月に、松江市の保有する公文書と、地域に残る歴史史料を等しく収集・保存・管理・公開するため、「松江市文書館（仮称）整備構想」を策定した。『松江市史』を活かすためにも文書館の果たす役割は大きく、確実に整備しなければならない。市史編纂が松江市民にとって本当の財産となるようにすること、それが今後の私の仕事だと思っている。

（史料調査課副主任）

佐藤仁志
自然環境部会専門委員

松江市史自然環境部門生物関係の編纂を終えて

筆者は、松江市史編纂事業のうち自然環境部門の生物関係を担当した。10 年に及ぶ編纂作業を通して、苦労したことなどについて記してみることにする。

これまでに県内で出版されてきた市史（市誌）や町・村誌では、私が担当する自然環境分野はどちらかといえば付け足し程度の位置づけのものが多く、孫引きの情報などを寄せ集め記されたものがほとんどであった。自然環境分野については、専門家の参画がほとんどみられず、あまり参考になるような記述がないのが現状であった。どうしても歴史分野が中心となるのは、市史の性格上致し方ないことでもあるが、井上寛司先生が本書第 1 章「松江市史編纂事業の成果と課題」で述べられている、「本格的な自治体史」の３条件を満たしたものは、ほとんど見当たらなかったのである。

『松江市史』は、「本格的な自治体史」の３条件を前提に企画され、松江市史編集委員会で決定された編集方針のもとに、編纂作業が進められてきた。この中で最も困ったのは、全体計画の中で通史編と史料編との出版時期が逆転していたことであった。まず史料編を作成し、それに基づいて通史編を作成するのが理想的な作業スケジュールであるが、今回は「自然環境・原始・古代」が第 1 巻として位置づけられ、平成 26 年度に松江市史通史編の第 1 号として出版することになっていた。一方、史料編は最終年度の平成 31 年度に出版が計画されていたので、これには閉口した。島根県内でフィールド調査を行っている生物関係の専門家は限られており、データの蓄積も十分とはいえず、ごく限られた人しか担当してくれそうな人が見当たらないのが現状であったので、よけいに困った次第である。

また、生物関係は当初 3 人が陸生動物、水生動物、植物をそれぞれ分担して編集作業に当たることにな

っており、通史編はその体制で実施できた。ところが、史料編の段階になると、いろいろな事情もあって、結局筆者１人で３分野すべてを担当せざるを得ない状況となったことも、つらいできごとであった。

通史編で苦労したのは、『松江市史』の編集基本方針と、生物関係の一般的な記載手法との調整であった。具体的に言えば、生物関係の記載は哺乳類・昆虫・植物など分類群ごとに記述するのが一般的であるが、松江市史通史編の編集方針としてはそれが許されず、読み物風に作り上げろとのことであったからである。いろいろ考えた末、「私たちの生活を育む里山」、「水の都松江とそこに見られる生き物たち」、「魅力いっぱいの島根半島と日本海の自然」の３部構成とし、何とか要望に応えることができたのではないかと思っている。

史料編では、通史編とは逆に分類群ごとに生物種リスト作りが必須の作業となり、その作業をそれぞれの専門家に依頼し作業を進めた。また、分類群ごとに総説のページを設け、松江市における概説を記述してもらったので、市民のみなさんにもわかりやすいものができたのではないかと思っている。ただ残念であったのは、高等生物の全分野について記述ができなかったことである。例えば、魚類を除く海産の貝類やサンゴ類、藻類などの海生生物等については、担当していただける専門家が見当たらず、断念せざるを得なかった。今後同様の企画があれば、全分野をカバーしたものを作成してほしいものである。

いろいろ苦労はあったが、生物部門の記載については、この時点における最高のメンバーにお願いをし、これまでに類を見ないような充実した市史が編纂できたのではないかと思っている。ご協力いただいたみなさんに、心より感謝申し上げる次第である。

（松江市文化財保護審議会委員）

佐藤　信
松江市史編集委員、原始古代史部会

松江市史の成果とこれから

『松江市史』の通史編５巻・史料編 11 巻・別編２巻の全 18 巻が、11 か年で刊行の完結を迎えたことは、大変喜ばしいことである。編集委員会の原始・古代史部会の委員として当初からお手伝いした者として、感慨深いものがある。編集委員としては、史料編・通史編の古代と考古資料編の文字資料を担当させていただいた。以前から文化財行政などで島根県･松江市とご縁があったことから､私にとって『松江市史』の編集は､とても嬉しく有難い仕事であった。

『松江市史』は、史料編で史料の調査・収集・編纂を行った上で通史編の歴史叙述につなげるという方針のもとで、本格的な市史として学術的に後世に残る仕事になったと思う。『島根県史』の史料編がないことから、出雲国の意宇郡・島根郡・秋鹿郡を市域とする松江市ではあるが、史料編・通史編とも古代では出雲国全体を扱うこととなった。井上寛司編集委員長からは、古代史料は少なめだろうから石見・隠岐の史料にも目配りするようにと示唆があり、対象を広げて史料収集したが、結局古代史料は膨大となり、出雲国と三郡を中心とした採録になった。また､出雲特有の古代史料である『出雲国風土記』や平安時代末の「出雲国正税返却帳」などの有力史料をどう載せるかも、議論した。古代の国司表や往生伝にみえる出雲など収録しきれなかった史料や叙述は、『松江市歴史叢書』『松江市史研究』『松江市ふるさと文庫』などの媒体で還元することとした。

古代の編集委員には、部会長の元島根県教育委員会の勝部昭さんや島根大学の大日方克己さんといった旧知の方がご一緒で、また執筆委員も島根県古代文化センターの野々村安浩さん・平石充さんほか昔からの友人で、居心地よく協業できた。また編纂事務局の方々には、調査・執筆・編集・校正の全過程において、私たちの要望に応じ我慢強く支援していただき、大変お世話になった。

史料編の調査・収集や通史編の調整・編集の過程

では、松江での調査・会議が度々あり、私には勉強になる得難い経験であった。会議後に、勝部さんに市内の古代遺跡や風土記の故地を案内していただいたことも、収穫であった。腰痛が激しい頃で、同病の勝部さんと温泉をはしごした思い出も、懐かしい。

史料の編集過程では、すべての史料をメンバー全員で読み合わせして、史料の歴史的位置づけと採否を確認しあったことは、良い勉強になった。史料を目で追うだけでなく、どう歴史を物語るのかを確認し音読することは、通史編につながる有益な共同作業であった。また、市民の読みやすさをめざして漢文史料を一語ずつ読下し、ルビを付す作業にも、工夫と苦労があった。これらのことは、今後地方史編纂を行う際の参考となろう。古代史部会で大変だったのは、史料編「古代・中世」と通史編の出版の時間差が、他時代に比べ短かったことである。史料編発刊ののち通史編を分担執筆する際に、意思疎通をはかる十分な余裕がなく、その分校正に時間がかかった。

また、市史の編纂・出版と併行して、市民向けに市史の内容・成果を発信するための市史講座が開かれたのも、有益なことであった。私が講座を担当した時も、多くの市民が市史に対して高いレベルの関心をお持ちである様子がよく伝わり、大変有益な場であった。

『松江市史』のこれからについては、私の持論として、市史は刊行して終わりではなく、市史の増補訂をめざした調査・研究・編纂を継続するとともに、出版した市史を多くの市民に読んでいただき、郷土の歴史を理解したり調べ・学ぶために利用されることをめざすべきだろう。市史で集めた史料を市民や研究者に提供することや、史料を新発見・増補する作業、そして市史にもとづく講座・勉強会などを市民との協業で開くことなどが望まれる。全18巻の膨大な市史を、一冊で平易に語る簡易版の市史も、まとめていただきたい。歴史叢書・歴史史料集・ふるさと文庫などの企画も、さらに続けていただきたい。また、出版部数が限られた市史を、インターネットなどで公開することも、検討をお願いしたい。

こうして、さらに多くの市民・県民・国民・研究者の方々に使い倒していただくように進展することが、完結後の『松江市史』に対する私の期待である。（東京大学名誉教授、島根県特別顧問〔古代歴史文化担当〕）

沢山美果子
近世史部会専門委員

近世松江の女・男・子どもの「いのち」と向き合って
- 市史編纂に関わって学んだこと -

私は、『松江市史』通史編４「近世Ⅱ」の「人々の暮らし」を執筆した。自治体史への執筆は初めての経験である。そのうえ、松江は旅行で訪れたことはあっても、どこまでが松江市域かもわからないという土地勘ゼロからの出発であった。

さらに『松江市史』では、今までとは異なる研究方法をとらねばならなかった。今までは、追究したいテーマがまずあり、そのテーマにそって史料を収集し考察を深めていくことが多かった。しかし『松江市史』の場合は、地域とテーマが先にあり、松江の「人々の暮らし」を、地域の史料のなかで、どのように明らかにできるかを考える必要があった。それは文字通り、手探りの作業であり、近世史部会での検討、史料編纂課の皆さんの献身的な協力がなければ、到底すすめることはできなかった。

史料編纂課が提供してくれた松江市域の文書目録のなかから、「人々の暮らし」に関わりそうな史料を抽出し、史料を読み、松江という地域に即してどんなことが書けそうか、どうしたら、「人々の暮らし」に接近することが出来るか考え、章立てを構成し、それにそって史料を選び、さらに、史料がない部分について、地域の史料を熟知している史料編纂課の方に「こんな史料はないだろうか」と相談する。そのプロセスは試行錯誤の連続であり、様々な模索を重ねることとなった。

『松江市史』の執筆にあたって重視したことは女性の存在を浮かび上がらせることであった。松江市の歴史のなかで不可視の存在であった女性に光を当て、女性の姿が見える市史にしたいというのは、史料編纂課の女性たちの強い要望でもあった。人々が生きる歴史的現場としての近世松江地域に焦点を当て、女・男・子どもの関係性に留意しながら、近世松江地域に生活する人々に固有の暮らしとその歴史

的変化を具体的に明らかにする。そのためには、地域に断片的に残されている史料をどのように重ね合わせ、そして読み解いていく必要があるのか。また、そのことを通して、どのように近世松江に生きた女・男・子どもの「いのち」をめぐる状況を明らかにできるのか。それは、人々の生活世界の体験の歴史的意味を解き明かそうとする試みであった。その意味では、松江市史編纂と関わり執筆する機会を頂けたことは、私にとって得難い機会だったと感謝している。

では、そのために、どのような史料を用いたか。松江市域には、人口に関する史料、日記、生死や出産、結婚、離婚をめぐる史料、民間療法の記録、孝養伝、捨て子記録、もめごとをめぐる記録など、性格の異なる様々な史料が残されていた。しかし、それらは、どれも断片的であった。そのため断片的な史料を重ねあわせつなぎ合わせて読み解くことを意図した。また、人々は、あたりまえの日常については、書き残したりしないため、日々の暮らしの記録は残りにくい。そこで、離婚、再婚、赤子の死亡の記録、処罰事例、男女のもめごとといった非日常的な記録のなかに、人々の暮らしを探るという方法をとった。その結果、どのような「人々の暮らし」を描くことが出来たかは、通史編4「近世Ⅱ」をお読み頂きたい。

執筆にあたっては、今までの研究成果、とくに『続　松江藩の時代』や松江市が積み重ねてきた『松江市ふるさと文庫』から学ぶことが多かった。市民の方が、分厚い『松江市史』を読むのは抵抗があるかもしれないが、『松江市ふるさと文庫』であれば手に取りやすいかもしれない。松江市史編纂の成果を、たとえば『松江市ふるさと文庫』のような、よりかみくだいた形で市民の皆さんに伝えていくことも、これから取り組むべき課題だろう。幸い松江市史編纂に携わった、地域の史料を熟知し執筆できる方たちがいらっしゃる。そして私は、今後も協力を惜しまないつもりでいる。

（岡山大学大学院客員研究員、ノートルダム清心女子大学非常勤講師）

澤田順弘
自然環境部会専門委員

松江市史「自然環境」に携わって

私が『松江市史』と関わりをもったのは通史編1「自然環境・原始・古代」からである。通史編の「自然環境」の第1章「地形・地質」は編集委員の高安克己さんが原案を出して、島根大学の三瓶良和さん、入月俊明さんと私がコメントをつけ、最終案とした。当初、地質の内容は138億年前の宇宙創成から始まる壮大なものであったが、紙数の関係で最終的には半分近くに圧縮され、地史（地質時代の歴史）は、日本列島がまだ、朝鮮（韓）半島の東にくっついていた白亜紀（1億4500万～6600万年前）からはじめることとなった。

2015年3月30日に通史編が刊行され、その後、史料編「自然環境」の編集・執筆の段階で高安さんから私に地質分野の責任者になるように打診された。通史編の中身や、市史の意義を考え、私は引き受け、自然環境部会の専門部会員（専門委員）となった。記録によれば史料編「自然環境」の第1回の編集委員会は2015年5月9日に開催され、それ以降、発刊された2019年春まで、多くの会合がもたれた。会合の後には会食があり（もちろん私費で）、皆でワイワイガヤガヤと語り合ったことが懐かしく思い出される。

史料編「自然環境」は大きく見て、地形・地質、気象、動・植物の3章からなるものである。地形・地質の巻頭カラーページは地形8ページ、地質40ページである。白黒の文書と図表は、地形が19ページ、地質関係が118ページで、次の7節からなっている。地形、明治時代以降の地質研究史、地質（日本列島の最古級の基盤、日本海形成前後とそれ以降の現在に至る地質と地史、化石など）、自然災害、鉱産資源、人と地質との関わり、地形・地質関連の指定文化財。

松江市を含む島根県の地質や鉱産資源については、1985年に島根県によってまとめられた大著『島根県の地質』がある。中国地方の地質に関しては『日

本の地質「中国地方」』（共立出版、1987 年）や『日本地方地質誌「中国地方」』（朝倉書店、2009 年）が、また、松江市周辺の地形・地質・化石・資源など個々のテーマで一般市民向けの本も出版されている。『松江市史』史料編では単に地質や鉱産資源のみではなく、自然災害や考古遺跡と地質、松江城にまつわる地質、土木地質、治水・利水・干拓、指定文化財など、人との関わりも重視し、多くのページをさいている。

地形・地質の執筆には 16 人が参加し、写真提供は 13 人と 12 機関、協力者と機関は 27 名と 22 である。さらに史料編「自然環境」には DVD が付録としてついている。DVD は高安さんが編集したもので、宍道湖・中海の古地理変遷、底質・水質、松江市を含むボーリング資料のほか、気象資料や松江城の石垣の石材など、膨大な資料がまとめられている。

松江市とその周辺の自然環境は島根半島、宍道湖・中海、その南方の丘陵部と変化に富み、特に 1 億年前以降の大きな地質事変を記録した数々の地質遺産もある。松江市とその周辺は、いにしえから出雲国として栄え、神々の地として伝承され、それらにまつわる歴史と自然が織りなす物語が過去から現在へと連綿と続いている。

私は他の行政府の歴史書について詳しくはないが、地質時代、先史時代から書き起こし、現代に至り、自然環境にも多くのページを割いた全 18 巻の歴史書という大著は類を見ないと思う。市史の主眼は人間生活に関わるものではあるが、その基盤となる自然環境は切っても切れないものである。大地、水域、気象、生物などの自然環境の現状を知り、過去から学ぶことによって未来を描くことができる。この市史は貴重な書として、大きな遺産となることは間違いない。

私の専門分野は地質学・火山学・岩石学であるが、市史に携わることによって専門分野と人間社会の接点を少しでも学ぶことができた。かつて“象牙の塔”と言われた大学の研究室も、今は“象牙”も“塔”もなくなり、教員には人々や社会と交わり、貢献することが求められている。地質学は自然災害や治山・治水などに関係した分野であり、人々の生活に深く関わっている。一方、市史「自然環境」には人間生活や社会にとって一見関係がないようなことも触れられている。「“日本海がいつ、どのようにしてできたか”、“デスモスチルスって何？”、そんなことは人々の生活とは関係ない」と思う人がいるかもしれない。しかし、社会貢献とは狭い意味での「実利」のみではなく、基礎的な研究も重要であり、自然や広い意味での地質を知ることは、大げさに言えば人類としての知的財産であると私は思っている。そもそもヒトは自然の一部なのである。私にとって市史に携わったことは貴重な体験であったとともに、他分野との交流も広がり、新たな道へと踏み出す一歩となった。

最後に「自然環境」の刊行にあたって、松江市史料編纂課の皆様、とりわけ稲田信さん、小山祥子さん、内田文恵さんには大変お世話になった。市史史料編「自然環境」が素晴らしいものになったのは執筆に携わった人々、機関のみならず、それを支えた編纂課にあると思っている。

（島根大学名誉教授）

宍道正年
元史料編纂室専門官

『松江市史』のかみくだき - 今後の課題 -

平成20年3月、松江市立法吉小学校長として定年退職。翌4月からは、組織改編の上、新設された松江市教育委員会文化財課史料編纂係の中で、嘱託職員（専門官）として勤めさせていただきました。主な職務内容は、それまでの小学校教職経験を生かした、松江市内小・中学校対象の「ふるさと教育」ないし「郷土史学習」でした。タイトルは「松江市子ども文化財探検隊」。5月17日、母衣小6年生への出前授業「松江の原始・古代」を皮切りに、法吉小6年「法吉町田中谷古墳見学」、佐太小6年、美保関小6年、城北小6年「戦国合戦の松江」、秋鹿小4年、鹿島東小4年、古江小4年、恵曇小4年「清原太兵衛と佐陀川づくり・現地見学」など初年度は21回実施しました。翌年度からは人事異動により、松江市歴史資料館整備室へ移りましたが、ここでも衣替えの形で「松江市子ども歴史教室」として継続しました。新たに「周藤弥兵衛の意宇川川違え」とか「松江城見学」などの内容も加わった上、対象も幼稚園・保育園児から中学生まで拡がりました。3年目となった平成22年度は実施回数が合計25回まで伸びました。翌23年度からは、松江歴史館がオープンした関係で、館内の展示や松江城の見学に重点がおかれましたが、それでも、当初からの内容は消えることなく続きました。回数は年度を追うごとにウナギ昇りとなりました。特に松江城天守が〝国宝〟となって一層拍車がかかりました。嘱託を終了した平成30年度まで、11年間、その傾向は続きました。そして令和元年度からは個人事業主の立場で、年間10回位、相変わらずの内容で続けさせていただいております。

長年の教育現場（小学校26年、幼稚園2年、社会教育3年）から体得させていただいたおかげでしょうか。歴史教室終了後の感想文や手紙を拝見すると、きわだって共通する点があります。以下３つの例で紹介してみます。

（例１）ぼくたちが分かる言葉でおしえてくださったから、説明がすごく分かりやすかったです。ちゃんとみんなのしつもんにも、くわしく答えてくれたので、メモがいっぱい書けました。家で家族に話しておきます。（4年男子）

（例２）日吉の「切通し」や忌部の「城あと」を見学して、松江のことが好きになりました。宍道先生に教えていただく時は、いつもおどろきや発見でいっぱいでした。その場にいるかのような説明とわかりやすい資料でお話を聞いている時は、ものすごく楽しかったです。（6年女子）

（例３）ぼくは、はじめ歴史はあまりきょうみがありませんでした。でも歴史教室をだんだんするうちに、歴史にきょうみがもてました。宍道先生に教えていただいたことをいかして、歴史のことをもっと学びたいと思います。（6年男子）

要するに話し手（講師）が、いかにわかりやすく、興味を引くようにできるか、ということです。そのことによって歴史学習に関心が深まり、郷土愛も高まっていくわけですから。これは子どもたちに限って言えることではありません、大人にもあてはまることです。

筆舌に尽くせぬほどの関係者各位のご努力、ご尽力によって完成したすばらしい『松江市史』。今後はいかにして、一般の方々や子どもたちに生かしていくのか、これが、大きな課題だと思います。正直なところ、歴史愛好者なら、難なく読破できても、それ以外の大人は相当難しいでしょう。ましてや子どもたちには無理です。

ここで、多少の例外や誤解があるかもしれませんが、１つの提案をさせていただきます。実は「わかりやすさ」と言っても小学生、中学生、高校生と発達段階によって異なります。例えば、いくら上手に子ども向けに語ることができる研究者や、中学・高校の先生でも、小学生に対して、わかりやすく教えるのは、至難の技です。やはり「モチはモチ屋」。小学生向けのお話は小学校の先生しかできま

せん。しかし多忙を極める現職の先生方に、『松江市史』の勉強をお願いするのは、現実的ではありません。そこで年金支給となった満65歳以上の元・小学校教師の方々にご登場を願いたいです。

まず、行政側の担当者（研究者）が、あの「市民向け講座」（市立図書館２Ｆにおける）よりも、さらに、かみくだいた形で、元小学校先生方に講義を連続します。（社会科以外の専攻の方が多いが、案外そういう方が強い興味を持たれます。）同様に、元中学、元高校の先生方への講座も開設します。

やがて次の段階は、自分が学校に出向いて小（中・高校生）学校の子どもたちに話してみたい、話すことができそうなテーマに絞って、個人ないしグループレッスン。そして相互授業の試みを実施後、希望校に出かけるのです。訪問先は学校だけではありません。例えば公民館とか「なごやか寄り合い」などの茶話会のような場所へも。交通費程度が支給されるとベターです。

（元松江歴史館専門官）

高橋　真千子
史料編纂課専門調査員

編纂事業の記憶と今後について

高校生の頃、時折訪れた島根県立図書館郷土資料室で、県内の市町村史をぱらぱらとめくりながら「将来は、この編集者欄の片隅に名前が載ったらいいな」と、ぼんやりと考えていた。

そのことを思い出したのは2017年（平成29）春、3月に出版された『松江市史』史料編9「近現代Ⅰ」（以下「近現代Ⅰ」）を、史料編纂課で受け取った帰りのことだった。忘れていた夢がいつの間にか叶っていたことになるのだが、残念ながら前年8月末に1年8ヶ月勤めた編纂課を辞職していた。誰にも言わなかったのだが、両腕が限界だった。原本通りに翻刻してある「近現代Ⅰ」のワードデータ、約850ページ分を、原本校正をしながら入稿原稿に直すという作業をほぼ一人でしたため、原稿が完成した2016年（平成28）3月末には、両腕が熱を帯び、薬指と小指の感覚がなくなっていた。夕方には何をしなくても両腕がぶるぶると震えるほどだった。忘れていたとはいえ、かつての夢は手の中にあった。それまでの私は、夢に真摯に向き合ってきたとはとても言えず、理由をつけて逃げていたことを反省した。

夢を自ら途絶えさせてしまったことに気づいたが、チャンスは再びやってきた。2016年（平成28）4月から近現代担当となっていた和田美幸さんから、自分が辞職するので後任をお願いしたいと打診があったのだ。2017年10月のことだった。両腕には不安があったものの、「今度こそ」とありがたくお引き受けし、今に至る。

担当中、たくさんの方に助けていただいた。稲田信次長、小山祥子さんには当初より作業の相談に乗っていただき、働きやすいようにいろいろと取り計らっていただいた。石塚晶子さん、小田恵さん、佐藤綾子さん、アルバイトの学生さんと翻刻者の方々には、データ作成・写真撮影・簿冊全翻刻・原本校正など、無理をお願いした。和田美幸さんは近世担

当だったが、「今の作業が終わったら手伝うよ」と何度も声をかけていただき、近現代の担当にもなっていただいた。そのことで編纂課内の方々にもご負担をおかけしたが、皆さん快く承諾してくださった。そして、同じ近現代担当の村角紀子さんには、「近現代Ⅱ」出版作業途中に私が産育休に入ったことで、一番ご迷惑をおかけした。

前担当の沼本龍さんのことも忘れてはいけない。彼が詳細な調査記録を残し、目録をとり、丁寧に写真を撮っていたから助かった事がたくさんあった。彼が残したものから、後に誰が担当となっても「分かるように残す」ことの大切さを学ばせていただいた。他にもお名前が書き切れないくらい多くの方に関わっていただいたからこそ、無事に出版できたのだと思っている。

さて、今後への期待として、編纂事業中に収集した膨大な史料の保存と活用を挙げる。今回収集した史料の中には、市史には活用できなかったが、松江市の歩みを知る上で重要なものも多い。また、松江市役所・各支所、公民館にも、古くは江戸期からの文書・旧町村文書が残されていることが分かった。まだ市民の皆様のお手元に眠っている史料もあるだろう。それらの貴重な史料は、松江市が設置する文書館に収められる予定ではあるが、適切に保存し、活用できるように整理・公開していかなければならない。一年ごとに任期が更新される立場としてははっきりと言いにくいのだが、これらの作業にできるだけ長く関わり、尽力していきたい。

2045年には戦後100年を迎える。『松江市史』編纂途中の2019年（平成31）に生まれた我が子は、26歳になっている。私が子どもの頃、たった数十年前の出来事だった戦争は、彼らにとっては昔話となるのだろう。戦後75年が経ち、戦争を体験した世代が減少していく今日、次の世代にいかに伝えるかということが課題になっている。編纂事業中に収集した史料の中には、戦時中のものも多い。直接の戦争被害が少ない松江市ではあるが、今後、改めてそれらの史料を調査し、伝えていくことが大切になる。と、またぼんやりと夢を見ている。

（史料調査課歴史史料専門調査員）

髙安克巳
松江市史編集委員、自然環境部会

松江市史の完結にあたって
- 市史での経験を未来へ -

10年あまりにわたってお手伝いをさせて頂いた『松江市史』がようやく完結しました。全体の編集を推進・統括された井上寛司編集長ならびに稲田信史料編纂課長に敬意を表するとともに、史資料の整理や、筆の遅い執筆者を励まし、様々な企画を通して市民のための市史編纂事業とすべく連日努力されてきたスタッフの皆さまに深く感謝いたします。

私は編集委員および自然環境部会の一員として、通史編の「自然環境・原始・古代」と史料編の「自然環境」に関わらせてもらいました。また、史料編の「絵図・地図」のお手伝いもさせて頂きました。本市史の刊行が企画された当初、この長丁場を最後までやりきれるのだろうか、と一抹の不安を抱いたのは私だけではなかったと思います。実際、関係した部会でも途中で何人か体を壊したり、刊行を見ずにお亡くなりになった方もおりました。私は編集作業の初期の頃に松江から離れ、遠方に転居してしまいましたが、年に数回編集会議などで松江に集まり、会議の後にスタッフの方々も交えて一献傾けるのが何よりの楽しみでした。

さて、市史刊行後にこの成果をどのように市民に普及・活用していくか、ということが話題になっています。その一つに「松江市文書館」の構想があります。市史編纂を通じて収集した文書類の保管庫として是非とも必要な施設ですが、同時に、史資料収集のノウハウを習熟されたスタッフの方々が引き続き活動していただく場としても必要と思っています。その際、史資料の電子化も是非進めて頂き、市民の方々がいつでもどこでもアクセスできるようにし、それをもとに過去の歴史だけでなく未来の松江についても広く語り合える場にすることができたら理想的です。史資料の電子化は「文書館」の収蔵史料だけでなく旧家の蔵にまだ眠っている文書類も含めて、悉皆的に電子化していくことが重要で、そうするこ

とによって史資料の散逸・消失を回避することができます。

松江市は本邦最高レベルの膨大な『市史』の刊行に成功しました。この経験をしっかり引き継ぎ、市民が自信を持ってこの街の歴史を語ることができる社会をつくってください。過去を知り、互いに議論し、理解を深めることは、健全で豊かな街の未来を保障することにつながります。

（島根大学名誉教授）

多久田友秀
近世史部会専門委員

松江市史編纂事業に参加して

この度、松江市史編纂事業が完結しました。私は、近世史部会に部会員の一人として参加させていただきましたが、同部会は松江市史の各時代分野の中で、最多の人数で構成される部会でした。全国の大学・専門機関に在籍され、学会の第一線で活躍されている先生方に加えて、私のような在野で無関係な仕事をしながら地元の歴史を調べている者までいるという、類例のない多様な顔触れでした。

このメンバーに加えていただいたことで、本当に得難い経験をさせていただきました。部会では近世巻の編集方針を決めることに加えて、それぞれが執筆した内容についての検討も行いました。私の執筆原稿に対しても、各先生方から深い学識に基づく的確なご助言をいただきました。どなたも気さくな方々で、自由な雰囲気の中で仕事をさせていただき、楽しい時間を過ごすことが出来ました。

私は、地元からの参加であり、通史編４「近世Ⅱ」の第５章第２節では、松江市域で実施された新田開発と河川普請の歴史を担当しました。地元でこれまで語られてきた、松江城下周辺の新田開発のほか日吉の切通しや佐陀川の開削等についても、史料を再検討して執筆しました。従来の通説の検証から始め、史料から導き出された結論は、私自身が当初は想定しなかった、これまでとは異なる歴史記述になっています。

今回の執筆を通して認識したことは、少なからず地元の歴史に関する記述において、過去に刊行された著述の内容がそのまま（場合によっては100年以上の間）、繰り返し利用されてきたということです。もちろん、これらは当時の歴史研究者の方々（私たちにとっての大先輩と言えるでしょう）がなされた研究の成果によるものであり、この度の松江市史の執筆においても多くの恩恵を蒙っています。しかし、そこにはどうしても書かれた時点での制約と限界があり、それ以降に見つかった新たな史料や研究の成

果を取り入れれば、自ずと変更されるべき内容があるものです。

また、執筆をするために不可欠な古文書などの史料は、今日、所在が不明になっているものが多くあり、今後も将来にわたってその継承が危機的な状況にあるといえます。失われつつある歴史史料を地域の共通財産として保全し、活用していくことが強く望まれます。まだまだ知られざる松江の歴史が、史料とともに眠っているはずです。引き続き、市民の皆さまにはご存知の情報をお寄せいただきますようお願いいたします。

この松江市史編纂事業の成果は、本の刊行に尽きるものではなく、執筆者の想定を超えた活用方法や新たな発見があるものと思います。市史の刊行が街づくりの一助となり、さらに記述内容が磨き上げられて、この地域の歴史研究が進展することを願っております。最後に、執筆にあたって、終始お世話になりました編纂課事務局および関係者の皆さま、そして長くご支援いただいた市民の皆さまにお礼申し上げます。

≪追記≫通史編４「近世Ⅱ」につき、次の点を修正させていただきます。第６章第３節「水上交通と舟運」がすべて私の執筆分担になっていますが、「三　半島浦の廻船稼ぎと海上交通」は中安恵一氏の執筆によるものです。また、第５章第２節 65 ～ 66 頁「松江城下と天神川の整備」の内容は、西島太郎氏（「城下町松江研究の現状と課題」『松江藩の基礎的研究』岩田書院・2015）の研究成果によるものです（出典表記について通巻で統一する際に欠落しておりました）。両先生には申し訳なく存じますとともに、読者の皆さまにはご承知おき下さいますようお願いいたします。

（出雲市文化財保護審議会委員）

竹永三男
松江市史編纂委員、編集委員、近現代史部会長

近現代編３冊の編集・執筆を担当して

（１）近現代編３冊の特徴

『松江市史』近現代編は、島根県内の自治体史の近現代編としては初めて、史料集をもつものとして編集･刊行された。その特徴は､2020 年３月 21 日（土）の市史講座完結シンポジウムで報告したとおり、①これまでの島根県内の自治体史では見られない規模の史料調査に基づいて編纂したこと、②２冊の「史料編」に「皇国地誌」「島根県歴史」、市町村合併関係文書、松江市域の人口と松江市財政の正確な統計など、市域の歴史の骨格を明らかにする基本史料を一括掲載したこと、③「通史編」は、市域の自然環境・地域区分に即した総合的叙述と特定問題に関する分析的叙述を組み合わせた構成とし、戦前松江市の地域政治構造、県都･軍都という都市の性格、「模範村」の集中という八束郡町村の特徴、社会･文化･暮らしに見られる人々の多様・多彩な活動を明らかにしたことなどなどである。

松江市域・島根県の近現代史研究としては、何と言っても内藤正中氏の業績が大きい位置を占めていた。『新修島根県史』、『島根県の百年』（山川出版社、1982 年）はその代表的なものだが、後者で島根県の「近代の横顔」を「後進性への挑戦」と特徴づけたことは､近現代日本における「地域格差」の形成･拡大の中での地域の自律的営み（「経済的成長」一辺倒でない）の端的な表現＝分析視角としても重要な提起であった。今回の市史編纂でも、松江市域の近現代史の特徴の一つを「地域格差の重層的構造」としたが、それに止まらず、地域に生きる人々の自律的で豊かな活動を発掘し、跡づけることに努めた。

また、編纂にあたっては、内藤氏の外、近現代史の先行研究、松江市・八束郡各町村の既刊の自治体史、公民館・旧村単位の「郷土誌」を参考としたが、それに加えて、地域における歴史編纂の営みとその成果を史料として利用することもできた。その代表的なものが、「地域社会のデモクラシーと平等」（第

2章第3節3）で紹介した『川津村青年団沿革史』（奥村久雄氏提供）である。同書は、川津村の農家の青年が、農作業の合間に自らの手で編纂したもので、綿密な史料調査に基づく実証的な記述は迫力もあり、史料的意義も高い。こうした松江市域の人々の地域の歴史に対する誠実な向き合い方を確認することができたことも市史編纂の大きな成果であった。

（２）近現代専門部会の構成と執筆体制

「松江市史編纂基本計画」（2008年10月）の策定後、最初に編集委員の選任に着手した。そして、産業・経済担当編集委員として伊藤康宏さん（島根大学）、自治制度史・市町村合併担当に居石正和さん（同、2019年から広島修道大学）、市政史・都市基盤分析担当に能川泰治さん（金沢大学）、民衆生活・地域保健福祉問題担当に鬼嶋淳さん（佐賀大学）をそれぞれ委嘱し、部会長を務めた竹永とともに近現代専門部会を構成した。県外のお二人の中、能川泰治さんは同じ日本海側の城下町都市金沢市にお住まいで、近現代の都市史研究を専門にしておられ、『金沢市史』の編纂にも参加されていたことから、また、鬼嶋淳さんは戦前・戦後の地域医療・保健問題の研究を進めておられ、松江市域の当該問題を市史の中で重点的に取り上げていただくことを期待したことから、それぞれ委嘱したものであった。

発足した近現代専門部会では、「編纂基本計画」に基づいて「通史編」「史料編」の構成を協議し、「通史編」については、編集委員の守備範囲を超える項目については、それぞれの専門研究者に執筆を委嘱することとした。その結果、「通史編」は本文の76項目を、編集委員5人、項目執筆者20人で担当して執筆した。また、執筆者が多数になったことからも、本文の叙述では関連する項目に参照指示を詳細に付し、全体の統一を図ることに努めた。

（３）史料編纂課と担当事務局の貢献

近現代の3冊が期限内に刊行できたのは、項目執筆の依頼に応えて原稿を寄せていただいた項目執筆者の方々とともに、前半期に史料調査を進めていただいた沼本龍さん、高橋真千子さん、和田美幸さんら、後半に掲載史料と提出原稿の校閲・校正を担当していただいた村角紀子さん・高橋真千子さんはじめ、他の巻に係る作業の傍ら、附録資料の編集等を進めていただいた史料編纂課の皆さんのご尽力の賜である。特に、村角さん・高橋さんには、編集委員の原稿提出を文字通り叱咤・鞭撻していただいた。そして、提出された原稿を繰り返し読み込み、原史料や「史料編」に基づく校正を行うとともに、「第一読者」として、説明不足の箇所や難解な表現、記述の精粗や文章表現の不統一を率直に指摘し、前後の関連づけを的確に求めるなど、編集者はかくあるべきと思うような役割を果たしていただいた。

以上の経過で刊行された近現代編3冊を見ると、近代初頭の松江市域の歴史・地誌の全容を確認できる「島根県歴史」「皇国地誌」（CD-ROMとも）と人口・財政の正確な統計を一括掲載できたこと、25人もの専門研究者の参加を得て「通史編」を編集・刊行できたことで、松江市域の近現代史研究の成果を包括的に提示できたことの意義は大きいと改めて感じる。占領統治の松江市域における展開の具体的分析を欠くこと、戦後の市政史を政治史として叙述できなかったことなど残した課題も多いが、それらを含めて、近現代編３冊の刊行によって、松江市域の近現代史研究の成果と課題を正確に確認できるようになったと言えよう。

（４）今後の期待

近現代編の編纂に際しては、史料編纂課によって市域全体を対象とした史料調査が行われたが、その中で特筆されるのは、戦後の市町村合併で成立した松江市と八束郡各町村の役場文書（多くは公民館に保管されている）の悉皆調査を実施し、目録を作成するとともに、保全措置を講じたことである。この作業によって、松江市域の近代公文書の全容が把握されたが、その成果は、現在設立準備が進められている「松江市文書館（仮称）」の基盤となるものであった。史料編纂課は史料調査課と改称して、市史

編纂事業を継承するとともに文書館設立準備を担当しているが、その速やかな成就を期待している。

刊行された市史については、編纂委員会・編集委員会でもその有効活用と市民への普及のための課題が議論され、具体案も提示されているが、私自身は、今後一定期間を経た後で全18巻をデジタル化し、これを松江市のウェブサイトで公開していただきたいと希望している。この点で、先に完結した『青森県史』では、「青森県史デジタルアーカイブス」を設置して、収集文書や「資料編」のデジタルデータを順次公開しており、尼崎市立地域研究史料館でも『尼崎地域史事典』『図説尼崎の歴史』などのウェブ版を公開している。『松江市史』についても、「史料編」「通史編」「別編」の全てがデジタルデータで公開され、全巻通した検索・閲覧が出来るようになることを期待している。

それに加えて、近現代編が課題として残した主題が卒業論文等で取りあげられ、研究が進むことを待望している。

（島根大学名誉教授）

田坂郁夫
松江市史編纂委員、編集委員、自然環境部会長

松江市史自然環境編の意図と意義

はじめに、松江開府400年祭記念事業の一つとして進められてきた『松江市史』全18巻が2020年3月に完了したことにお祝い申し上げます。2008年に松江市史編纂検討委員会が立ち上げられて以降、藤岡先生をはじめとする編纂委員会の皆さん、井上先生をはじめとする編集委員会の皆さん、また、多くの専門委員・執筆者の皆さん、そして何より、10年以上の長きにわたり市史出版事業を支えてこられた松江市史料編纂課の皆さんに敬意を表するとともに、はからずも私もその一員として参加できたことに感謝したいと思います。

私が自然環境部会の一員として松江市史編纂事業に加えていただいたのは、事業がスタートして数年後の2011年(平成23)年のことであった。2007(平成19)年に松江市史編纂事業実施に向けての準備が始められ、島根大学法文学部の歴史学分野の先生方から編纂委員会、編集委員会のメンバーとしての兼業申請書が提出された時には、学部長としてその書類を拝見し、「長期間のお仕事ご苦労様」と思いながら、承認の決済を行っていた。歴史学とは無縁の私が事業に関わることがあるとは思いもせずに。

その少し後、学部のメールボックス(郵便物受け取り室)で、近世担当の小林先生が送られてきた史料編原稿をチェックしているところに偶然出くわし、その分厚さに、「大変ですね」と声をかけたことを覚えている。そんな第三者・門外漢の私に、自然環境部会長をしておられた高安先生から、気候学分野の専門委員として部会参加の依頼があった。気候学の専門家が島根大学をはじめ県内にいないことは承知していたので、少し逡巡しながらもお引き受けした。

今回の『松江市史』では、自然環境を除く分野はいずれも、史料編が先に刊行され、その資料を基に通史編として新たな歴史が語られるという形式をとっている。しかし、自然環境だけは通史編・史料編

の順番で出版されることになり、私が部会に参加したのは、ちょうど通史編の骨組みを検討しているときだった。地形・地質、気象と気候、生物という三本柱は既に決まっていたが、記述の基本姿勢、基本コンセプトが議論されていた。部会では市誌的な立場から、松江の自然環境の特色そのものを前面に打ち出すという意見もあったが、井上委員長との話し合いなどを経て、“歴史の舞台背景、基盤として自然環境”を記述することになった。

気象と気候に関しては、私が松江の気候特性や四季の変化についてまとめ、浜田周作先生が歴史的に重要な気象トピックスについて専門的な分析を加えたものを歴史、災害という観点でまとめていった。

2015（平成27）年に通史編1「自然環境･原始･古代」が出版され、引き続いて史料編の編集に取りかかった。これを機会に、部会長の高安先生が千葉県に居を移されていたこともあり、私がその職を受け継ぐことになった。通史編の編集や原稿執筆の際の高安先生の部会運営を見ていて、私には荷が重いと思ったが、委員の先生方のご協力もあり、なんとかその任を務めることができた。

松江市では1941(昭和16)年の『松江市誌』をはじめ何回か市史・市誌が編纂されている。しかし、それらの何れにおいても自然環境に割り当てられた頁数は極めて少なく、掲載されている資料・写真も乏しいものであった。これに対し、今回の史料編はA4判600頁で、カラー口絵も180頁という計画であった。この貴重な紙面をどのようなコンセプトでまとめていくか。部会では何回も議論を重ねたが、結果として“現在(2010年代後半)の松江の自然環境を後世に伝える一冊にする”ことになった。

現在最も懸念されている環境問題である地球温暖化がこのまま進んでいくと、今世紀末には松江の気候環境も大きく変化すると予想されている。これに伴い、生息する動植物の種類にも著しい変化がみられるであろう。そのような時代の人々に、変化する前の環境資料として使ってもらえる資料集を目指して、現在生息する動植物写真をできうる限り掲載するとともに、近年収集された地形・地質資料、歴史史料収集のなかで新たに発見された気象災害などの資料を掲載した。さらに、紙面に載せきれないものの貴重である史資料については、付属のDVDにデジタルデータとして掲載していった。

このような経緯で刊行された自然環境通史編・史料編の2巻は、松江市における壮大な自然環境の過去から現代への変遷と今の姿をとりまとめたものであり、『松江市史』を語るうえで基礎となるものであり、後世の評価にも堪えるものとなっていると信じている。

（放送大学島根学習センター所長、島根大学名誉教授）

友森　勉
元松江市教育委員会理事

松江市史編纂事業立ち上げのころ

松浦市長が歴史館建設の意思を固められた。まず下地作りからということで市立図書館における後の市史講座につながる松江藩講座を一新することにした。松江藩の藩政改革、産業振興、文化振興をわかりやすく市民の皆さんに知っていただく一助とし、歴史館建設の機運を盛り上げるためだった。唯物史観にとらわれることなく、明るく楽しく未来志向の事業展開とするため乾隆明さんに主宰となっていただいた。

平成15年の環日本海国際交流会議に北朝鮮の歴史学者の李定男先生を招聘するため、島根大学名誉教授の内藤正中先生、山陰放送の荒川和也部長と北朝鮮の平壌へ行くことになった。途中、瀋陽から平壌までの間、高麗航空機の中で内藤先生に松江藩講座を刷新することを恐る恐る話したところ予想に反して「そうかね、若い人たちの思う通りにしなさい。がんばってください」とおっしゃった。平壌では楽浪郡の遺跡発掘に立ち会ったり、社会科学院では田和山遺跡で出土した硯や鹿島沖で見つかった海上がりの壺と同じものや馬車の部品、銅鐸、銅剣など様々な素晴らしい遺物を沢山見せてもらうことができた。

歴史館といえば、下層、中層、上層とそれぞれの時代の家老屋敷の遺構や遺物、水害の経過など興味深い発掘調査となった。歴史学会からは遺構として残すべきと強く主張され、島根県庁も大きく歴史学会の主張に傾きかけた。当時の藤原義光教育長、卜部吉博文化財課長の発案で最下層の遺構を残し、その上に22センチの砂を盛り未来に向けて遺構を保存して歴史館を建設することで決着した。この時の縁で卜部氏は退職後松江城国宝化のため松江市職員となっていただいた。この際に他の道を希望されていた卜部氏の肩をひと押ししてくださったのは藤原教育長である。

さて、藤岡大拙先生、井上寛司先生の陣頭指揮のもと市史編纂事業が始まった。市史が対象とする主たる範囲は松江藩領の区域とすること、資料としてのレベルは平成元年の市制100周年事業で発刊した『松江市誌』とは異なり『松江市史』へ格上げすること、すなわち「国内外の大学や研究機関の研究資料として十分に耐えうるものとし、かつ、一般の市民にもわかりやすいものとすること」であった。この目標に私たち職員は大いに燃えた。

吉岡弘行文化財課長、稲田信課長補佐が各分野のスタッフ、専門家が足りないと言うので人材確保が急務となった。まず、古文書が読めて理解できる専門家を探すことになった。この時は島根県知事部局の三宅克正政策局長にお世話になった。島根、松江の古文書に関して中央の学者の皆さんから信頼の厚い内田文恵さんを県職員の身分のまま松江市へ派遣していただけることとなった。月々の給与は松江市負担で、退職時の退職金は島根県負担でという破格の措置であった。内田さんは退職後も松江市で勤務していただくこととなった。宍道正年先生は行政の型にはめられることを嫌われ松江市の職員になることをためらっておられた。ある日のこと京店界隈で偶然お会いしたときに食事にお誘いした。話が進みお酒が進むと、ついに市史編纂に携わっていただけるとのご返事がいただけた。

全国の研究者の招致には、藤岡先生、井上先生の構想の下に年代ごと、分野ごとに大学や研究機関の皆さんを編集委員として次々に委嘱された。

市史発刊の部数や発行年次計画を立てることとなった。課題として挙がった大きなものが印刷発行である。市史のような資料の編集には印刷発行する会社に時代考証をはじめ歴史、文化、産業、宗教などに詳しい学芸員が一定数いるかあるいは大学等と提携していてその能力があり社内校正ができる会社でなければ不可能とのことだった。松江市内の主だった有力印刷会社の皆さんに状況を伺った。この手のものを得意としておられる谷口印刷の現会長である谷口社長に伺ったところ、本格的な市史はやはり専門の職員がいないので県内の印刷会社では受注は困

難と思われるとのことであった。私が、可能であるなら中央の大手と地元の数社でジョイントベンチャーを組むというのはどうですかと尋ねると、それはいいですねとのことであった。印刷業界の皆さんには真摯に対応していただき誠にありがたかった。しかし、一方で是非にも地元の特定の会社に受注させたい勢力が現れ、市内部を混乱に陥れた。このような話はつきものといえばそれまでのことであるが市史編纂にかかわるすべての者が困惑し大いに迷惑を被った。このため印刷発行計画立案は半年以上遅れ、その間、事務局は空疎で無駄な時間を費やしてしまった。この間も編纂委員の皆さんの研究は着々と進展していた。この騒動により結果として地元の今井印刷株式会社が受注されたのは勿怪の幸いであった。

時々、市立図書館の市史講座を拝聴する。そのたびに開府400年事業の中で綺羅星のように輝いている事業は市史編纂事業だと思う。そして平成17年の市町村合併をしてよかったことの一つに宍道町職員であった稲田信現歴史まちづくり部次長という人材を得たことがある。宍道町での木幡家の研究、宍道町史の編纂など豊富な経験を持つ稲田氏がいたから藤岡先生、井上先生とつながり、全国の研究者の皆さんとつながることができたと思う。よい人脈、よい人の和の力は偉大なものがある。直接的、間接的に一体どれだけの人たちが市史編纂にかかわってくださったのだろうか。その中の一員でいられたことはとても嬉しいことで神仏がいらっしゃれば感謝に堪えないところである。

市史編纂事業によって蓄えられた力で今後も文化財行政、市史編纂事業がますます深化拡充し、もってその成果があらゆる分野のまちづくりに松江市政に反映されること並びに松江市史が100年も200年も後の世にも広く資料として活用されることを願っています。

（美保関公民館館長）

永井　猛
民俗部会専門委員

民俗芸能を執筆して

（佐陀神能の「八乙女」と三番叟の復活）

民俗芸能は刻々と変化する。『松江市史』別編２「民俗」（平成27年）の佐陀神能の項目では「八乙女」を写真入りで紹介することが出来たが、実は平成24年に復活されたばかりであった。逆に、刊行後の平成28年に復活された「式三番」の三番叟については、執筆時に途絶えていたため、「最近の佐陀神能では三番叟は登場しない」（561頁）と書かざるをえなかった。盆踊りの場合も、前に見た時は歌い手の方が櫓の上で歌っておられたのに、次の時は録音テープが流されていたりする。

民俗芸能の記述は調査した時点での記録であって、次の年にはどう変化しているか分からない。変化するからこそ、記録が必要だともいえる。

（松江城下で盆踊り）

盆踊りを調査していて、松江城下では盆踊りはなかったと言われ続けた。松江城築城の時に人柱にされた踊り好きの娘のたたりで、踊ると城が揺れ、そのために松江城下では盆踊りは禁止されたというのである。ただ、『松江八百八町 町内物語 白潟の巻』（昭和30年）に「江戸時代には風俗を乱すとあって取り締まりが行われたこともあったが、それでも社寺の境内やあちこちの広場で老若男女が踊り明かした」と書いてあり、それを裏付ける記録がないものか調べた。『松江市史』別編２「民俗」執筆中には見つからなかったが、刊行後、松江の豪商・滝川家の分家で和多見町の新屋に仕える太助の日記（信楽寺蔵「大保恵日記」等）にあるのではという島大の小林准士先生のアドバイスを受け、史料編纂室の内田文恵さんのご協力を得て調べたところ、盆踊りの記事があったのである。

嘉永５年（1852）の盆の７月15日に新屋の前で夜明けまで踊りがあった。翌年も若者たちが夜中踊ったとある。ただ、踊りは御法度なので、忍び忍びに踊ったという。嘉永７年は閏年で７月が２回あり、

例年にない盛り上りをみせた。7月16日には「踊り大流行」として灘町で500人が踊ったとある。翌月の閏7月には14日から17日まで「前代未聞の大さわぎ、老若無差別」の盛況を見せている。江戸時代の終わり頃だが、確かに松江城下でも盆踊りはあったのである。おそらく、度重なる踊り禁止の命令をかいくぐって、たくましく踊り続けられていたのであろう。

このことは、山陰中央新報（平成28年3月8日）、松江市史講座94講「松江の芸能―神楽と盆踊り―」（平成28年3月12日）で紹介することができ、よかったと思っている。

（宍道に息づく松江城下の踊り）

『松江八百八町 町内物語 末次の巻』（昭和31年）に「松江も盆踊りといえば百姓町」で、踊りは狭い町筋の両側にずらりと並んだ「縄手踊り」と称するものだったと書かれている。百姓町での踊りは廃れているが、宍道町の「町部盆踊り」には「縄手踊り」が踊り継がれている。

宍道町の八雲本陣前の通りにそって細長い輪になって踊られる。「縄手踊り」のほかに「こだいじ踊り」も踊られるが、この踊りも松江城下で踊られていたものである。つまり、松江城下の盆踊りの姿が宍道には息づいているのである。宍道の盆踊りには太鼓がない。松江城下でも忍び忍び踊られていたから太鼓はなかったはずである。文献資料から浮かび上がる松江城下の盆踊りの姿を宍道の盆踊りに見つけた時には、静かな興奮を味わった。

（米子工業高等専門学校名誉教授）

中井　均
松江城部会専門委員

松江市史編纂と山城調査

『松江市史』で別編「松江城」が編纂されることとなり、その専門部会員として編纂事業に参加させていただくこととなった。部会では新幹線で岡山に行き、そこから特急やくもで松江に向かうことが数年続いた。特に午前からの委員会や調査で前泊となると、大学の講義を終え、最終のやくもに乗り、0:12に松江駅に着いたことも思い出深い。

さて、私の担当は松江築城に伴う慶長期の堀尾氏による本・支城体制である。そこで松江城だけではなく、支城の調査をおこなうこととなった。その最初の調査が2011年3月に山根正明先生のご案内で訪れた三刀屋城跡である。矢穴技法によって割られた石垣石材や、天守台の存在は慶長期の城郭の特徴をみごとに示しており、松江城の支城としてふさわしい構造であった。この日は好天に恵まれたのであるが、その年の12月に訪れた赤穴瀬戸山城跡では、夜に広島駅をバスで発ったものの、赤名峠を越えて出雲に入ると雪が降っており、翌日の調査は雪中行軍となった。これを教訓に翌年の調査は5月に三沢城跡を訪れたが雨であった。

一連の調査で忘れられないのが2014年に訪れた亀嵩城跡である。12月も半ばを過ぎると奥出雲では雪の可能性があるので、調査は12月上旬に実施することとした。2014年12月3日、亀嵩を目指したのであるが、現地に着くとすでに雪が降っていた。山城の縄張り調査では夏のブッシュと冬の積雪による遺構の埋没は調査にならない。しかし、亀嵩城跡を目の前に、理屈ではわかっていたのであるが、やはり引き返すことなどできない。私の記憶では、私と西尾克己先生、稲田信室長、福井将介室員、そして地元教育委員会の方、計5人でアタックを開始した。山に分け入るとすぐに道がなくなり、積雪の斜面地を滑りながら登って、尾根に取り付き、尾根伝いに黙々と山頂を目指したのである。

標高624mの山頂へは1時間くらいかかっただろ

うか。山頂の積雪はひざまであり、吹雪いて目の前も見えない。思った通り雪の日は調査どころではなかった。しかし、せっかく苦労して登った城跡である。雪をかき分け、何とか図面を作成することができた。全身ずぶ濡れで、足元もトレッキングシューズに雪が入って濡れてしまい凍傷になりかねない状態で、下山したのは日没寸前であった。宿に着き、お風呂に浸かってようやく生き返った思い出がある。市史編纂室の皆様にはお付き合いいただき大変なご迷惑をおかけしてしまった。この場を借りて改めてお詫びを申し上げる次第である。

若いころから数えきれないほど山城に登ってきた。そのなかには滑落や道に迷ったり、灌木に転倒したり、体中に荊が刺さるなど様々な体験をしてきたが、この亀嵩城跡踏査ほど過酷な踏査はなかった。

しかし、こうした過酷な調査によって堀尾氏時代の出雲の本・支城体制を明らかにすることができ、その成果を別編「松江城」にまとめることができた。改めて松江城編に掲載した三刀屋城跡、赤穴瀬戸山城跡、三沢城跡、亀嵩城跡の概要図を見ると、それぞれの踏査の思い出がよみがえってくる。私にとって『松江市史』は改めて現地踏査の楽しさと辛さを教えてくれた仕事となった。

（滋賀県立大学人間文化学部教授）

雪の亀嵩城跡遠景

西尾克己
松江市史編纂委員、編集委員、松江城部会長、原始古代史部会

『松江市史』編纂との10年

『松江市史』との関わりは10年以上となり、前半が原始・古代部会の史料編２「考古資料」と通史編１「自然環境・原始・古代」で、後半が松江城部会の別編「松江城」であった。長期間に及ぶ事業で、その間、いろいろな事があり、その様子を少し記録しておきたいと思う。

【原始・古代部会（考古部会）】

考古部会の会合は夕方から開かれることが多く、仕事が終わった後、殿町の古代文化センターから学園南にある松江市史編纂室まで通い、２時間程、編集会議（読み合わせ、意見交換など）を行った。出版計画では、「考古資料」は早い刊行(2012年３月刊)となっており、計画段階から調査のための時間がなく、事業が始まると直ぐに執筆するというハードなスケジュールで、誰もが刊行が間に合うか大変心配していた。

また、市史は島根大学考古学研究室の方々と元教官の皆さんが中心になられると思っていたが、編纂が始まる直前に松江歴史館敷地内（松江藩家老屋敷跡）の発掘調査とその保存問題で、松江市と意見の相違が生じ、編纂事業には残念ながら参加されなかった。

2009年以降、勝部昭部会長を中心として、「考古資料」の編集がスタートし、掲載する市内遺跡を選び出す作業から始まった。基本的には以前に携わった『宍道町史』の例に倣って、発掘調査に関わった担当者に執筆してもらうことにした。よって、執筆者の数は増え、事務局には本人、所属機関等への執筆依頼から内容説明等、いろいろと苦慮されたと思う。分量は遺跡の重要性や遺構・遺物の記述内容から、１～３頁にランク分けを行い、執筆していただいた。

事務局に石井悠氏が加わっていただいたので、原稿が集まった後の読み合わせ会や、編集時には遺跡の写真の選定や図版の作成などを手際良く対応して

もらった。「考古資料」はA4版で、840頁にも及び、完売できるか心配をしていたものの、数年を経て在庫がなくなったと聞き、関係者は一安心したものであった。

史料編「考古資料」、通史編「自然環境・原始・古代」刊行後の副産物もあった。『出雲考古学のあゆみ』（2018年出版）である。編集の中で、「自分たちが記憶を失わないうちに・・・・記録として纏めよう」と話がもちあがり、調査報告書には書けなかったこと、保存運動の体験話、先輩らとの厳しい調査の思い出など、みんなが元気な今のうちに書き残そうと、「出雲考古学の思い出を語る会」として作業に入った。足掛け3年をかけて、30名ほどに執筆を頂いた。その多くは60才を過ぎ、一線を退いた方々である。この記録集が、将来の『松江市史』の資料の一部として使用されるのかもしれない。

【松江城部会】

史料編「考古資料」、通史編「自然環境・原始・古代」に目途がつくと、ちょうど松江城部会が忙しくなってきた。別編「松江城」は、出版スケジュールの関係で刊行年は事業後半の2017年度末である。調査のための時間的余裕があり、調査は少しずつ進んでいた。私は、城郭史グループの一員として、城下町遺跡の発掘調査や出土品の検討会等に参加していたものの、原始古代部会が忙しい頃はまだ現職であり、どうしても『市史』に関わる時間は限られていた。ところが、松江城部会を牽引されておられた山根正明氏が2013年に突然、家庭の事情で部会長を辞されることとなった。後任は地元島根の人でということとなり、各グループの長でもなく、城郭史グループの一員である自分に部会長を指名されてしまった。

ところで、別編「松江城」では、松江城を、松江城天守、内堀内の城山のみではなく、城下町全体も含めて松江城と捉えている。また、他の自治体史のうち、城郭を単独巻で扱っているものと比べると、別編「松江城」に関わっていただいた学問分野は広く、城郭史、文献史学、歴史地理学（絵図・地図）、建築史、考古学、土木工学、地質学の専門家に参加願った。よって、多彩な分野から執筆していただきき、本編と資料編も併せもつ異色な巻となった。結果、部会長となって以降、城郭史グループ以外の文献・歴史地理・建築グループ、土木氏グループの活動にも参加の声がかかり、会議の数も増えて、退職後は仕事の関係で大田市に移っていたので、『松江市史』のために月に何度も松江へ出向く羽目となった。

また、城郭史グループは、滋賀県立大学の中井均教授をはじめ関西の方が5人と多く、グループ会は当初から集まり易い場所でとなり、毎年1回は尼崎市で開催することになった。会議室の予約は地元の山上雅弘氏にお願いし、JR尼崎駅近くを確保していただいた。松江方面から出向く者も新大阪駅からも時間がかからず、結果殆どの方に参加していただいた。しかし、事務局を始め、松江方面から行く者は大変であり、朝1、2番の早い「やくも」に乗り、午後の会議が終わると、その日の内にとんぼ返りすることもしばしばであった。大田の自宅に帰るのは、日付も翌日に変わっていたこともあり、大変長い1日を体験させられたものである。

別編「松江城」では、原稿の査読のために、査読検討委員会なる委員会を設け、部会長の他、和田嘉宥氏、河原荘一郎氏、岡崎雄二郎氏、松尾信裕氏、事務局担当者に集まっていただいた。読み合わせは、2014年度から始まり、19回にも及んだが、これだけの回数となると、どうしても中心となるのは地元の委員であった。別編「松江城」の執筆分野は多岐にわたっており、内容も基本的なことから、細部にわたる専門的な内容まであり、時間をかけての長丁場となった。

一方、市史編纂と並行して進められていた松江城天守の国宝化運動が実を結び、2015年7月、松江城天守は近世城郭を代表する建築物として65年ぶりに国宝に指定された。国宝復帰には、市民の念

願のもと、市史とは別に進められていた松江城調査研究委員会の地道な研究成果と市史事業での祈祷札の再発見が大きく寄与したのである。天守の国宝指定は、別編「松江城」刊行予定まで２年半ほどのタイミングであり、お陰で原稿執筆にも拍車がかかり、無事に2018年３月に刊行できた。幸いにも、予定の頁数を大幅に増やしてもらい、関連史料や明治初年から昭和の大修理までの写真等を多く盛り込むことができ、片手では持てないほどの重さ、1000頁に及ぶ大著となった。

事務局の石塚晶子さんと福井将介さんの支えも貴重であった。各部会の議事録や文献史料（「堀尾古記」、「島根県史」等）の大部のコピーを、部会やグループ会議で用意していただき、これが執筆や査読の折には大いに役立った。別編「松江城」の編纂はお二人の存在があってのものと思っている。

その後、松江城部会は松江市全巻が完結した2020年３月まで活動を続け、松江城調査研究委員会に６名の松江市史関係者が加わることで発展的に解消した。私は現在も松江城部会長として史料調査課内に机を置き、「市史の成果」が今後の松江城研究に活かされるように活動を続けている。

（元島根県古代文化センター長）

西田友広
松江市史編集委員、中世史部会

松江市史の思い出

松江は私にとって第２の故郷である。第１の故郷は島根県江津市二宮町であるが、高校時代の３年間（1992年４月～1995年３月）を松江で過ごした。1年目は外中原町にある寮から、２年目と３年目はそれぞれ奥谷町にある別の下宿から高校に通った。その後、大学進学により東京へ引っ越して以来、東京で暮らしているため、松江での生活が一番短いのではあるが、それでも松江は思い出深い土地である。

このような松江で、松江開府400年事業の一環として『松江市史』の編纂が開始され、その編集委員会の委員を委嘱され、中世史部会の専門委員となったのは2009（平成21）年の６月であった。

中世史部会に所属した私が直接関与したのは『松江市史』史料編３「古代・中世Ⅰ」（2013年）、『松江市史』史料編４「中世Ⅱ」（2014年）、『松江市史』通史編２「中世」（2016年）の３冊で、史料編の中世Ⅰ・Ⅱの編集と通史編の第１章「中世社会の成立」の執筆を分担・担当した。史料編の編集、特にその校正作業は大変で、もとになった史料のコピーや写真と原稿とを比べながら、正しく印字化されているか、確認を繰り返した。また通史編では平安時代末期の院政期から鎌倉幕府の滅亡までの政治状況を執筆したが、松江市域の状況を直接示してくれる史料は多くはなく、日本全体また出雲国全体の状況を見ながら、間接的に松江の状況を推測し叙述するにとどまってしまった部分も少なくない。

『松江市史』の編纂事業の中では、市民向けの市史講座が定期的・継続的に開催されており、大きな特徴となっている。私も「中世の松江市域と橋」（2012年）、「武者の世の始まりと出雲国」・「知行国制度と出雲国」（2014年）、「荘園のしくみと下地中分」（2018年）の４回を担当した。講座の概要は「山陰中央新報」にも掲載されており、当日の様子は録画され松江市立中央図書館での閲覧が可能である。コラムの執筆も随時行われ、「中世の松江の「筌（うけ・

せん）」漁業」（第10回・2011年）、「続・中世松江の「筌」漁業」（第45回・2015年）、「源氏の御曹司、松江に死す」（松江市史プラス・2017年）を執筆した。これは松江市のホームページで公開されている。また大部な史料編・通史編に対し、よりテーマを絞り、手に取りやすいブックレット（小冊子）として『松江市ふるさと文庫』も刊行されている。私は、中世の社会・経済の基本的な仕組みである荘園制度と、荘園での人々の生活をテーマとした「中世の松江を探る―荘園のしくみと暮らし―」（仮）を執筆し、これは2020年度中に刊行の予定である。

こうした活動を通じ、特に通史編刊行までの間には何度も松江を訪れることとなった。ホテルの自転車を借りて編纂室へ通ったり、持田荘や加羅加羅橋、多賀神社などの歴史の現場を訪れたのも楽しい時間であった。30代を再び松江と関わりながら過ごすことができたのは幸せなことであったと思う。

このように松江の歴史に関する調査・研究を通じて、多くの事を学び、理解することができた。そのなかで強く感じたのは、宍道湖・中海、そして中世にはその間に広がっていたもう一つの湖である「松江潟」、さらには日本海と、豊かな水に接していることが、松江の歴史や生活の大きな構成要素となっているということである。松江での高校生活中に、松江で釣りをすることはなかったが、中学生の頃には父・弟と冬の大橋川でワカサギ釣りをし、数10疋から100疋近く釣れた記憶がある。現在ではワカサギ釣りの話も聞かれないようで、残念である。一方、松江城の堀川は水質が改善され、堀川遊覧船が就航したのは、私が高校を卒業した後の1997年である。松江の水をめぐる状況は、私が松江で生活していたころとさまざまな点で変化しているが、より良い形での水との共存が行われることを願ってやまない。

また、史料編・通史編の刊行後に見いだされた新たな史料や、修正・改善すべき点も存在している。新たな史料の発掘や、それにともなう研究の進展、さらに刊行された松江市史を用いた市民の方々自身による学習や研究が継続的に行われ、松江の文化がより発展してゆくことも期待したい。

この間、松江市教育委員会史料編纂室（現、松江市歴史まちづくり部史料調査課）の方々をはじめ、多くの方々にたいへんお世話になりました。末尾ながら、記して感謝申し上げます。

（東京大学史料編纂所准教授）

仁田　玲江
松江市史編纂委員

「松江市文書館仮 (仮称)」への期待・「市史」を贅沢な学習ツールへ

（はじめに）

最終市史講座が思わぬ形となり、大きな忘れ物をしているような思いの昨今です。講座は、資料によれば 142 回にも及び、どの分野でも 100 名を超える市民の参加があったと聞きます。様々な分野での当代を代表する先生方による講義は、分かりやすく大きな楽しみでした。マーブル放送は、講座の隠れファンばかりでなく、再度視聴できる安心感や、仲間と議論できる機会となり有難いものでした。

最終回のシンポジウムは、「市の持つ特性、著しい特徴とは何なのか」「成果をどう生かすか」の二つの論点により、「新しいタイプの本格的な自治体史」「市民の為の市史」という編集方針の基本的な考えが明快に語られました。又、先生方の高い専門性と熱情溢れるお話しは、公的な記録媒体に長く保存して欲しいと感じたほどに重要で興味深いものでした。10 年に及ぶ講座は、学びの深さ、楽しさを改めて教えられた素晴らしい体験であり、時期を同じくして学べる幸せを感じる日々でありました。

（「誌」から「史」へ。でも、気安く使えないのではあまりにもったいない）

昔からの『松江市誌』を見慣れている目には、勇んで手にとった「市史」は専門書そのものでたじろぎました。なるほど辞書によると「誌」は書付、事実を書き記した記録とあるのに対し、「史」は世の移り変わり、その変遷・発達の過程等とあり、史料編はその根拠となるものですから当然のこととはいえ、その硬さはずっしりとこたえ、課題の明確でない素人はどこからどう使っていいのやら、これはかなり手強いというのが第一印象でありました。然し、版が重なり、通史が出版され、膨大な量の写真や絵図を見る楽しみができ、易しい読み下し文、老齢の目にも優しい字体や大きさ、色合い等々、様々な工夫のお陰で、次第にその重厚さへの気後れが薄らいでいきました。悉皆調査のすごみと共に、「何のためにどのような市史を作るのか」という視点や方法が、他に類を見ないと称される本の独自性となって伝わってきます。「専門書」だけにしておいてはあまりにももったいないというのが実感です。

使いやすくという観点から、市史「総索引」の作成が示されました。例えば講座で中世白潟の役割を学んだ時、以前、大店の奥にかけてあった槍を見たこと、神社仏閣の歴史、小路の謂れ等々を思い出し、中世白潟への興味関心が膨らみました。中世の人やモノの流れ等もう少し総合的・具体的にも学びたいと思った時、関連する事項の手引きが併せてあれば、素人にも手がかりが得られそうです。

（地域に開かれた「松江市文書館(仮称)」への期待・私たちにもできる事を）

市史編纂完了後の事業継承を目的としたこの事業の詳細は別稿に記されていますが、地域に開かれた、地域活性化への視点があることに喜びを感じます。私たちの学 (楽) 習会には、ご寄付を受けたかなりの数の白潟豪商の記録や秘蔵写真等がありますが、専門的な目録作りもままならず、活用には程遠いものとなっております。文書館の機能にこのような公民館レベルの地域資料にも配慮が向けられ、例えば目録作り等の指導がなされ統一した基準による資料化ができれば、地域の事柄も独自性のある得難いものとして生かされるように思います。又、その過程はネットワークとなり、「松江市文書館 (仮称)」はその要としても動き出すのではと夢が膨らみます。「松江市文書館 (仮称)」早期の実現が楽しみです。

私たちの楽習会は小さい団体ではありますが、公民館の一室という小さい空間で身近に先生方のお話が聞かれる、贅沢な学びの場を持っています。この場の良さを生かし、「市史」が私たちにとってももっと豊かな学びのツールとなるよう、知恵を出し合っていかなければと思います。先生方のより一層のご指導をお願いする次第です。(注　白潟歴史まち歩き楽会は、前身を、白潟公民館が平成 18 年度からの進めてきた白潟地域歴史学習にもち、平成 23 年度に任意団体として独立した学 (楽) 習会です)

（白潟歴史まち歩き楽会事務局長）

能川泰治
松江市史編集委員、近現代史部会

印象に残っていることと期待していること

－『松江市史』完結によせて－

はじめに、『松江市史』通史編「近現代」がこの2019年度末に納本されるとの知らせを聞き、そして3月21日に市史完結記念総括シンポジウムも滞りなく開催されたとの知らせを聞いた今、松江市史料編纂課のスタッフのみなさんのこれまでのご助力に、あらためて心より御礼を申し上げたい。現地案内、史資料の送付、原稿のチェック、校正作業等々、数え上げればきりがないが、市史編纂室のみなさんには大変お世話になった。私のように仕事が遅くて要領の悪い者が何とか市史の原稿を提出できたのも、編纂課のみなさんのサポートがあってこそと、心より感謝している。

ところで、与えられた課題は、市史編纂事業について最も印象に残っていることと今後の期待について語ることであるが、印象に残っていることとしては、市史講座を挙げたい。私は、これまで滋賀県の長浜市史と石川県の金沢市史の編さん事業に関わってきたが、これらの自治体史ではなかった取り組みであり、市史編さん事業の成果を市民に伝え、同時に執筆者のモチベーションを刺激するうえで、画期的な取り組みであると感じたからである。

市史講座には、平成24年度の第12回（2013年3月9日）と平成26年度の第9回（2014年12月20日）の二回にわたって担当させていただき、最初は「歩兵第63聯隊の創設と松江の都市社会」、次は「神国大博覧会開催計画とその行方」というテーマで講演した。最初の「歩兵第63連隊～」の報告の準備過程では、まだ松江の地理に不案内な私に内田さんと沼本さんが現地案内をして下さり、さらに市史編纂室のみなさんと編集委員の竹永部会長と伊藤さん、居石さんとが集まってリハーサル報告会をして下さった。こうした準備過程のサポートにどれだけ助けられたことか。また、市史講座そのものについては、講演に聞き入る市民の熱気が印象に残っている。市民の熱意に直にふれたことにより、市史の原稿を執筆する際の気持ちが引きしまった。また、聴衆の人数は100人を超えていたと思うが、それは地元の歴史に関心をもっている市民がたくさんいらっしゃることの表れであると同時に、市史編纂室の宣伝努力も功を奏していたのではないかと思う。特に印象的だったのは、地元紙の山陰中央新報に写真付きの予告記事が掲載されることである。マスコミと連携した宣伝の重要性を教えられた。

以上のように、市史講座で話すという経験をしておいたおかげで、歩兵63連隊の誘致と神国博に関する通史編の原稿は、市史講座のレジュメをもとにして順調に書き進めることができたし、市史以外の出版物で論稿としてまとめることもできた。その意味でも、市史講座は執筆担当者に確実に原稿を書かせるための貴重なステップであると感じた。

最後に今後への期待については、私なりの反省点とからめながら述べておきたい。それは、通史編の内容についてまだ計画だけを検討している段階では、市民の戦時中や戦後の体験談も収録することも計画されていたが、結局取りやめになったことである。その体験談というのは、軍事郵便や既に刊行された体験記を収集して、それらをふまえた特集原稿を掲載することが予定されていたと思う。しかしながら、私の勤務先の仕事が多忙で、松江での調査に十分取り組めなかったことなどを理由に、この企画は途中で割愛されることになったように記憶している。今後は市史編さん事業の取り組みが松江市文書館に継承されるそうだが、その際には、市民の戦争体験や戦後体験といった、現代史の体験談を少しでも多く集め、それらを保存・活用することも検討していただければと思う。また、可能であれば、聞き取りに応じてくれる協力者を募り、その口述史料を保存・活用することも検討してもらいたい。その際には、私のような遠隔地にいる者の協力に期待するのではなく、市民の協力者と恒常的に対面することができて、土地勘もある、島根県在住のスタッフが中心になって取り組むことを願っている。

（金沢大学人間社会研究域歴史言語文化学系教授）

長谷川博史
松江市史編集委員、中世史部会

松江城下町形成以前の地形復元調査について

中世の史料編・通史編の編集は、井上寛司部会長による采配と、ご一緒させていただいた委員・執筆者や編纂課の高い作業能力と多くの作業量によって、これまでにない松江地域像や中世史像が描き出されたのではないかと思う。触れるべきことは多いが、私が個人的に最も知的な刺激を与えていただいた「古松江湖汀線調査検討会」のことについて振り返り、感謝と課題を述べたい。

「古松江湖」とは、島根半島中央部にかつて存在した水域を指して用いられる仮称であり、概念規定が明確であるわけではない。「松江湖」という湖が現在存在しているわけではないので「古」を付す必要はないという考え方もあるし、特に松江城下町の北東側に存在していたと思われる水域については、「松江潟の内」「松江潟」と称する案もある。『松江市史』通史編２「中世」においては、「古松江湖汀線調査検討会」において中心的に検討された城下町北東側のかつての水域を、「松江潟」と仮称して記述した。検討の焦点は、当時の景観の復元であり、具体的に水域がどの範囲におよんでいたのかを推定することである。

この検討会の出発点を確かめたわけではないが、手許のメモによれば、2011 年 9 月 24 日（土）の松江市史中世史部会（松江市環境センター）において、私から松江城下町形成以前の地形復元調査の必要性について提言し、「地質学、考古学、絵図・地図部会、松江城部会などとの連携が不可欠だ」と発言した。今にして思えば、当時すでに他の部会においては検討をはじめられていたのかもしれないが、必要性を強く感じ、かなり踏み込んで発言したように記憶している。

それからおよそ１年後の 2012 年 9 月に、松江市史編纂室長稲田信氏より、松江潟汀線調査につき地籍図の分析依頼があり、地籍図との格闘がはじまった。当初は、1889 年（明治 22）の地籍図であるので、明治初期の切絵図に比べれば、地形の現地比定は容易であるはずだと考えたが、実際には、一体どの範囲を示す図であるのかを特定することに四苦八苦した。ひたすら小地名を追いかけて、古い空中写真を見比べながら、現在の地図に落としていく作業を続けた。あわせて、広島大学図書館所蔵「中国五県土地・租税資料文庫」所収の江戸時代の検地帳を調査し、17 世紀中期の小地名を確認していった。

2012 年 11 月 18 日（日）、松江市役所第４別館において、「古松江湖汀線調査検討会」が開催された。その内容は、以下のようなもので、私も地籍図調査の途中経過を報告した。

１．問題提起（長谷川）
２．絵図から見る古松江湖（大矢幸雄氏）
３．中世史料から見る古松江湖（長谷川）
４．古松江湖周辺の地質学的・考古学的情報（高安克己氏・渡邉正巳氏・瀬戸浩二氏・西尾克己氏）

また、2014 年 8 月 23 日（土）には、検討会における議論の内容を紹介する「松江市史講座シンポジウム―城下町形成期の景観復元―」が、松江市総合文化センターにおいて開催された。河原荘一郎氏・渡邉正巳氏・大矢幸雄氏・西尾克己氏とともに登壇して、報告した。

結論的に言うならば、文献史料にもとづいて中世の島根半島の景観を復元することは、未だ道半ばと言わざるをえない。ただし、無理な提案にお付き合いいただいた側面があるにもかかわらず、地質学・古生物学・考古学・絵図史料学の分野において解明されてきた成果の数々は、私にとってはいずれも瞠目させられるものばかりであり、実に多くの知見と示唆を与えていただいた。心より感謝申し上げたい。一連の検討内容のうち、文献史料にもとづく現時点での結論は、通史編２「中世」の第四章第一節三「中世松江地域の景観」において、要約的に叙述している。ご参照いただくとともに、引き続き検討が深められることを期待している。

（島根大学教育学部教授）

東谷　智
松江市史編集委員、近世史部会

自治体史の執筆と新たな研究フィールド

『松江市史』の編纂事業が終わり、「ホッとした」というのが正直な気分である。近世編は通史編２冊、史料編４冊というかなり大部の分量であり、『松江市史歴史叢書（市史研究)』の刊行や市史講座など、盛りだくさんの内容を含む事業だった。私は不安を抱えながら市史編纂に参加した。初めて松江藩領の史料を読み分析し、本の編纂を行うことがその理由である。地域での研究成果に新しい知見を加えられるかとの不安が松江市史の出発点である。

私の研究フィールドは畿内・近国地域が中心である。畿内・近国は中小の藩領や旗本領、公家領などが入り乱れて配置されており、所領の錯綜地帯と呼ばれる。ほぼ出雲一国を一円的として所領とする松江藩とは、所領の構成が大きく異なったのである。

早速､頭を悩ませたのが村役人（下郡･与頭･庄屋）であった。松江藩の村役人は、ほぼ藩の役人と変わらない役割を果たしていた。村の自治を象徴する庄屋（＝村の代表）をベースにした松江藩の郡・村制は理解できない世界であった。

幸い、近世史部会は、自由に発言できる雰囲気のなか運営されていた。素直に違和感について話したところ、他の委員から「同様の仕組みがある藩は他にも多くある」と教えていただいた。郡・村制をどう理解するかという大きな課題に直面することとなった。

なお、近世史部会は単なる「会議」ではなかった。疑問の解決や、課題の発見、他地域の例からの学びを伴う楽しい会議であった。編纂課の方々と部会員に恵まれたことに感謝したいが、小林部会長の部会運営によるところも大きかったと思う（懇親会も含めて)。

さて、郡・村制の理解に転機があったのは、史料編７「近世Ⅲ」の編集作業であった。この巻に村役人の執務記録である「御用留」を一年分掲載した。村役人は多くの業務をこなす。「御用留」には、やりとりした文書の控や写を含め、膨大な情報が含まれる。下郡と庄屋の間に位置する与頭を通して、村役人が一年間に行った仕事内容を把握し、仕事の分担が分析できるとの見通しから掲載した。掲載したのは「与頭」の「御用留」（天明二年（一七八二))であり、史料編７「近世Ⅲ」の四分の一を占める大部なものであった。私が経験した自治体史では、近世の史料編は一冊程度であり一つの史料に多くの分量はとれない。史料編が４冊ある松江市史だからこそ掲載でき、結果として通史編につながったと思っている。刊行計画に感謝したい。

通史編３「近世Ⅰ」では、「御勝手御任せ」について執筆した。藩財政を村役人に委託していたことを発見したのは、「御用留」の読み込みが基礎になっており、史料編７「近世Ⅲ」の試みは実を結んだと思っている。畿内・近国の所領が錯綜する地域でよく見られる「御任せ」という仕組みを藩規模で実施したとの着想に至ったのも、他地域をフィールドとしていたからであろう。自治体史の執筆を契機に新たな研究フィールドに取り組むことに意味があると感じており、編集の責任を果たしたことをひとまずは安堵している。

さて、松江市史編纂が進む中、どうしても取り組めなかったテーマがある。松江藩と出雲大社との関係である。藩主の社参や家臣の代参に関する史料を見る中で、随分と気になった。執筆担当したテーマの郡・村制から離れることもあり、十分な分析ができないままであった。せっかく新たに得たフィールドで発見したテーマである。今後取り組んでいきたい。

（甲南大学文学部教授）

引野道生
松江市史編纂委員

市史がもたらした成果

11 年間に及ぶ松江市の大きな事業が、2020 年 3 月末で終了した。原始古代からの歴史や暮らし、出来事、自然環境などをまとめた松江市史の編纂事業だ。3 月末に通史編「近世Ⅱ」と通史編「近現代」が刊行され、全 18 巻すべてが出そろった。

市史は、市民に古里・松江の歴史を知り、学んでもらえる教科書を作ろうと、松江開府 400 年記念事業の一環として 2009 年 4 月に始まった。最新の研究成果に基づき県内はもとより、全国各地の研究者 180 人あまりが執筆を担当した。

本を作るだけでなく、松江ならではの工夫も凝らした。執筆者が研究成果を分かりやすく伝える松江市史講座を開催。142 回を数える講座では毎回約 150 が聴講し、市民の旺盛な探求心を示した。

さらに事業の最大の成果として、松江城天守の国宝指定が実現した。史料調査の中で、松江城が完成した慶長 16(1611) 年に堀尾氏と天守の末永い繁栄を祈った祈祷札を発見。城の完成年が解明され、国宝指定の決め手になった。

地道な調査活動により市民の念願がかない、文化財の大切さを市民が実感し、編纂を後押しする相乗効果が発生。かつて市行政内部にあった「文化行政に税金を投じてどうなるのか」といった風潮が大きく変わった。

2020 年は松江城の国宝指定 5 周年を迎える。松江は古代から出雲の政治経済、文化の中心地。市史を活用し、茶道文化など松江らしさに磨きをかけ、まちづくりにつなげていきたい。

（山陰中央新報社編集局地域報道部編集委員）

福島律子
元松江市教育委員会教育長

松江市史編纂事業に参画して

平成 23 年 12 月、『松江市史』史料編 5「近世Ⅰ」（第 1 回配本）を手にした時の感動は、今でも鮮明に脳裏に焼付いている。計画発表以来 5 年を閲して、『松江市史』全 18 巻の第 1 回配本分が上梓されたのである。5 年間の経緯・紆余曲折が、脳裏を去来し、こみ上げるものがあった。

思えば、「松江開府 400 年祭」（平成 19 ～ 23 年）に当たり、平成 19 年 3 月に『松江市史』の編纂が、その基本計画に組み入れられ、平成 19 年度から教育委員会内で、編纂計画の具体化について検討を始めたのが、私のこの事業との実質的な出会いであった。

平成 20 年 4 月には、文化財課内に史料編纂係が設置され、市史編纂に向けた事務局体制の足がかりができ、一歩ずつ事業の遂行の歩を進めることができた。更に 7 月には、市史編纂の基本計画作成のための「松江市史編纂検討委員会」が設置され、10 月に「松江市史編纂基本計画」が市長に答申された。そして、平成 21 年 4 月には、市史編纂の事務局として史料編纂室が設置されるとともに、編纂の基本事項を検討する「松江市史編纂委員会」・市史の編集を所掌する「松江市史編集委員会」等が組織され、平成 21 年から市史の本格的な編集作業が始まった。

このようにして始まった編集作業であったが、第 1 冊目の発刊に至るまでには、様々な課題が生じ、その解決のために大きなエネルギーを費やすこともしばしばであった。

そのうちの一つが、印刷業者選定に関する事例であった。第 1 冊目の刊行予定が 1 年後に迫った平成 22 年の春のことであった。

事務局としては、市史という学術的な要素が多く含まれる性質上、専門的な内容に的確に対応できる技術を有する業者、つまり大手の業者を想定しており、私もそれでよろしいと思っていた。ところが、「印刷業者選定方法について、市長部局から『待っ

た』がかかりました」との連絡があり、詳しく聞くと、大手業者のみによるプロポーザル方式ではなく、地元業者も参加できる競争入札がふさわしいとのことであった。

「さあ、これから」という時に、出鼻をくじかれた感があり、途方にくれたのも事実であった。しかし、この難題の解決に当たっての事務局の対応は、実に見事なものであった。

それは、市史の質を落とすことなく、かつ地元業者にも入札参加できるよう、専門性に富む大手業者に市史編纂印刷仕様書の作成を依頼するとともに、編纂委員・編集委員の皆様方の同意のもと、入札に臨むこととした。そこには、単なる市史編纂の事務手続き等を担当するのではなく、この印刷のあり方によって、今後の松江市史の学術的質が問われるということを承知した事務局の矜持が感じられ、頼もしさを覚えたものである。

そして、今一つが「人権問題に関わる近世身分呼称（差別的表現）の取扱い」に関する件であった。それは、平成22年8月、第1回配本の史料編5「近世Ⅰ」の凡例の記載案をめぐるものであった。発行責任者である松江市としての意思決定が必要であり、教育長としての見解が求められた。編集委員会の「史料は史料として掲載する方向で行きたい」との方針を受け、私はその方針を了とし、「責任は取る」旨を伝えた。

これを判断するに際しても、編纂委員会における基本方針の策定、更に編集委員会及び部会長会における綿密な検討がなされており、市史を学術的にも信頼に足るものにしようとの熱い思いが感じられ、自信をもって臨むことができた。

この場合にも、事務局の問題の本質をおろそかにしない姿勢があったからこそ、編集委員の先生方の信頼が得られ、段階を踏んだスムーズな対応ができたと考えている。

第1回配本に至るまでには、その他様々な課題が生じたが、その際いつも心がけてきたことは、「市史は何のために編纂されるのか」という市史編纂の基本に立ち返って対応することであった。それは、「松江市『誌』ではなく、歴史的な検証を通して未来への方向性を模索する新たな松江市『史』を編纂する」というものである。

この考え方、姿勢が、事務局職員一人一人にも浸透し、市史編纂の屋台骨を支えるんだという気概が、静かなる闘志として感じられたものである。

『松江市史』全18巻は、編集者・執筆者は言うまでもなく、すべての関係者の市史のあるべき姿を追求する真摯な姿勢が貫かれていたからこそ完結したと言っても過言ではないと考える。

市史編纂という大事業に参画できたことに感謝し、今後の大いなる活用を念じて、筆をおかせていただく。

（松江総合医療専門学校校長）

堀田浩之
松江城部会専門委員

松江の市民生活での豊かな城郭環境を確認する

城郭を地域史の中で正当に評価する作業は、思いのほか難しい。城郭を構成する各施設の相互比較により、性能の優劣や意匠面での差異を指摘することは可能であっても、その城郭に託された個性の成立事情にまで言及しなければ、やはり自治体史での城郭の記述としては、物足りない気がするのである。今から約四百年前に登場した〝松江〟という城郭都市。その空間が今日の松江市民の生活環境の端緒となっているわけであるが、そもそも松江市民にとっては、唯一無二の地元の城をどのようなイメージで捉えているのか、今後の市民生活の展開を考えていく上での興味深い問題が横たわっている。その際、松江城とのより良き共生の関係を模索する上でも、市民サイドからの積極的な問いかけは必要となろう。松江城の魅力を総合的に解明する市史編纂の絶好の機会に臨み、ここでは敢えて市外の人間特有の感覚から、地元の松江市民がこれまで気付かなかった（かもしれない）、この城の込められた個性の見極めに幾分でも貢献すべく、執筆の準備を進めたところである。

実際の現地調査では、事前に地図や地誌類から〝松江〟の人文情報をおさえておき、部会での打ち合わせで訪れた時は、その都度できるだけ城下・近郊の各方面を歩き回って、周辺の寺社の位置や山々の見え方に注意しながら、〝松江〟を取り巻く地理的な空間構成の確認を行った。かつて筆者は姫路城の事例において、自然地形を踏まえた城郭環境の捉え方について研究成果を発表したことがあり、同じく松江城においても築城に伴う空間設計の趣向が見出せるのではないかと、考えたからである。一般的に軍事施設と性格付けられる城郭の縄張には、往々にして戦闘場面での機能を想定した解釈が施される傾向が認められる。しかし、平時の日常生活の中においてこそ存在感を発揮する、近世城郭という新基軸の政庁と、領内を統制する中核都市としての城下町の新興計画に、地域創生にかかる別次元での地理的な根拠を必要としたものと思われる。すなわち、〝松江〟の空間を包み込むように律する風景の要素（山々や寺社の位置）を介して、城地と郊外との望ましい融和の形に配慮しつつ、安寧と悠久への切実な願いと共に、在地の環境整備に向けてのオリジナルの基準線が見立てられていたのであろう。

市史（別編１「松江城」第１章第４節）の中では、私自身が歩いて実感した〝松江〟の空間構成を模式図にまとめてみた。あらためて松江城が、狭義の軍事施設ばかりの認識では済まされない状況が御理解いただけたものと思う。言わば〝松江〟とは、城地と郊外から成る総合的な地域のまとまりを表現した対象なのであって、現在の松江市民はそうした土地の系譜を遺産として受け継ぐ立場にいるのである。日頃は意識していない都市生活のベースは、実は今から約四百年前の築城時に計画されたものであり、当の松江市民にとっても、かつての城郭環境との今日的な関係について自覚する体感は、おそらく初めてのことだろう。〝松江〟に寄せられた先人たちの思いを、いつもの身近な風景の中で想像しながら、現在、そして未来の〝松江〟へと時空の由緒が伝えられていければ、どんなに素晴らしいことか。

以前、強烈な北西風が吹き荒れる日に松江市内を歩いたことがあった。平素は穏やかな大橋川の水面が激しく逆巻いて流れている。こうなると風上に向かって進むことはまず困難で、今更ながら山陰地方の気候風土の現実を思い知ることとなる。これ程の強風が恒常的に発生するのであれば、築城に大きな影響を与えたであろうことは容易に推測され、実際問題として松江城では建造物や住環境の保全のためにも風除けの方策がとられていた。例えば城山を利用して、風下の南東麓に城主の居住スペースを確保するといった空間配置については、もはや現場の環境を踏まえた必然の対処法と言えるのではないか。その土地の気候風土を知る者にとっての当たり前の

事情は、必ずしも一般の間の情報として共有されてはおらず、体感する機会の少ない市外の者に意外な発見をもたらしてくれるのである。その他、全国の近世城郭との比較による松江城の分析では、正面性を企図した表裏の造作レベルの違いや、敢えて工事を行わない未完のスペースを保持する作為について、幾つか気になるところを指摘しておいた。是非とも市内の散策のおりに、松江城に秘められた個性の豊かさに触れていただきたい。

（兵庫県立歴史博物館社会教育推進専門員）

松尾信裕
松江城部会専門委員

松江城下町遺跡を掘り下げる

（松江とのかかわり）

2007年10月10日（水）、松江歴史館敷地で進められていた発掘調査を見学する機会を得た。これが松江市史とのかかわりのきっかけとなる。筆者は大阪市で1980年代から始めていた近世大坂城跡や城下町跡の発掘調査を数多く経験し、それらの発掘調査報告書を編集し大坂城下町の遺構や遺物を承知していたことで、財団法人松江市教育文化振興事業団（当時）から声を掛けていただいたのであろう。

歴史館敷地は江戸時代を通して重臣屋敷が存在していた場所で、地表下１ｍほどの深さに夥しい数の遺構が発見されていた。また、九州地方や東海地方で生産されていた陶磁器だけでなく中国製の磁器も出土していた。松江市ではこれまで近世遺跡の発掘調査がさほどなく、発見される遺構や出土する遺物に接する機会も少なかったようだ。そこで発掘調査担当者が遺跡の理解を深めるために、近世考古学だけでなく歴史学や建築史学・地質学などの様々な分野の研究者を現地へ招聘し、現地検討会を幾度も開催された。その結果、発掘調査担当者諸氏の近世遺跡への意識も高まり、調査精度も深化したと考える。これ以降の松江城下町遺跡の発掘調査にも大いに活かされることになった。

（松江城下町遺跡検討会が生み出したもの）

松江市史松江城部会の開催日にあわせて、（財）松江市教育文化振興事業団では松江歴史館敷地での発掘調査で発見される遺構や出土資料の検討会を開催され、筆者も参加させていただいた。検討会では歴史館敷地で発見された遺構や出土資料の時期をめぐって意見交換し、性格や時期による敷地の利用状況の変遷などについて議論が交わされた。出土した陶磁器の生産地や時期の同定作業などを繰り返し、それらを総合化する作業の中で歴史館敷地の利用変遷が明らかになり、『松江市史』別編「松江城」の執筆に大きな情報源となった。その場には松江市教

育委員会や事業団の方々だけではなく、県外からも近世遺跡・遺物に詳しい方々も参加して、歴史館敷地の江戸時代の様子を明らかにしていった。

同じ頃、大手前線の拡幅工事に先立つ発掘調査が行われ、城下町建設の第１段階に行われた大溝や米子川の護岸石垣、米子町の町屋跡、南田町の大橋家与力屋敷、城下町東端を限る土手、南田町の障子堀などが次々に発見された。これらは松江城下町がどのように建設され、変遷したのかを知る重要な知見で、絵図でしか知りえなかった施設の構造が目の前に現れてきた。この調査の検討会では、低湿地に建設された松江城下町の武家屋敷地の造成手法が、同じく低湿地に建設された徳島県徳島城下町と同様の造成手法で建設されていることが報告された。調査担当者の鋭い観察から生まれた大きな成果である。また、裁判所の建替えに先立つ発掘調査では、国内で非常に類例の少ない肥前磁器の優品が出土し、その陶磁器群を見た陶磁器研究の第一人者である大橋康司氏は言葉を失うほどに驚かれた。

（松江城下町の考古学）

松江城下町遺跡にかかわって13年になるが、この間に城山松江公園線（大手前線）や裁判所の発掘調査が長期にわたって行われてきたことで、調査担当者の経験も豊富になり松江城下町遺跡の調査精度が飛躍的に向上してきた。検討会を重ねて出土資料に対する研究も深化し、内容の濃い発掘調査報告が全国に発信されてきている。この間の蓄積とそれを豊かに膨らませてきた発掘担当者諸氏のたゆまぬ努力に敬意を表する。そうした成果を『松江市史』別編「松江城」に活かすことができたであろうか。心許ない。

これからは末次や白潟の町人地や南部の雑賀町などでの発掘調査も進めていただき、松江城下町遺跡全域の形成過程が明らかになるようにと願う。

（元大阪城天守閣館長）

松本岩雄
原始古代史部会専門委員

歴史は面白い　- 松江市史の今後の活用 -

11年間にわたる『松江市史』の編纂が完結し、全18巻に及ぶ市史が刊行された。松江市域の歴史を全国的な視野でまとめた内容の充実した市史であり、県内外の多くの研究者の努力の結晶と思う。自治体史を編纂する場合、通常は作業を進める過程で新たな調査・研究課題が生じることが多く、刊行が計画より大幅に遅れることも少なくない。ところが、松江市では、概ね予定通りの刊行を着々と進めて完結に至ったことは、編纂課をはじめとする松江市関係者のご努力の賜物であり、敬意を表する次第である。

市史刊行の完結は、後世に誇れる偉業ともいえるが、これで終了したのではなく、松江市の歴史をみつめ、将来を考える素材がやっと整った段階といえよう。編纂過程で新たに見つかった課題を今後継続的に調査研究し公開していくことも重要であるが、ここでは活用の方向性として、2点だけ記しておきたい。

一つ目は、市史を読む（松江市史輪読のススメ）。これまでの市史編纂過程で、142回におよぶ市史講座が定期的に開催されてきたことは、とても有意義なことであったと高く評価される。ただし、この講座は編纂に関わった研究者が一方的に話をして聴講者はいわば受け身という状況であったと思う。市史がすべて刊行された現在、今後は是非とも市民・住民主体の活用ができる環境を整える必要があろう。活用のスタイルは様々なものがあろうかと思われるが、まずは住民が主体となって通史編を読む活動（松江市史輪読のススメ）といったものが継続的にできないものであろうか。市史編纂事業の継承と発展的に組織されるであろう「松江市文書館（仮称）」の組織が中心となって「松江市史を読む会」の事業を進めるのも一案かと思う。

「歴史は面白い」ということをもっと身近に感じてもらうために、松江歴史館、出雲玉作資料館、鹿

島歴史民俗資料館、八雲郷土文化保存伝習施設、小泉八雲記念館等のミュージアム関連施設等で「読む会」を行うのも良いかもしれない。さらには、各公民館単位で「読む会」の活動が行われるようになれば、一層の広がりが期待できよう。そうした学習活動の支援･アドバイスを『松江市史』に関わった人々が担うシステムを構築し、市史活用の第一歩として進めてはいかがであろうか。いずれも継続的に行うことがポイントである。参加者が順次読み進めることによって理解が深まるであろうし、時には疑問点なども見えてくる。そのような活動を通して、地域への誇りや自信につながるとともに、地域色豊かな松江市の今後の在り方なども見据えることができるようになるのではなかろうか。

二つ目は、考古資料の分類と保管。松江市ではとりわけ1960年代以降、様々な開発に伴う発掘調査が行われ、膨大な考古資料が蓄積されている。これらの考古資料は発掘調査報告書をはじめ、『松江市史』史料編2「考古資料」や『松江市史』通史編1「自然環境・原始・古代」に掲載されており、その概要を把握することができ、重要な資料が多数存在することが分かる。しかし、その実物資料は秋鹿収蔵庫や野波小学校旧校舎などに保管されている。プレハブの建物もあり、火災・盗難等に極めて不安な建造物である。しかも、未整理のままで言葉は悪いが無造作に積み上げてあるというのが実態である。これらの実物資料は、展示公開等による活用がなされてはじめて大きな価値を持つことになる。私は県立八雲立つ風土記の丘に勤務していた折に企画展等で資料調査や借用依頼をしたが、探し出すことが出来なかった資料も少なくない。せっかく市史を編纂して実物資料を活用しようとしても、実現できないのが現状といえる。

先ずは貴重な松江市の文化遺産（考古資料）を火災・盗難等から守るために、適切な構造物に保管することは喫緊の課題といえよう。保管にあたっては、少なくとも報告書や市史に掲載された資料はきちんと分類整理し、いつでも資料調査や展示に活用できる状況にしておく必要がある。米子市埋蔵文化財センターは、日新小学校旧校舎を利用して埋蔵文化財（考古資料）の分類・保管・活用がなされており、参考になるのではないだろうか。

（八雲立つ風土記の丘顧問、松江市文化財保護審議会委員）

三宅正浩
松江市史編集委員、近世史部会

松江藩を考える

2009年6月に第1回編集委員会に出席して以来、これまで約11年間、編集委員および近世史専門部会員として市史の編集と執筆に携わった。編集委員に就任した頃、私は前年に博士号を取得したばかりの駆け出し研究者で、神戸に住んでいた。その後は職を転々としたこともあり、福島・仙台・岡山と転居を繰り返し、現在にいたる。思えば様々なところから色々な手段で松江を訪れたものである。

現在は私は岡山に住み、京都まで新幹線で通勤している。岡山駅―京都駅（219km）が新幹線で1時間であることに比べ、岡山駅―松江駅（188km）が特急やくもで2時間40分もかかるので、松江は近くて遠いところという印象がある。ただ、11年間、年に何度も松江を訪れたので、いつ頃からであったか、松江駅に着くと妙な親近感を感じるようになった。地元の方からすれば私は「よそ者」であろうが、私にとって松江は慣れ親しんだ地になったのである。このことは、松江藩についても同じである。

当初、私が依頼されたのは、市史の中で近世の松江藩政史を担当し、研究が遅れている松江藩の基礎的事実を解明して欲しいということであった。それまで私は、主に徳島藩蜂須賀家を研究対象として、近世前期の幕藩関係や藩の政治構造を研究しており、松江藩については初心者であった。当然、松江藩についての基礎的知識はほとんどなく、最初は大変だったことを覚えている。

松江藩の研究がこれまで他の藩に比較して遅れていた最大の理由は、基礎的な事実を解明する材料となる基本史料がなかったことである。藩の各部署で作成され蓄積された一般に藩政史料と呼ばれる記録類が、松江藩の場合はほとんど失われて残っていなかったのである。利用できそうなまとまった史料として、家臣の履歴書である「列士録」があったので、当初は「列士録」を基礎史料として何とか松江藩政のしくみや展開を解明できないかと模索していた。しかし、他にも家臣の家に伝わった史料など、松江藩政を解明するのに利用できる様々な史料があることが次第にわかってきた。加えて、ありがたいことに史料編纂課の方々の尽力によって新たな史料が次々に発掘されていった。それらの史料をつなぎ合わせて松江藩政について明らかにできた成果を市史に執筆したわけである。藩政史料がまとまって残っていない藩をどう研究するのか。その一つの方法論ともなればよいと思う。

こうして限られた史料と格闘しながら、松江藩の研究に11年もの間（断続的にではあるが）携わったので、松江藩という研究対象は私にとって非常になじみのあるものとなった。他の藩の事例などを考える際、自然と松江藩の事例をモデルケースとして参照することもしばしばである。私にとって、松江市史編纂事業に関わった最大の成果は、自分の研究に松江藩という引き出しが増えたことである。

松江藩研究を通して得た成果の中で、最も印象に残ったのは松江藩の家老制度である。私がこれまで見てきた藩では、基本的に家老は世襲であった。松江藩も同じと当初は思っていたのだが、世襲制が導入されたのは近世中期以降だということがわかった。さらに世襲以外の家老の方が多数を占める。松江藩は、比較的出世のできる藩だったといえるかもしれない。

さて、松江市史編纂事業により、松江藩についての様々な事柄が解明された。しかし、それは到達点ではなく出発点である。通史編に私が書いたことは、松江藩政の全貌からすればほんの一部分にすぎない。史料編に収録した史料は重要なものではあるが、まだまだ未収録の史料も多く、それどころかどこかに眠っている史料もあるに違いない。ある程度「わかった」ことにより、わからないことも増えた。大事なのはこれからであろう。『松江市史』を手がかりにして、多くの人が松江藩の研究に取り組み、さらに豊かな歴史を描き出して欲しいと願う。

（京都大学大学院文学研究科准教授）

村角紀子
史料編纂課専門調査員

『松江市史』近現代史部会担当者として

私が近現代史部会担当の専門調査員として史料編纂課に入ったのは、編纂事業も終盤にさしかかった2016年9月のことでした。着任後すぐに史料編9「近現代Ⅰ」の校正が始まり、2018年3月に刊行。そのまま、史料編10「近現代Ⅱ」、通史編5「近現代」を和田美幸さん、高橋真千子さんとともに続けて担当させていただき、2020年3月末の『松江市史』完結を迎えました。

個人的なことになりますが、私の学生時代からの専門は日本近代美術史です。特に、明治大正期に日本美術史が学問としてどのように形成されたか、という美術史学史に興味があり、名著『近世絵画史』（1903年初刊）で知られる国文学者・藤岡作太郎（1870～1910）の日記翻刻を、着任前の2008年からひとりで続けていました。この作業は、刊行を引き受けてくれる出版社も無事に決まって校正に入ったところで大きな壁にぶつかりました。原稿段階では難読箇所もひとまず「■」で済ませていられましたが、公刊となると、これらを何としてでも解読しなければなりません。見たこともない異体字、聞いたこともない慣用句などに悩まされ、校正作業は返却期限を大きく過ぎて停滞していました。

編纂課に呼んでいただいたのは、まさにこうした行き詰まりの只中でした。このタイミングで古文書を読むのが本業の人々と一緒に働けることになったのは、私にとってほぼ人生最大の幸運だったと思います。藤岡日記のどうしても読めなかった箇所に付箋を貼って、机を並べる和田さんや北村久美子さんに、勤務の後で教えてもらう日々。「近代は勝手なくずし方だからちょっと…」と言いながらも、彼女たちは次から次へと答えてくれました。調べ方のノウハウも内田文恵さんや大谷令子さんから惜しみなく伝授していただき、ここで教えていただいた異体字字典や大漢和辞典には、私が数年間読めずにいた字や語句が、ちゃんと採録されていました。

また、藤岡日記には京都の華厳寺の僧・鳳潭の軸を詳細に手写した箇所があり、これは原本の画像まで入手したものの、近世仏教の知識がない私には難解でした。たまたま大谷さんに相談したところ、知らぬ間にその画像を持って小林准士先生にまで質問に行かれ、小林先生に教えていただくことになって大いに慌てました。ともあれ、こうして私の翻刻の穴は、松江市史編纂に関わる多くの方々に助けられ、オセロの石を黒から白へ裏返すように埋まっていきました。

さらに市史編纂の過程では、行政から産業経済・社会・教育まで、分野を問わず大量の近現代史料と論考に触れることができ、美術史の枠内にとどまっていた私の視野は大きく広げられました。一例を挙げると、藤岡日記には「郷友会」というものがしばしば登場し、私はこれを彼の出身地である金沢独自のものと思い込んでいましたが、近現代史部会長の竹永三男先生の論文から、明治前期に上京した青年が出身地域地ごとに設立していたものと知りました。こうした知見を解説にも取り入れ、2019年3月、『藤岡作太郎「李花亭日記」美術篇』を無事に刊行することができました。

一方、それまで市内の研究者と自主的に続けていた「桑原羊次郎・相見香雨研究会」での調査成果を、「桑原羊次郎とその美術工芸研究」（通史編5「近現代」第2章第4節第5項）として『松江市史』に反映することもできました。桑原は美術分野以外にも、私立松江法律学校や八雲会、松江盲唖学校といった近代松江の重要タームに深く関わった人物だったこともあり、桑原家や島根大学附属図書館桑原文庫に収蔵される史料群の存在を知っていたことは、関連項目での資料収集に大いに役立ちました。

『松江市史』全18巻の出版事業はこの度で完結しましたが、収集した史料の整理保存や、地域所在の史料調査の仕事はまだまだ残されています。今後も美術史を自分の中心テーマに据えつつ、史料調査課でこれらの仕事に取り組み続けていきたいと考えています。

（史料調査課歴史史料専門調査員）

森田喜久男
原始古代史部会専門委員

古代史の部分を担当して

私は、島根県立古代出雲歴史博物館の学芸員をしていた頃、かつての上司であった勝部昭先生からお声をかけていただいた。それまで、石川県の自治体史や『宍道町史』の史料編や通史編を担当したことはあったが、古代の部分はほとんど一人もしくは二人で書いていた。ところが、『松江市史』では、佐藤信氏、大日方克己氏、野々村安浩氏、平石充氏など私以外は強力な執筆陣が集結した。これは驚くべきことであった。県史ならばともかく、市町村史で古代だけで部会を組むような事例はあまりない。何しろ、松江市は出雲国府の所在地である。島根県の出雲圏域は、史料が少ない古代史の分野においても豊富な史料が残っている。改めて『松江市史』における古代史の重要性を再認識した。

私は、史料編では神話や伝承に関わる史料の収集と編纂を担当した。通史編では、宗教や神話の部分を執筆した。当時を振り返って、改めて事務局の皆様におわびしなくてはならない。『松江市史』の仕事に取り組んでいた時期に、ちょうど私の勤務先である古代出雲歴史博物館で本務としての大きな仕事を抱えていたのである。

しかし、原稿遅延の原因はそれだけではなかった。どこに問題があったのか、これについて言い訳になるのかも知れないが、当時の私の心境を思い出しながら述べてみたい。

史料編において私を苦しめたのは、『出雲国風土記』の本文をどのように提示するのか、といった問題であった。一番簡単な方法は、地元の人々に愛読されている加藤義成氏の『修訂出雲国風土記参究』の成果を活かすことである。全国に散在する写本に目を通し、字句の異同を本文の上に掲示した校訂は、写本を見る機会の少ない人にとっても考えるきっかけを与えてくれる。ただ、島根県古代文化センターで多くの『出雲国風土記』の写本を調査する機会のあった私は、新たな校訂の必要性も痛感していた。しかし、当時の島根県では、『出雲国風土記』の校訂をどのような形で進めていくか、その方針が定まっていなかった。私としては、『出雲国風土記』のいろいろな活字本と私が目にすることができた写本の写真を比較しながら、自分自身の判断でとりあえずたたき台を提示してみた。これに対しては、異論が出た。その多くは写本の文字にもとづくご意見であった。それらのご意見にはなるほどと思いつつ、私自身は『出雲国風土記』の校訂は、ただ単に良質の写本を比較しただけではできないと考えていた。結局、代表的な写本の写真版や過去の活字本、近世以降の風土記学の成果、そして同時代の古代文献と対比させつつ、右往左往しながらなんとかまとめた次第である。現在、島根県古代文化センターで最新の研究成果にもとづき『出雲国風土記』の校訂作業が進んでいると聞く。その成果が、未来の『松江市史』に活かされることを期待したい。

もう一つ私を悩ませたのは、神話に対するスタンスである。神話に書かれている内容を史実として扱うべきではない。そのご指摘は私も古代史研究者であるから理解しているつもりである。しかし、執筆途上において寄せられたいろいろなご意見にそのとおりだと思う自分と違和感を持つ自分とがいた。神話が地域に根ざしているという点をどのように考えたらよいのか、「科学的歴史学」の美名のもとに、その点を切り捨てて市民を「啓蒙」するというスタンスだけでは住民参加の自治体史にはならないだろう。私自身は地元の人々と交流しながら、現地を歩いてその中で史料を読み直している時が楽しかった。この文章を書きながら、改めて地域社会において研究することの意味を考え始めている。

（淑徳大学人文学部教授）

渡辺浩一
松江市史編集委員、近世史部会

心残りの史料

小林准士さんから松江市史編纂へのお誘いを受けたのは11年前のことでした。朝ドラ「だんだん」の放映中であったと記憶します。遠方に住んでいる私に声がかかったのは、松江藩の家老であった三谷家文書の調査でご一緒したことがあったからだと思っています。ただ、実はその前、小林さんが島根大学に赴任する以前のことですが、職場の史料調査事業で県立図書館所蔵の松江藩郡奉行所文書の調査にも参加していました。そのため、松江が魅力的な旧城下町であることはよく知っていましたのでお引き受けすることにしたのです。せっかく紙面をいただきましたので、ここでは時間の制約から分析できなかった史料を紹介したいと思います。

一つ目は、県立図書館所蔵永井家文書のなかの「日記」（慶応四年）です。松江城下町の町役人文書は非常に少なく、もっぱら戦前の『松江市誌』編纂の際の筆写史料である「滝川家公用扣」に今回も依拠せざるをえませんでした。通史編の初校が出てから存在に気づき、同家文書「御用留書抜」の方の分析はかろうじて間に合いました。これにより、幕末まで続く町役人制度は貞享期から形成が始まり元禄九年に確定したことをはっきりさせることができました。しかし、「日記」については読むことができませんでした。これを読むと、通史編３「近世Ⅰ」の第三章で書いたことにもっと肉付けが出来るはずです。

二つ目は、県立公文書センター所蔵の「明治六年農商部　漁業場区」です。島根県庁文書の一部です。松江の漁師仲間について賣布神社所蔵文書から詳細なことがわかり、通史編にも書かせていただきました。大橋川のすぐ下流域が船の航路を除いては一面網を仕掛ける漁場であったことを知った時は新鮮な驚きを感じました。通史編の原稿を書き上げたあとに、細かい部分で多々分からない点があったので、初めて公文書センターに行き、「漁業場区」を閲覧しました。明治初年に松江漁師仲間の漁業特権が廃止されると、旧家臣を含めた非常に多くの人々が漁猟許可願を出しました。その願書の連続であり、許可申請の対象である漁場の彩色絵図も沢山ありました。そのなかの一点は通史編の図版に使うことができましたが、願書そのものの方はあまりにも点数が多かったので、ほとんど読まずに終わってしまいました。これを分析すれば、漁師仲間文書からはわからないことが沢山判明するはずです。江戸時代には漁師仲間の競合相手として藩の御船手方やそれ以外の家臣がいますが、実はもっと多様な漁業従事者がいて、それが明治初年の特権廃止に伴って史料に現れるようになったのだと思います。明治六、七年の史料から江戸時代の実態を推測することができそうです。

三つ目の史料は、島根大学附属図書館所蔵の美保関定秀家文書です。定秀家は廻船問屋ですが、網元でもあり漁業関係の史料も沢山現存しています。今回の通史編では一部分しか読むことができず、十七から十八世紀にかけての定秀家と地下中（湊町の地縁集団）の船宿をめぐる関係変化についてのみ叙述することになってしまいました。それが江戸時代後半にどのように変化していったのかという点については不明なままですし、定秀家は網元でもあるので、一般の漁師との関係の変化も湊町にとって重要な要素です。松江藩の廻米にも酒造業にも従事しています。さらに、定秀家は美保神社の氏子惣代的役割も果たしていました。このような定秀家の多様な側面とその変化がこの点数が非常に多い文書群から明らかになるのではないかと期待が膨らみます。そのほか、美保神社文書があって國學院大學によって目録が刊行されています。密接に関連する良質な文書群がもう一つあるという意味で、多くの人が共同で研究する価値のある文書群だと思います。

今回心残りに思った史料を特に三つだけ挙げてみました。これはそのままこれからの課題です。松江には古文書を整理し読み分析できる人材が他の地域

に比べて非常に沢山いらっしゃるのではないでしょうか。どんどん解明していっていただきたいと思います。そして、もしもまた、そうした方々のお仲間に加えていただく機会があればと感じているところです。

（人間文化研究機構国文学研究資料館教授、総合研究大学院大学文化科学科研究科教授）

和田嘉宥
松江城部会専門委員

緒についた松江城研究

建築史を専門とし、地域の歴史的建造物の調査研究していた関係だろう、松江市史編纂事業では松江市史専門部会の一つ、松江城部会の専門委員を依頼された。私は城郭建築に関する研究などはあまりしていなかったが、城下町松江や松江藩御作事所と御大工の働きなどについて調査・研究を行っていたこともあり、気軽な気持ちで専門委員を引き受け、結果的に文献・歴史地理・建築グループ長を務めることになった。

別編１「松江城」は15章からなるが、建築史を専門としていたからだろう「第三章　松江城の城郭施設」、「第五章　松江城下の都市構造」、「第七章　歴史遺産としての松江城」、「第八章　絵図資料」、「第十一章　文献史料」、「第十二章　松江城伝来資料」、「第十三章　写真資料」などに関わらせていただくことになった。

「第三章　松江城の城郭施設」は「第一節　天守をはじめとする城郭施設の推移」、「第二節　松江城天守」、「第三節　本丸・二之丸および周辺の松江城城郭施設」、「第四節　三之丸の推移と基本構成」からなる。「第二節　松江城天守」は、松江城調査研究委員会の委員長の故西和夫氏に執筆を内々でお願いしていたが、西氏の急逝に伴い筆者が執筆することになった。幸い、西氏を中心とする研究グループによって『松江城天守学術調査報告書』が出来ており、天守の建築的な特徴についての新たな知見も明らかにされていたので、この報告書を参考に書かせていただいくことにした。

「第五章　松江城下の都市構造」と「第七章　歴史遺産としての松江城」では、安高尚毅氏（元島根大学助教）、渡部理絵氏（山形大学准教授）、大矢幸雄氏（元松江市立図書館長）、足立正智氏（島根県建築士会会長）、堀田浩之氏（兵庫県立歴史博物館学芸課長）、岡崎雄二郎氏（元松江市文化財課課長）、中野茂夫氏（元島根大学教授）等に参画していただ

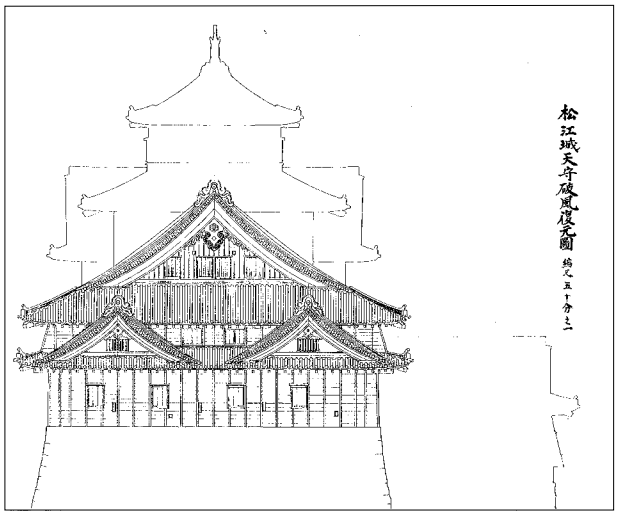
き、その専門的知見を遺憾なく発揮していただいた。

「第八章　絵図資料」は渡部理絵氏、稲田信氏（史料編纂課長）と小生の３名で松江城に関する絵図などを選定した。「第十二章　松江城伝来資料」では「松江城天守雛形」及び現存する「墨書資料」について執筆し、「第十三章　写真資料」では、昭和の松江城天守解体修理の際の記録写真や図面類を掲載することになった。

このように、別編１「松江城」では、様々な角度から松江城について関わり、既存資料については相互的な関連を読み解くことを試みた。そして、特に天守については「出雲国松江城絵図」や「比翼千鳥破風の痕跡」などを通して「初期松江城天守に関する復原的検討」を行い、「今後の検討課題」にも言及することができた。この別編１「松江城」は平成30年３月に刊行され、松江城部会は役目を終えることになったが、松江城調査研究委員会は松江城部会を吸収する形で継続されることになり、「世界遺産」などを見据え新たな課題を設定し再スタートすることになった。

松江城天守が、創建以来どのような変遷を経て今の天守の姿になったのか、初期の天守がどのような姿であったのか。不明な点は多々ある。「更に荘重だった」かもしれない松江城天守について、改めて資料を見直し、その実像に迫るのも課題だろう。松江城研究は諸についたばかりである。さらなる調査・研究の深化に期待したい。

（米子工業高等専門学校名誉教授）

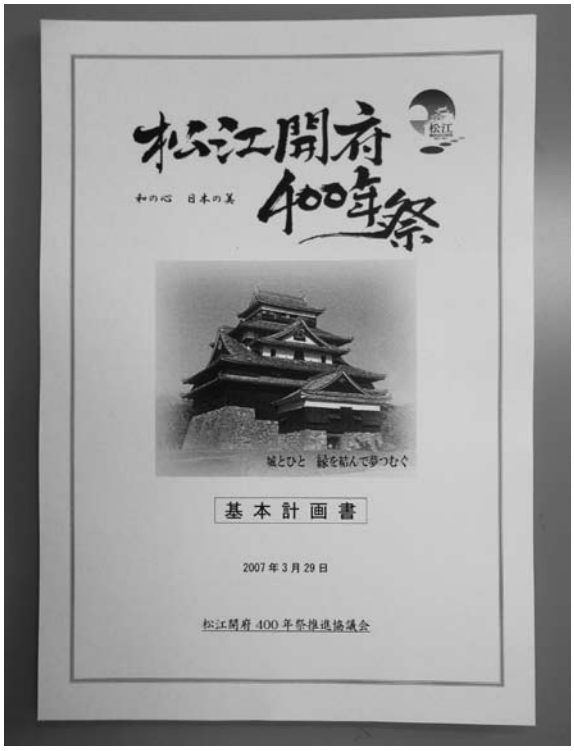


附図　昭和の修理時に作図された
「松江城天守破風復元図」

第５章

写　真　編

１. 松江市史編纂事業の始まり（基本計画）



1-1 松江開府 400 年祭基本計画書

1-2 松江市史編纂基本計画

2.松江市史編纂委員会

2-1 第1回松江市史編纂委員会(1)
(2009年6月15日)

2-2 第1回松江市史編纂委員会(2)
(2009年6月15日)

2-3 平成27年度松江市史編纂委員会
(2015年11月4日)

2-4 平成30年度松江市史編纂委員会
(2018年11月12日)

2-5 令和元年度松江市史編纂委員会(最後の委員会)
(2020年2月14日)

2-6 令和元年度松江市史編纂委員会(市長よりお礼の挨拶)
(2020年2月14日)

３. 松江市史編集委員会

3-1 第１回松江市史編集委員会（1）
（2009 年 6 月 21 日）

3-2 第１回松江市史編集委員会（2）
（2009 年 6 月 21 日）

3-3 平成 22 年度松江市史編集委員会（合同部会）
（2010 年 5 月 16 日）

3-4 平成 25 年度松江市史編集委員会
（2013 年 6 月 9 日）

3-5 平成 29 年度松江市史編集委員会
（2017 年 5 月 21 日）

3-6 令和元年度松江市史編集委員会（最後の委員会）
（2019 年 5 月 18 日）

4.部会長会議

4-1 部会長会議
（2012 年 1 月 6 日）

4-2 部会長会議
（2013 年 7 月 1 日）

4-3 部会長会議
（2016 年 3 月 3 日）

4-4 各部会長と事務局職員（松江市史講座最終回）
（2020 年 3 月 21 日）

5. 専門部会

5-1 第 1 回松江市史編集委員会後に開催された最初の専門部会
（2009 年 6 月 21 日）

5-2 自然環境部会
（2013 年 10 月 11 日）

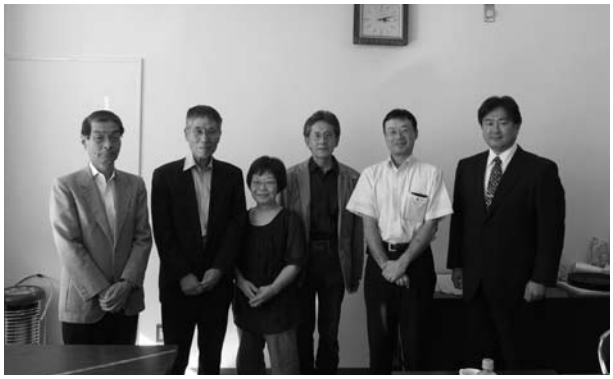
5-3 自然環境部会（他部会との通史編執筆検討）
（2013 年 12 月 1 日）

5-4 自然環境部会
（2017 年 7 月 25 日）

5-5 原始古代史部会
（2011 年 10 月 19 日）

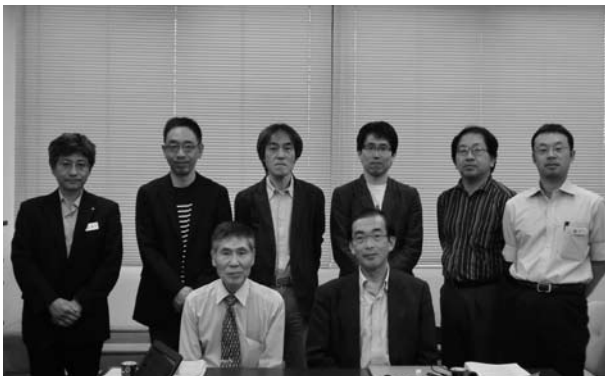
5-6 考古専門部会（仕事を終えてからの集合）
（2010 年 10 月 25 日）

5. 専門部会



5-7 考古専門部会
（2014 年 10 月 4 日）

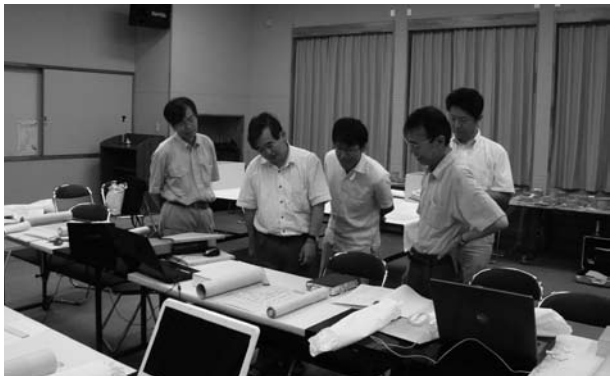
5-8 古代史専門部会
（2014 年 9 月 27 日）



5-9 古代史専門部会
（2013 年 10 月 20 日）

5-10 中世史部会（第 1 回編集委員会後）
（2009 年 6 月 21 日）

5-11 中世史部会（秋上家文書調査・借用挨拶）
（2010 年 8 月 8 日）



5-12 中世史部会（秋上家文書調査・風土記の丘にて）
（2010 年 8 月 8 日）

5. 専門部会

5-13 中世史部会
（2011 年 5 月 8 日）

5-14 中世史部会
（2011 年 9 月 24 日）

5-15 近世史部会（市内巡検・美保神社）
（2009 年 8 月 25 日）

5-16 近世史部会
（2012 年 2 月 27 日）

5-17 近世史部会
（2013 年 3 月 28 日）

5-18 近世史部会
（2013 年 6 月 8 日）

5. 専門部会

5-19 近世史部会
（2018 年 3 月 3 日）

5-20 近現代史部会（第 1 回編集委員会後）
（2009 年 6 月 21 日）

5-21 近現代史部会
（2015 年 12 月 19 日）

5-22 近現代史部会
（2017 年 5 月 22 日）

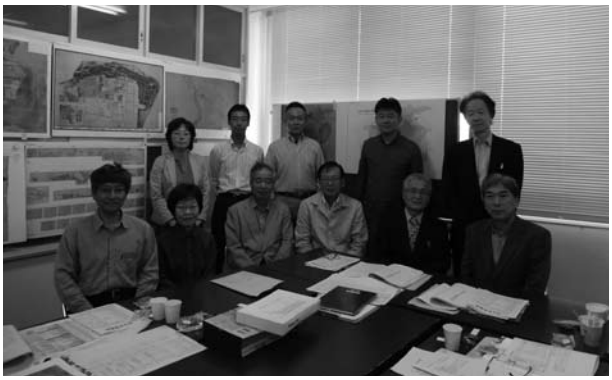
5-23 近現代史部会
（2017 年 9 月 13 日）

5-24 近現代史部会
（2018 年 6 月 3 日）

5. 専門部会

5-25 絵図・地図部会
（2010 年 12 月 12 日）

5-26 絵図・地図部会
（2011 年 12 月 3 日）



5-27 絵図・地図部会
（2013 年 10 月 13 日）

5-28 絵図・地図部会（島根県立図書館での絵図調査）
（2010 年 12 月 11 日）

5-29 絵図・地図部会（史料編纂室での絵図調査）
（2011 年 12 月 2 日）

5-30 松江城部会
（2015 年 2 月 22 日）

5. 専門部会

5-31 松江城部会（尼崎での城郭史 G 会）
（2014 年 7 月 16 日）

5-32 松江城部会（松江城天守調査）
（2016 年 6 月 25 日）

5-33 松江城部会（査読検討委員会）
（2016 年 10 月 10 日）

5-34 松江城部会（別編「松江城」刊行報告会）
（2018 年 3 月 25 日）

5-35 民俗部会
（2010 年 5 月 9 日）

5-36 民俗部会
（2011 年 4 月 3 日）

5. 専門部会

5-37 民俗部会
（玉湯公民館での聞き取り調査：2011 年 7 月 24 日）

5-38 民俗部会
（忌部公民館での聞き取り調査：2011 年 9 月 11 日）

5-39 民俗部会
（2013 年 11 月 4 日）

5-40 八雲町での建物調査
（民俗部会：2012 年 8 月 21 日）

5-41 宍道湖（古松江湖）汀線検討会
（自然環境・考古・中世史部会：2012 年 11 月 18 日）

5-42 宍道湖（古松江湖）汀線検討会
（松江潟の内ジオスライサー調査：2013 年 2 月 6 日）

5. 専門部会

5-43 合同部会
（自然環境・原始古代史・中世史部会：（2013 年 6 月 8 日）

5-44 石造物調査
（中世史部会：2013 年 9 月 8 日）

5-45 公民館文書調査
（近現代史部会：2014 年 6 月 2 日）

5-46 瓦比較検討会
（松江城部会：2014 年 8 月 25 日）

5-47 松江歴史館での藩主印譜調査
（近世史部会：2014 年 10 月 24 日）

5-48 松江城支城調査・雪の亀嵩城
（松江城部会：2014 年 12 月 3 日）

5. 専門部会

5-49 松江城天守用材樹種調査・階段
（松江城部会：2016 年 1 月 5 日）

5-50 松江城石垣調査
（自然環境・松江城部会：2017 年 1 月 14 日）

5-51 史料調査室での調査・執筆
（近世史部会：2017 年 10 月 30 日）

5-52 松平治郷（不昧公）研究会
（近世史部会：2018 年 10 月 25 日）

5-53 松江城調査研究委員会
（松江城部会：2019 年 10 月 20 日）

5-54 斐伊川東流問題検討会
（自然環境・考古・中世史・近世史・絵図地図：2020 年 3 月 14 日）

6. 史料編纂課

6-1 第 1 回配本・史料編「近世Ⅰ」出版記念（文化財課執務室）
（2011 年 12 月 26 日）

6-2 史料編纂課執務室
（2020 年 3 月 1 日）

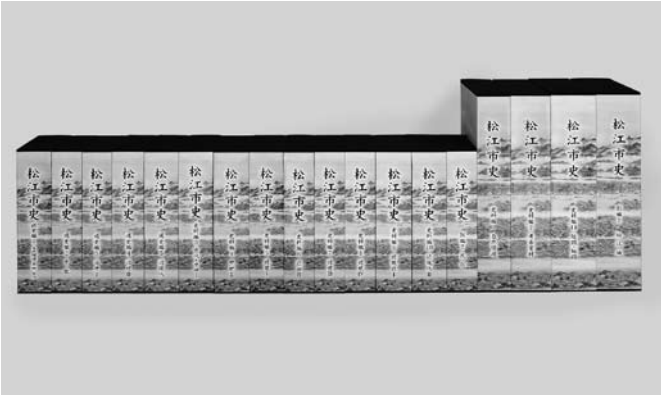
6-3 今井印刷永見氏へ最終校正の返却
（2020 年 3 月 5 日）

6-4 調査室
（2020 年 3 月 20 日）

6-5 課内会議
（2020 年 3 月 30 日）

6-6 通史編「近世Ⅱ」の納品
（2020 年 3 月 31 日）

7. 松江市史、付帯出版物



7-1『松江市史』全 18 巻

7-2 通史編 1「自然環境・原始・古代」

7-3 別編「松江城」

7-4 松江市ふるさと文庫ほか

7-5 松江市歴史叢書

7-6 松江市歴史史料集

8. 地域の歴史史料調査（古文書等）

8-1 乙部家等古文書調査検討委員会
（2008 年 5 月 29 日）

8-2 市内寺社史料調査検討委員会
（2013 年 7 月 3 日）

8-3 市内寺社史料調査（佐太神社文書）
（2010 年 8 月 27 日）

8-4 市内寺社史料調査（神魂神社文書）
（2010 年 11 月 29 日）

8-5 市内寺社史料調査（熊野大社文書）
（2012 年 2 月 7 日）

8-6 旧八束町役場文書調査
（2010 年 11 月 26 日）

8. 地域の歴史史料調査（古文書等）

8-7 旧東出雲町役場文書調査
（2011 年 8 月 30 日）

8-8 水道局文書調査
（2014 年 3 月 10 日）

8-9 旧美保関町役場文書調査
（2016 年 12 月 2 日）

8-10 旧鹿島町役場文書調査（史料の借用・移動）
（2017 年 9 月 6 日）

8-11 生馬公民館文書調査
（2008 年 3 月 5 日）

8-12 本庄公民館文書（調査前）
（2013 年 11 月 5 日）

8. 地域の歴史史料調査（古文書等）

8-13 本庄公民館文書調査（大分類後の仮箱状況）
（2013 年 11 月 12 日）

8-14 大野公民館文書
（2008 年 3 月 19 日）

8-15 竹矢公民館文書（調査後、公民館の要請により松江歴史館へ移管）（2008 年 3 月 13 日）

8-16 津田公民館文書（調査後、公民館の要請により松江歴史館へ移管）（2008 年 7 月 16 日）

8-17 大庭公民館文書
（2010 年 9 月 2 日）

8-18 大庭公民館文書調査
（2010 年 10 月 13 日）

８. 地域の歴史史料調査（古文書等）

8-19 片江区有写真調査（片江船団）
（2011 年 12 月 1 日）

8-20 旧野波公民館文書調査
（2012 年 6 月 4 日）

8-21 旧野波公民館文書調査
（2012 年 6 月 4 日）

8-22 野波区有文書調査
（2013 年 2 月 19 日）

8-23 忌部公民館文書調査
（2008 年 1 月 30 日）

8-24 忌部公民館文書調査（調査後しばらくすると片隅に）
（2013 年 9 月 19 日）

８. 地域の歴史史料調査（古文書等）

8-25 忌部公民館文書（再整理・中世紙箱へ詰め替え）
（2014 年 8 月 6 日）

8-26 朝酌公民館文書調査（2014.09.25）

8-27 雑賀教育資料館文書調査
（2017 年 10 月 10 日）

8-28 川津公民館文書調査（2017 年 10 月 17 日）

8-29 川津公民館文書（調査後）（2018 年 3 月 13 日）

8-30 文書調査状況の説明
（2013 年 11 月 28 日）

8. 地域の歴史史料調査（古文書等）

8-31 家別文書調査
（2011 年 11 月 2 日）

8-32 家別文書調査
（2012 年 12 月 12 日）

8-33 家別文書調査
（2015 年 11 月 12 日）

8-34 家別文書調査
（2016 年 10 月 24 日）

8-35 家別文書調査
（2017 年 11 月 2 日）

8-36 文書箱の収蔵保管

9. 市民のための市史
（松江市史講座）

9-1 松江市史講座司会の乾隆明氏
（2012 年 1 月 14 日）

『松江市史』シンポジウム
～歴史のなかに私たちのまを見つけます～

第一部　基調講演　「今なぜ『松江市史』なのか」
第二部　パネルディスカッション「松江の歴史像を探る」

新しい松江の歴史をみなさまと考えていくために、多くのまのご参加をお待ちしています。

日時　平成二十二年五月十五日（土）午後一時三〇分～三時三〇分（三〇分前開場）
会場　松江市総合文化センター　プラバホール（大ホール）

お問い合わせ　松江市教育委員会文化財課史料編集室　℡　〇八五二―五五―五三八八
事前連絡不要／入場無料

9-2 2010 年 5 月 15 日開催の『松江市史』
シンポジウムの案内

9-3 松江市史講座
（2012 年 7 月 14 日）

9-4 講座の受付
（2014 年 11 月 15 日）

9-5 最終講座（新型肺炎の影響で無受講者による録画収録）
（2020 年 3 月 21 日）

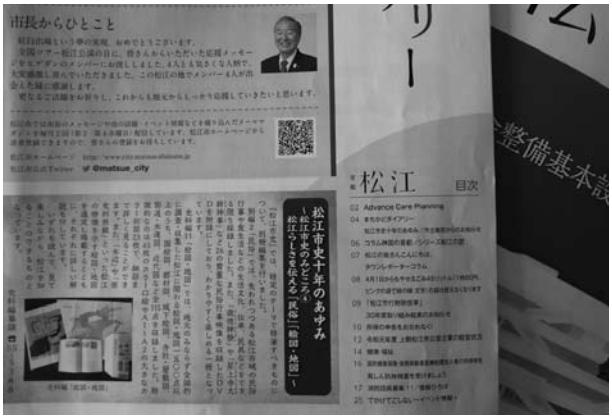
9-6 最終講座終了後に乾隆明氏へ感謝状贈呈
（2020 年 3 月 21 日）

9-7 松江市史講座終了後の記念撮影（各部会長と事務局職員）
（2020 年 3 月 21 日）

（松江市史ホームページ）

9-8 松江市史ホームページ

（広報まつえ）



9-9 広報まつえに連載した「松江市史十年のあゆみ」

10. 松江市文書館の検討と整備構想

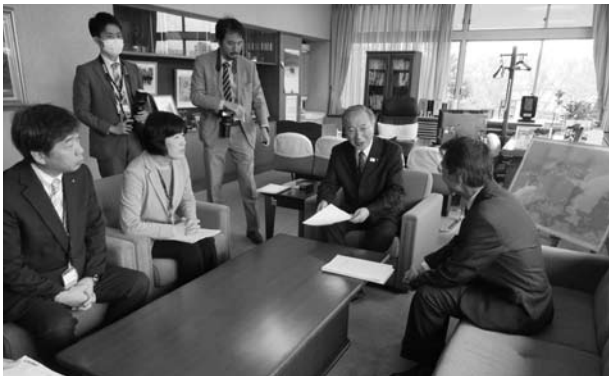
10-1 先進地文書館視察（鳥取県公文書館）
（2016 年 6 月 24 日）

10-2 先進地文書館視察（山口県文書館）
（2018 年 2 月 6 日）

10-3 先進地文書館視察（松本市文書館）
（2018 年 2 月 7 日）

10-4 総務課・史料編纂課合同先進地文書館視察（鳥取県公文書館）
（2018 年 11 月 26 日）

10-5 松江市文書館（仮称）整備検討委員会
（2018 年 12 月 20 日）



10-6 松江市文書館整備構想の答申（井上委員長から市長へ）
（2019 年 2 月 28 日）

11.『松江市史』完結報告

11-1 松江市長への『松江市史』完結の報告（1）
（2020 年 6 月 3 日）

11-2 松江市長への『松江市史』完結の報告（2）
（2020 年 6 月 3 日）

第６章

資　料　編

【資料１】松江市史編纂基本計画 …… 144
【資料２】第１回松江市史編纂検討委員会議事録 …… 151
【資料３】松江市史編纂委員会設置要綱 …… 154
（第１回松江市史編纂員会委員名簿）
【資料４】第１回松江市史編纂委員会議事録 …… 155
【資料５】松江市史編集委員会設置要綱 …… 158
【資料６】第１回松江市史編集委員会議事録 …… 159
【資料７】松江市史文書館（仮称）整備構想 …… 163
【資料８】松江市史編纂基本計画の実施結果 …… 180
（松江市史講座一覧）
（松江市史編纂コラム一覧）
（付帯出版物一覧）
【資料９】松江市史編纂体制図 …… 189
【資料 10】松江市史編纂事務局体制変遷表 …… 190
【資料 11】松江市史編纂事業全期間における主な活動 …… 191
（平成 19 年 [2007] ～令和 2 年 [2020]）

【資料１】松江市史編纂基本計画

松江市史編基本計画

平成２０年１０月
松江市史編纂検討委員会

例　　言

本書は、新たな松江市史の編纂方針を定めるため、松江市史編纂検討委員会が検討しその結果を松江市史編纂基本計画としてまとめたものである。

松江市史編纂検討委員会（平成20年６月２日設置）

※設置要綱、委員名簿については、資料編参照

松江市史編纂基本計画策定までの経過（松江市史編纂検討委員会の開催過程）

開催回	開催年月日	議事等
第１回	平成 20 年７月４日	市史の編纂方針、内容（構成）について
（小委員会）	平成 20 年７月 25 日	松江市史編纂基本計画（素案）について ・出版計画、執筆者など
（小委員会）	平成 20 年７月 31 日	松江市史編纂基本計画（素案）について １）具体的な編集構成 ２）出版予定年 ３）完成年 ４）大まかな時期区分 ５）編集・執筆陣の基本方針など
第２回	平成 20 年８月 28 日	松江市史編纂基本計画（素案）について
（小委員会）	平成 20 年９月 30 日	松江市史編纂基本計画について ・第２回委員会の意見をもとに計画を修正
第３回	平成 20 年 10 月８日	松江市史編纂基本計画について

１．新しい松江市史について

（１）松江市史編纂の必要性と目的

松江開府 400 年を迎え、地域の歴史を見直そうという気運が高まる中で、平成 22 年（2010）には「松江市歴史資料館（仮称）」の開館が予定されている。松江の歴史と文化を学ぶことにより、改めて現在を見つめ直し、先人の経験と知恵を活かして未来を展望するための中核施設が出来上がることに併せ、施設の諸機能を支える歴史情報、特に松江藩の時代に関するものの集積が求められている。

また、昭和 16 年（1941）に、当時としては高い水準の松江市誌（旧版松江市誌）が出版され、以来、数次の市誌が編纂されたが、旧版松江市誌の発刊から 60 年あまりが経過し、松江市域を含めた全国的な歴史研究については大きな進展が見られた。中国・朝鮮半島に対面する日本海岸に立地し、近世城下町を前身とする都市であり県都でもある松江は、国際文化観光都市として、最新の学問成果と史料に基づいた全国的視点に立った松江市史の編纂が求められている。新しい市史では、松江市の歴史を通史的に記述する「通史編」と、基本史料をまとめた「史料編」から構成されるものとしなければならない。史料は地域の歴史の真実を集積した基礎をなすものであり、地域の歴史を見直し、顕彰し、未来を見とおすためには、「史料編」に重点を置く必要がある。

一方、平成 17 年（2005）の市町村合併により誕生した新松江市では、これまで公民館区や旧町村単位で、

いくつかの小地域史や自治体史がまとめられているものの、貴重な史料の急速な散逸が懸念されとともに、島根県外においても松江市関連史料の存在も確認されていることから、早急に史料の調査・収集・保存・資料化（体系的整理）が求められている。特に近世・近代の史料は、これまで十分に調査がなされていないことから、緊急な対応が必須な状況である。
さらに、地方分権、厳しい財政状況、道州制の導入等予想される時代の変化に対応し、地域の歴史の中に、地域の未来を見つける努力を始めるためにも、改めて松江市の歴史を総合的に編纂する必要がある。
　以上の観点から、新しい松江市史を編纂する目的は次のとおりである。
①松江開府 400 年を契機とした大事業として、松江市域における最新の地域史研究の成果を集結させた、県都にして国際文化観光都市である松江にふさわしい「全国・世界に誇れる、史料編に重点を置く『松江市史』」を後世に伝えていく。また、「松江市歴史資料館（仮称）」の開館に併せ、松江藩の歴史については重点的に取り組む。
②松江市に関係する歴史史料をこの機会に全国的視野で徹底的に調査･収集･保存･資料化（体系的整理）することで、今後の史料の散逸を防き、その活用を図る。
③時代の変化に対応していくため、地域の過去の歩みを明らかにすることによって、現在を見つめ直し、そこから地域と地域に住む人々の進むべき未来を見とおしていく。
（２）松江市の目指す新しい市史
　市町村史は、専門家（研究者）に執筆を依頼し、それを住民に示すといったタイプのもの、あるいは地元の人たちだけで作り上げてしまうタイプのものがある。
　松江市の目指す新しい市史は住民、行政、専門家が共に地域について考え、知恵を出し合ってまとめ作り上げていくべきものであり、このことによって現在の学問レベルに裏打ちされた、住民のための新しい市史ができるのである。

２．市史の編纂方針と内容、計画

（１）市史編纂の方針

[通史編について]

　通史編については学問的に信頼されるものであり、最新の歴史学研究の成果を盛り込んだものでなくてはならない。史料編を踏まえて通史編が執筆されるという歴史学の学問的方法（事実に基づいて過去を総括する）をとり、執筆にあたっては、歴史学研究の到達点を踏まえ、現在の学問レベルを反映できる専門家が中心となる。また、松江市域という地域の側に視点を据え、全国的・世界的な視点から見た松江市の持つ地域的独自性を解明すると同時に、松江市の歴史をとおして日本・世界を問い直し、一方で日本・世界の歴史の中に松江市の歴史を位置づけるよう試みる。

[史料編について]

　市民が地域に残された史料（資料）を基に地域を見直し、顕彰し、未来を見とおすためには通史編だけではなく、史料編に重点を置く必要がある。
この松江市史における史料編には、次の４つの性格をもたせる。
①史料そのものの現在における歴史的総括
　現時点で史料の所在を可能な限りくまなく確認し、その史料を活字化して網羅することで、歴史の検証を可能にし、後世へ史料を引き継ぐことができる。
そのためには、「史料編」は永久性・普遍性をもたなければならない。
②「通史編」叙述の根拠の明示

「通史編」が歴史的事実に基づき記述されているという根拠を示すものである。

③市民のための歴史研究の基礎資料

原文そのままの史料では一般には難解なため、句読点、返り点等を付し、内容によっては解説などを付ける必要がある。

④松江藩とその時代の歴史の重視

松江開府 400 年を契機に編纂を開始するこの松江市史では、これまで十分な史料調査がされていないため明らかにされてこなかった松江藩の歴史を解明するため、可能な限り多くの史料を掲載する。

史料の収集、編纂にあたっては市民の皆さんの協力をいただくとともに、専門家の指導の下に、行政内におかれる編纂組織（室）スタッフがあたる。

[別編について]

松江城といったあるテーマで特筆すべきものは、本編と資料編をあわせた別編として編纂する。

[市民のための市史]

新しい市史は、市民のための市史を目指すものであり、その成果は逐次公開される必要がある。市史編纂事業の終了時には、地域の歴史を活かす観点と、史料保存の意識が松江市民に備わっていることを目標とする。

そのためには、執筆者は編纂過程で市民との座談会や講演会等により意見交換や情報提供するなど、市民とともに市史を作り上げる必要がある。

なお、学問的なレベルを確保し、歴史的検証に耐えうる市史とするためには、一般市民に分り易いものにするとしても限界があるため、一般市民向けの付帯出版物や松江の将来を担う子供向けの副読本などを出版する必要がある。

（２）市史の内容

新松江市史は、通史編５冊、史料編１１冊、別編３冊の合計１９冊を予定とする。

なお、冊子に加えて、デジタル化が望ましい史（資）料やデータはデジタル化して、ＣＤやＤＶＤなどの媒体でも刊行する。

[通史編]

１巻『自然環境・原始・古代』、２巻『中世』、３巻『近世』、４巻『近代』、５巻『現代』

[史料編]

１巻『地質、自然環境』、２巻『原始・古代』、３巻『中世Ⅰ』、４巻『中世Ⅱ』、５巻『近世Ⅰ』（地域史の基礎史料）、６巻『近世Ⅱ』（松江藩政関係史料Ⅰ）、７巻『近世Ⅲ』（松江藩政関係史料Ⅱ）、８巻『近世Ⅳ』（通史編の執筆内容にあわせた内容別編成）、９巻『近代』、１０巻『現代』、１１巻『古絵図･地図』

[別編]

１巻『松江城』、２巻『松江の文化財』（松江市内の指定文化財、建造物、石造物、図書解題等）、３巻『民俗編』

なお、時代区分については、次のとおりとする。

[原始・古代]（～ 11 世紀）～ 11c

[中世]（11 世紀末～慶長５年）11c 末～ 1600

[近世]（慶長５年～明治４年）1600 ～ 1871

[近代]（明治４年～昭和の大合併）1871 ～ 1955

[現代]（昭和の大合併～平成の大合併）1956 ～ 2007

（３）市史編纂上の基礎調査と付帯出版物

①基礎調査

市史編纂をおこなって行くために、次の基礎調査を実施する必要がある。基礎調査の実施にあたっては、後述の市史編纂室が主としてあたる。

[記録史料悉皆調査]市史を出版するときに重要になるのは地域に残された記録史料がどれだけあるかである。松江では悉皆調査（地域に残された全ての古文書等の所在と内容を明らかにする調査）がおこなわれていない。そこで、これらの所在確認のための調査体制を組むとともに、市史編纂上不可欠の解読作業を専門スタッフによる行政内作業として組織的に進める必要がある。なお、調査の成果を史料目録として可能な限り刊行する。

[松江城調査]松江市史の編纂が、松江開府 400 年を契機とした事業であることを考慮し、松江市においては、そのシンボル的遺跡である松江城及び松江城町形成に関連する調査を実施し、「松江城研究」を深めていく必要がある。成果については市史の別編に掲載する。

[松江市域での図書出版物調査]松江市域で出版された図書は、松江市史記述の基礎となるため、松江市域で出版された図書について調査し、解題を作成する必要がある。成果については市史の別編あるいは市史の付帯出版物としてまとめていくことが望ましい。

[石造物調査]石造物については、劣化が著しいものもあり、早急に所在の確認、図化、採拓等が必要である。松江市域に残された石造物のうち、五輪塔、宝篋印塔、銘文を持つ石碑、紀年銘を持つ石造物等を中心に調査を進める必要がある。成果については市史の別編あるいは市史の付帯出版物としてまとめていくことが望ましい。

[建造物調査]老朽化や開発事業により、近代建築物等存続が危ぶまれる建造物も多くあるため、早急に所在の確認、図化等が必要である。成果については市史の別編あるいは市史の付帯出版物としてまとめていくことが望ましい。

[戦争体験調査]聴き取り・座談会の開催、手記の公募などにより戦争体験内容を調査する必要がある。成果については市史の付帯出版物としてまとめていくことが望ましい。

[新聞記事採録調査]近代以降松江の歴史を調べるためにも、新聞記事から松江の出来事を採録する必要がある。成果については市史の付帯出版物としてまとめていくことが望ましい。

[統計史料調査]近代以降は自治体で統計資料を出版しているので、これら統計史料を調査する必要がある。成果については市史の付帯出版物としてまとめていくことが望ましい。

[民俗調査]市内の民俗調査を実施する必要がある。成果については市史の別編に掲載する。

[地名、伝承調査]民俗調査とともに地名伝承調査を実施する必要がある。成果については市史の付帯出版物としてまとめていくことが望ましい。

[自然環境調査]地球温暖化など環境の変化が著しい昨今、将来に伝えていきたい自然環境を記録することは重要である。成果については市史の史料編の『地質・自然環境』に掲載する。

②付帯出版物

市史編纂をおこなって行くために、次の付帯出版物を出版することが効果的である。

[松江市ふるさと文庫]編纂事業の成果等を市民向けに分かりやすく伝えるもの。

[松江市歴史叢書（市史研究）]市史編纂過程での執筆者の研究状況を報告し、紀要の役割をも果たすもの。

[松江市歴史史料集]市史史料編には含めないが、市史執筆上、重要かつ、松江市の歴史を知る上で必要な史料の集成。

[松江市史副読本]市史編纂の成果等を子供向けに分かりやすく伝えるもの。学校などと連携して編集す

る必要がある。なお、市史の刊行を踏まえて発行するものである。

[松江市歴史年表･松江市史索引]市史の通史編の各巻に掲載した年表と索引をまとめて、市史を活用しやすいようにするもの。なお、市民や子供たちに、このふるさと松江をより理解してもらうため、これらの出版物は市史完成後も随時出版する必要がある。

（４）執筆、出版計画

①平成 20 年度より編纂事業を開始する（平成 20 年度に市史編纂基本計画を策定）。
②通史編１巻『自然環境・原始・古代』は平成 26 年度（2014 年度）に出版する。
③通史編２巻『中世』は平成 27 年度（2015 年度）に出版する。
④通史編３巻『近世』は平成 28 年度（2016 年度）に出版する。
⑤通史編４巻『近代』は平成 29 年度（2017 年度）に出版する。
⑥通史編５巻『現代』は平成 30 年度（2018 年度）に出版する。
⑦史料編１巻『地質・自然環境』は平成 30（2018 年度）年度に出版する。
⑧史料編２巻『原始・古代』は平成 23（2011 年度）年度に出版する。
⑨史料編３巻『中世Ⅰ』は平成 24 年度（2012 年度）に出版する。
⑩史料編４巻『中世Ⅱ』は平成 25 年度（2013 年度）に出版する。
⑪史料編５巻『近世Ⅰ』は平成 22 年度（2010 年度）に出版する。
（『近世Ⅰ』は松江開府 400 年祭期間中に出版する。）
⑫史料編６巻『近世Ⅱ』は平成 24 年度（2012 年度）に出版する。
⑬史料編７巻『近世Ⅲ』は平成 26 年度（2014 年度）に出版する。
⑭史料編８巻『近世Ⅳ』は平成 27 年度（2015 年度）に出版する。
⑮史料編９巻『近代』は平成 28 年度（2016 年度）に出版する。
⑯史料編 10 巻『現代』は平成 29 年度（2017 年度）に出版する。
⑰史料編 11 巻『古絵図・地図』は平成 25 年度（2013 年度）に出版する。
⑱別編１巻『松江城』は平成 29 年度（2017 年度）に出版する。
⑲別編２巻『松江の文化財』は平成 23 年度（2011 年度）に出版する。
⑳別編３巻『民俗編』は平成 30 年度（2018 年度）に出版する。
※年表は通史編の巻末に、索引は各編の巻末に収録する。

[出版計画（表）]

平成	［通史編］	［史料編］	［別編］
20 年度			
21 年度			
22 年度		『近世Ⅰ』	
23 年度		『原始・古代』	『松江の文化財』
24 年度		『中世Ⅰ』、『近世Ⅱ』	
25 年度		『中世Ⅱ』、『古絵図・地図』	
26 年度	『自然環境・原始・古代』	『近世Ⅲ』	
27 年度	『中世』	『近世Ⅳ』	
28 年度	『近世』	『近代』	
29 年度	『近代』	『現代』	『松江城』
30 年度	『現代』	『地質・自然環境』	『民俗編』

３．市史編纂体制の整備

（１）市史編纂委員会

市史編纂とその成果を市民に還元していくための基本的事項を決定するために、市史編纂委員会を設置する。この委員は、地元住民代表、専門研究者、行政職員で構成する。

（２）編集委員会

今回の市史で重点を置く史料編を刊行するにあたり、史料収集や史料編の編集を中心となって行う編集委員会を設置する。この委員は、市史編纂委員会の専門研究者に各分野の専門家を数名加えて構成する。

（３）執筆委員会

通史編の執筆内容を調整するため、執筆委員会を設置する。この委員は、通史編の執筆者で構成する。執筆者は各分野で複数の執筆者になると考えられる。なお、執筆委員会に、専門分野ごとに専門部会を設けて、具体的な内容の調整を図る。

（４）市史編纂室

市史編纂を円滑に遂行していくために、行政内に市史編纂室を設置する。計画どおり短期間で作業を進めていくために、市史編纂室では次の職務をおこなう必要がある。

①市史編纂上必要な事務の実施。

②中世、近世、近代文書の悉皆調査とその解読作業。

③執筆者の求めに応じた史料収集の補助。

④市史編纂が住民とともに進められるような企画（講演会開催、編纂経過報告の発刊等）を歴史資料館とともに実施。

⑤市民・住民の代表として「市民のための市史」となるためのチェック機能。

また、これらの職務を実施するために、市史編纂室には市史編纂担当者及び、古文書解読能力を備えた専門職の配置が必要である。ただし、市史編纂室のスタッフのみでは、膨大かつ広範囲にある史料の調査及び解読に限界があるため、史料調査・解読作業の一部をその能力のある外部へ委託する必要がある。なお、史料の保管や調査・解読作業などが行えるように、史料編纂室には十分なスペースが必要となる

資 料 編

松江市史編纂検討委員会 設置要綱

（設置）

第１条　新しい松江市史の編纂方針を定める松江市史編纂基本計画を策定するため、松江市史編纂検討委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

（組織）

第２条　委員会は、委員 15 名で組織する。

２　委員は、次に掲げる者のうちから市長が委嘱する。

(1)　公共的団体等の役員及び職員（行政委員）

(2)　県内で学識経験を有する者（地元有識者委員）

(3)　自然環境、原始古代史、中世史、近世史、近代史の専門家（専門委員）

（委員長及び副委員長）

第３条　委員会に委員長１名及び副委員長２名を置き、委員の互選によってこれを定める。

２　委員長は、会務を総理する。

３　副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき又は委員長が欠けたときは、あらかじめ委員長の指定する副委員長がその職務を代理する。

（委員）

第４条　委員の任期は、平成 21 年３月 31 日までとする。

２　委員は、非常勤とする。

（会議）

第５条　委員会の会議は、委員長が招集する。

２　委員長は、委員会の会議の議長となる。

３　委員会は、委員の半数以上が出席しなければ会議を開くことができない。

４　委員会の会議の運営に関し必要な事項は、会長が別に定める。

（庶務）

第６条　委員会の庶務は、松江市教育委員会文化財課において処理する。

（委任）

第７条　この要綱に定めるもののほか、委員会に関し必要な事項は、市長が定める。

附　則

この要綱は、平成 20 年６月２日から施行する。

松江市史編纂検討委員会委員名簿

氏名	所属及び役職	委員区分	備考
藤岡 大拙	荒神谷博物館館長	地元有識者	委員長
木幡 修介	松江市文化財保護審議会会長	地元有識者	
安部 登	松江郷土館館長	地元有識者	
乾　隆明	松江市文化財保護審議会委員	地元有識者	
岡部 康幸	山陰中央新報社報道部主幹（論説委員）	地元有識者	
髙安 克巳	島根大学副学長	専門（自然環境）	
勝部 昭	松江市文化財保護審議会委員	専門（原始古代史）	
井上 寛司	島根大学名誉教授	専門（中世史）	副委員長
小林 准士	松江市文化財保護審議会委員、島根大学准教授	専門（近世史）	
竹永 三男	島根大学教授	専門（近代史）	
友森 勉	松江市教育委員会理事	行政	副委員長
川原 良一	松江市総務部長	行政	
原　厚	松江市財政部長	行政	
森　秀雄	松江市観光振興部長	行政	
杉谷 充久	松江市教育委員会副教育長	行政	

事務局名簿

氏名	所属及び役職
吉岡 弘行	松江市教育委員会文化財課長
稲田 信	松江市教育委員会文化財課長補佐
内田 文恵	松江市教育委員会文化財課史料編纂係長
木下 誠	松江市教育委員会文化財課文化財係副主任
山根 正明	松江市教育委員会文化財課史料編纂係専門官
宍道 正年	松江市教育委員会文化財課史料編纂係専門官
和田 美幸	松江市教育委員会文化財課史料編纂係嘱託員
福井 将介	松江市教育委員会文化財課史料編纂係嘱託員
沼本 龍	松江市教育委員会文化財課史料編纂係嘱託員

【資料２】第１回 松江市史編纂検討委員会 議事録

第１回 松江市史編纂検討委員会 議事録

１、日　時　平成 20 年７月４日（金）

２、場　所　松江市役所本館西棟第２常任委員会室

３、出席者　（１）委員　藤岡委員、木幡委員、安部委員、岡部委員、髙安委員、勝部委員、森委員、井上委員、小林委員、友森委員、川原委員、星野委員代理、杉谷委員（２）事務局　松浦市長、福島教育長、（文化財課）吉岡課長、稲田課長補佐、内田係長、山根専門官、宍道専門官、木下誠副主任、和田嘱託員、沼本嘱託員、福井嘱託員（歴史資料館整備室）大塚室長、岡崎顧問、稲垣学芸員、西島学芸員、松原学芸員

４、議　題　（１）市史の編纂方針、内容（構成）（２）その他

５、会議経過（発言の要約）

【松浦市長挨拶】今、松江市では、昨年度から５年間をかけて松江開府 400 年祭を開催している。論語の中に「温故知新」という言葉があり、「古きをたずねて新しきを知る」という意味。400 年祭は、まさに「温故知新」そのものであり、松江の歴史を検証し、次のまちづくりに活かしていく。そして、人づくりを行い、新しい時代に向けて飛躍していくことをねらいにしている。この 400 年祭の中で、県都として、全国に通用する新しい「松江市史」の編纂に着手したい。これまでの経過を見ると、昭和 16 年に旧版『松江市誌』を発行し、その後、『新修松江市誌』『市制施行 100 周年記念松江市誌』を刊行している。今回の市史では、400 年祭にふさわしく近世・出雲国松江藩の歴史を中心に据えて、合併した新松江市の歴史を明らかにしたい。また、近年、全国的に歴史史料の散逸が危惧されていることから、松江市では、この貴重な歴史史料の散逸を防ぐためにも、全国的視野に立って、歴史史料の調査に力を入れて、約 10 年をかけて史料に裏打ちをされた市史を編纂したい。そこで、歴史解釈である通史編だけでなく、根拠となる史料をまとめた史料編に力を入れ、「史料が語り、伝える」松江市史をめざしたい。平成 22 年にオープンする予定の歴史資料館は、400 年祭でのハード事業の根幹をなすものであり、市史編纂はソフト事業の主力となる。市史は、松江市の歴史のデータベースとして、後世に引き継ぐ役割を担い、歴史資料館では、市史編纂の過程で明らかになった松江市の歴史を市民に分かりやすく紹介する役割を担う。このように、市史と歴史資料館を車の両輪のように展開して、松江市の歴史を市民が共有し、市民と協働して魅力あるまちづくりの基盤となるようにしていきたい。これこそ「温故知新」の精神に沿うもの。この委員会では、松江市民の大きな財産として素晴らしい松江市史ができるようにご検討いただき、松江市史編纂基本計画を策定していただきたい。

（委嘱状の交付）（委員自己紹介）（事務局紹介）（資料をもとに本会設置の目的を説明）（資料№３をもとに市史編纂基本計画の策定項目（案）及び本会の今後の進め方（案）を説明）（委員長、副委員長の選出）（委員長選出：藤岡委員：地元有識者委員）（副委員長選出：井上委員：専門委員、友森委員：行政委員）（委員長、副委員長の挨拶）

【吉岡課長】これからの進行は、委員長に会議の議長を務めていただくこととなっている。

【藤岡委員長】はじめての会なので、委員から、市史に対する思い、希望を述べていただきたい。

【安部委員】今回の市史では通史編と史料編を分けてつくると市長から話があったが、大変よいことだ。

資料を見ると他の市史も通史編と史料編を分けて 10 数巻を刊行しているので、是非、松江市も 10 数巻の発行を実現してほしい。新修島根県史には史料編があるが、ただ史料を羅列しているだけで、一般の人は使いにくいので、できれば史料編にリード文、解説、解題をつけていただきたい。史料をそれぞれ読み下しするのは大変だと思うが、一般の人でも分かるようにして使いやすいようにしていただきたい。史料で通史を語るとなると、通史編よりも史料編が先に発行されることになると思う。また、今、400 年祭を開催しているところなので、400 年祭の開催中に近世の史料編を一部でもいいので発行していただきたい。

【藤岡委員長】400 年祭の開催中に近世の史料編を一部でもいいので発行してほしいとのことだが、事務局の方ではいかがか。

【吉岡課長】大変ありがたい意見だと思う。事務局としても、是非 400 年祭の開催中に市民の方々に松江市史を読んでいただけると大変ありがたいと思う。委員の皆様、よろしくお願いしたい。

【小林委員】何を編纂するのかというのも大事だが、どのように編纂していくかという編纂のプロセスも大事であると思っている。私は近世を専門としているので江戸時代を中心とした話になるが、江戸時代というのは、それ以前の中世以前と比べて識字率の向上ということからも多くの史料が地域に残っている。この地域に残っている史料は、残っていること自体で地域の文化遺産的な要素があるが、歴史という観点からすると、その史料から民衆の暮らしなど非常に詳しく知ることができる。こういう史料を保存して後世に残していくことが市史編纂の大きな意義であると思う。そういう観点からすると、史料の所在調査・収集・整理という作業過程が非常に重要であると思うので、その作業に力をいれていただきたい。その作業を十分行った

うえで、どういった史料編を刊行していくかということを検討していくことになると思う。史料収集をして史料編を編纂し通史編を編纂するというプロセスを重視していただきたい。

【藤岡委員長】事務局の方から、いかがか。

【吉岡課長】小林委員のおっしゃる通りだと思う。文化財課としては、以前から史料調査を実施しているが、市史編纂に向けて今年度から体制を整えてきている。今後とも、市民の皆様方にこの取組みの周知を図りながら、史料調査を進めていきたい。

【高安委員】市史編纂が 10 年の長丁場であるという点を考えると、市民に対して常に市史編纂事業が見えるような形で紹介される仕組みがあればいいと思う。たとえば、調査成果を文章にする前に講演会を開催するとか、探訪モデルコースを設けて現場をみてもらうなどの工夫をして、市史編纂事業が長い年月の間に市民から忘れられないようにしてはどうかと思う。

【井上副委員長】何のために市史を編纂するのかということだが、一つは後世に伝える史料を調査し確認して保存すること。もう一つは、市民の皆さんに自分が住んでいる地域を学んでもらい、地域に誇りをもってもらうという文化運動であると思う。そのことから、市史編纂事業は単に本をつくるだけでなく、講演会などいろいろな企画を総合的に展開することが必要。なお、市史編纂事業が市民に対して責任をとるためにも、きちんとした計画性をもって、期間内でやりきるといったことも必要となる。

【岡部委員】市民とともに市史ができていくことが大切であると思う。編纂期間が長い中でどうしていくかというところで、他市では執筆者の中間的なまとめとして「紀要」というものを出しているが、内容が専門的で一般市民には分かりにくい。ただ、松江市では市内の歴史や自然を分かりやすく紹介した「ふるさと文庫」というブックレットを一般市民向けに出版しているので、このような取組みを市史編纂と上手に関連付けていくとよいと思う。たとえば、市史編纂での調査で明らかになった成果を先取り的に「ふるさと文庫」で発行して、それに対する市民の反応を市史へフィードバックする方法などが考えられる。是非とも、「ふるさと文庫」のような市民への啓発活動をしていただきたい。

【井上副委員】一般市民向けの「ふるさと文庫」での啓蒙活動も必要だが、同時に「紀要」といった研究活動も必要。島根県の歴史研究は、大変遅れている。他県では、戦前戦後に自治体史が編纂され、1960 年代にも新たな史料調査に基づき自治体史の史料編が編纂され、現在も新たな研究成果を踏まえて史料編が編纂されていますが、島根県は大正頃の 1910 年代に集めた史料に基づく史料編しかない。他県では新たな史料編をもとに研究がされ学問レベルが保たれていることから、その成果をもとに市民に親しみやすいブックレットを作ることができる。しかし、島根県はその土台となる史料がなく、研究者が歴史を研究することができない状況にある。市民へ歴史を紹介するためにも、島根県の学問レベルを全国レベルへあげる作業が先決となる。そのためには、史料調査で明らかになった史料をもとに、執筆者が研究した成果を研究紀要として発表し、学問的な土台を固めたうえで、通史編を編纂する必要がある。

【木幡委員】史料収集について、意見を述べたい。山陰中央新報社は創刊 100 周年を迎えたときに記念事業として新聞にみる山陰の世相 100 年という連載をしたが、史料の保存が不十分で古い新聞がない状況だったので、社告を出して人々から古い新聞を募ったところ大量の新聞が届いた。古新聞と歴史史料とは違うと思うが、新聞を使って古文書等を送ってもらうように呼びかけたら多くの史料が届くと思うし、呼びかけるということで市民の関心も高まるのではないかと思うので、是非試みていただきたい。

【岡部委員】ご協力できる点があれば、ご協力していきたいと思う。ところで、さきほどの「紀要」について、その必要性を否定するものではない。なお、今回の松江市史の編纂は県史の編纂と同等の意味を持つ大変大きな事業であると認識している。そういう意味では大変な作業になると思うので、その事業を成し遂げるだけの体制を整えていただきたい。

【勝部委員】県には古代文化センターなどの研究機関があるので、是非県と連携していただきたい。

また、学校（子どもや先生）と連携して市史を応援してもらえる仕組みがほしいと思う。歴史好きな子どもたちが育っていけば、将来日本を背負っていく松江市出身の人たちがたくさん出てくると思う。また、市史の編纂にあたっては史料の調査・整理・保存のスペースや人手が必要になるので、空いた学校などを活用して、市民の方に参加・協力してもらえる仕組みをつくってはどうかと思う。石見銀山の熊谷家住宅文書で同様のことをしているので、参考にしていただければと思う。

【高安委員】史料そのものの保管も大事だが、史料をデジタル化して、誰でも見られるようにしておくことも大事ではないかと思うので、是非とも史料をデジタル化していただきたい。また、現在の松江市は平成の大合併で１市６町１村という多くの市町村が合併して成立しているので、旧松江市だけではない広い範囲での松江市としての視点をもつ必要があると思う。

【小林委員】松江藩の歴史という視点でいくと市外・県外にも史料が結構あると思われるので、史料調査にあたっては全国的な視野、つまり市域にとらわれないでいただきたい。

【安部委員】今回の市史の編纂は 10 年という長丁場の大事業ですので、やはり市史編纂に携わる人間とそれを支える予算がし

っかり準備されないと成し遂げられないと思う。通史編の執筆は専門の先生方が中心となってされると思うが、史料の発掘や収集には、かなり多くの市民の協力・市民参加が必要になると思いますので、それを裏付けていくための予算を準備していただきたい。また、市史編纂の過程で膨大の史料が集まることになると思うので、しっかりした市史編纂室がないと作業効率が悪くなる。ついては、予算と人とスペースとしての史料編纂室をしっかりと確保していただきたい。

【松浦市長】安部委員のおっしゃる通りだと思う。どのくらいかかるか見積もる必要があるが、市史を編纂するということは決まったことなので、必ず対応させていただきたいと思う。

【木幡委員】今後建設予定の歴史資料館の中に史料編纂ができる部屋は確保されていなのか。

【吉岡課長】歴史資料館の中に市史編纂室は考えていない。現在、文化財課と歴史資料館整備室は文化財の保存活用、史料調査や歴史資料館の整備について連携を図っているところ。今後とも連携を図っていく必要があるので、どのような配置が良いのか現在検討中。

【友森副委員長】既に副市長以下で彦根市などに訪れている。彦根市は、市史編纂室、文化財課、歴史資料館は別々に存在して三位一体で物事を決めているので、そういったところを参考にしながら組織・人の配置等を検討している最中。

【岡部委員】ハードとしての歴史資料館、ソフトとしての市史編纂が車の両輪のようにうまく機能していくためには、歴史資料館の中にいかに市史編纂の成果を盛り込んで、歴史資料館を通じて研究成果を市民へ分かりやすく還元するということが、非常に重要なことなので、常に念頭において、言葉だけでなく市民へ目に見える形で連携してほしい。

【井上副委員長】市史編纂の最大の課題は、しっかりとした史料調査をして、市民の財産となるようなきちんとした史料編を提示して、その史料編をもとに学問的にしっかりとした市史（史料編・通史編）を編纂することにある。そして、本当に市民の皆様に分かっていただくものを提供していくには、市史が発行されたのちに、ふるさと文庫などを使って分かりやすくしていくことだと思う。そうすることによって、本当に市史が活きたものになると思う。そういう意味でも、市史編纂事業は市史を発行して終わりではなく、文化運動であるということになる。

【松浦市長】市民へ分かりやすく研究成果等を提示していくことについては、私も意識しており、歴史資料館において、史料等を噛み砕いて市民に分かりやすく興味をもっていただけるような展示を心がけたい。そのためのスタッフを揃えて対応していきたい。

【小林委員】歴史資料館を整備して、市史を編纂するということで、今、松江市は一気にいろいろなことを同時並行でやろうとしているので、無理をしすぎると両方ともうまくいかないのではないかということが心配されるので、そこはあせらずにやっていく必要があると思う。おそらく市史を編纂していく場合は、歴史資料館の学芸員にも執筆していただくこともあると思うので、あまり負担のないようにする必要があると思う。そういう意味で、市史編纂室で執筆者をサポートするスタッフをどれくらい準備できるかが重要なことになると思う。また、執筆分担の問題でいえば、地元のメンバーはもちろんのこと、全国的に見渡して執筆していただける人を探すことも重要であると思う。松江市史を市民に対してアピールするだけでなく、松江の歴史を全国に向けてアピールすることも重要であると思う。

【井上副委員長】松江の歴史は県都の歴史でもあるので、全国的にみて恥ずかしくない市史を編纂する必要があるので、それにふさわしい執筆陣とするため全国から執筆者を探すことが重要であると思う。その場合、松江（市民）に対して責任を負うことができる研究者である必要がある。

【森委員】市制施行 100 周年記念松江市誌は、当時の事実やデータが羅列されているだけでつまらないと不評である。新修松江市誌は、読み物として面白いと好評である。市誌ではないが、市民から一番面白いといわれているのが、伝承を中心に分かりやすく興味深く書かれている松江八百屋町物語。史料に基づく歴史研究も大変重要だが、伝承の部分に本当の事実が多分にあると思うので、ふるさと文庫やダイジェスト版となるのか分からないが、まとめてほしいと思う。また、通史編の区分として、堀尾時代、京極時代、松平時代などの時代区分ではなく、市民にとっつきやすい区分も考えてほしいと思う。

【井上副委員長】史料がなくても歴史はあるので、伝承は非常に大事なので、それを市史へ活かしていく必要はあると思う。また、市史は学問的にしっかりとしたものであると同時に、市民の期待に応えていく必要がるので、研究成果をどのように分かりやすく通史編として執筆していくかという点については、今後の編纂の中で十分に検討していく必要があると思う。なお、「誌」と「史」の違いだが、「誌」とは現在の生活を整理したものであり、「史」は過去を総括しながら現在はどういう時代なのかを検証して未来を展望するもの。そういう意味で、「史」は市民の期待に応えうるものであると思う。

【藤岡委員長】それでは、次回までに本日皆様からいただいた様々な意見をもとに委員長・副委員長・専門委員で基本計画の素案をまとめたいと思う。

【資料３】松江市史編纂委員会設置要綱

松江市史編纂委員会設置要綱

（設置）
第１条　松江市史（以下「市史」という。）を編纂するため、松江市史編纂委員会（以下「委員会」という。）を設置する。
（所掌事務）
第２条　委員会は、市史編纂全般に関わる基本的事項及び事業内容を協議する。
（組織）
第３条　委員会は、１５名以内の編纂委員（以下「委員」という。）で組織する。
２　委員は、次に掲げる者のうちから、市長が委嘱又は任命する。
　一　県内で学識経験を有する者
　二　松江市文化財保護審議会会長
　三　自然、原始古代、中世、近世、近現代、民俗、歴史地理の専門家
　四　松江市副市長
（任期）
第４条　委員の任期は、２年とする。ただし、委員が欠けた場合における補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。
２　委員は、再任することができる。
（委員長及び副委員長）
第５条　委員会に委員長１名及び副委員長２名を置き、委員の互選によりこれを定める。
２　委員長は、会務を総理し、委員会を代表する。
３　副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき又は委員長が欠けたときは、あらかじめ委員長の指定する副委員長がその職務を代理する。
（会議）
第６条　委員会の会議（以下「会議」という。）は、委員長が招集する。
２　委員長は、会議の議長となる。
３　委員会は、委員の過半数の出席がなければ会議を開くことができない。
４　委員会は、必要があると認めるときは、関係者の出席を求めることができる。
（編集委員会）
第７条　市史編纂事業を具体的に推進するため、委員会に編集委員会を置く。
２　前項の規定による編集委員会については、市長が別に定める。
（庶務）
第８条　委員会の庶務は、松江市教育委員会文化財課史料編纂室において処理する。
（委任）
第９条　この要綱に定めるもののほか、委員会の運営、その他必要な事項は、委員長が委員会に諮って定める。
附　則
この要綱は、平成２１年５月２０日から施行する。

第１回松江市史編纂委員会委員名簿

氏名	所属及び役職	委員区分
安部 登	郷土史家	県内で学識経験を有する者
乾 隆明	松江市文化財保護審議会委員	県内で学識経験を有する者
岡部 康幸	山陰中央新報社報道部主幹（論説委員）	県内で学識経験を有する者
藤岡 大拙	松江市史編纂検討委員会委員長	県内で学識経験を有する者
木幡 修介	松江市文化財保護審議会会長	松江市文化財保護審議会会長
高安 克己	島根大学名誉教授	専門家（自然）
勝部 昭	松江市文化財保護審議会委員	専門家（原始古代）
井上 寛司	松江市史編纂検討委員会副委員長、 島根大学名誉教授	専門家（中世）
小林 准士	松江市文化財保護審議会委員、 島根大学法文学部准教授	専門家（近世）
竹永 三男	島根大学法文学部教授	専門家（近現代）
喜多村 正	島根大学名誉教授	専門家（民俗）
小川 正幸	松江市副市長	松江市副市長

（所属及び役職は当時）

【資料４】第１回 松江市史編纂委員会 議事録

第１回 松江市史編纂委員会 議事録

１、日　時　平成21年６月15日（月）

２、場　所　松江市役所本館西棟第２常任委員会室

３、出席者　（１）安部委員、乾委員、岡部委員、藤岡委員、高安委員、勝部委員、井上委員、小林委員、竹永委員、喜多村委員、小川委員　（２）事務局　松浦市長、福島教育長、友森理事（文化財課・史料編纂室）吉岡課長、稲田課長補佐、木下副主任、内田主任編纂官、山根専門官、居石専門調査員、和田専門調査員、福井専門調査員、沼本専門調査員（歴史資料館整備室）西島副主任、松原主任主事

４、議題、議事の要旨

（１）松江市史編纂基本計画について

昨年度策定された松江市史編纂基本計画の内容を確認した。

（２）松江市史の構成と出版計画について

基本計画をもとに具体的に専門委員の方に集まってもらい検討した結果を踏まえて、井上副委員長より出版計画の変更の提案がなされ、了承された。その変更内容は次のとおり。通史編の4･5巻を基本計画では「近代」「現代」としていたものを、「近世(二)」「近現代」とする。史料編の２巻を基本計画では「原始古代」としていたものを、「原始古代（考古）」とし、3巻を基本計画では「中世Ⅰ」としていたものを、「古代（文献）･中世Ⅰ」とする。なお、木簡や考古資料の中近世･近代の取扱いは今後の課題とする。史料編の9･10巻を基本計画では「近代」「現代」としていたものを、「近現代Ⅰ」「近現代Ⅱ」とする。別編の「松江の文化財」の出版年を平成30年度とし、「民俗」の出版年は平成26年度とする。

（３）松江市史編纂体制について

編纂委員会、編集委員会、専門部会に分けて、それぞれの役割を分担し、市史編纂事業を展開することを事務局より提案し、了承された。また、編集委員会の委員について了承された。

（４）平成21年度事業計画について

編纂委員会、編集委員会の日程・概要、付帯出版物の計画、史料編「近世Ⅰ」の執筆スケジュール等について了承された。

（５）その他

松江城の国宝化運動も考慮して、市民啓発となる付帯出版物を出版するよう努力することとした。市報松江などの広報物を利用して市史編纂の動きを紹介するなど市民に関心をもってもらうよう努力することとした。市史編纂の作業及び協議をする場や史料を保管する場としてのスペースを確保してほしいとの意見が多数あった。市史の編集や執筆者への財政的なフォローをするようにとの意見があった。

５、会議経過（発言の要約）

【松浦市長挨拶】今日は第１回松江市史編纂委員会の開催にあたりお忙しい中をお越しいただきありがとうございます。また、松江市史編纂委員会の委員を快くお引き受けいただき感謝申し上げます。昨年度は、松江市史編纂の着手に向けて、本日ご出席頂いております皆様方を中心とする「松江市史編纂検討委員会」において、検討して頂き、基本的な編纂方針を「松江市史編纂基本計画」としてお纏め頂きました。松江開府400年祭の中の大きな事業の一つとして、本年度よりこの基本計画をもとに松江市史の編纂が始まることとなり、非常に嬉しく思っております。皆様方には編纂委員として市史編纂の舵取りをお願いいたします。まちづくりにあたって一番重要なことは、そのまちの市民がまちを知って郷土愛を持ち、様々な分野に参画し、まちづくりをしていくことであると思います。その郷土愛を醸成するにあたり最も大切なものは歴史であると思います。そのまちの歴史をそこに住んでいる人々が共有することで郷土愛が育まれ、まちづくりへの原動力になると思っております。しかし、歴史について市民の共通理解がなされているかどうかを考えてみると残念ながら十分ではないと思っています。昭和16年に編纂された『松江市誌』が本格的に松江の歴史を編纂したものと言われておりますが、その後は十分な松江市史の編纂が行われにくい状況にありましたので、松江開府400年祭を契機にぜひ後世に残る市史を編纂して、これをもとに新しいまちを市民の皆様といっしょになってつくりあげていきたいと思っております。皆様方の叡智を集めていただき、後の世に残る市史を編纂できるようにお願いいたします。

（松江市長から各委員への委嘱状の交付）（委員自己紹介）（委員長：藤岡大拙委員、副委員長：井上寛司委員（専門委員）、小川正幸委員（行政委員））（委員長、副委員長挨拶）

【藤岡委員長】議題①松江市史基本計画について、事務局より説明をお願いする。

【稲田補佐】（資料により松江市史編纂基本計画を説明）

【藤岡委員長】ただいま説明いただいた基本計画は昨年度策定したもので決定している。ただ、市史の出版計画については市史編纂の準備の会議で若干の変更が検討されたようなので、その会議を取りまとめて頂いた井上副委員長から議題②松江市史の構成と出版計画について説明をお願いする。

【井上副委員長】具体的に専門委員の方に集まってもらい検討した結果、方向性は同じだが、編纂を進めていくうえで若干の修正した方がよいと考えたのが資料④「松江市史の構成と出版計画（変更提案）」に赤字で修正してある部分。通史編４・５巻を基本計画では「近代」「現代」としていたものを、「近世（二）」「近現代」とするもの。これは、基本計画では近世を１冊でまとめる予定だったが、今回の市史は松江藩の時代に重点を置くため、近世を「近世（一）」「近世（二）」の２冊とするもの。そして、「近代」「現代」は基本計画では各１巻としていたが、近現代は１冊で十分とのことであったため「近現代」の１冊とするもの。史料編の２巻を基本計画では「原始古代」として考古資料と文献史料を一つにまとめる予定だったが、考古資料と文献史料は性格が異なり、本の判型を分けた方がよいため、２巻を考古資料をまとめた「原始古代（考古）」とし、文献を３巻に入れて「古代（文献）・中世Ⅰ」とするもの。なお、木簡をどちらの巻で取り扱うか、また、考古資料の中近世・近代のものの取扱いをどうするかなど検討の余地を残している。史料編の9･10巻を基本計画では「近代」と「現代」で分けていたが、近代の史料は１冊では不足し、現代の史料は１冊もいらないことから、近現代を「近現代Ⅰ」「近現代Ⅱ」の２巻とするもの。別編の「松江の文化財」の出版年を平成30年度に変更したい理由は、調査が必要であり時間がかかるため最終年度とするものです。また、「民俗」は基本計画策定時には民俗の専門家が参加していなかったため、その後専門家を交えて検討した結果、調査３年、補足調査１年、執筆１年として、平成26年度発行でよいとのことからそのように変更するもの。その他に変更はない。

【藤岡委員】議題の①松江市史編纂基本計画について、②松江市史の構成と出版計画について質問、意見はないか。

【乾委員】出版計画の変更案を聞いて、無理のない形に収まったのではないかと思う。

【安部委員】出版計画について、平成29年度に別編の「松江城」を出版する計画になっているが、松江城の国宝化を目指す運動が今年から始まるので、市民運動の盛り上がりを考えると平成22年度に出版される史料編「近世Ⅰ」と同時に出版ができないか。国宝化との関わりからタイミングを合わせるほうがよいと思うが、いかがか。

【藤岡委員長】重要な問題提起だと思うが、いかがか。

【井上副委員長】松江城については現時点では調査が不十分。これから本格的な調査が必要で、総合的に解明するには時間をかけて多面的に専門家を集めて検討する必要がある。平成22年度の出版は間に合わないと考える。

【山根委員】文献、絵図･地図（歴史地理学）だけではない多面的な研究成果など色々な角度から光をあて解明する必要がある。家老屋敷、発掘調査で分かったことを吟味し検討し報告書が纏められるとしてもだいぶん時間がかかるとのことで、そのため平成29年度でも難しいと考える。ただ、調査成果など途中で分かったことは、いろいろな手段で出していく必要はある。

【岡部委員】基本計画の中に『ふるさと文庫』など付帯出版物が盛り込んであるので、これを市民運動の流れの中で考え松江城についてある程度分かった所で一般向けに出版すれば両方合致するのではないか。

【藤岡委員長】『ふるさと文庫』のような市民啓発的なものを早めに出していただきたいと思う。松江城の国宝化について文化庁は学術的に高度な調査結果を求めているのか。

【吉岡課長】現在、松江城は建造物として重文指定を受けている。国宝ということになると学術的な裏付けはもちろんだが、ユネスコによる世界遺産登録の動向などをみても、その文化財を住民がいかに愛し活用しているかということもウェイトを持つようになってきているので、市民運動は大切。学術的裏付けについては、松江市史の中で最終的には行われることになるが、市史編纂過程の中で文化庁とは個別の論文等で協議することが可能であると思っている。

【藤岡委員長】それでは、①松江市史編纂基本計画について、②松江市史の構成と出版計画についてはよろしいか。続いて議題③松江市史編纂体制について事務局より説明をお願いする。

【稲田補佐】（資料により松江市史編纂体制を説明）

【藤岡委員長】市史編纂体制模式図案についていかがか。

【乾委員】編集委員には全国レベルの新進気鋭の研究者が揃っており、これでいけるのではないかと思う。

【藤岡委員長】今後市史編纂が進むにつれて更に追加変更等があると思うが、スタートはこれでいきたいと思う。議題④平成21年度事業計画について事務局より説明をお願いする。

【稲田補佐】（資料により平成21年度事業計画を説明）

【藤岡委員長】平成21年度の事業計画について疑問・意見はないか。

【岡部委員】ふるさと文庫「松江市史への序章」について何か具体的なことが分かれば教えてほしい。

【井上副委員長】現在分かっているところで各時代別の松江市の特徴を摘要して、１テーマ3、000字位でその概要を示し、市史編纂の導入にあたって松江市の歴史の全体像イメージを一般市民に理解をしてもらうもの。

【藤岡委員長】何かこの際に希望などないか。

【勝部委員】各専門分野の部会員が共有できるスペース（資料や話し合いを行える）が必要なので､ぜひ確保していただきたい。

【竹永委員】市民の皆さんへ「広報松江」に広報していってはどうか。発見や調査など市史編纂の動きを載せてはどうか。また、こういうものが史料として大切だということも紹介できる。ノート、夏休みの友など戦前・戦中の系統的に集めれば、松江市の教育史の史料になる。引札、近代のものならばチラシなども貴重な史料。

【吉岡課長】ご指摘のことは常に思っている。文化財課では広報に「みんなの文化財」というコーナーを毎月設け、平易な表現により市民に関心を持ってもらおうとしている。同様に、市史についても市民の方に関心を持ってもらうことが大切。広報やホームページを使って積極的に打ってでようと思っているので、執筆をぜひお願いしたいと思う。

【喜多村委員】勝部委員にも言ってもらったが、同じことを強くお願いしたい。交流の場が市史の編纂室にない。現在は、文化財課の事務の方の席を借りて打ち合わせや意見の交換を行っている。気軽に意見交換を行える場を、是非ともお願いする。また、調査によって集まった史料についての置き場もない。史料の保管の場所についてもご理解いただきたい。

【藤岡委員長】合併によって空いた所もあるが、行きづらいと困る。ひとつお願いする。

【井上副委員長】今回の出版計画は年間３冊を出すので大変、通常年に１冊のペースなのであまり例が無く覚悟が必要。きちっとした市史を出すには編纂室を物・人両面での拡充が必要。人的・時間的に編纂室への負担が大きいので、仕事がしやすい状況にしていただきたいと思う。

【藤岡委員長】会を終了するにあたり委員長として一言申し上げる。執筆者は松江市史に参画すると、学問的な業績となり、各先生方へのメリットもあるが、本来の仕事の間をみて市史の執筆をすることから、執筆者への財政的なフォロー（交通費・調査費）など働きやすいように考えて欲しいと思う。10年間で行える体制として財政的な問題もあるとは思うが、市長、教育長が居られるのでお願いしたいと思う。

【福島教育長挨拶】本日は、本市にとって念願の大事業である「松江市史」編纂事業を立ち上げるにあたり、その根幹組織である編纂委員会の委員に快くご就任頂きますとともに、ご多忙の中、ご出席を賜り、誠にありがとうございました。今後、委員の皆様からの貴重なご意見・ご指導を基に、素晴らしい「松江市史」を編纂し、本市の歴史を後世に引き継ぐとともに「温故知新」の言葉どおり、歴史に学び、文化を大切にしつつより良い松江を築いてまいりたいので、引き続きご協力を賜りますようお願い申しあげる。本日は本当にありがとうございました。

【資料５】松江市史編集委員会設置要綱

松江市史編集委員会設置要綱

（設置）

第１条　松江市史編纂委員会設置要綱第７条の規定により、松江市史編集委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

（所掌事務）

第２条　委員会は、次に掲げる職務を行う。

一　市史編纂事業の具体的な内容の企画・立案・実施

二　市史全体の編集

三　市史編纂に必要な資料の調査及び整理並びにその総括

２　委員会は、その職務の実施状況、経過等について、編纂委員会に報告しなければならない。

（組織）

第３条　委員会は、２５名以内の編集委員（以下「委員」という。）で組織する。

２　委員は、次に掲げる者のうちから、市長が委嘱又は任命する。

一　松江市史編纂委員会設置要綱第３条第３号の規定により編纂委員に委嘱された者

二　その他編纂委員会が必要と認める者

（任期）

第４条　委員の任期は、２年とする。ただし、委員が欠けた場合における補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

２　委員は、再任することができる。

（委員長及び副委員長）

第５条　委員会に委員長１名及び副委員長１名を置き、委員の互選によってこれを定める。

２　委員長は、会務を総理し、委員会を代表する。

３　副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき又は委員長が欠けたときは、副委員長がその職務を代理する。

（会議）

第６条　委員会の会議（以下「会議」という。）は、委員長が招集する。

２　委員長は、会議の議長となる。

３　委員会は、委員の過半数の出席がなければ会議を開くことができない。

４　委員会は、必要があると認めるときは、関係者の出席を求めることができる。

（専門部会）

第７条　市史各巻の執筆内容を各専門分野で検討するため、委員会に専門部会を置く。

２　専門部会の専門委員については、委員会で検討する。

３　編纂委員又は委員が、該当する専門部会の部会長となる。

４　専門委員以外の者にも、市史の執筆を依頼することができる。

（資料の調査及び整理）

第８条　委員以外の者にも市史編纂に必要な資料の調査及び整理を依頼することができる。

（庶務）

第９条　委員会の庶務は、松江市教育委員会文化財課史料編纂室において処理する。

（委任）

第１０条　この要綱に定めるもののほか、委員会の運営、その他必要な事項は、委員長が別に定める。

附　則

この要綱は、平成２１年５月２０日から施行する。

【資料６】第１回 松江市史編集委員会 議事録

第１回 松江市史編集委員会 議事録

１、日　時　平成２１年６月２１日（日）

２、場　所　松江市役所本館西棟３階第２常任委員会室

３、出席者（１）高安委員、勝部委員、西尾委員、佐藤委員、井上委員、西田委員、川岡委員、長谷川委員、小林委員、三宅委員、東谷委員、渡辺委員、鳥谷委員、岸本委員、竹永委員、伊藤委員、居石委員、鬼嶋委員、喜多村委員、山根委員（２）事務局　松浦市長、福島教育長、友森理事（文化財課・史料編纂室）吉岡課長、稲田課長補佐、木下誠副主任、内田主任編纂官、居石専門調査員、和田専門調査員、福井専門調査員、沼本専門調査員

４、議　事

（１）委員長・副委員長の選出・議事の要旨

委員長に井上委員、副委員長に小林委員が選出された。

（２）第１回松江市史編纂委員会（６月１５日開催）の報告について

松江市史編纂基本計画について・松江市史編纂体制について・松江市史の構成と出版計画について・平成２１年度事業計画について

（３）松江市史各巻の体裁について

基本的な大枠は了承された。

（４）史料編「近世Ⅰ」の構成・掲載史料・体裁について

近世部会から提案された内容で了承された。

５、会議経過（発言の要約）

【松浦市長挨拶】第１回編集委員会の開催にあたり、皆様には遠方からのご指導をたまわり、また編集委員を快くお引き受けくださり重ねて御礼申し上げる。今回松江開府 400 年祭および市制施行 120 周年を記念して松江市史を作っていくことを計画した。市史はいろいろ作られているが、本格的に作られたのは昭和 16 年というたいへん古い時代のもの。その後、合併等々があり、新たに市史を作っていきたいと思った次第。皆様方にはお世話になるが、よろしくお願い申し上げたいと思っている。松江市でも、まちづくりを一生懸命やろうと思っている。どこの物まねでもないオンリーワンの町をつくっていかねばならない。それが市民のみなさまのいろんな意味でのまちづくりへの参加を促していくことになると思う。オンリーワンのまちづくりといってもどうしても、何かを見本にしていかなくてはならない。それは地域の歴史をさかのぼってみることと国際交流だと思っている。歴史というものをひとつの柱にしてまちづくりをこれからやっていきたいと思っている。この市史の編纂については、編纂検討委員会で基本計画をたてていただき、それに基づき先日は編纂委員会、そして今回編集委員会を開催していただいた。皆様方が実質的な市史編纂の組織と言っていいと思っている。これから 10 年かけて市史を作っていきたい。10 年というと時間があると思っていたが、実際は、年間 2、3 冊をまとめるハードなスケジュールになっている。皆様方は歴史のまさに専門家であり、卓越した知識と経験を活かしてこの際本格的なものをつくって後世に残る業績をたてていただければと思っている。ハードなスケジュールをこなしていただくことになり、大変申し訳なく思っているが、どうぞよろしくお願い申し上げる。

（委員自己紹介）（委員長：井上寛司委員、副委員長：小林准士委員選出）

【井上委員長】松江市史は、実は本格的なものは初めてと言っていいと思う。島根県も同様で、新修島根県史は旧県史を補うものとして作られたもの。島根県は全国の自治体史の中では 2 周遅れで、史料編が無い。悉皆調査は明治末大正初にやったきりというたいへん厳しい状況にある。ようやく端緒につき、学問的にも市民の皆さんからも多方面から期待は大変大きいものがある。しかし同時に財政的に厳しい状態にある。10 年間で 19 冊という計画だが、困難は承知の上、厳しい覚悟で臨まないといけない。専門家集団が専門的に書いたもので、同時に市民に親しまれるものでなければならない。現在にふさわしいものにして 2 周遅れを取り返すといった多面的な課題を背負っている。皆さんには大変ご無理を承知でお願いしている。どうぞよろしくお願いします。

【小林副委員長】自治体史編纂は、これまで宍道町史を編集執筆させていただいただけ。今回は規模も違うので大変だという

ことは認識している。全般的な目配りということでもまだまだ至らない点があると思う。未熟ながら務めさせていただく。どうぞよろしくお願いします。

【井上委員長】第1回松江市史編纂委員会(6月15日開催)の報告について。編集委員会は編纂委員会を踏まえて成立する組織で、先だって編纂委員会が開かれたのでその報告をする。

【稲田補佐】（資料により、松江市史編纂基本計画について、松江市史編纂体制について、松江市史の構成と出版計画について、平成21年度事業計画について説明）

【井上委員長】事務局からご報告いただいた内容について、ご質問、問題提起などあればお願いしたい。

【伊藤委員】近現代について聞きたい。史料収集はこれからだが、膨大なのは新聞雑誌等々、団体等の記録の収集と記録化をしていくには、時間はけっこう厳しいというのを宍道町の経験から予想している。特に新聞雑誌は、膨大な資料から検索して史料編に掲載するものを選択するというのは、史料編纂室の体制でお願いするのはたいへん心苦しいものがある。財政的な裏付けがあっての話だが、学生のアルバイトを使ってそのような作業を進められないか検討していただきたいと思う。

【稲田補佐】新聞については、宍道町のときは宍道町域に関わる記事をマイクロフィルムから抜き出して先生方にお渡ししたが、今回はすべての新聞をこちらでコピーをしてCD-ROM等で先生方にお渡しして、必要なものを先生方がその中から抜き出すというスタイルをとりたいと思っている。併せて索引取りを現在作業としてやっている。

【竹永委員】理想的なものとしては柳川市が柳河新報の見出しをとって年表をつくっていて、同様のものをとお願いしたが難しいということ。松江市に関わる記事索引をとろうと思うと、ほとんど全部の記事の索引を作らないといけないので、デジタルデータにして編集委員に渡してもらい、一部は記事索引をとってもらうということで作業を進めていきたいと思う。他の編集委員の方に叱られるかもしれないが、そのように考えている。

【井上委員】史料編は、時代によって性格が違う。原始・古代・考古編の考古は、中世以降の成果も含める考え。古代・中世編は原則全ての文献史料を載せることにしているが、実際のところは無理かとも思っている。近世編は4冊のうち2冊分を、近現代編は全体を通史編に対応する史料集とする、いわば通史編の根拠を示すことに重点を置くことになっている。史料そのものを悉皆調査してそれを史料編に載せるということではないので、その点は古代・中世と違っている。近世に関しては、史料編Ⅰは未活字のものを中心として市民が広く求めている史料を、史料編Ⅱは藩政史料を載せ、ⅢとⅣは通史編に対応するものとして編集するプランになっている。これはおおまかな方向を定めたもので、議論を進めていくなかで修正の必要が起こってくると思う。それらについては可能な範囲で編纂委員会とも合意を進めながら、具体化していきたいと思っている。（異議なし）

【井上委員長】平成21年度の事業計画についてだが、2回目の編集委員会を8月ないし9月初までにやりたく、それまでに専門部会を開催しないといけない。たいへん厳しいスケジュールでことを運ばなければならないということをご理解いただきたいと思うが、いかがか。

【竹永委員】それぞれの時代ごとの専門部会については、各部会でやられることと思う。近現代でも本日1名欠席なので、できるだけ早く部会を開催し、また史料調査も進めたいと考える。しかし、財政的な問題から費用弁償は無制限というわけにはいかないだろうから、率直なところをお知らせいただければと思うが。

【稲田補佐】費用弁償の関係だが、今の時点では、具体的な部分はご相談させていただいて事務局でもできることは努力させていただくというくらいにとどめさせてもらいたい。

【井上委員長】たいへん難しいところだが、私たちとしては可能な限り皆さんの希望に添うように努力したいと思っている。史料調査についてもどんどんやっていただきたいと同時に、厳しい面もあるので、具体的にどうするか部会長さんや事務局と相談しながら期待に応えるようにしたいと思うのでご理解願いたい。編纂委員会は2回目を今年の秋、来年度の予算要求をする前に開こうということなので、今回及び次回の議論も含めて編纂委員会に持ち上げることになると思う。それでは21年度の事業計画につきましてはよろしいか。（異議なし）

【稲田補佐】（松江市各巻の体裁について資料により説明）

【井上委員長】まだまだ流動的なものも含んでいるし、時代や資料の性格等によって、若干行数ポイント等が違うことはありうる。全部を同じ規格というようにあまり堅くしばらないほうがいいのかとういうこともあるので、大枠としてよろしいか考えいただきたく思う。

【伊藤委員】体裁のことではないが、今回ぜひ ISBN を取得していただきたいと思う。自然科学系に所属していると、ISBN のない書籍は業績としてあまり評価されないので、取得をお願いできたらと思う。

【稲田補佐】ISBN については国際規格であり、松江市教育委員会の出版物を刊行する中でご指摘を受けているところで、友森理事からも督促を受けている。なんとか努力したいと事務局でも思っている。

【井上委員長】だいたいこんな方向で考えていくということに。まだ検討の余地がたくさんあるので、それは今後詰めていくということにしたいと思う。

【小林副委員長】史料編「近世Ⅰ」の構成・掲載史料・体裁について。先ほどご説明いただいたように、史料編は 4 冊出すことが予定されている。基本的には、通史編との対応、もうひとつは松江藩の関係史料をとりあげるということを、近世では方針としている。史料編の前半は、松江藩関係の基本的史料からとりあげていくことにさせていただきたいと思っている。先ほどの日程表にもあったように、近世Ⅰについては来年刊行するということで、400 年祭にあわせて市史をアピールするという意味合いもあって、早めに出すということで本来なら編集委員会にかけてから編集すべきところだすが、出せるものから出していこうということで、資料のような形で案を提出させていただきたいと思う。（資料に従い収録予定史料について説明）

【井上委員長】短い時間の中で作業をすすめるという全体のスケジュールから考えて、松江市史に取り組んでいることを市民のみなさまにご理解いただき関心をもっていただくためにも、前宣伝として市民のみなさまから強い希望の出ていたものを活字化するということで、先走っておりますが、ご理解いただきたいと思う。体裁に関しては、詰め切れないところもあるが、いかがか。（異議なし）では近世編Ⅰはこのような準備に立って進めさせていただく。予定した議題は以上だすが、みなさんの方で何かあればお願いする。

【渡辺委員】市史が完成した後、その過程で収集した資料の保存と公開については検討されているのか。

【稲田補佐】逐次対応して行かなくてはならないということが前提になるが、松江市では平成 22 年度を目途に仮称松江市歴史資料館の建設準備を進めている。当然こちらの方には収蔵庫等を備えている。貴重な資料、文献史料については収蔵が可能だと考えられる。公開も博物館としての役割だと思うので、連携を図ることで、保存と公開ということは十分果たせるのではないかと思っている。

【渡辺委員】博物館だと公開は展示という形になるので、歴史資料館では文書館機能を発揮できる組織作りを考えていただければと思う。

【吉岡課長】かねてからお世話になっている家老家の所蔵文書とも同じことだと思うが、保存については歴史資料館がいちばん良い施設になると思う。ただ蔵の中のものを動かすかどうかは、所有者とのご相談になろうかと思う。公開については、調査に入らせていただくときに個々にお願いはしているので、ご了承がとれたところについては公開していきたいと思う。調査をさせていただいたものについては、基本的に写真撮影を全て行うので、写真での公開とういう方法もとれると思う。研究等ということで深くご覧になりたい方については、所有者とのご相談という形になろうかと思う。当面は歴史資料館で保存、活用については少し息の長いスパンで、文化財課としてはぜひやりたいところだが、財政状況等をにらみながらやっていきたいと思っている。

【井上委員長】歴史資料館は結構だが、文書館機能を持たせたものになっているのかという質問なので、その辺はどうか。

【吉岡課長】いわゆる文書館としての機能は全面にでていない。基本構想の段階ではぜひ文書館機能もということで盛り込んでいただいていたが、敷地の問題、建物スペース等の問題があり、文書館としての機能が充実しているとは思っていない。

【井上委員長】ご指摘いただいた点は、島根県全体に関わる問題で、島根県には文書館がない。それについては以前から検討が一部では進められているが、情報公開法との関係もあって、とくに近代文書をどうするかということもあって、それについてはある程度対応ができつつあるかと思うが、歴史資料も含めた本格的な文書館はなかなか難しいところがあり、その辺が松江市にも影響している。これは島根県全体の課題で、私どもも努力していきたいところ。この 10 年間で流れが変わることを願っている。みなさんにご協力いただいて前に進みたいと思う。

【竹永委員】近現代の部会では、協議後、松江市総務課の書庫を見学することにしている。さらに県立図書館の書庫も見学する。松江藩の日記をはじめ藩政史料もある。よろしければご一緒に。

【井上委員長】これまで島根県では図書館が文書館の機能を兼ねていたので、図書館のなかに文書が入っている。時間があれば、ご覧になってほしい。

【川岡委員】市史編纂途中の収集資料について、自治体によっては、市史編纂のために集めたのであり目的外使用を認めないところと、市史編纂室で一般市民や研究者に公開しているところの二通りるが、編纂途上の資料についてもかなりオープンな形でやるのかどうか伺う。

【井上委員長】具体的には煮詰まっていない。編纂室そのものが整っていない状況にあり、独立した部屋があるわけではない。施設として不十分。市民にも親しまれ、研究者にとっても利用しやすい空間、機能をどう発揮するかは、当面する大きな課題で、獲得目標となっているのが現状。川岡さんからご指摘いただいたところについても、可能な限り市民や研究者にとって利用しやすい形で対応したいと思う。努力をしたいということでご理解いただきたいと思う。予定時間を過ぎたので、会議を終わりたい。

【福島教育長挨拶】本日は念願の大事業である市史編纂事業を立ち上げるにあたり、その中核の組織である編集委員会の委員を皆様方にご就任いただき、忌憚のない、私どもが事業を進めるにあたりよくよく考えなければならない貴重なご意見をちょうだいした。私も実は宍道町に住んでいる者で、宍道町史の悉皆調査にみえたときのことなどいろんなことを思い出し、そのわくわくする気分を思い起こした。大きな松江市になったけれども、松江市民の皆さんに「ああ、わたしたちの住んでいる郷土はこうなんだ」という思いを抱いていただける松江市史になっていきたいと思う。皆さんから今日いただいたご意見をすぐには無理でも、クリアするのが私どもの仕事なので、いい市史ができるようにがんばっていきたいと思う。どうぞこれからもよろしくお願いしたい。今日はありがとうございました。

【資料 7】松江市文書館（仮称）整備構想

松江市文書館（仮称）整備構想

平成 31 年３月
松　江　市

１．整備構想策定の趣旨

(1) 公文書の保存と管理体制の見直し

松江市は、「松江市情報公開条例」（平成 17 年 3 月 31 日制定）に基づき、市が保有する公文書の公開の推進を図るとともに、平成 29 年 3 月策定の「松江市総合計画（2017-2021）」において「共創・協働のまちづくり」を基本姿勢とし、市民と行政が情報を共有し、協働してまちづくりを進めていくことを目指しています。また、情報公開と情報共有の基盤となる公文書の取り扱いについては、「松江市文書取扱規程」（平成 17 年 3 月 31 日制定）において作成から廃棄・保存までの管理ルールを定めるとともに、平成の合併に際し旧市町村から引き継いだ公文書は、本庁舎・文書庫・各支所等において保存しています。

このような中、国の機関における公文書の保存・利用が十分機能するように、「公文書等の管理に関する法律」（平成 21 年 7 月 1 日公布。以下「公文書管理法」という。）が制定されました。この法律では、地方公共団体も歴史公文書等の保存・利用及び保有する文書の適切な管理に関して必要な施策を策定し、実施するように努めなければならないと規定されました。公文書の中には、自治体のあゆみを示す歴史的な価値が高い史料も含まれており、保存期間を経過した公文書を評価・選別した上で歴史公文書として保存し、利用に供して自治体の政治・政策を検証できる体制を整えることは、過去に学び将来に備えるという、社会的な要請に合致するものといえます。

松江市では文書庫や執務室などに、目録上約２６万冊の公文書が保管されていますが、文書管理のガバナンス（統治、組織の取り仕切り）が高いとは言えず、公文書の発生から歴史公文書の保存に至る、「公文書のライフサイクル」を見通した公文書管理体制全体の見直しと、効率的な運営が求められています。（【付属資料 1】「松江市における公文書と地域に所在する歴史史料（古文書等）の数量的現状」参照）

(2) 地域の歴史史料（古文書等）の調査・保存と活用

一方、「松江市総合計画（2017 － 2021）」では、基本施策の一つとして「自然環境・歴史・文化を生かしたまちづくりの推進」を示しており、「本市の歴史や文化に関する資料が次第に明らかになっていますが、今後も調査研究を進めるとともに、市民などが松江市の歴史・文化を学ぶ機会を増やし、郷土理解を深められる取り組みが必要です」と記しています。松江市では、地域の歴史を明らかにするために、松江市史編纂事業などを通して、古文書等の地域に残る歴史史料の調査・保存・活用を行い、各種刊行物の発刊、市民向けの講座などを開催し、情報を発信してきました。松江市には常に松江市民の歴史史料（古文書等）を守り伝え、市民のための歴史編纂を積み重ねてきた蓄積があり、今後も地域の歴史史料（古文書等）の調査・保存と活用について、継続的に取り組んでいくことが必要です。

(3) 文書館整備の必要性と整備構想

「公文書管理法」によれば、国等の諸活動の記録である公文書等は、国民共有の知的資源として国民が主体的に利用できるように、適正な管理・保存・活用を図り、現在及び将来の国民に対し説明する責務が全うされるものとされています。松江市では、「公文書のライフサイクル」を見通した公文書管理体制全体の見直しを進めるとともに、「公文書管理法」の趣旨に沿って選別された歴史公文書と、地域に所在する歴史史料（古文書等）を一体的に保存･活用する「文書館」を整備することが必要であると判断し､「松江市文書館（仮称）整備構想」を策定します。

２．整備構想の位置付け

この整備構想は、「共創・協働のまちづくり」を基本姿勢とし、「公文書管理法」、「公文書館法」（昭和62年12月15日公布）等の趣旨を踏まえ、「松江市総合計画（2017 － 2021）」に示された「時代に適応した効率的な行財政の運営」、「自然環境・歴史・文化を生かしたまちづくりの推進」に資するものとします。

３．松江市文書館（仮称）の基本理念

(1) 松江市での文書館の役割

松江市でも、様々な公文書が日々作成・蓄積されています。公文書には、①市政について市民への説明責任を果たす、②市職員が法令などに基づく事業事務や様々な問題解決の履歴を残すことで、将来の行政運営に備える、③市民だれもが自らの地域の営みを検証できる、というような社会的な役割があります。

公文書は、市民共有の知的資源として継続的に後世に残し、市民だれもが公平公正に利用できるようにする必要があり、そのためには体系的に選別・保存し、市民への説明責任を果たしていく「場」としての「文書館」が必要になります。

また、市民が自らの手で地域の歴史を紐解き、先人たちの蓄積から地域の独自性や自立性を学び、新たな自治の形を作り上げていく、そのために地域の歴史史料（古文書等）や市政情報、政策形成の基本的なデータを提供する施設としての文書館が求められています。

松江市文書館（仮称）は、「歴史公文書」と「地域の歴史史料（古文書等）」を同等に扱うことで、現在はもとより、将来の市民に対しても市がその説明責任を果たしていくための役割を担う施設です。

(2) 松江市文書館（仮称）の基本目標

ア）歴史公文書の保存・活用による行政情報の共有と説明責任の実現

松江市の歴史公文書を適切に保存・管理し、公開することで、行政情報を共有し、市民と行政の新たな協働・信頼関係を築くとともに、行政運営の透明性を担保し、現在及び将来の市民に対する市政の検証と説明責任を果たします。

イ）地域の歴史・文化遺産の継承と地域文化の発展への寄与

地域の歴史・文化遺産を未来に伝えるために、散逸の恐れのある地域の歴史史料（古文書等）の保存に努めるとともに、歴史史料の保存の意義を普及・啓発し、資料所蔵者や保存活動に取り組む市民を支援します。これらの活動を通じて、個性豊かな地域文化の継承と発展に寄与します。

ウ）調査研究に基づいた歴史情報の発信と市民支援体制の構築

未来の松江市のあるべき姿と指針を見出すため、専門性に裏付けられた確かな調査研究に基づいて、地域の歴史・文化に関する情報を公開・発信するとともに、市民や行政組織等からの照会に対して適切な情報提供を行い、その調査活動を支援します。

(3) 松江市文書館（仮称）の基本機能

ア）歴史公文書と地域の歴史史料（古文書等）の収集・整理・保存

文書館における史料保存の原則は、歴史公文書も地域の歴史史料（古文書等）も等しく収集・整理・保存し、市民の利用に供することです。そのためには、必要な情報をもつ様々な史料の保存に努めることが大切です。文書館では、基本的に歴史公文書と地域の歴史史料（古文書等）を扱い、調査に基づく歴史史料の収集（評価・選別）・整理・保存を行います。

イ）歴史公文書と地域の歴史史料（古文書等）に基づく調査研究・歴史編纂

文書館の活動は、職員の専門性に裏付けられた歴史史料の調査研究が基礎となります。これを土台に、歴史公文書分野と地域の歴史史料（古文書等）分野及び歴史編纂分野の活動がバランス良く展開されることによって、地域・歴史・行政に関する様々な情報を市民に還元することができます。

文書館では、松江市域の歴史研究を進めること、歴史公文書・地域に所在する歴史史料（古文書等）を後世に伝え活用していくための保存管理体制を整えることに加え、松江市政史の解明も研究対象とします。その成果は将来の歴史編纂事業に備え、刊行物や講座などで市民に公表するとともに、効率的な市政運営に活かします。

ウ）歴史史料や歴史情報の公開と提供

市民共有の知的資源としての歴史史料や歴史情報の公開と活用を一層進める必要があります。地域の歴史を何らかの形で表していくことは、市民の期待に応える基本的な作業であり、利用者にとって使いやすく便利な情報提供の方法を充実させていきます。

情報提供の方法として、①史料検索のための目録の作成・供覧、② 既刊ｼﾘｰｽﾞである「松江市ふるさと文庫」「松江市歴史叢書」「松江市歴史史料集」等の継続的な発刊、③歴史研究の成果を反映した講座の開催、④ 調査研究の成果や史料原本等を活用したミニ展示などを行います。また、市民や行政組織等の求める情報についてレファレンスサービス（調査相談）を行い、市民の学習や行政事務を支援します。

エ）歴史公文書・歴史史料（古文書等）を保存する類似施設との連携

文書館では、専門性に基づく調査研究の蓄積を基礎として、歴史公文書や歴史史料（古文書等）を保存する松江歴史館、松江市立図書館、県立類似施設など、松江市域内外に所在する歴史史料保存施設との連携を図ります。

４．松江市の公文書管理体制の見直し

(1) 見直し事項

松江市文書館（仮称）における歴史公文書の保存・利用を円滑に行うため、松江市の公文書管理体制を見直します。

①国の公文書管理制度(「公文書管理法」･「同施行令」)に準じて公文書の保存年限の見直しを行います。(国は公文書の保存年限を最大 30 年とする)

②文書管理の専門部署を総務部総務課に設け専門的職員〔ﾚｺｰﾄﾞﾏﾈｰｼﾞｬｰ〕を配置するなど、公文書管理において文書の作成時から適正な管理ができるよう職員の指導、研修を行い、職員への意識付けや文書管理のための目録の整理を進め、公文書管理のガバナンスを高めます。

③総務課に引き継がれた現用公文書を保管する文書庫は市内５か所に点在しています。現用公文書を効率的に保管及び評価・選別ができるようこれを集約し、１か所での保管を目指します。

④保存年限を経過した公文書は非現用文書とし、歴史史料の専門的職員〔アーキビスト〕により重要な公文書は歴史公文書として残し、他のものは廃棄する評価・選別を適正に行います。

⑤松江市に文書館を整備することで、松江市として大切な歴史公文書と地域に所在する歴史史料（古文書等）とを適正に整理・保存・公開（調査研究）します。文書館の整備により、公文書の作成から歴史公文書の保存までの一連の仕組みを構築します。

⑥一連の公文書管理の基本的な考えを示すために、「松江市公文書管理の基本的な考え方」や「評価・選別の基準」などを整えます。

(2) 例規等の整備

松江市の公文書管理体制の見直しを実行するために、文書作成から保存、廃棄、文書館への移管、歴史

公文書の利用までの、公文書のライフサイクルについて規定する関係規則等の整備を行います。

５．松江市文書館（仮称）の施設と運営

(1) 施設のあり方

松江市文書館（仮称）の整備にあたっては、既存の公共施設の活用などを考慮しつつも、歴史公文書及び地域の歴史史料（古文書等）を将来にわたって、適切かつ安全に管理できるように耐火･耐震性を持ち、温度・湿度管理が可能で、セキュリティを確保できる災害等に強い建物を理想とします。

また、利用者が利用しやすく、職員が円滑に管理・運営できる必要があります。

(2) 施設の規模

文書館では、史料保存機関の役割を果たすため、年々増加が見込まれる歴史公文書及び地域の歴史史料（古文書等）の収蔵量に対応できるスペースを確保する必要があります。

施設の規模については、松江市所蔵の公文書、地域に所在する歴史史料（古文書等）の数量的現状に基づき検討します。

(3) 設置場所

施設は交通の便がよく、市民の利用しやすい場所を検討します。また、津波や水害による浸水等の災害に備えた対応策を検討します。施設整備にあたっては、文書保存に適した環境をもつ既存施設の有効活用などを考慮し検討します。

(4) 施設構成

文書館の役割を果たすために下記のような機能が必要です。

ア）史料保存機能（一時保管室、収蔵庫、特別収蔵庫など）

イ）調査・整理・写真撮影機能

ウ）歴史史料の公開・提供機能（一般閲覧室など）

エ）情報発信機能（展示コーナー、講座室など）

オ）一般的な機能（事務室、会議室、物品庫、トイレ、駐車場など）

(5) 管理運営体制

文書館の設置と管理運営に関する事項について「松江市文書館（仮称）管理運営条例（仮称）」等を制定し、開館時間・休館日等は、市民が利用しやすいように定める必要があります。

文書館には館長､専門的職員（ｱｰｷﾋﾞｽﾄ）などのほか､必要な職員を配置する必要があります。文書館では、基本的に歴史公文書と地域の歴史史料（古文書等）が管理対象となることから､専門的職員（ｱｰｷﾋﾞｽﾄ）には、歴史公文書と地域の歴史史料（古文書等）への幅広い知識、保存管理の知識・技術、地域の歴史や行政に関する専門的な知識などが求められます。

文書館では、行政での業務経験を有する職員や地域の歴史史料（古文書等）の状況に習熟している職員がバランスよく配置され、そのような中で文書館の専門的職員（ｱｰｷﾋﾞｽﾄ）が育成・配置され、また、現用公文書に関する専門的職員（ﾚｺｰﾄﾞﾏﾈｰｼﾞｬｰ）との連携が密接に行われることが望ましいと考えます。

(6) 運営審議機関と客員研究員制度

文書館の適切な運営を確保するため､「松江市文書館（仮称）運営審議委員会（仮称）」を設置する必要があります。また、史料に基づく歴史研究を継続的に行うために、松江市史編纂事業体制を活用し、客員研究員制度を設置する必要があります。

(7) 松江歴史館、松江市立図書館との役割分担と連携

松江市には、文書館と類似した歴史史料保存機関として、松江歴史館と松江市立図書館があります。

これらの各施設で所蔵されている歴史史料は、それぞれの施設で管理するものとしますが、松江市文書館（仮称）は文書（歴史公文書・古文書等の歴史史料）の中核施設として、各施設で収蔵管理が困難なもののうち、文書館で保存・活用すべき歴史史料については、別途協議のうえ、文書館に移管し保存・活用する必要があります。

なお、各館が持つ歴史史料の保存と活用にあたり、専門的職員の人的交流を含めて、相互の連携を積極的に図る必要があります。

６．松江市文書館（仮称）整備の推進にあたって

(1) 関連計画の策定と例規等の整備

現在、松江市では総務部（総務課）が条例等に基づく現用公文書の管理と保存を行い、歴史まちづくり部（史料編纂課・松江歴史館）が地域の歴史史料（古文書等）の調査・保存、歴史研究、講座の開催、各種刊行物の刊行を行うなど、本整備構想に掲げる松江市文書館（仮称）の機能に類似した業務を行っています。

松江市総務部、歴史まちづくり部では、松江市文書館（仮称）の具体的な整備に向けて「松江市文書館（仮称）整備計画」や「松江市公文書管理の基本的な考え方」、「評価・選別の基準」などを策定するとともに、「松江市公文書管理条例（仮称）」や「松江市文書館（仮称）管理運営条例（仮称）」など、関係条例等の整備を行う必要があります。

(2) 松江市文書館（仮称）整備の時期

平成 31（2019）年度に松江市史編纂事業が終了し史料編纂課の組織変更が求められていることから、平成 32(2020)年度には、発生から 30 年を経過したような永年保存文書の点検や、歴史史料の継続調査、「評価・選別の基準」の作成など、事前の準備・検討を進めるために、文書館機能を先行的に整備する必要があります。その後、新庁舎建設スケジュールとの調整を図りつつ、松江市文書館（仮称）を整備していく必要があります。

【用語の解説】

歴史公文書・・・歴史史料として重要な公文書

ﾚｺｰﾄﾞﾏﾈｰｼﾞｬｰ・・・組織全体の文書管理の方針・規則・手順を策定し、実施推進する責任を有する専任の文書管理の専門的職員

ｱｰｷﾋﾞｽﾄ・・・公文書管理を支え、個人や組織、社会の記録を保存し、提供する専門的職員

【付属資料】

【資料１】松江市における公文書と地域に所在する歴史史料（古文書等）の数量的現状

【公文書の数量的現状】

表①　松江市保管公文書の収納面積

表②　単年度で発生する永年保存文書

表③　平成期に発生した文書量

表④　平成期の公文書の発生状況

【地域に所在する歴史史料（古文書等）の数量的現状】

表⑤　調査済み文書点数

【資料２】公文書管理と文書館のイメージ

①松江市における公文書と地域に所在する歴史史料（古文書等）の管理に関する試案

②専門的職員の配置場所と所管文書の仕分け

③文書（現用文書、歴史公文書、歴史史料）の分担管理のイメージ

④松江市文書館（仮称）の基本機能

【資料３】文書管理改善スケジュール（案）

【資料1】
松江市における公文書と地域に所在する歴史史料（古文書等）の数量的現状

【公文書の数量的現状】

表①松江市保管公文書の収納面積

松江市が保管する公文書の収納面積（消防・支所を除く）は1,622㎡、このうち第1文書庫と各課執務室を合わせた本庁舎内での公文書収納面積は、少なくとも約1,200㎡と試算できます。

（現用公文書の約7割が永年保存文書なので、本庁舎内での永年保存文書収納面積は1,200㎡×0.7=約840㎡と試算できます）

表②単年度で発生する永年保存文書

文書作成時の約40%（冊数）が永年保存文書となっています。

表③平成期に発生した文書量

永年保存文書量（冊数）の割合は、昭和期以前（約100年間）が全体の5%（冊数）に対し、平成元～28年の28年間で95%（冊数）を占めています。

表④平成期の公文書の発生状況

平成期における公文書の発生状況（件数）をみると、平成7年と平成16年に文書発生件数が大きく増加しています。（公文書のﾏｲｸﾛﾌｨﾙﾑ化と平成合併の影響か）

【地域に所在する歴史史料（古文書等）の数量的現状】

表⑤　調査済み文書点数

平成29年12月15日現在の調査点数は101,526点。松江市域に所在する予想古文書史料数は375,220点程と計算でき、寄贈・寄託実績（約38%）から、松江市域内に所在するであろう全ての古文書史料の予想収納面積は約114.4㎡と試算できます。

資料1

表①　松江市保管公文書の収納面積について

1.【公文書書庫】

名称	場所	利用開始	文書収納面積（㎡）	書架総延長（m）A	保存延長（m）B	空き延長（m）A−B	収容率 B/A(%)
第1文書庫	**松江市役所別館1階**	S54年	**120.0**	903.0	903.0	0.0	100
第2文書庫	浜佐田文書庫1階（2室）	H元年	128.4	746.1	534.4	211.7	72
第3文書庫	第3別館1階（浅利）	H12年	69.8	557.5	557.5	0.0	100
第4文書庫	松江市ｼﾙﾊﾞｰﾜｰｸﾌﾟﾗｻﾞ2階（3室）	H18年1月	102	361.3	346.6	14.7	96
第5文書庫	旧島根町商工観光センター1階文書庫（2室）	H23年8月	121	606.6	467.8	138.8	77
合計			a **541.2**	3,174.5	2,809.3	365.2	88

※書架総延長(m)等は、H28年度実測値
※棚の幅は、規格品ではボックス3箱で80cmであるが、計測値86cmで計算したもの。計算は、棚1つ分の長さを、0.86m＊段数＊書棚数で算出し、合計値を小数点以下2位を四捨五入した。

2.【各課執務室】

（文書収納書架延長(m)は文書量調査集計表（平成28年度総務課調べ）より算出）

名称・保存場所		文書収納書架延長			文書収納面積（㎡）	備考
		公文書(m)	書籍等(m)	文書量計(m)		
各課執務室	全部局（消防・支所を除く）	9,237.92	1,585.16	10,823.08	b 1,081.1	①幅94cm、奥行き35cm、6段の書棚に収納すれば、1,638棚が必要。(=9,237.92／(0.94m×6段)) ②文書収納面積として、0.33㎡(0.94m×0.35m)×2(通路計算)×1,638棚＝1,081.08㎡が必要。
	参考：消防・支所を含めた場合	文書(m) 12,725.87	書籍等(m) 1,976.91	文書量計(m) 14,702.78	1,489.6	同上

3.【公文書（現用文書）の収納面積】

【公文書書庫】＋【各課執務室】の公文書収納面積 (a541.2㎡＋b1081.1㎡)	a＋b **1,622.3㎡**	永年保存文書の割合…223,454冊（永年保存）／314,748冊（全公文書）=0.7099 ⇒全公文書のうち約70%が永年保存文書（平成28年11月時点総務課文書目録（冊数）より算出） ⇒【公文書書庫】＋【各課執務室】永年保存文書の収納面積=1,622㎡×0.7=1,135㎡

本庁舎の公文書収納面積（第1文書庫+各課執務室）	第2～4文書庫の収納面積
1,201.1㎡ (120㎡+1081.1㎡)	421.1㎡

本庁舎内で、永年保存文書は少なくとも1,200㎡×0.7=約840㎡を占めていると試算できる

資料1

表② 単年度で発生する永年保存文書

（平成28年11月時点総務課文書目録より算出）

	総文書量		永年保存文書量		総文書量に対する永年保存文書の割合		備考
年度	件数	冊数	件数	冊数	件数	冊数	
H28	7,306	19,961	1,187	7,823	16%	39%	
H27	6,385	18,037	1,175	7,986	18%	44%	1年保存文書廃棄
H26	6,020	15,870	1,116	6,796	19%	43%	
H25	5,052	15,065	1,105	7,734	22%	51%	3年保存文書廃棄
H24	5,184	15,433	1,190	7,716	23%	50%	
H23	2,517	11,532	1,270	8,421	50%	73%	5年保存文書廃棄 東出雲町合併
H22	2,518	10,611	1,298	6,628	52%	62%	
H21	2,624	9,524	1,329	6,379	51%	67%	
H20	2,528	9,861	1,228	5,710	49%	58%	
H19	2,202	10,008	1,154	7,005	52%	70%	
H18	1,491	8,531	1,317	7,067	88%	83%	10年保存文書廃棄
H17	1,629	8,788	1,462	8,447	90%	96%	H17合併

※上記数字は平成28年11月時点総務課文書目録の発生年度欄を「H○年度」に選択したフィルターをかけて算出したもので、
「H○～H○年度」や「H○・H○」など複数年度に渡るものは含んでいない。
※本表には消防・支所（合併後）分も含んでいる。

資料1

表③　平成期に発生した文書量

（平成28年11月時点総務課文書目録より算出）

	全文書				永年保存文書				備考
	件数	（全件数に対する割合）	冊数	（全冊数に対する割合）	件数	（全件数に対する割合）	冊数	（全冊数に対する割合）	
昭和期以前	4,690	7%	9,421	**3.6%**	4,640	15%	9,407	4.9%	うち40冊は消防総務課 【公文書書庫】+【各課執務室】の公文書収納面積は1,622.3㎡と計算（表①）。全文書(冊数)に対する割合は4%なので、昭和期以前文書の収納面積は1,622.3㎡×0.04=64.9㎡
平成元～28年	58,026	93%	251,505	**96.4%**	26,332	85%	183,992	95.1%	【公文書書庫】+【各課執務室】の公文書収納面積は1,622.3㎡と計算（表①）。全文書(冊数)に対する割合は96%なので、平成元～28年文書の収納面積は1,622.3㎡×0.96=1,557.4㎡。
合計	62,716		260,926		30,972		193,399		

※本表の「昭和期以前」とは平成28年11月時点総務課文書目録の発生年度欄の「M〇」、「M〇～」「S〇～H〇」等を選択したもので、昭和期以前を起点として発生し、複数年度にまたがるものを含んでいる。

※本表は消防・支所(合併後)分も含んでいる。

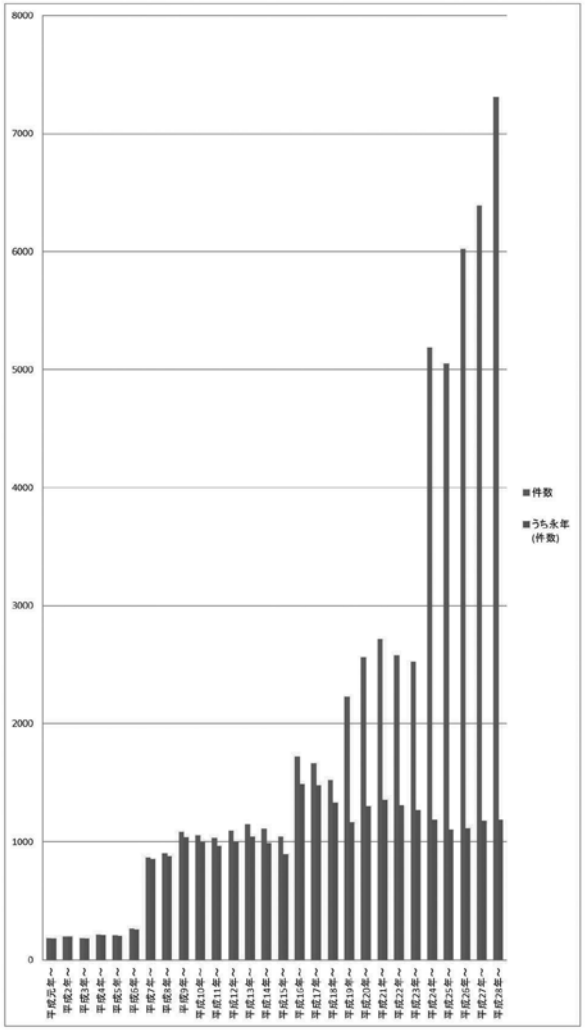
資料1

表④ 平成期の公文書の発生状況

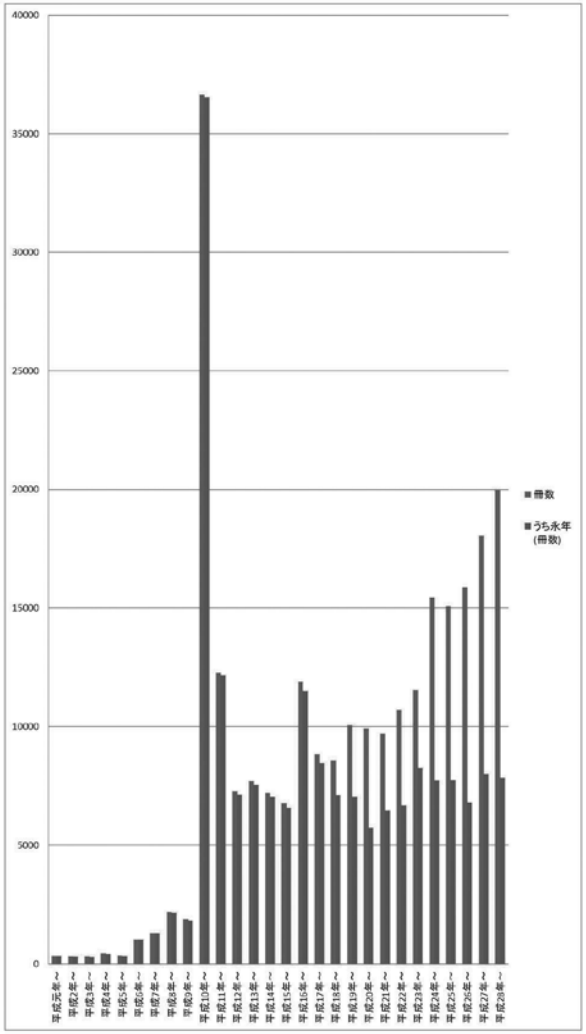
※平成28年11月時点総務課文書目録より算出

	件数	うち永年（件数）	冊数	うち永年（冊数）	箱数	割合	備考
平成元年～	184	181	327	325	32	99.4%	
平成2年～	197	195	302	284	20	94.0%	
平成3年～	182	180	294	280	25	95.2%	
平成4年～	210	208	442	421	20	95.2%	
平成5年～	207	201	348	307	18	88.2%	
平成6年～	263	257	1017	1011	21	99.4%	
平成7年～	866	855	1296	1287	32	99.3%	マイクロフィルム導入
平成8年～	899	878	2176	2160	21	99.3%	
平成9年～	1082	1037	1882	1812	18	96.3%	ボックスファイリング導入
平成10年～	1053	995	36649	36545	259	99.7%	戸籍26,000冊
平成11年～	1032	963	12270	12137	32	98.9%	
平成12年～	1094	998	7268	7111	263	97.8%	
平成13年～	1148	1043	7691	7522	39	97.8%	
平成14年～	1113	988	7195	7021	42	97.6%	
平成15年～	1043	894	6764	6566	28	97.1%	
平成16年～	1720	1484	11889	11497	39	96.7%	
平成17年～	1660	1475	8827	8459	31	95.8%	
平成18年～	1520	1329	8565	7083	25	82.7%	10年保存文書廃棄
平成19年～	2229	1163	10046	7013	47	69.8%	
平成20年～	2563	1301	9905	5722	12	57.8%	
平成21年～	2712	1355	9693	6468	69	66.7%	
平成22年～	2577	1309	10698	6665	143	62.3%	
平成23年～	2520	1270	11535	8241	125	71.4%	5年保存文書廃棄
平成24年～	5185	1190	15434	7716	209	50.0%	
平成25年～	5052	1105	15065	7734	182	51.3%	3年保存文書廃棄
平成26年～	6020	1116	15870	6796	166	42.8%	
平成27年～	6387	1175	18037	7986	340	44.3%	1年保存文書廃棄
平成28年～	7306	1187	19965	7823	70	39.2%	

※件数及び冊数は、平成28年11月時点総務課文書目録の発生年度欄の「H○年度」、「H○～H○年度」、「H○・H○」等を選択してフィルターをかけ算出したもので、複数年度にまたがる文書を含んでいる。
※本表には消防・支所(合併後)分も含んでいる。



件数で見る公文書の発生状況



冊数で見る公文書の発生状況

資料１

表⑤　調査済み歴史史料（古文書等）点数一覧

国庫補助事業実施分：	20,761 点
旧町村役場・公民館・区有文書調査実施分：	20,739 点
その他調査実施分：	41,265 点
宍道町実施分：	18,761 点
合計：	101,526 点

※平成30年12月時点

松江歴史館収蔵	23,124	寄託
	10,118	寄贈
史料編纂課収蔵	5,252	寄贈
合計：	38,494	

文書収納スペースの試案

実数

①史料編纂課の調査点数（平成30年12月28日現在）	101,526点	
②松江市への古文書史料寄贈・寄託点数	38,494点	寄贈・寄託率　②／①≒３８％
		文書箱一箱（50×37×H26）に平均約100点収納するので約385箱

想定

①松江市域に所在する予想古文書史料数	375,220点	悉皆的な古文書調査を行った宍道町を参考とし、18,761（宍道町の調査点数）を20倍（人口比）している。
②市域所在古文書史料の予想寄贈・寄託点数	約142,584点	①×寄贈・寄託率（38%）
		文書箱一箱100点収納として約1,426箱
③古文書史料の予想寄贈・寄託品収納スペース（松江市域内にあるであろう全ての古文書史料）	約114.4㎡	書架（0.50×0.80×＝0.4㎡）に10箱収入できるので、必要書架は143個 0.4㎡×2（通路計算）×143＝114.4㎡

【資料2】
公文書管理と文書館のイメージ

松江市における公文書管理の大きな課題は、文書作成時に全文書量の約4割（冊数）が永年保存文書に設定され、その後、評価選別(廃棄と保存)の仕組みが無い事です。

課題の解決のための一試案として、松江市においても、

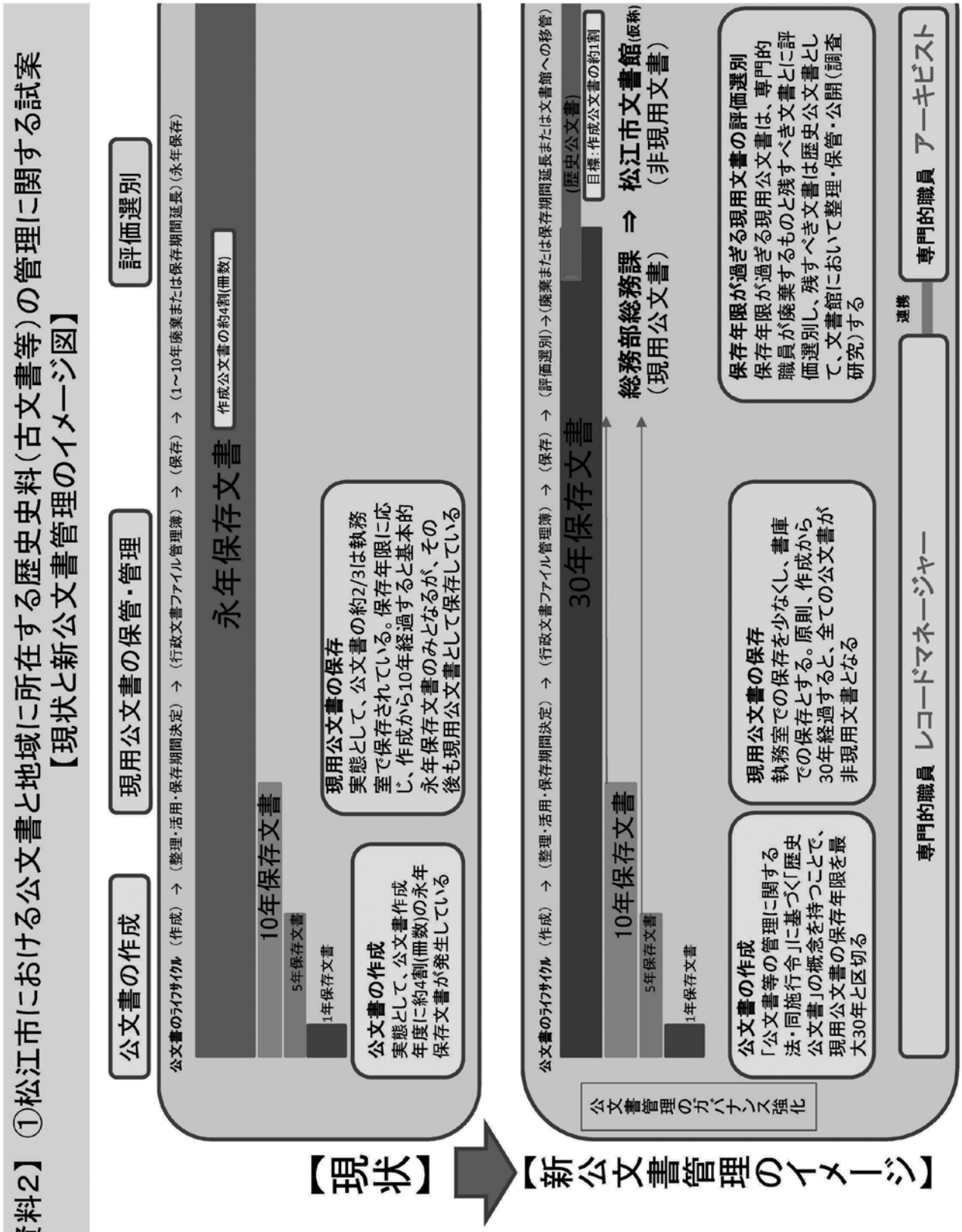
①国の公文書管理制度（公文書等の管理に関する法律・施行令）に準じて公文書の保存年限を最大30年と区切る。

②文書管理の専門的職員〔レコードマネージャー〕を配置するなど、公文書管理のガバナンスを高め、特に文書作成時に適正な管理を行う。

③保存年限を経過した公文書は非現用文書とし、歴史史料の専門的職員〔アーキビスト〕により、重要な公文書は歴史公文書として残し、他のものは廃棄する（評価・選別）ことで、最終的に歴史公文書（永年保存）は作成公文書の約1割とすることを目標とする。

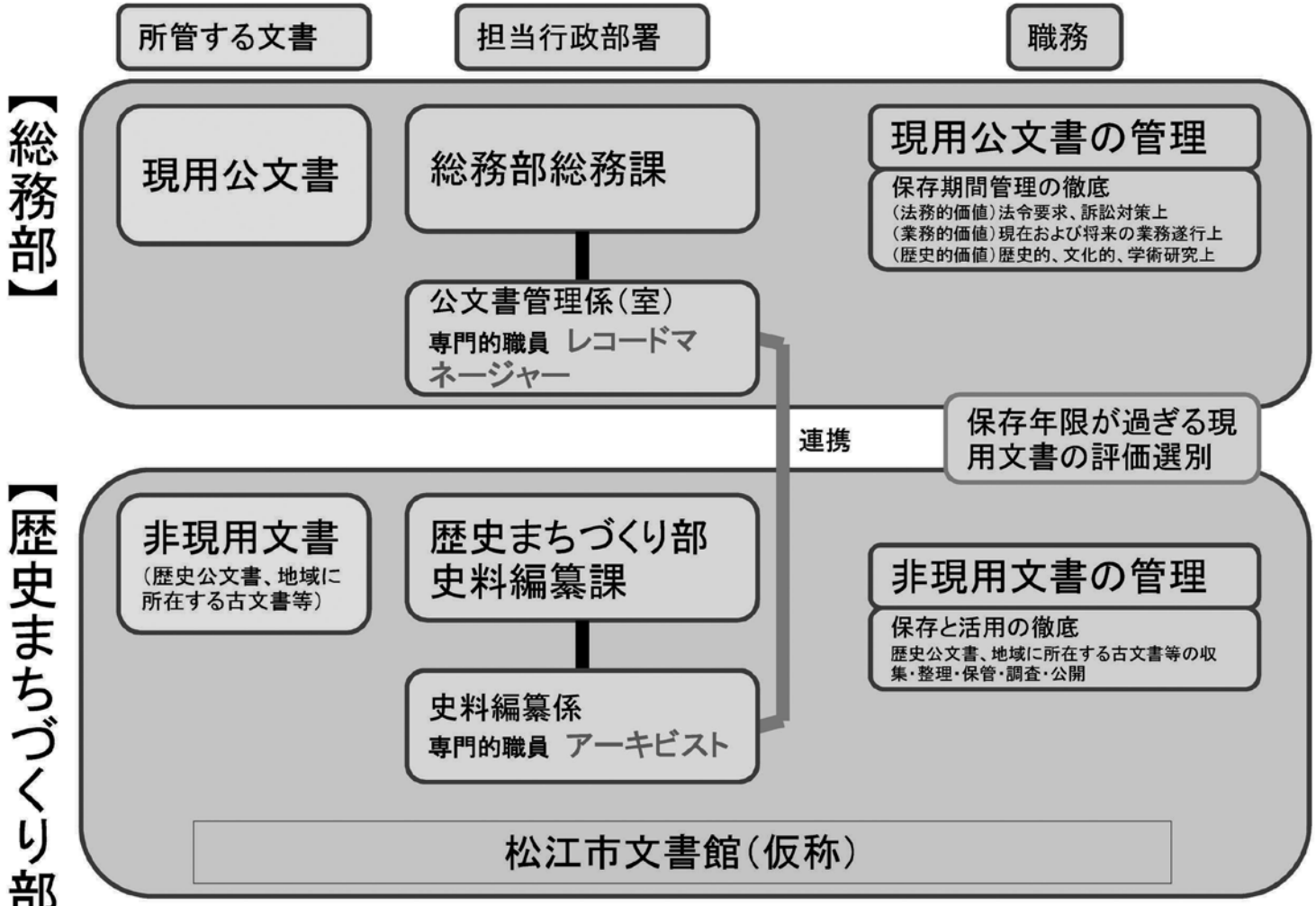
④松江市文書館（仮称）を設置し、松江市として大切な歴史公文書と地域に所在する歴史史料（古文書等）とを適正に整理・保管・公開（調査研究）するという、一連の仕組みを早急に構築していく必要があります。

【イメージ図】
①松江市における公文書と地域に所在する歴史史料の管理に関する試案
②専門的職員の配置と所管文書の仕分け
③文書（現用文書、歴史公文書、歴史史料）の分担管理のイメージ
④松江市文書館（仮称）の基本機能

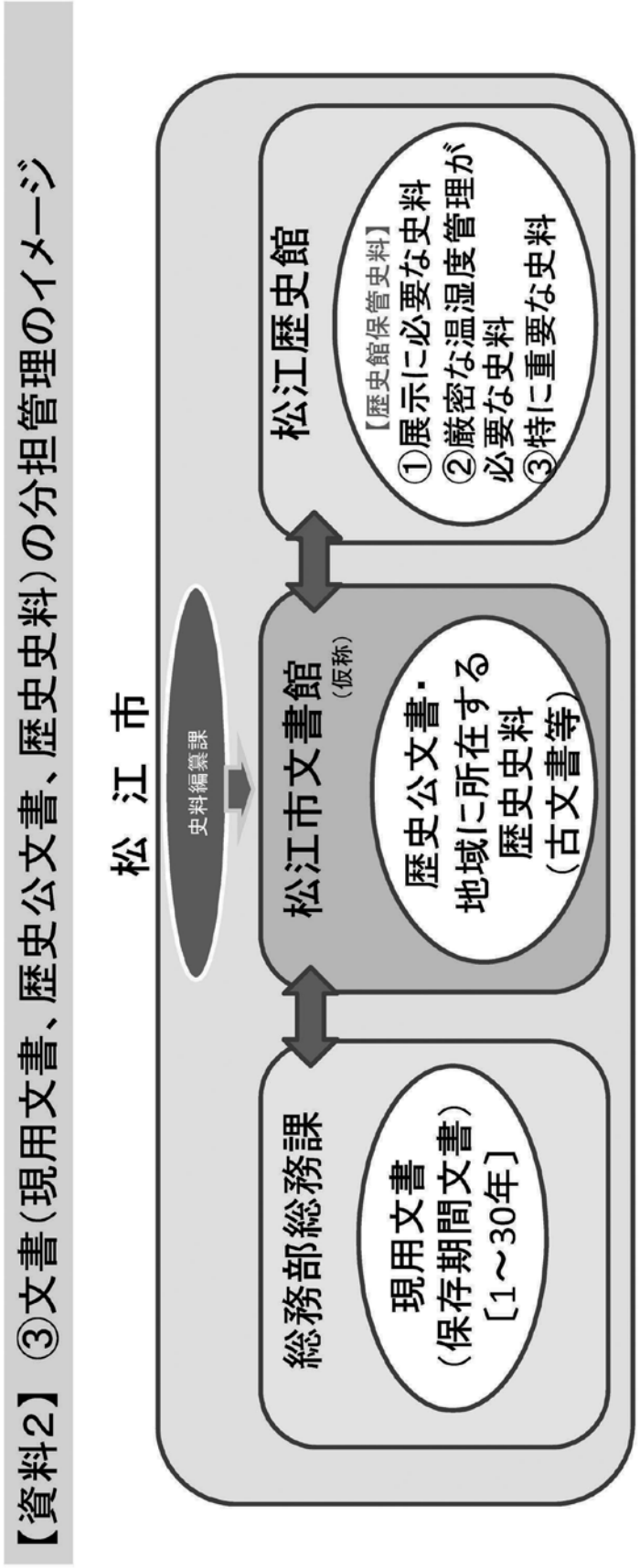

【資料2】 ①松江市における公文書と地域に所在する歴史史料（古文書等）の管理に関する試案
【現状と新公文書管理のイメージ図】
公文書の作成
現用公文書の保管・管理
評価選別
公文書のライフサイクル （作成） → （整理・活用・保存期間決定） → （行政文書ファイル管理簿） → （保存） → （1～10年廃棄または保存期間延長）（永年保存）
永年保存文書
作成公文書の約4割(冊数)
10年保存文書
5年保存文書
1年保存文書
公文書の作成
実態として、公文書作成年度に約4割(冊数)の永年保存文書が発生している
現用公文書の保存
実態として、公文書の約2/3は執務室で保存されている。保存年限に応じ、作成から10年経過すると基本的永年保存文書のみとなるが、その後も現用公文書として保存している
【現状】
【新公文書管理のイメージ】
公文書のライフサイクル （作成） → （整理・活用・保存期間決定） → （行政文書ファイル管理簿） → （保存） → （評価選別）→（廃棄または保存期間延長または文書館への移管）
30年保存文書
目標：作成公文書の約1割
（歴史公文書）
10年保存文書
5年保存文書
1年保存文書
公文書管理のガバナンス強化
総務部総務課 ⇒ 松江市文書館(仮称)
（現用公文書）
（非現用文書）
公文書の作成
「公文書等の管理に関する法・同施行令」に基づく「歴史公文書」の概念を持つことで、現用公文書の保存年限を最大30年と区切る
現用公文書の保存
執務室での保存を少なくし、書庫での保存とする。原則、作成から30年経過すると、全ての公文書が非現用文書となる
保存年限が過ぎる現用文書の評価選別
保存年限が過ぎる現用公文書は、専門的職員が廃棄するものと残すべき文書とに評価選別し、残すべき文書は歴史公文書として、文書館において整理・保管・公開（調査研究）する
連携
専門的職員 アーキビスト
専門的職員 レコードマネージャー

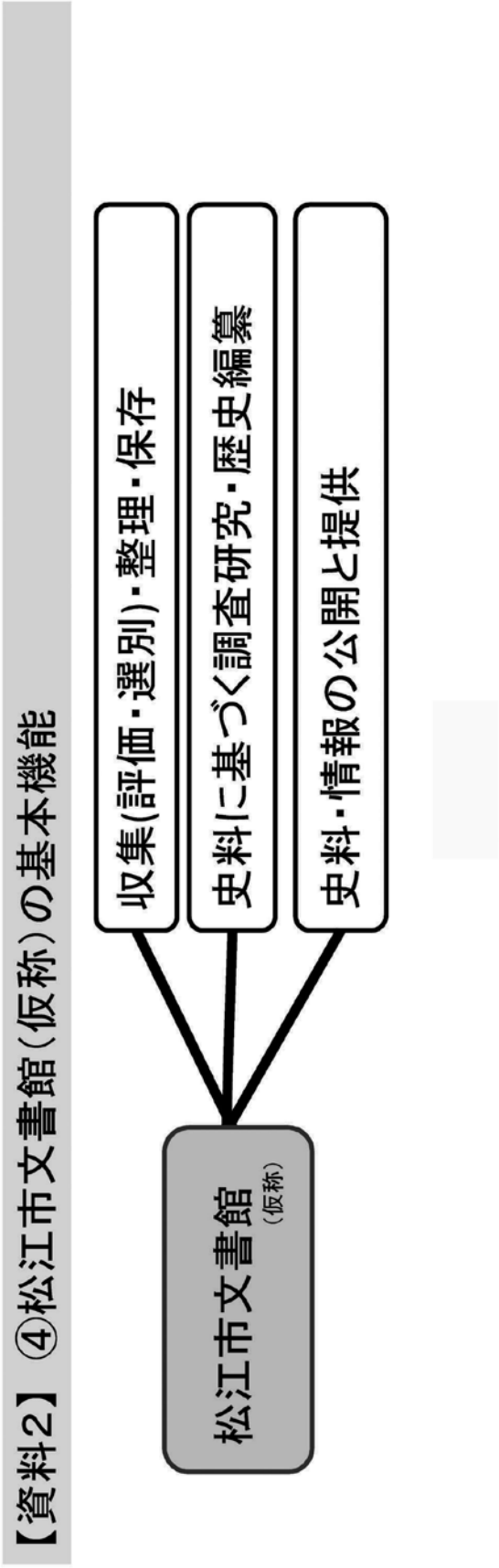
【資料2】②専門的職員の配置場所と所管文書の仕分け

公文書のライフサイクル
作成→整理・保存期間決定→管理簿→保存→評価選別→廃棄または保存期間延長
→歴史公文書は文書館へ移管

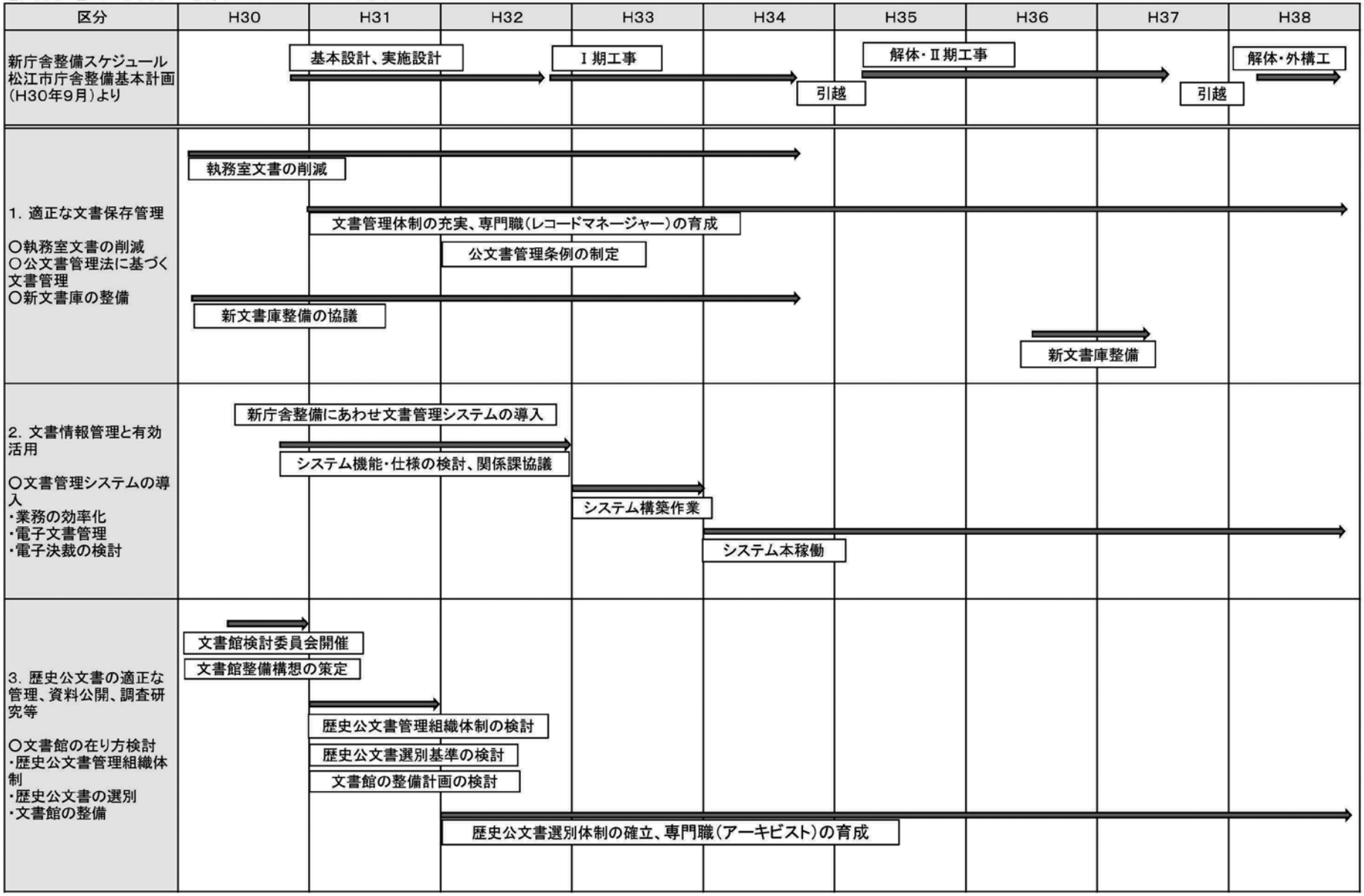


歴史公文書・・・歴史史料として重要な公文書
ﾚｺｰﾄﾞﾏﾈｰｼﾞｬｰ・・・公文書管理の方針・手順・実施推進などに関わる専門的職員
ｱｰｷﾋﾞｽﾄ・・・公文書管理を支え、個人や組織、社会の記録を保存し、提供する専門的職員


【資料2】③文書（現用文書、歴史公文書、歴史史料）の分担管理のイメージ
松　江　市
史料編纂課
総務部総務課
現用文書
（保存期間文書）
〔1～30年〕
松江市文書館
（仮称）
歴史公文書・
地域に所在する
歴史史料
（古文書等）
松江歴史館
【歴史館保管史料】
①展示に必要な史料
②厳密な温湿度管理が
必要な史料
③特に重要な史料


【資料2】④松江市文書館（仮称）の基本機能
収集（評価・選別）・整理・保存
史料に基づく調査研究・歴史編纂
史料・情報の公開と提供
松江市文書館
（仮称）

【資料3】 文書管理改善スケジュール（案）



【資料８】松江市史編纂基本計画の実施結果

（１）市史の出版　　（全１８巻発刊）

（２）市民のための市史　　（松江市史講座、別紙「松江市史講座一覧」）（ホームページ・市史編纂コラム、別紙「松江市史編纂コラム一覧」）

（３）基礎調査　　【　】成果の刊行物（刊本）

項目・小項目		内容・実施状況
[記録史料悉皆調査]		＊ 106,721 点の文書調査（R 元 .12 現在）
	乙部家等古文書史料調査	・乙部家をはじめとする家老、藩士を中心に、松江藩政史上重要と思われる史料の目録作成（7,683 点）。 【調査目録】刊行（H19 ～ 21 国補助事業）
	松江市内寺社史料調査	・承諾いただいた松江市内にある寺社の史料の目録作成（13,065 点）。 【調査目録】刊行（H22 ～ 25 国補助事業）
	市役所・旧町村・公民館・区有文書調査	・旧町村・公民館文書の所在確認を実施。【市内公民館文書目録】刊行 ・区有文書は情報提供のあったところについて、目録作成。 ・市役所（本庁・総務課蔵）公文書の一部調査。
	松江藩家老三谷権大夫家文書調査（整理）	・三谷家の蔵には膨大な史料が残されていた。（13,366 点） ・平成 13 年度から平成 23 年度にかけて文書の仮目録を作成→三谷家文書は松江歴史館に寄託。 ・平成 24 年度から松江歴史館での閲覧や展示に活かせるよう、整理作業を実施。 ・【概要調査報告書】刊行（H17.3）
	その他、個別対応調査	・随時、文書等の所在情報の提供を受け、目録作成、写真撮影を実施。 【歴史史料集】刊行
[松江城調査]		
	絵図調査	・松江市域に関わる絵図・地図の悉皆的調査を実施。【史料編「絵図・地図」、「松江城」】、【松江市域の絵図・地図目録 (市史研究 7)】刊行
	富田城及び出雲国内支城調査	・富田城や出雲国支配の支城の調査を実施。【松江城】
	縄張調査	・松江城の普請のあり方について他国との比較研究を含めた調査を実施。【松江城】
	石垣（構造）調査	・他国との比較研究を含めた調査を実施。【松江城】
	石垣（石材）調査	・石垣の石材や産地の調査を実施。【松江城】
	建物調査	・城郭内や城下町の建物について調査を実施。【松江城】
	考古資料調査	・発掘調査成果を踏まえて他国との比較研究を含めた調査を実施。【松江城】
	瓦調査	・他国との比較研究を含めた松江城に関する瓦の調査を実施。【松江城】
	城下町形成期（土木）調査	・城下町造成のあり方について土木学の立場から調査を実施。【松江城】
	城下町形成期（地質）調査	・城下町造成前の景観復元について、地史学の立場から調査を実施。【松江城】
	文献史料調査	・松江城（城下町を含む）に関する各種文献史料掲載記事のカード化、刊本記事をリスト化し、情報を集積。【松江城】
	松江城伝来資料調査	・松江城に関連する伝来資料の調査を実施。【松江城】
	写真資料調査	・松江城に関連する写真資料の調査を実施。【松江城】
[松江市域の図書出版物調査]		
	松江市域の図書出版物調査	・松江城に関する刊本調査・目録作成。【松江城】刊行
[石造物調査]		
	中世石塔調査	・中世を中心に、五輪塔や宝篋印塔の所在確認、実測調査を実施。【通史編「中世」】、【松江市所在の五輪塔・宝篋印塔一覧 (市史研究 5)】刊行
	銘文石碑調査	・主な銘文をもつ石碑、墓石塔等の調査を実施。【松江掃苔録 (ふるさと文庫 14)】、【松江の碑 (ふるさと文庫 17)】刊行
		・旧版松江市誌掲載の石碑銘文を訓読する調査を実施。

[建造物調査]		
	古建築物調査	・古建築物の所在確認、実測調査などを実施。【別編「民俗」】刊行
[戦争体験調査]		
	戦争体験聞き取り調査	・戦争体験者に対し随時聞き取り調査を実施。
	戦争関連史料調査	・記録史料悉皆調査などで調査した史料の中から兵役関係文書、軍事郵便などの戦争に関わる史料の調査を実施。【通史編「近現代」】に掲載予定
[新聞記事採録調査]		
	新聞記事採録調査	・島根大学附属図書館、島根県立図書館、山陰中央新報社などに所蔵さている松陽新報や山陰新聞、島根新聞、山陰中央新報などの採録とデジタル画像化。【PDFﾃﾞｰﾀｰ作成済】 ・松江などに関する記事の採録・目録作成。
[統計史料調査]		
	近現代統計調査	・近現代の諸統計調査の実施。【史料編「近現代Ⅱ」】等に掲載予定。
[民俗調査]		
	民俗調査	・松江市域の民俗調査の実施。【別編「民俗」】刊行
[地名、伝承調査]		
	地名入り松江市域白地図作成調査	・松江市域の地名の場所を理解しやすいように、別編「民俗」に掲載する松江市域の地名入り白地図を作成。【別編「民俗」】刊行
[自然環境調査]		
	古松江潟調査	・城下町造成以前に広がっていたとみられる古松江潟の実態について調査を実施。【通史編「中世」、別編「松江城」】刊行
	地形・地質、気候・気象、生物関係諸調査	・松江市域の民俗調査の実施。【史料編「自然環境」】に掲載予定。

（４）付帯出版物　　（別紙「付帯出版物一覧」）

１）松江市ふるさと文庫　　松江市の歴史・文化・自然を市民に分かりやすく伝えるために、手軽なブックレットとして出版するもの

２）松江市歴史叢書（市史研究）　　松江市に関わる歴史事象の調査・研究成果を適宜集めて出版するもの

３）松江城研究　　松江城に関わる調査・研究成果を適宜集めて出版するもの

４）松江市歴史史料集　　地域の基礎的史料をテーマ別に編集し、地域史研究の便に供するため出版するもの

（松江市史講座一覧）

(H23 年度)

講座	講　　師	専門部会	演　　題
1	上杉 和央	絵図・地図	絵図に見る水の都・松江
2	山根 正明	松江城	宍道湖畔に築かれた松江城
3	多久田 友秀	近世	近世水運と松江
4	長谷川 博史	中世	中世水運と松江
5	丹羽野 裕	原始古代	水運が支えた古代出雲の須恵器生産
6	伊藤 康宏	近現代	宍道湖の恵みと宍道湖漁業
7	品川 知彦	民俗	海の民俗
8	高安 克己	自然環境	宍道湖の誕生と治水・災害
9	大日方克己 (基調報告)	原始古代	古代律令制下の出雲をめぐる国際関係（基調報告）
10	井上寛司ほか	各分野	シンポジウム：世界に開かれた町・松江

(H24 年度)

11	田坂 郁夫	自然環境	気象災害からみる松江の気候
12	小林 准士	近世	神社における都市住民の信仰と芸能
13	野々村 安浩	原始古代	『出雲国風土記』と松江地域
14	西田 友広	中世	中世の松江市域と橋
15	佐藤 仁志	自然環境	松江市の動物たち・過去～現在～未来
16	竹永 三男	近現代	松江の外の松江 - 同郷会と同郷人雑誌 -
17	佐藤 信	原始古代	律令国家と出雲
18	渡辺 理絵	絵図・地図	絵図の世界へ誘う－松江城下町絵図－
19	丹羽野 裕	原始古代	松江に人が住み始めた頃
20	川岡 勉	中世	室町時代の出雲守護と分国支配
21	大日方 克己	原始古代	平安時代の出雲受領
22	喜多村 正	民俗	松江市南部農村部のムラ
23	森田 喜久男	原始古代	出雲神話の神々と松江
24	鬼嶋 淳	近現代	戦前松江の医療と福祉
25	山田 康弘	原始古代	山陰地方の縄文時代
26	三宅 正浩	近世	松平直政書状を読む
27	枚村 喜則	自然環境	松江市の植物
28	足立 正智	民俗	江戸時代の松江の建造物
29	平石 充	原始古代	出雲国の成立－意宇郡と出雲国－
30	原 慶三	中世	系図の利用と活用－行間を読む－
31	松本 岩雄	原始古代	松江の弥生時代
32	宇野田 尚哉	近世	松江藩の儒学者たち
33	西尾 克己	原始古代	王家の谷－山代・大庭古墳群と横穴墓
34	能川 泰治	近現代	歩兵第 63 連隊の創設と松江の都市社会

(H25 年度)

35	越川 敏樹	自然環境	宍道湖・中海における魚介類の現状
36	東谷 智	近世	『土工記』にみる河川の維持管理と藩政改革
37	池淵 俊一	原始古代	邪馬台国と前方後円墳時代のはじまり
38	居石 正和	近現代	松江市の誕生
39	森田 喜久男	原始古代	出雲国風土記に見える神社と村落
40	川村 博忠	絵図・地図	いわゆる「慶長日本総図」の誤認を解く
41	井上 寛司	中世	中世出雲神話の世界と意宇六社
42	乗岡 実	松江城	石垣から松江城を考える
43	入月 俊明	自然環境	出雲地方の地質と化石
44	酒井 董美	民俗	民話（鉈 (なた) 盗られ物語ほか）
45	松尾 充晶	原始古代	“ブレ出雲国” 成立の背景
46	渡辺 浩一	近世	水の都の恩恵と脅威～松江と江戸
47	佐藤　信	原始古代	出雲国府の実像
48	伊藤 康宏	近現代	八束郡の外海漁業と漁業組合
49	長谷川 博史	中世	戦国時代の松江地域
50	大矢 幸雄	絵図・地図	絵図に見る白潟三町屋の実態と動向
51	西田 良平	自然環境	出雲地方の地震
52	浅沼 政誌	民俗	松江市近辺の民具の保存状況
53	平石 充	原始古代	出雲の人制・部民制
54	渡邉 正巳	松江城	科学が明かす松江平野の歴史
55	勝部 昭	原始古代	古代出雲の交通
56	沢山 美果子	近世	松江城下『おぼえ日記』にみる町人の『家』と男女子供
57	西田 友広	中世	「武者の世」の始まりと出雲国
58	廣嶋 清志	近現代	近現代の松江市の人口の推移とその特徴

(H26 年度)

59	鳥谷 智文	近世	出雲地域における産物の特徴について
60	松尾 信裕	松江城	近世城下町の変遷と松江城下町
61	西田 友広	中世	知行国制度と出雲国
62	安高 尚毅	松江城	松江城下町の空間設計と武家地・町人地の空間について
63	竹永 三男	近現代	「模範村」とその時代
64	澤田 順弘	自然環境	石が語る出雲国
65	原 慶三	中世	勝部宿祢一族と朝山日乗
66	山田 康弘	原始古代	お墓にみる縄文時代から弥生時代への移行
67	大矢幸雄・長谷川博史・河原荘一郎・	自然環境・中世・	基調報告
68	渡辺正巳・西尾克己	松江城・絵図地図	シンポジウム：城下町形成期の景観復元
69	川岡 勉	中世	中世後期の出雲と地域権力
70	大日方 克己	原始古代	松江古代史の魅力
71	伊藤 昭弘	原始古代	松江藩の財政について
72	喜多村 理子	民俗	伝染病の大流行と信仰

73	長谷川 博史	中世	中世の経済と社会
74	阿部 志朗	絵図・地図	各種地図の変遷からみる松江の近代化
75	能川 泰治	近現代	まぼろしの神国博
76	足立 正智	松江城	松江の建造物
77	的野 克之	中世	松江の古寺と仏像
78	三瓶 良和	自然環境	中海・宍道湖の自然環境
79	和田 嘉宥	松江城	松江城城郭施設の特色とその推移
80	常松 隆嗣	近世	江戸時代の農村
81	井上 寛司	中世	中世の寺院と神社
82	鬼嶋 淳	近現代	戦後松江の公民館と新生活運動

(H27 年度)

83	岸本 覚	近世	幕末松江藩と雨森謙三郎（精翁）
84	高安克己・澤田順弘・田坂郁夫・佐藤仁志	自然環境	シンポジウム：市民と語る松江の自然
85	居石 正和	近現代	松江裁判所 事始め
86	池淵 俊一	原始古代	出雲世界のルーツ
87	中井 均	松江城	城郭から見た堀尾氏の出雲支配
88	森田 喜久男	原始古代	「神々の国、出雲」を再考する
89	石田 俊	近世	松江藩松平家の女性たち
90	中野 賢治	中世	尼子氏の滅亡と「御一家再興」戦争
91	竹永 三男	近現代	明治維新後の松江市域
92	上杉 和央	絵図・地図	地図から読み解く近世の松江市域
93	山上 雅弘	松江城	堀尾氏の城郭普請
94	永井 猛	民俗	松江の芸能 －神楽と盆踊り－

(H28 年度)

95	小暮 哲也	自然環境	松江市の海岸地形
96	井上寛司・長谷川博史・原慶三	中世	シンポジウム：新しい松江の中世史像
97	三宅 正浩	近世	松江藩政と家老
98	佐々木 倫朗	近世	堀尾氏の出雲・隠岐支配
99	堀田 浩之	松江城	近世城郭と城下の空間設計を考える
100	工藤 泰子	近現代	戦後復興期における松江の観光振興
101	和田嘉宥・伊藤孝一	松江城	写真でたどる松江城とその周辺
102	中安 恵一	近世	近世の海運と松江
103	関 耕平	近現代	財政運営と行政組織からみる松江市のあゆみ
104	竹永 三男	近現代	自由民権運動とその時代
105	岡崎 雄二郎	松江城	松江城を掘る　－地下に眠る松江城の歴史
106	吉松 大志	原始古代	松江市史から古代の出雲を考える

(H29 年度)

107	大矢 幸雄	絵図・地図	堀尾期松江城下町の新たな知見
108	渡辺 浩一	近世	玉造温泉の近世
109	伊藤 康宏	近現代	松江商業会議所と商工業
110	和田嘉宥・稲田信	松江城	初期松江城天守の形態と千鳥破風
111	丹羽野 裕	原始古代	原始 / 古代から見る松江成立の基盤
112	山根 正明	中世	特色ある松江市内中世城館
113	谷永 守	自然環境	島根県（松江）の気象特性について
114	喜多村 正	民俗	松江市域の集落名称ー本郷と口ー
115	清家 泰	自然環境	宍道湖 / 中海の水環境
116	小林 准士	近世	仏と神から見た近世
117	鬼島 淳	近現代	敗戦直後松江地域の暮らし
118	西尾克己ほか	松江城	松江城をめぐる諸問題と今後の展望

(H30 年度)

119	横田 修一郎	自然環境	松江市と周辺の自然災害史
120	西島 太郎	近世	松江藩主松平宗衍・治郷二代の寵愛を受けた江戸詰藩士・萩野信敏　―天愚孔平伝―
121	吉儀 和平	民俗	松江市域における民芸運動の展開とその担い手　―出雲民芸紙と布志名焼を中心に―
122	足立 正智	松江城	解体修理から分かった武家屋敷［瀧川君山旧居］の姿
123	松本 岩雄	原始古代	弥生時代史にみる東アジアとの交流
124	西田 友広	中世	荘園のしくみと下地中分
125	喜多村 理子	民俗	星上山大餅行事の変遷～近世から近現代へ
126	小山 泰生	松江城	松江城下町の考古学　―地面の下の松江城下町遺跡―
127	佐藤 仁志	自然環境	松江の自然～見どころあれこれ～
128	東谷 智	近世	江戸時代中後期の郡・村政　―「殿 (しま) り合い」「御勝手御任せ」をめぐって―
129	徳岡 隆夫	近現代	中海・宍道湖の干拓・淡水化事業の歴史的回顧
130	渡辺 理絵	絵図・地図	松江城下絵図とデジタルマップ　―その構築・分析・活用まで―

(H30 年・R1 年度)

131	会下 和宏	自然環境	縄文～弥生時代の景観と遺跡
132	沢山 美果子	近世	近世松江の女・男・子ども
133	板垣 貴志	近現代	昭和恐慌と畜産業の展開 -「米と繭」から 「有畜農業」へ -
134	大日方 克己	原始古代	出雲に来た渤海人 – 東アジア世界のなかの 古代山陰と日本海域 -
135	松尾 信裕	松江城	松江藩の支城城下町 - 広瀬・三刀屋・赤名 -
136	原 慶三	中世	続・源頼朝と出雲国
137	山上 雅弘	松江城	松江城跡の築城経緯と縄張り
138	酒井 哲弥	自然環境	島根半島の大地は日本海の底から引き上げられた地層が記録する別の「くにびき」
139	石田 俊	近世	松江藩の縁組や相続の戦略について
140	山本 志乃	民俗	女たちの行商 - 恵曇の魚商人と大根島の花 売りさん -
141	大矢 幸雄	絵図・地図	松江の水道敷設と水環境
142	各部会長	全専門部会	完結シンポジウム　松江市史の完成と松江の未来へ

（松江市史講座は全講座を録画保存しており、松江市立図書館で閲覧できます）

（松江市史編纂コラム一覧）

（松江市史ホームページに掲載、『松江市史編纂コラム』として製本）　（令和２年３月 31 日現在）

タイトル・執筆者	掲載日
第 1 回：堀尾但馬の子孫・堀尾方善の後半生（福井将介）	平成22年10月 1日
第 2 回：銀山と松江藩との借金バトル（内田文恵）	平成22年11月 1日
第 3 回：上空に現れる謎の物体（和田美幸）	平成22年12月 1日
第 4 回：松江制服図鑑明治編 - 私立中学修道館の巻 -（居石由樹子）	平成23年 1月 5日
第 5 回：石切丁場に残る残念石（山根正明）	平成23年 2月 1日
第 6 回：明治時代のシラウオ缶詰工場～宍道湖・中海の豊かな水産資源と松江の商工業～（沼本龍）	平成23年 3月 2日
第 7 回：伊能測量を契機に正確な地図を作った松江藩の人々 （乾隆明・面谷明俊）	平成23年 4月 1日
第 8 回：佐太神社の神在祭（品川知彦）	平成23年 5月 2日
第 9 回：床几山の水道施設と外灯（足立正智）	平成23年 6月 1日
第 10 回：中世松江の「筌 (うけ・せん)」漁業（西田友広）	平成23年 7月 1日
第 11 回：松江藩士松原基と『消暑漫筆』（宇野田尚哉）	平成23年 8月 1日
第 12 回：七類の大敷網（越川敏樹）	平成23年 9月 1日
第 13 回：東京出雲学生会（竹永三男）	平成23年10月 3日
第 14 回：松江城下町商家の倹約計画（渡辺浩一）	平成23年11月 3日
第 15 回：図解で知る近代化以前の山陰漁業（伊藤康宏）	平成23年12月 1日
第 16 回：美保関町七類の「鉈盗られ物語」のこと（酒井董美）	平成24年 1月 4日
第 17 回：伊能忠敬第八次測量隊の足跡をたどる（面谷明俊・乾隆明）	平成24年 2月 1日
第 18 回：『(竹内右兵衛書つけ)』について（和田嘉宥）	平成24年 3月 1日
第 19 回：国内最古の人物埴輪セット－石屋古墳－（西尾克己）	平成24年 4月 1日
第 20 回：江戸時代の中海・宍道湖水運の主役「渡海船」（多久田友秀）	平成24年 5月 1日
第 21 回：気象の記録あれこれ（田坂郁夫）	平成24年 6月 1日
第 22 回：松江市指定文化財（建造物）武家屋敷（足立正智）	平成24年 7月 2日
第 23 回：まぼろしの松江城博覧会（修正版第 32 回を参照）（山根正明）	平成24年 8月 1日
第 24 回：大庭梨について - 松江藩主から徳川将軍家への献上品 -（福井将介）	平成24年10月 1日
第 25 回：松江城創建に関わる祈祷札の発見（稲田信）	平成25年 1月15日
第 26 回：松江開府を成し遂げた堀尾家に関わる石塔群－高野山奥之院－（木下誠）	平成25年 2月25日
第 27 回：中世宍道湖の汀線調査見聞録（福井将介）	平成25年 4月 1日
第 28 回：松江城下町遺跡検討会が開催されました（稲田信）	平成25年 7月21日
第 29 回：一生害記ーある足軽の手記ー（内田文恵）	平成25年 9月 5日
第 30 回：文献史料からみる『松江城・松江城下町』（石塚晶子）	平成26年 1月22日
第 31 回：松江藩士の幕末維新期の記録（北村久美子）	平成26年 3月 7日
第 32 回：再考・まぼろしの松江城博覧会（山根正明）	平成26年 4月 1日
第 33 回：松江藩御台所を取材した明治の新聞記事（和田美幸）	平成26年 5月15日
第 34 回：国内最古の警察署建築（初代松江警察署）発見のとき（稲田信）	平成26年 6月10日
第 35 回：堀尾氏と三つの姓（福井将介）	平成26年 7月 3日
第 36 回：松江城下での不思議な話（福井将介）	平成26年 8月21日
第 37 回：松江藩凶年時にみる藩の通達そして捨子・身元不明者・乞食の実相（内田文恵）	平成26年 9月19日
第 38 回：松江藩の切支丹類族の最後（内田文恵）	平成26年11月27日
第 39 回：亀嵩城、決死の調査隊（稲田信）	平成27年 1月20日
第 40 回：古代出雲の中心地であった松江市域の新しい歴史像とその舞台となった自然環境 -『松江市史』通史編 1「自然環境・原始・古代」の発刊 -（木下誠）	平成27年 3月30日
第 41 回：飢饉時における食料対策について（和田美幸）	平成27年 4月 1日
第 42 回：文献史料から見る「松江城と松江城下町」その２（石塚晶子）	平成27年 5月 1日
第 43 回：江戸時代松江市中のゴミ捨て場（内田文恵）	平成27年 6月 1日
第 44 回：池尻家「御用留」（天明２年） -『史料編 7 近世 3』より -（北村久美子）	平成27年 7月 1日
第 45 回：続中世松江の「筌」漁業（西田友広）	平成27年 7月 3日
第 46 回：終戦前の松江市（高橋真千子）	平成27年 8月 1日
第 47 回：85 年ぶりの「新・松江城築城物語」（稲田信）	平成27年 8月 3日
第 48 回：松江の町屋住宅事情 - 大保恵日記に見る裏借屋のくらし -（小山祥子）	平成27年 9月 1日
第 49 回：松江城天守幻視考（稲田信）	平成27年 9月 8日
第 50 回：江戸時代松江の糞尿処理事情（内田文恵）	平成27年11月12日

第 51 回：「瀧川家代々記録」にみえる新屋の一面（和田美幸）	平成27年12月24日
第 52 回：編纂室のもう一つの仕事 - 古文書調査 -（和田美幸）	平成28年 1月25日
第 53 回：野津左馬之助先生と『松江市史』（稲田信）	平成28年 3月 1日
第 54 回：初期松江城天守と千鳥破風（稲田信）	平成28年 4月 1日
第 55 回：松江藩のお家騒動・その１（内田文恵）	平成28年 5月19日
第 59 回：松江藩のお家騒動・その２＜殿様斎貴＞（内田文恵）	平成28年10月13日
第 60 回：今この時も松江市の歴史の中のほんの一瞬（岩町紀子）	平成28年11月25日
第 61 回：第１次松江市総合計画はどこ？（村角紀子）	平成28年12月28日
第 62 回：ふるさと文庫 40 号の発刊にあたって（稲田信）	平成29年 2月 1日
第 63 回：お殿様は松江城のどこに住んでいたのか？（福井将介）	平成29年 3月 3日
第 64 回：「駅々御本陣御間取絵図」（北村久美子）	平成29年 4月14日
第 65 回：出雲地方の喫茶習慣についての一試論（稲田信）	平成29年 5月11日
第 66 回：『松江市史』別編１「松江城」編集日記（石塚晶子）	平成29年 6月 8日
第 67 回：女流俳人石橋秀野の松江疎開（内田文恵）	平成29年 7月10日
第 68 回：歴史史料と郷土愛（岩町紀子）	平成29年 8月24日
第 69 回：江戸中期、商人のお友達 - 人物画と俳句（和田美幸）	平成29年10月16日
第 70 回：バートン・ホームズの見た 1922 年の松江（村角紀子）	平成29年12月18日
第 71 回：松江城初代藩主・堀尾忠氏の発給文書について（福井将介）	平成30年 1月22日
第 72 回：松江城天守創建に関わる祈祷札の発見（パート２）（稲田信）	平成30年 3月 5日
第 73 回：松江の「隠れ茶室」（稲田信）	平成30年 3月16日
第 74 回：松江市域における気象観測と物産陳列所（小山祥子）	平成30年 7月 4日
第 75 回：松江城の桐の階段（稲田信）	平成30年 7月 9日
第 76 回：松江に暮らす庶民の記録「大保恵日記」紹介（内田文恵）	平成30年 8月22日
第 77 回：「松江城部会」ミニレポート（石塚晶子）	平成30年 9月19日
第 78 回：松江の水上飛行機（高橋真千子）	平成31年 2月 3日
第 79 回：『松江市史』から読み解く「大橋川」と「大橋」の名称由来　付録：「田町」町名考（稲田信）	平成31年 4月 1日
第 80 回：推論「大橋」の名称起源と斐伊川東流について（稲田信）	平成31年 4月 1日
第 81 回：富田城下の寺院について（西尾克己）	令和元年 5月30日
第 82 回：『松江城を掘る』の刊行について（石塚晶子）	令和元年 6月25日
第 83 回：藩主治郷（不昧公）と女性たち、その明暗 -『御産献立控帳」に見る -（内田文恵）	令和元年 8月20日
第 84 回：明治８年以前の松江城古写真と現在	令和元年12月15日
第 85 回：松江の歴史文化を踏まえた文化財行政の将来ビジョン - 市史編纂事業の成果を活かす -（藤井一）	令和元年12月25日
第 86 回：松江市における文書管理改善の歴史（小山祥子）	令和元年12月27日

【松江市史ホームページ】http：//www 1 .city.matsue.shimane.jp/bunka/matsueshishi/

『松江市史編纂コラム』2020 年 1 月 31 日 史料編纂課発行

（付帯出版物一覧）

松江市ふるさと文庫

（令和２年３月31日現在）

No.	タイトル	著者	発行年月	頁数
1	お殿様の御成り - 近世松江藩主と本陣 -	小林准士	平成18年2月	60頁
2	大根島のおいたちと洞窟生物	澤田順弘、新部一太郎、星川和夫	平成19年3月	51頁
3	松江藩の財政危機を救え　- 二つの藩政改革とその後の松江藩 -	乾　隆明	平成20年2月	63頁
4	堀尾吉晴と忠氏　- 松江開府を成しとげた武将たち -	佐々木倫朗	平成20年3月	40頁
5	城下町松江の誕生と町のしくみ　- 近世大名堀尾氏の描いた都市デザイン -	松尾　寿	平成20年11月	120頁
6	堀尾吉晴 - 松江城への道　- 浜松、富田、松江城普請の軌跡 -	山根正明	平成21年1月	118頁
7	松江市の指定文化財　- 未来へ伝える松江の文化遺産 250-	「松江市の指定文化財」編集委員会	平成22年3月	246頁
8	京極忠高の出雲国・松江	西島太郎	平成22年2月	124頁
9	松江城下に生きる　- 新屋太助の日記を読み解く -	松原祥子	平成22年3月	63頁
10	松江市史への序章　- 松江の歴史像を探る -	井上寛司他 18 名	平成22年3月	138頁
11	松江藩校の変遷と役割	梶谷光弘	平成22年6月	104頁
12	決定版　見立番付を楽しむ	乾隆明、下房俊一	平成22年10月	115頁
13	雲陽秘事記と松江藩の人々	田中則雄	平成23年3月	86頁
14	松江掃苔録　－松江藩を支えた家と人－	青山侑市	平成24年3月	104頁
15	中世水運と松江　- 城下町形成の前史を探る -	長谷川博史	平成25年1月	90頁
16	松江城再発見　- 天守、城、そして城下町 -	西　和夫	平成26年8月	124頁
17	松江の碑　- 碑が語る松江の歴史 -	安部　登	平成27年7月	98頁
18	古墳時代史からみる古代出雲成立の起源	池淵俊一	平成29年1月	112頁
19	石垣と瓦から読み解く松江城	乗岡　実	平成29年3月	104頁
20	松平不昧の茶室　- 不昧が求めた茶の湯の空間 -	和田嘉宥	平成29年9月	104頁
21	郷土のｴﾝｻｲｸﾛﾍﾟﾃﾞｨｱ　桑原羊次郎	桑原羊次郎・相見香雨研究会編	平成30年12月	58頁
22	出雲に来た渤海人　- 東アジア世界のなかの古代山陰と日本海域 -	大日方克己	平成31年3月	100頁
23	石が語る松江城の物語	澤田順弘	平成31年3月	104頁
24	西洋医学受容から衛生思想普及までの道のり　-南蛮流医学からオランダ医学、そしてドイツ医学へ-	田野俊平・梶谷光弘	令和2年3月	122頁
25	松江藩主松平家墓所　- 松江・月照寺に守り伝えられる近世大名墓 -	大名墓研究会編著	令和2年3月	60頁

松江市歴史叢書

（令和２年３月31日現在）

No.	テーマ	タイトル	著者	発行年月	
1	京都・妙心寺派春光院（堀尾氏菩提寺）―堀尾氏関連の文献・石造物調査―	春光院に所在する来待石製石塔群について	岡崎雄二郎、西尾克己、稲田信、樋口英行、佐々木倫朗、松原祥子	平成19年12月	102頁
		春光院所蔵の堀尾氏関連文献史料について	佐々木倫朗、和田美幸、松原祥子、狩野真由、福井将介、樋口英行		
2	松江市史研究 1号	新『松江市史』編纂の意義	井上寛司	平成22年3月	159頁
		第一次桂太郎内閣下の府県廃合計画と福岡世徳・松江市長の上京活動	竹永三男		
		島根県における鉄道敷設運動の出発	沼本　龍		
		堀尾吉晴・忠氏父子に関する基礎的考察	福井将介		
		松江藩主の居所と行動　- 京極・松平期 -	西島太郎		
		松江東照宮と圓流寺伝来の石造物について - 松江神社、圓流寺、鰐淵寺等に所在する石造物 -	岡崎雄二郎、西尾克己、稲田信、椿真治、木下誠、松尾充晶、高屋茂男		
		将軍家を祀った東照宮と圓流寺	山根克彦		
		堀尾氏関係史料目録	福井将介		
3	松江市の近代化遺産（興雲閣特集Ⅰ）	興雲閣の魅力	堀　勇良	平成22年3月	105頁
		建築史からみた興雲閣の位置づけ	足立正智		
		興雲閣の沿革	新庄正典		
		興雲閣貴顕室壁紙について	安部己図枝		
		興雲閣貴顕室壁紙の下張りについて	沼本　龍		
		資料　興雲閣の一部解体調査報告	松江市教育委員会文化財課		
4	松江市史研究 2号	応仁・文明の乱と尼子氏 - 文書の声を聴く -	原　慶三	平成23年3月	106頁
		島根県民俗学関連雑誌等目次総覧	山崎　亮		
		松江市史編纂日誌	史料編纂室		
		附　松江市史編纂基本計画	松江市史編纂検討委員会		
		宗教施設と宗教者身分からみた近世出雲の特徴 - 松江市域を中心に -	小林准士		
5	松江市史研究 3号	絵図と測量図に見る大橋川の歴史	徳岡隆夫、高安克己、大矢幸雄	平成24年3月	135頁
		2000年代に島根半島沿岸域の定置網で漁獲された魚介類の季節変動および年変動	勢村　均		
		松江市沿岸海域の魚類	越川敏樹		
		島根県の弥生時代鉄器集成	池淵俊一		
		出雲の子持壺集成	池淵俊一		
		出雲国司補任表（稿）大宝元年～保元元年	大日方克己		
		島根県立図書館所蔵「桃家資料」―解題と目録―	宇野田尚哉		

		寛永期に 2度作成された中国筋国絵図 ―寛永 10、15年出雲国絵図の比較―	川村博忠		
		松江市史編纂日誌	史料編纂室		
		松平直政論 ―西国における政治的位置―	三宅正浩		
6	松江市史研究 4号	政府に報告された市内発見の古墳 ―『埋蔵物録』にみる松江の近代考古学―	渡辺貞幸	平成25年3月	118頁
		松江市域の横穴墓 ―意宇型横穴墓を中心として―	西尾克己、稲田　信		
		「松江城及城下古図」の特徴とその表現内容	渡辺理絵、大矢幸雄		
		明治初年出雲地域における郡別産物の特徴	鳥谷智文		
		日本新八景の選定をめぐる諸運動と松江市	長尾　隼		
		松江市史編纂日誌	史料編纂室		
		松江における米騒動に関する史料紹介	能川泰治		
7	松江市史研究 5号	松江藩財政に関する覚書	伊藤昭弘	平成26年3月	137頁
		白潟町屋の商人と町人地の変容 ―「松江白潟町絵図」の分析を中心として―	大矢幸雄、渡辺理絵		
		明治期における伝染病の大流行と民間信仰	喜多村理子		
		松江市所在の五輪塔・宝篋印塔一覧表（稿）	松江石造物研究会		
		松江城の石垣の構造と年代	乗岡　実		
		三ノ丸の特色とその推移について	和田嘉宥		
		松江平野の古環境(3) ―県道城山北公園線（大手前通り）発掘調査に関連して(3)―	渡辺正巳、瀬戸浩二		
		松江市史編纂日誌	史料編纂室		
		尼子氏による出雲国成敗権の掌握	川岡　勉		
		『土工記』にみる河川の維持管理と松江藩の藩政改革	東谷　智		
8	松江市史研究 6号	19 世紀中頃における松江・北堀町新橋の住人と空間構成	大矢幸雄、渡辺理絵	平成27年3月	128頁
		史跡松江城の発掘調査 (1) ―外曲輪 (二之丸下ノ段) ―	岡崎雄二郎		
		大崎下屋敷の拡張・整備と建築に関する考察	和田嘉宥、安高尚毅		
		松江城の屋根瓦　―山陰で活躍した瓦工人と城郭整備―	乗岡　実		
		遺跡から見た出雲府中	西尾克己、廣江耕二		
		松江平野北部の平野発達史と古環境変遷史	瀬戸浩二、渡辺正巳、山田和芳、高安克己		
		松江の中世石塔訪問	狭川真一		
		松江市史編纂日誌	史料編纂室		
9	松江市史研究 7号	堀尾氏の出雲支配における支城について (3)- 亀嵩城と三沢城 -	中井均	平成28年3月	128頁
		文献史料から見た松江城築城物語	佐々木倫朗、福井将介		
		松江城および周辺遺跡出土瓦の胎土分析について	白石 純		
		松江市域の絵図目録（中間報告）	大矢幸雄		
		松江城下町遺跡における陶磁器の様相と編年について　- 1 7 世紀代の資料を中心に-	小山泰生		
		史跡松江城の発掘調査（２）　- 北惣門橋、御廊下橋跡 -	岡崎雄二郎		
		松江平野北部の平野発達史と古環境変遷史（２）　- 花粉分析から推定される古植生 -	渡邉正己		
		松江城城郭呼称について	松江城部会		
		松江城古写真天守考	稲田 信、福井将介		
		〈史料紹介〉「高城権八家過去帳」に見る高城権八家の系譜	稲田信、内田文恵、小山祥子		
		松江市史編纂日誌	史料編纂室		
10	松江市史研究 8号	初期松江城天守の形態に関する試論　―絵図、文献史料、天守に残された痕跡を通して―	和田嘉宥、稲田信	平成29年3月	122頁
		「正保城絵図」と「出雲国松江城絵図」に関する考察	和田嘉宥、稲田信		
		出雲における中近世の瓦と松江城築城期の瓦	花谷 浩		
		松江平野北部の平野発達史と古環境変遷史　- 法吉坡の形成と周辺の古植生 -	渡辺正巳、瀬戸浩二、奥中亮太		
		〈史料紹介〉「出雲名物番付」	鳥谷智文		
		松江市史編纂日誌	史料編纂課		
		松江藩七里飛脚と本陣の機能	大津 瞳		
		「堀尾古記」の検討	佐々木倫朗、小山祥子		
11	松江市史研究 9号	近世初期における松江城下町の空間的特性　-「堀尾期松江城下町絵	大矢幸雄、渡辺理絵	平成30年3月	152頁
		松江城石垣の岩石とその原産地	新宮敦弘、澤田順弘、古川寛子、乗岡実		
		〈史料紹介〉明治８年以前の城郭施設を描いた「旧松江城図面」と類似の絵画資料について	和田嘉宥、岡崎雄二郎、稲田信		
		松江城天守築城鎮宅の祈祷について	大北哲也		
		松平宣維室天岳院の立場と役割	石田俊		
		近世後期、松江藩領における小型廻船の活動	中安恵一		
		新出の商家文書紹介　- 両替商・桑原家と「志儀」-	村角紀子		
		桑原羊次郎とその美術工芸研究	村角紀子		

12	松江市史研究 10号	松江城郭絵図「出雲御本丸」について	和田嘉宥	平成31年3月	138頁
		白潟天満宮と西岩坂村平林家	喜多村理子		
		「客船帳」にみる城下町松江の廻船　- 町人地研究の基礎資料として蒐集 -	大矢幸雄		
		松江・善光寺に所在する来待石石塔群について	岡崎雄二郎・西尾克己・稲田信・高屋茂男		
		松江市史編纂日誌	史料編纂課		
		「日吉の切通し」に関する考察と史料紹介	多久田友秀		
		簸上鉄道の創立と松江 - 明治後期の出雲地域 -	沼本　龍		
		『松江市史』史料編「中世」補遺	中世史部会		
		鎌倉初期の出雲守護安達親長について - 河内金剛寺所蔵『梵網経古迹記巻下』紙背文書から -	堀江康史		
13	松江市史研究 11 号	松江市史編纂事業の成果と課題	松江市史編集委員会委員長 井上寛司	令和元年3月	144頁
		出雲地方における御頭・伽藍頭	喜多村理子		
		松江城の石垣刻印分布調査について（１）　- 中曲輪東面石垣 -	岡崎雄二郎・乗岡実・飯塚康行・徳永隆		
		史跡松江城の発掘調査（３）　－本丸土坑－	岡崎雄二郎		
		松江城月見櫓下石垣と石材について	徳永隆・澤田順弘・新宮敦弘		
		『松江市史』史料編 11「絵図・地図」の「郡村図・地籍図」目録 －中間報告以降の調査を受けて－	大矢幸雄		
		松江・善光寺に所在する伝佐々木高綱石塔について	岡崎雄二郎・西尾克己・稲田信・木下誠・樋口英行		
		松江市文書館（仮称）の検討と整備構想	史料編纂課		
		松江市史編纂事業のあゆみ -市史編纂全期間における主な活動(H19.4.1～H31.3.31)	史料編纂課		

松江市歴史史料集　（令和 2 年 3 月 31 日現在）

No.	テーマ	タイトル	発行年月	頁数
1	湯之助文書	1-1 湯之助文書（上）	平成19年2月	96頁
		1-2 湯之助文書（下）	平成20年3月	86頁
2	大保恵日記	2-1 大保恵日記Ⅰ　文政九年十六日～天保七年八月二十五日	平成28年4月	126頁
		2-2 大保恵日記Ⅱ　弘化五年（嘉永元年）【大保恵日記　二冊目　上】	平成30年3月	160頁
		2-3 大保恵日記Ⅲ　嘉永二年【大保恵日記　二冊目　下】	平成30年3月	174頁
		2-4 大保恵日記Ⅳ　嘉永四年【大保恵日記　三冊目　上】	令和元年7月	164頁
3	新番組列士録	新番組列士録　上、中、下ノ上、下ノ下（全四冊）	平成28年10月	137頁
4	御産献立控帳	御産献立控帳－松江藩主松平家の料理方小田九蔵の御祝レシピ－	令和元年6月	74頁

松江城研究　（令和 2 年 3 月 31 日現在）

No.	テーマ	タイトル	著者	発行年月	頁数
1	松江城研究報告会 「松江城研究の最前線 －わかったことと これからと－」	基調報告「松江城研究の最前線」	山根正明	平成24年3月	120頁
		分野別報告「松江城の縄張りについて」	山上雅弘		
		分野別報告「松江城天守と城郭施設について」	和田嘉宥		
		分野別報告「松江城下町遺跡の遺構と町割り」	松尾信裕		
		堀尾氏の出雲支配における支城について (1) －三刀屋尾崎城－	中井 均		
		松江平野の古環境 (1) －県道城山北公園線発掘調査に関連して (1) －	渡辺正巳、瀬戸浩二		
		【史料翻刻・解題】『（竹内右兵衛書つけ）』	和田嘉宥		
2	再発見の祈祷札	松江城天守創建に関わる祈祷札について	稲田 信、内田文恵、居石由樹子	平成25年3月	126頁
		松江城祈祷札の樹種同定及びウイグルマッチングによる年代測定	渡辺正巳		
		「奉転読大般若経六百部武運長久処」祈祷札付着の紙片について	安部己図枝		
		松江城下町絵図と城下町の建設	水田義一		
		松江城下町遺跡の土質試験	河原荘一郎		
		松江平野の古環境 (2) - 県道城山北公園線（大手前通り） 発掘調査に関連して (2)-	渡辺正巳、瀬戸浩二		
		「武家屋敷」創建時の姿を探る	足立正智		
		松江城城郭施設の推移について	和田嘉宥		
		堀尾氏の出雲支配における支城について (2) －赤名瀬戸山城－	中井 均		
		満願寺城跡の発掘調査について	岡崎雄二郎		
		尼子家復興戦における佐陀江と満願寺城	山根正明		
		松江城の空間構成をめぐる研究視点の提言	堀田浩之		
		【史料翻刻・考察】『御城内惣間数』	和田嘉宥		

【資料９】松江市史編纂体制図

松江市史編纂体制図

（令和２年３月現在）

区分	役割	委員名							
編纂委員会	・市史編纂全般に関わる基本的事項の協議 ・市史編纂の成果を市民に還元していく事項の協議 ※住民、行政、専門家が一体となり市史を作り上げるため、地元有識者、専門研究者で構成する。	◎ 藤岡大拙（委員長） ・ 田坂郁夫	・ 安部登	・ 乾隆明 ○ 井上寛司（副委員長）	・ 引野道生 ・ 小林准士	・ 安部己図枝 ・ 竹永三男	・ 川島芙美子 ・ 大矢幸雄 （木幡修介）	・ 蔦谷典子 ・ 西尾克己 （勝部昭）	・ 仁田玲江 ・ 喜多村正 （岡部康幸）
編集委員会	・市史全体の編集 ・必要な史料（資料）の調査・整理及び総括 ※市史全体の編集を中心となって行うため、各分野の専門研究者で構成する。 ◎委員長　○副委員長	・ 田坂郁夫 ・ 高安克己	・ 勝部昭 ・ 大日方克己 ・ 佐藤信 ・ 西尾克己	◎ 井上寛司 ・ 川岡勉 ・ 長谷川博史 ・ 西田友広	○ 小林准士 ・ 岸本覚 ・ 鳥谷智文 ・ 東谷智 ・ 三宅正浩 渡辺浩一 ・	・ 竹永三男 ・ 伊藤康宏 ・ 居石正和 ・ 能川泰治 ・ 鬼嶋淳	・ 大矢幸雄 ・ 渡辺理絵	・ 西尾克己	・ 喜多村正 ・ 喜多村理子
部会長会議	・編纂事業の具体的な内容の企画・立案 ※各部会の部会長で構成する。	・ 田坂郁夫	・ 勝部昭	◎ 井上寛司	○ 小林准士	・ 竹永三男	・ 大矢幸雄	・ 西尾克己	・ 喜多村正
専門部会（専門委員）	・市史各巻の内容を検討 ・必要な史料（資料）の調査・整理 ※市史各巻の編集を中心となって行うため、担当専門分野の専門研究者で構成する。 ◎委員長　○副委員長 orGL	【自然環境】 ◎ 田坂郁夫 《地形・地質 G》 ○ 澤田順弘 ・ 高安克己 ・ 小暮哲也 《気候・気象 G》 ○ 田坂郁夫 《生物 G》 ○ 佐藤仁志 （枚村喜則） （浜田周作） （越川敏樹）	【原始古代史】 ◎ 勝部昭 《考古専門部会》 ○ 西尾克己 ・ 丹羽野裕 ・ 山田康弘 ・ 松本岩雄 ・ 平石充 《古代専門部会》 ○ 大日方克己 ○ 佐藤信 ・ 平石充 ・ 野々村安浩 ・ 森田喜久男	【中世史】 ◎ 井上寛司 ○ 川岡勉 ○ 長谷川博史 ○ 西田友広 ・ 原慶三	【近世史】 ◎ 小林准士 ○ 岸本覚 ○ 鳥谷智文 ○ 東谷智 ○ 三宅正浩 ○ 渡辺浩一 ・ 伊藤昭弘 ・ 宇野田尚哉 ・ 沢山美果子 ・ 多久田友秀 ・ 佐々木倫朗 ・ 西島太郎 ・ 石田俊	【近現代史】 ◎ 竹永三男 ○ 伊藤康宏 ○ 居石正和 ○ 能川泰治 ○ 鬼嶋淳	【絵図・地図】 ◎ 大矢幸雄 ・ 川村博忠 ・ 高安克己 ・ 上杉和央 ・ 渡辺理絵 ・ 乾隆明 ・ 内田融 ・ 阿部志朗 ・ 安髙尚毅	【松江城】 ◎ 西尾克己 《城郭史 G》 GL 中井均 ・ 松尾信裕 ・ 山上雅弘 ・ 乗岡実 ・ 先山徹 ・ 堀田浩之 ・ 岡崎雄二郎 《文献・歴史地理・建築 G》 GL 和田嘉宥 ・ 渡辺理絵 ・ 堀田浩之 ・ 足立正智 《土木史 G》 GL 河原荘一郎 ・ 渡邉正巳 写真 伊藤孝一 （山根正明）	【民俗】 ◎ 喜多村正 ・ 中村幹雄 ・ 足立正智 ・ 藤原宏夫 ・ 山﨑節枝 ・ 喜多村理子 ・ 山﨑亮 ・ 品川知彦 ・ 中上明 ・ 永井猛 ・ 酒井董美 ・ 浅沼政誌 （成相脩）
執筆者（通史編・別編）	・部会で議論した内容に基づく執筆 ※市史各巻の執筆を行うため、部会の専門委員と部分執筆を行う執筆者で構成する。 編集委員・専門委員以外の執筆者⇒ （松江市職員、スポーツ財団職員は未掲載）	《地形・地質 G》 ・ 徳岡隆夫　・入月俊明 ・ 横田修一郎　・林広樹 ・ 酒井哲弥　・三瓶良和 ・ 古川寛子　・田中秀典 ・ 会下和宏　・渡邉正巳 ・ 乗岡　実　・新宮敦弘 ・ 清家　泰　・瀬戸浩二 ・ 河原荘一郎　・管原庄吾 ・ 菅井降吉 《気候・気象 G》 ・ 谷永　守　・山根克彦 《生物 G》 ・ 金森弘樹　・森　茂晃 ・ 桑原弘道　・桑原正樹 ・ 岩田貴之　・淀江賢一郎 ・ 大浜祥治　・林　成多 ・ 松田隆嗣　・尾原和夫 ・ 前田泰生　・筆谷憲一 ・ 山口勝秀　・戸田顕史 ・ 田中秀典　・柳浦正夫 ・ 井上雅仁　・冨川康之 ・ 宮崎惠子　・野津貴章	・ 池淵俊一 ・ 松尾充晶	・ 的野克之 ・ 永井猛 ・ 西尾克己 ・ 山根正明 ・ 中野賢治 ・ 下房俊一	・ 伊藤康宏 ・ 森本幾子 ・ 要木純一 ・ 中安惠一 ・ 原　豊二 ・ 常松隆嗣 ・ 仲野義文 ・ 藤原雄高	・ 矢野健太郎 ・ 内田融　・松下孝昭 ・ 関耕平　・大矢幸雄 ・ 廣嶋清志　・板垣貴志 ・ 内田和義　・山本志乃 ・ 井口隆史　・吉儀和平 ・ 谷口憲治　・徳岡隆夫 ・ 中間由紀子 ・ 保永展利 ・ 中野茂夫 ・ 工藤泰子 ・ 勝部昭 ・ 喜多村理子	・ 面谷明俊	・ 西島太郎 ・ 安髙尚毅 ・ 中野茂夫 ・ 狭川真一 ・ 花谷　浩 ・ 佐々木倫朗 ・ 大矢幸雄	
	専門部会員（専門委員）、執筆者合計	47	13	11	21	24	10	22	13
事務局体制	1. 市史編纂事業の事務的統括 2. 編集委員等専門研究者の支援 3. 市史、付帯出版物等の編集作業・出版 （市民の代弁者としてのチェック機能も） 4. 文化運動の推進（講座やシンポジウムなど）	〔松江市〕市長：松浦正敬、副市長：能海広明、副市長：星野芳伸　〔松江市教育委員会〕教育長：清水伸夫 〔歴史まちづくり部〕部長：須山敏之　次長：稲田 信 （史料編纂課）課長：稲田 信、副主任：小山祥子、嘱託職員：白名悦子 主任編纂官：内田文恵、専門調査員：北村久美子、専門調査員：石塚晶子、専門調査員：村角紀子、専門調査員：高橋真千子 （松江城調査研究室）室長：稲田 信、専門企画員：藤井 一、松江城部会長：西尾克己、専門調査員：佐藤綾子							

【資料 10】松江市史編纂事務局体制変遷表

平成 19 年度 （2007）	〔松江市〕市長：松浦正敬、副市長：伊藤忠志、副市長：片山重政 〔松江市教育委員会〕教育長：福島律子、理事：友森勉、副教育長：杉谷充久 （文化財課）文化財課長：吉岡弘行、課長補佐（文化財係長）：稲田信、副主任：木下誠
平成 20 年度 （2008）	〔松江市〕市長：松浦正敬、副市長：伊藤忠志、副市長：中村光男 〔松江市教育委員会〕教育長：福島律子、理事：友森勉、副教育長：杉谷充久 （文化財課）課長：吉岡弘行、課長補佐（文化財係長）：稲田信、副主任：木下誠、史料編纂係長：内田文恵、専門官：山根正明、専門官：宍道正年、専門調査員：和田美幸、専門調査員：福井将介、専門調査員：沼本龍
平成 21 年度 （2009）	〔松江市〕市長：松浦正敬、副市長：伊藤忠志→小川正幸、副市長：中村光男 〔松江市教育委員会〕教育長：福島律子、理事：友森勉、副教育長：瀧野一夫 （文化財課）課長：吉岡弘行、課長補佐（文化財係長）：稲田信、副主任：木下誠 （史料編纂室）室長：吉岡弘行、主任編纂官：内田文恵、専門官：山根正明、専門調査員：和田美幸、専門調査員：居石由樹子、専門調査員：福井将介、専門調査員：沼本龍
平成 22 年度 （2010）	〔松江市〕市長：松浦正敬、副市長：小川正幸、副市長：中村光男 〔松江市教育委員会〕教育長：福島律子、理事：友森勉、副教育長：瀧野一夫、文化財課長：錦織慶樹 （史料編纂室）室長：稲田信、副主任：木下誠、嘱託：石井悠、主任編纂官：内田文恵、専門官：山根正明、専門調査員：和田美幸、専門調査員：居石由樹子、専門調査員：福井将介、専門調査員：沼本龍
平成 23 年度 （2011）	〔松江市〕市長：松浦正敬、副市長：小川正幸、副市長：松浦芳彦 〔松江市教育委員会〕教育長：福島律子、副教育長：松浦俊彦、副教育長：坂根哲治、文化財課長：錦織慶樹 （史料編纂室）室長：稲田信、副主任：木下誠、嘱託：石井悠、嘱託：岩橋康子、主任編纂官：内田文恵、専門官：山根正明、専門調査員：北村久美子、専門調査員：居石由樹子、専門調査員：福井将介、専門調査員：沼本龍
平成 24 年度 （2012）	〔松江市〕市長：松浦正敬、副市長：小川正幸、副市長：松浦芳彦 〔松江市教育委員会〕教育長：福島律子、副教育長：松浦俊彦、副教育長：坂根哲治、文化財課長：錦織慶樹 （史料編纂室）室長：稲田信、副主任：木下誠、主任編纂官：内田文恵、専門官：山根正明、専門調査員：北村久美子、専門調査員：居石由樹子→和田美幸、専門調査員：福井将介、専門調査員：沼本龍
平成 25 年度 （2013）	〔松江市〕市長：松浦正敬、副市長：小川正幸→能海広明、副市長：松浦芳彦 〔松江市教育委員会〕教育長：福島律子→清水伸夫、副教育長：松浦俊彦→安部隆、副教育長：古川康徳、文化財課長：錦織慶樹 （史料編纂室）室長：稲田信、副主任：木下誠、主任：西村裕美、主任編纂官：内田文恵、専門調査員：北村久美子、専門調査員：石塚晶子、専門調査員：和田美幸、専門調査員：福井将介、専門調査員：沼本龍
平成 26 年度 （2014）	〔松江市〕市長：松浦正敬、副市長：能海広明、副市長：吉山治〔松江市教育委員会〕教育長：清水伸夫 〔歴史まちづくり部〕部長：安田憲司、文化財統括官：錦織慶樹 〔まちづくり文化財課〕課長：永島真吾 （史料編纂室）室長：稲田信、主任：木下誠、主任：西村裕美、主任編纂官：内田文恵、専門調査員：北村久美子、専門調査員：石塚晶子、専門調査員：和田美幸、専門調査員：福井将介、専門調査員：沼本龍→高橋真千子
平成 27 年度 （2015）	〔松江市〕市長：松浦正敬、副市長：能海広明、副市長：吉山治〔松江市教育委員会〕教育長：清水伸夫 〔歴史まちづくり部〕部長：安田憲司、次長：安達良三 〔まちづくり文化財課〕課長：永島真吾 （史料編纂室）室長：稲田信、主任：西村裕美、副主任：小山祥子、主任編纂官：内田文恵、専門調査員：北村久美子、専門調査員：石塚晶子、専門調査員：和田美幸、専門調査員：福井将介、専門調査員：高橋真千子
平成 28 年度 （2016）	〔松江市〕市長：松浦正敬、副市長：能海広明、副市長：吉山治〔松江市教育委員会〕教育長：清水伸夫 〔歴史まちづくり部〕部長：藤原亮彦　次長：永島真吾 （史料編纂課）課長：稲田信、副主任：小山祥子、副主任：岩町紀子、主任編纂官：内田文恵、専門調査員：北村久美子、専門調査員：石塚晶子、専門調査員：和田美幸、専門調査員：高橋真千子→村角紀子、専門調査員：福井将介 （松江城調査研究室）室長：卜部吉博、主幹：山本盛治、専門調査員：佐藤綾子
平成 29 年度 （2017）	〔松江市〕市長：松浦正敬、副市長：能海広明、副市長：星野芳伸〔松江市教育委員会〕教育長：清水伸夫 〔歴史まちづくり部〕部長：藤原亮彦　次長：永島真吾 （史料編纂課）課長：稲田信、副主任：小山祥子、副主任：岩町紀子、行政専門員：白名悦子、主任編纂官：内田文恵、専門調査員：北村久美子、専門調査員：石塚晶子、専門調査員：和田美幸→高橋真千子、専門調査員：村角紀子、専門調査員：福井将介 （松江城調査研究室）室長：山本盛治、専門官：卜部吉博、専門調査員：佐藤綾子
平成 30 年度 （2018）	〔松江市〕市長：松浦正敬、副市長：能海広明、副市長：星野芳伸〔松江市教育委員会〕教育長：清水伸夫 〔歴史まちづくり部〕部長：藤原亮彦　次長：永田明夫 （史料編纂課）課長：稲田信、副主任：小山祥子、行政専門員：白名悦子、主任編纂官：内田文恵、専門調査員：北村久美子、専門調査員：石塚晶子、専門調査員：村角紀子、専門調査員：福井将介、専門調査員：高橋真千子 （松江城調査研究室）室長：山本盛治、専門調査員：佐藤綾子、松江城部会長：西尾克己
令和元年度 （2019）	〔松江市〕市長：松浦正敬、副市長：能海広明、副市長：星野芳伸〔松江市教育委員会〕教育長：清水伸夫 〔歴史まちづくり部〕部長：須山敏之　次長：稲田信 （史料編纂課）課長：稲田信、副主任：小山祥子、嘱託：白名悦子、臨時職員：岩根栄子、主任編纂官：内田文恵、専門調査員：北村久美子、専門調査員：石塚晶子、専門調査員：村角紀子、専門調査員：高橋真千子 （松江城調査研究室）室長：稲田信、専門企画員：藤井一、専門調査員：佐藤綾子、松江城部会長：西尾克己
令和 2 年度 （2020）	〔松江市〕市長：松浦正敬、副市長：能海広明、副市長：星野芳伸、副市長：平林剛　〔松江市教育委員会〕教育長：清水伸夫 〔歴史まちづくり部〕部長：須山敏之　次長：稲田信 （史料調査課）課長：稲田信、副主任：小山祥子、歴史史料専門調査員：村角紀子、歴史史料専門調査員：高橋真千子、（事務）岩根栄子 （松江城調査研究室）室長：稲田信、調査研究係長：藤井一、主事：高吉沙季、文化財総合ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ：丹羽野裕、歴史史料専門調査員：佐藤綾子、松江城部会長：西尾克己

【資料 11】松江市史編纂事業全期間における主な活動

（平成 19 年 [2007] ～令和 2 年 [2020]）

期日	担当部会	内容	備考
平成 19 年 (2007)			
3 月 29 日		**松江開府 400 年祭の基本計画に「松江市史及び松江開府 400 年祭記念誌を編纂する」と盛り込まれる**	
3 月 30 日		『ふるさと文庫』2 発行	「大根島のおいたちと洞窟生物」澤田順弘・新部一太郎・星川和夫
4 月 1 日		松江開府 400 年祭始まる	
		松江市史編纂事業実施に向けての準備始まる	松江市教育委員会（文化財課）で具体的な組織人員体制を立案、庁内調整を始める
12 月 1 日		『松江市歴史叢書』1（京都・妙心寺春光院）発行	
平成 20 年 (2008)			
2 月 1 日		『ふるさと文庫』3 発行	「松江藩の財政危機を救え　- 二つの藩政改革とその後の松江藩 -」乾隆明
3 月		松浦市長、市議会で松江城国宝化に向けて市民運動の醸成を提唱	
3 月 30 日		『ふるさと文庫』4 発行	「堀尾吉晴と忠氏　- 松江開府を成しとげた武将たち -」佐々木倫朗
4 月 1 日		**組織改編により松江市教育委員会文化財課内に史料編纂係設置**	史料編纂係 : 係長 1 名（島根県より派遣）、専門官 2 名、嘱託職員 3 名配属、実務・庶務は文化財課文化財係職員が担う
5 月 13 日		井上寛司氏と事務局による市史編纂の考え方についての論点整理の協議	
7 月 4 日	全般	第 1 回松江市史編纂検討委員会	〔議題〕 ①市史の編纂方針 ②市史の内容（構成）
7 月 5 日		新聞記事掲載「松江市史編さん　検討委が初会合　委員長に藤岡氏」	山陰中央新報
7 月 5 日		新聞記事掲載「松江市史編纂で初会合」	読売新聞
7 月 25 日	全般	松江市史編纂検討小委員会	〔議題〕 松江市史編纂基本計画（素案）について ①出版計画 ②執筆者　など
7 月 31 日	全般	松江市史編纂検討小委員会	〔議題〕 松江市史編纂基本計画（素案）について ①具体的な編集構成 ②出版予定年 ③完成年 ④大まかな時期区分 ⑤編集・執筆陣の基本方針　など
8 月 28 日	全般	第 2 回松江市史編纂検討委員会	〔議題〕 松江市史編纂基本計画（素案）について ①松江市史編纂の必要性と目的、松江市の目指す新しい市史 ②市史編纂の方針 ③市史の内容、出版計画 ④市史編纂上の基礎調査と付帯出版物 ⑤市史編纂体制
8 月 30 日		新聞記事掲載「松江の近世史研究に光明－家老屋敷跡遺跡」	山陰中央新報
9 月 2-6 日		松江藩家老三谷家文書調査	
9 月 30 日	全般	松江市史編纂検討小委員会	〔議題〕松江市史編纂基本計画について
10 月 5 日		新聞記事掲載「注目の一冊　乾隆明編著『松江藩の時代』」	山陰中央新報
10 月 8 日	全般	第 3 回松江市史編纂検討委員会	〔議題〕松江市史編纂基本計画について
10 月 20 日	全般	「松江市史編纂基本計画」答申	松江市史編纂検討委員会藤岡大拙委員長から松浦正敬松江市長へ
11 月 8 日		新聞記事掲載「『松江市史』の計画提出　10 年度に第 1 弾　全 19 冊で構成」	山陰中央新報
11 月 9 日		『ふるさと文庫』5 発行	「城下町松江の誕生と町のしくみ－近世大名堀尾氏の描いた都市デザイン－」松尾寿
平成 21 年 (2009)			
1 月 17 日		『ふるさと文庫』6 発行	「堀尾吉晴 - 松江城への道　- 浜松、富田、松江城普請の軌跡 -」山根正明
4 月 1 日		**組織改編により松江市教育委員会文化財課内室として史料編纂室設置**	室長 1 名 (文化財課長兼務)、主任編纂官 1 名 (嘱託)、専門官 1 名 (嘱託)、専門調査員 4 名 (嘱託) 配置、文化財課内から副主任 1 名の応援体制をとる。翌 22 年 4 月からは文化財課からの応援体制を止め専任室長 (市職員)、専任副主任 1 名 (市職員) を配置
4 月 3 日		新聞記事掲載「家老屋敷遺跡問題を振り返る〈田中義昭〉」	山陰中央新報
6 月 15 日	全般	**第 1 回松江市史編纂委員会**	〔議題〕 ①松江市史編纂基本計画について ②松江市史の構成と出版計画について ③松江市史編纂体制について ④平成 21 年度事業計画について
6 月 20 日		新聞記事掲載「松江市史編纂　10 年作業　本格始動」	山陰中央新報
6 月 21 日	全般	**第 1 回松江市史編集委員会**	〔議題〕 ①第 1 回松江市史編纂委員会 (6 月 15 日開催) の報告について ②松江市史各巻の体裁について ③史料編「近世Ⅰ」の構成・掲載史料・体裁について
6 月 21 日	原始古代	原始古代史部会	〔議題〕 ①部会の任務と構成の検討 ②史料編・通史編の編纂方針の検討
6 月 21 日	中世	中世史部会	〔議題〕 ①部会の任務と構成の検討 ②史料編・通史編の編纂方針の検討
6 月 21 日	近世	近世史部会	〔議題〕 ①部会の任務と構成の検討 ②史料編・通史編の編纂方針の検討
6 月 21 日	近現代	近現代史部会	〔議題〕 ①部会の任務と構成の検討 ②史料編・通史編の編纂方針の検討
6 月 22 日	民俗	民俗部会	〔議題〕 ①調査項目の分担、合同調査の予定、調査方針等の検討
6 月 26 日		新聞記事掲載「松江市史刷新へ編纂委が初会合　2010 年度発刊目標」	読売新聞
7 月 2 日		新聞記事掲載「世紀の大事業　『松江市史』編纂〈井上寛司〉」	山陰中央新報
7 月 27 日	自然環境	自然環境部会	〔議題〕 ①部会の任務と構成の検討 ②史料編・通史編の編纂方針の検討
7 月 29 日 -8 月 1 日		松江藩家老三谷家文書調査	
8 月 3 日		新聞記事掲載「ひと　松江市史の編さんを進める小林准士さん」	山陰中央新報

資料 11　松江市史編纂事業全期間における主な活動

期日	担当部会	内容	備考
8 月 10 日	近現代	近現代史部会	〔議題〕
8 月 21 日	民俗	民俗調査	恵曇地区聴き取り調査
8 月 23 日	民俗	民俗調査	八束地区聴き取り調査
8 月 23 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕史料編「考古資料」の編集方針の検討
8 月 24 日	全般	第 2 回松江市史編集委員会	〔議題〕 ①各専門部会の進捗状況について（編集方針、構成と出版計画等） ②平成 22 年度事業計画について ③史料編『考古資料編 (原始・古代・中世)』(仮題) の編集方針について
8 月 24 日	原始古代	原始古代史部会	〔議題〕史料編の編集方針の検討
8 月 24 日	中世	中世史部会	〔議題〕編集方針の検討
8 月 24 日	近世	近世史部会	〔議題〕編集方針の検討
8 月 25 日	近世	市内巡検	美保関ほか
8 月 25 日	民俗	民俗調査	美保関地区聴き取り調査
8 月 28 日	民俗	民俗調査	島根地区、秋鹿地区聴き取り調査
8 月 30 日	民俗	民俗調査	片江地区聴き取り調査
9 月 9 日	自然環境	自然環境部会	〔議題〕工程表の検討
9 月 19 日		「松江城を国宝にする市民の会」設立	
9 月 21 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕史料編「考古資料」の掲載遺跡、判型、遺跡一覧等の検討
10 月	全般	松江市史編纂基本計画改訂（第 1 回改訂）	編集委員会、専門部会での議論を経て編集上の観点からの改訂
10 月 17 日	原始古代	古代専門部会	〔議題〕史料編「古代・中世Ⅰ」の判型、版面設定、掲載史料の検討
10 月 27 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕史料編「考古資料」の掲載遺跡・執筆者、凡例等の検討
10 月 30 日	全般	第 2 回松江市史編纂委員会	〔議題〕 ①松江市史編纂事業の進捗状況について ②松江市史編纂体制について
11 月 1 日		「市史編纂だより①」発行（市報松江 11 月号に掲載）	〔タイトル〕松江市史の編纂が始まりました ・市史編纂の必要性 ・市史編纂の基本方針 ・松江市史の構成 ・出版計画
11 月 10 日		新聞記事掲載「松江市史　国宝化運動と連携へ別編「松江城」　編纂委が第 2 回会合」	山陰中央新報
11 月 18 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕①史料編「考古資料」の版面、資料集成、個別遺跡解説等の検討
12 月 25 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕①史料編「考古資料」のスケジュール、版面設定、執筆要領の検討

平成 22 年 (2010)

1 月 27 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕 ①史料編「考古資料」の執筆状況の確認 ②史料編「考古資料」の資料集成の検討
2 月 1 日		『ふるさと文庫』8 発行	「京極忠高の出雲国・松江」西島太郎
2 月 15 日		**松江市観光振興部に松江城国宝化推進室設置**	平成 28 年 4 月より「松江城調査研究室」と改称、史料編纂課の内室となる
3 月 1 日		「市史編纂だより②」発行（市報松江 3 月号に掲載）	〔タイトル〕松江市史への思い（編纂委員）
3 月 3 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕①史料編「考古資料」の執筆状況イメージ、掲載遺跡の追加の検討
3 月 10 日		『ふるさと文庫』7 発行	「松江市の指定文化財　- 未来へ伝える松江の文化遺産 250-」 「松江市の指定文化財」編集委員会
3 月 14 日	原始古代	古代専門部会	〔議題〕 ①史料検索の進捗状況の確認 ②史料編「古代・中世Ⅰ」の構成の検討
3 月 20 日		『ふるさと文庫』9 発行	「松江城下に生きる　- 新屋太助の日記を読み解く -」松原祥子
3 月 30 日	民俗	民俗部会	〔議題〕 ①調査結果の報告
3 月 26 日		『ふるさと文庫』10 発行	「松江市史への序章　- 松江の歴史像を探る -」井上寛司他 18 名
3 月 26 日		『松江市歴史叢書』2（松江市史研究 1 号）発行	
3 月 31 日		『松江市歴史叢書』3（興雲閣特集Ⅰ）発行	
4 月 1 日		史料編纂室に専任室長 (市職員)、専任副主任 1 名 (市職員) 配置	専任室長 1 名、専任事務担当（市職員）1 名、専門調査員 6 名 (嘱託) という編纂室体制の基本が整う
4 月		松江市の行政組織内 (庁内) で行われた松江市史編纂事業の検討作業始まる	副市長をトップとする総務部、財政部による編纂計画の抜本的な見直し検討
4 月 27 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕 ①平成 22 年度活動計画の検討 ②史料編「考古資料」の内容検討
5 月 1 日		「市史編纂だより③」発行（市報松江 5 月号に掲載）	〔タイトル〕松江の歴史像に迫る本　ふるさと文庫で発刊
5 月 9 日	民俗	民俗部会	〔議題〕 ①別編「民俗編」の編集方針の検討 ②平成 22 年度の調査計画の検討
5 月 12 日		新聞記事掲載「『松江市史』編纂への期待　〈川島芙美子〉」	山陰中央新報
5 月 14 日		新聞記事掲載「あすの動き・予定 15 日（土）松江市史シンポジウム（松江市）」	山陰中央新報
5 月 15 日		新聞記事掲載「イベント 15 日　定期講座「松江藩講座」松江市史シンポジウム　プラバ大会議室」	山陰中央新報
5 月 15 日	全般	松江市史シンポジウム	〔第一部〕基調報告「今なぜ『松江市史』の編纂なのか」 〔第二部〕パネルディスカッション「松江の歴史像を探る」
5 月 16 日		新聞記事掲載「市史編纂の意義考える　松江でシンポ　各専門家が意見交換」	山陰中央新報
5 月 16 日	全般	松江市史合同部会	〔議題〕 ①史料編「近世Ⅰ」における差別的表現の取り扱いについて ②各部会の進捗状況について ③啓発活動（市民との意見交換や情報提供）について ＊編纂事業の庁内検討作業が始まり、編集委員会の代わりに合同部会として開催
5 月 16 日	原始古代	古代専門部会	〔議題〕 ①史料編「古代・中世Ⅰ」の史料掲載方針の検討 ②原稿スタイルの検討
5 月 16 日	中世	中世史部会	〔議題〕 ①史料編「古代・中世Ⅰ」の今後の作業内容の確認
5 月 16 日	近世	近世史部会	〔議題〕 ①今後の作業内容の確認
5 月 16 日	近現代	近現代史料調査	合同汽船関連史料調査
5 月 19 日	自然環境	自然環境部会	〔議題〕 ①編集計画（工程表）の検討
5 月 31 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕 ①史料編「考古資料」の資料集成の検討 ②個別遺跡解説の原稿提出状況の確認
6 月 1 日		『ふるさと文庫』11 発行	「松江藩校の変遷と役割」梶谷光弘

期日	担当部会	内容	備考
6 月 16 日	全般	松江市内寺社史料調査検討委員会	〔議題〕 ①事業計画について ②調査先（候補）について ③調査方法について
6 月 21 日	民俗	民俗調査	城東地区聴き取り調査
6 月 22 日		新聞記事掲載「松江市史歴史叢書 2 巻と 3 巻を刊行　市史に関する論文　城山の興雲閣沿革」	山陰中央新報
6 月 25 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕 ①史料編「考古資料」の資料集成の検討 ②個別遺跡解説の原稿提出状況の確認
7 月 2 日	民俗	民俗調査	白潟地区聴き取り調査
7 月 12 日		**第 1 回松江城調査研究委員会（西和夫委員長）**	
7 月 26 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕 ①史料編「考古資料」の出土文字資料の編集方針の検討
7 月 29,30 日	原始古代	古代専門部会	〔議題〕 ①史料編「古代・中世Ⅰ」の掲載史料の選別作業の実施 ②執筆分担の検討
8 月 1 日		「市史編纂だより④」発行（市報松江 8 月号に掲載）	〔タイトル〕後世に残したい松江市の「自然」・「景観」を募集します
8 月 6,7 日	絵図・地図	絵図調査	山口県内絵図調査 (大矢編集委員)
8 月 7 日	民俗	民俗調査	城北地区聴き取り調査
8 月 8-10 日	中世	中世史料調査	史料編「古代・中世Ⅰ」の掲載史料（秋上家文書）の原本校正
8 月 10-12 日	原始古代	古代史料調査	愛知県西尾市岩瀬文庫所蔵史料調査 (大日方編集委員)
8 月 11 日	全般	松江市史部会長会議	〔議題〕 ①史料編「近世Ⅰ」における差別的表現の取り扱いについて ②各部会の進捗状況について
8 月 12,13 日	原始古代	古代史料調査	奈良県内出土木簡調査 (佐藤編集委員・平石専門委員)
8 月 18 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕史料編「考古資料」の個別遺跡解説の原稿提出状況の確認
8 月 18-30 日		佐太神社所蔵史料調査	
8 月 21 日	民俗	民俗調査	城西地区聴き取り調査
8 月 25 日	絵図・地図	絵図・地図部会	〔議題〕史料編「絵図・地図」の編集方針、今後の作業内容の確認
8 月		行政組織内 (庁内) で行われた松江市史編纂事業の検討作業終了	【発行巻数】19 冊→ 18 冊【刷部数】2,000 部→ 500 部【販売価格】A5 判 1 冊 5,000 円、A4 判 1 冊 7,000 円。【総事業費】総事業費の上限を設定【編集、印刷契約】プロポーザル審査ではなく競争入札で発注。瑕疵責任を明確にするため編集・印刷 [印刷は地元業者に配慮] は一括発注【地元業者への配慮】編集・印刷業務における地元業者への印刷発注等
9 月 1 日		史料調査協力員の会	〔議題〕 ①松江市史編纂事業について ②史料（資料）に関する情報提供について
9 月 6-10 日		松江藩家老三谷家文書調査	
9 月 7 日	近現代	近現代史調査	菅田町での聴き取り会
9 月 9 日	近現代	近現代史部会	〔議題〕通史編の基本構成及び執筆分担の検討
9 月 10 日	近現代	近現代史料調査	大庭公民館所蔵史料調査
9 月 14 日	松江城	松江城部会	〔議題〕別編「松江城」の編集方針、調査計画の検討
9 月 15-19 日	近世	近世史料調査	秋田・山形県内史料調査（小林編纂委員・岸本編集委員）
9 月 17 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕史料編「考古資料」の個別遺跡解説の原稿提出状況の確認
9 月 18,19 日	絵図・地図	絵図調査	兵庫・岐阜県内絵図調査 (大矢編集委員、上杉専門委員)
9 月 19 日	松江城	松江城部会	〔議題〕絵図・地図部会、近世史部会との役割分担の検討
10 月	全般	松江市史編纂基本計画改訂（第 2 回改訂）	行政組織内 (庁内) で行われた松江市史編纂事業の検討作業の反映
10 月 1 日		「市史編纂コラム第 1 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕堀尾但馬の子孫・堀尾方善の後半生
10 月 6 日		文化庁へ松江城天守国宝指定の陳情（署名 128,044 人分提出）	この時を機に松江市は学術的な成果を目指す姿勢に転換
10 月 13,14 日	近現代	近現代史料調査	大庭公民館所蔵史料調査
10 月 14 日	絵図・地図	絵図調査	広島大学所蔵絵図調査 (大矢編集委員、乾編纂委員)
10 月 19 日	自然環境	自然環境部会	〔議題〕 ①進捗状況の確認 ②今後の予定の検討 ③通史編「自然環境・原始・古代」の執筆計画の検討
10 月 20 日	松江城	松江城部会（建築小部会）	〔議題〕 ①建築小部会の体制構築について ②別編「松江城」の構成・執筆分担等について ③今後の調査予定等について
10 月 24 日	民俗	民俗部会	〔議題〕 ①今年度の調査日程の確認 ②調査細目（執筆細目）について ③平成 22 年度調査報告会について
10 月 25 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕 ①史料編「考古資料」の個別遺跡解説の原稿提出状況の確認 ②通史編「自然環境・原始・古代」について ③東京国立博物館所蔵遺物調査について
10 月 26 日	近現代	近現代史調査	菅田町での聴き取り会
10 月 31 日		『ふるさと文庫』12 発行	「決定版　見立番付を楽しむ」乾隆明、下房俊一
11 月 1 日		「市史編纂だより⑤」発行(市報松江 11 月号に掲載)	〔タイトル〕箱底からの宝の出現
10 月 26 日		「市史編纂コラム第 2 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕銀山と松江藩との借金バトル
11 月 1,2 日	原始古代	古代専門部会	〔議題〕 ①史料編「古代・中世Ⅰ」の掲載史料の選別作業の実施 ②ｷﾛﾛｼﾞ遺跡出土墨書土器・中殿遺跡出土木簡の釈文確認 ③今後の予定の検討 ④通史編「自然環境・原始・古代」についての検討
11 月 4 日	松江城	松江城関連調査	大井町岩汐石切場調査
11 月 9 日		朝日寺所蔵史料調査	
11 月 12 日		新聞記事掲載「松江藩の参勤交代街道絵図　松江市内民家で発見　江戸全行程 800 キロ記載」	山陰中央新報
11 月 16-18 日	松江城	松江城関連調査	石材産地（岩石）調査 (先山委員)
11 月 17-19 日		近現代史料調査	大庭公民館所蔵史料調査
11 月 19 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕 ①史料編「考古資料」の個別遺跡解説の原稿提出状況の確認 ②東出雲町の遺跡について ③年代観の確認 ④ 12 月に行う原稿確認について
11 月 23 日	松江城	松江城関連調査	松江城石垣調査 (乗岡専門委員)
11 月 25 日	全般	松江市史編纂委員会	〔議題〕 ①松江市史編纂基本計画の変更について ②平成 22 年度の事業経過報告について ③平成 23 年度の事業計画について ④市史の体裁について

資料 11　松江市史編纂事業全期間における主な活動

期日	担当部会	内容	備考
11 月 26 日		近現代史料調査	八束支所・美保関支所所蔵史料調査
11 月 26 日	絵図・地図	絵図調査	東京都内絵図調査 (大矢部会長、上杉委員、高安委員)
11 月 29 日		神魂神社所蔵史料調査	
11 月 29,30 日	松江城	松江城関連調査	松江城下町遺跡調査 (松尾委員)
12 月 1 日		「市史編纂コラム第 3 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕上空に現れる謎の物体
12 月 4 日		新聞記事掲載「市史の印刷部数大幅減　基本計画変更　財政事情悪化受け」	山陰中央新報
12 月 6-8 日		佐太神社所蔵史料調査	
12 月 10 日	松江城	松江城部会（城郭史小部会）	〔議題〕 ①章・節立てについて ②ページ割りと体裁について ③今後の調査活動について ④部会員の増員について
12 月 12 日	絵図・地図	絵図・地図部会	〔議題〕 ①絵図地図名の命名基準について ②史料編「絵図地図」の掲載資料の選定
12 月 14 日	近現代	近現代史料調査	八束支所所蔵史料調査
12 月 15 日		新聞記事掲載「松江市教委『見立て番付を楽しむ』発刊　江戸庶民が付けた序列」	山陰中央新報
12 月 16 日		新聞記事掲載「松江市ふるさと文庫　新史料を発掘、成果着々〈小林准士〉」	山陰中央新報
12 月 16 日		新聞記事掲載「決定版見立番付を楽しむ：今も昔も「番付」好き　松江市教委から発行」	毎日新聞
12 月 15,16 日		信楽寺所蔵史料調査	
12 月 19 日	原始古代	考古専門部会	史料編「考古資料」原稿確認会
12 月 19 日	近世	近世史部会	〔議題〕 ①史料編「近世Ⅰ」の編集について ②史料編「近世Ⅱ」（藩法集）の編集について ③史料編「近世Ⅲ」の編集について ④通史編の執筆分担の検討と次回以降の予定 ⑤史料調査状況等の報告 ⑥絵図部会との調整
12 月 21 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕 ①史料編「考古資料」の原稿集約状況について ②東出雲町の遺跡について ③ 12/19 の原稿確認会の結果について
12 月 24 日	松江城	松江城関連調査	大井・大海崎石切場調査
12 月 25,26 日	松江城	松江城関連調査	松江城・城下町調査 (松尾専門委員、山上専門委員)
12 月 29 日	原始古代	考古専門部会	史料編「考古資料」原稿確認会

平成 23 年 (2011)

1 月 5 日		「市史編纂コラム第 4 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕松江制服図鑑明治編 - 私立中学修道館の巻 -
1 月 6 日	原始古代	考古専門部会	史料編「考古資料」（旧石器時代）原稿読み合わせ
1 月 7 日	全般	部会長会議	〔議題〕市史講演会の検討、各部会からの報告　など
1 月 8,9 日	原始古代	古代専門部会	〔議題〕 ①史料編の掲載史料の選定、凡例の検討、原稿読み合わせ ②史料編「古代・中世Ⅰ」における古代・中世の頁配分の検討
1 月 16 日	原始古代	考古専門部会	史料編「考古資料」（古墳時代）原稿読み合わせ
1 月 19 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕 ①史料編「考古資料」の原稿提出状況の確認 ②史料編「考古資料」の字数・行数・字体・フォントの検討
1 月 30 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕史料編「考古資料」（古墳時代）原稿読み合わせ
2 月 1 日		「市史編纂だより⑥」発行（市報松江 2 月号に掲載）	〔タイトル〕『秘書』の発見
2 月 1 日		「市史編纂コラム第 5 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕石切丁場に残る残念石
2 月 3 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕史料編「考古資料」の原稿提出状況の確認、凡例の検討
2 月 3,4 日		洞光寺所蔵史料調査	
2 月 12 日	原始古代	考古専門部会	史料編「考古資料」（古墳時代）原稿読み合わせ
2 月 13 日	原始古代	考古専門部会	史料編「考古資料」（奈良・平安時代）原稿読み合わせ
2 月 14,15 日	原始古代	古代史料調査	奈良県内出土木簡調査 (佐藤信委員・平石委員)
2 月 16 日	松江城	松江城部会	〔議題〕 ①別編「松江城」の構成の検討 ②これまでの調査・研究成果の確認 ③今後の調査・研究の検討　など
2 月 18 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕史料編「考古資料」（古墳時代）原稿読み合わせ
2 月 23,24 日		信楽寺所蔵史料調査	
2 月 28 日～3 月 1 日	絵図・地図	絵図調査	東京都内絵図調査 (川村委員)
3 月 1 日		「市史通信№ 1」発行（市報松江 3 月号に折込）	〔内容〕 ①『松江市史』第 1 回配本・史料編「近世Ⅰ」の概要紹介 ②専門部会ごとの各部会長の抱負 ③刊行計画、編纂体制の概要紹介
3 月 2 日		「市史編纂コラム第 6 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕明治時代のシラウオ缶詰工場～宍道湖・中海の豊かな水産資源と松江の商工業～
3 月 5 日	松江城	松江城関連調査	富田城石垣調査 (乗岡委員)
3 月 7 日	近現代	近現代史料調査	松江市役所文書調査 (能川委員、鬼嶋委員)
3 月 8 日	近現代	近現代史部会	〔議題〕 ①市内巡見 (八束町、市内団地) ②金沢市史編纂に関する話題提供 (能川編集委員) ③史料編の構成の検討　など
3 月 8,9 日	近世	近世史料調査	草津宿関連史料調査 (鳥谷委員)
3 月 9 日	近現代	近現代史料調査	島根県立図書館所蔵資料調査 (鬼嶋委員)
3 月 9 ～ 11 日	原始古代	古代史料調査	本居宣長記念館所蔵史料調査 (森田委員)
3 月 10 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕史料編「考古資料」の原稿提出状況・協力者一覧の確認
3 月 10,11 日	近現代	近現代史料調査	東京都内史料調査 (居石委員)
3 月 10 日		『ふるさと文庫』13 発行	「雲陽秘事記と松江藩の人々」田中則雄
3 月 13 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕史料編「考古資料」（古墳時代）原稿読み合わせ
3 月 19 日		**松江歴史館開館**	充実した史料の保存環境が備わり、松江市にとって貴重な史料の収集・保管と展示の基盤が整う
3 月 22,23 日	原始古代	古代専門部会	〔議題〕 ①平成 23 年度の部会活動の検討 ②史料編「古代・中世Ⅰ」の口絵・凡例・史料解説の検討 ③史料編「古代・中世Ⅰ」の原稿の読み合わせ ④通史編の構成の検討　など

期日	担当部会	内容	備考
3 月 24,25 日	松江城	松江城関連調査	三刀屋城跡調査 (中井専門委員)
3 月 25 日		『松江市歴史叢書』4（松江市史研究 2 号）発行	〔内容〕 ・「応仁・文明の乱と尼子氏」 ・「島根県民俗学関連雑誌等目次総論」 ・「宗教施設と宗教者からみた近世出雲の特徴 ・「松江市史編纂日誌」 ・「附 松江市史編纂基本計画」
3 月 28 日	全般	部会長会議	〔議題〕 ①各部会からの報告 ②市史講座の確認 ③平成 23 年度事業計画の検討 ④史料編の凡例の検討 ⑤編集委員会の議題の検討　など
4 月 1 日		「市史編纂コラム第 7 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕伊能測量を契機に正確な地図を作った松江藩の人々
4 月 3 日	民俗	民俗部会	〔議題〕 ①平成 22 年度調査報告 ②別編「民俗」の構成の検討　など
4 月 5 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕史料編の進捗状況の確認　など
4 月 17 日		新聞記事掲載「読書　田中則雄著『雲陽秘事記と松江藩の人々』〈三原浩良〉」	山陰中央新報
4 月 17 日	原始古代	考古専門部会	史料編「考古資料」（中世、弥生時代）原稿読み合わせ
4 月 18 ～ 20 日		熊野大社所蔵史料調査	
4 月 19 日	松江城	松江城関連調査	松江城関連石切場調査 (大海崎・上本庄)
4 月 26 日		松江市内寺社史料調査検討委員会	
4 月 26,27 日	原始古代	考古資料調査	東京国立博物館所蔵松江市内出土遺物調査 (勝部委員)
5 月 2 日		「市史編纂コラム第 8 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕佐太神社の神在祭
5 月 6 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕史料編の進捗状況、凡例の確認　など
5 月 7 日	近世	近世史部会	〔議題〕史料編の凡例、内容・構成の検討、通史編の執筆分担の検討　など
5 月 7,8 日	原始古代	古代専門部会	〔議題〕史料編凡例、史料解題の検討、原稿提出状況の確認、読み合わせ
5 月 7,8 日	中世	中世史部会	〔議題〕 ①史料編の史料の選定、区分、役割分担等の検討、読み合わせ ②通史編の検討　など
5 月 8 日	民俗	民俗部会	〔議題〕平成 23 年度の調査計画の検討　など
5 月 8 日	全般	松江市史編集委員会	〔議題〕 ①平成 22 年度事業報告、平成 23 年度事業計画 ②各部会からの報告 ③市史講座について ④凡例について ⑤通史編について ⑥『松江市史研究』について
5 月 9 ～ 11 日		熊野大社所蔵史料調査	
5 月 10 日	松江城	松江城部会土木史グループ会	〔議題〕平成 23 年度の調査研究、『松江城研究』の執筆方針の検討　など
5 月 11 日	松江城	松江城部会建築史グループ会	〔議題〕平成 23 年度の調査研究、『松江城研究』の執筆方針の検討　など
5 月 14 日	松江城	松江城部会城郭史調査	松江城石垣調査 (乗岡委員)
5 月 16,17 日		安国寺所蔵史料調査	
5 月 27 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕史料編の進捗状況、資料集成、位置図の確認　など
5 月 29 日	絵図・地図	絵図調査	神戸市立博物館所蔵絵図調査 (大矢委員、上杉委員)
5 月 30 日		新聞記事掲載「山陰行啓と近代化考える　浜田城資料館建設期成同盟会　専門家招き講演会」	山陰中央新報
6 月 1 日		「市史編纂コラム第 9 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕床几山の水道施設と外灯
6 月 9,10 日		安国寺所蔵史料調査	
6 月 10 日	松江城	松江城部会城郭史グループ会	〔議題〕調査研究と別編の編纂予定、『松江城研究』の執筆方針の検討　など
6 月 21 日	松江城	松江城部会建築史調査	武家屋敷建築調査
6 月 24 日		新聞記事掲載「絵図に見る水の都・松江〈上杉和央〉」	山陰中央新報
6 月 27 日		津山市視察受入（市史編纂事業）	
7 月 1 日		「市史編纂コラム第 10 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕中世松江の「筌 (うけ・せん)」漁業（前編）
7 月 2 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕絵図に見る水の都・松江 (上杉委員 (絵図・地図部会))
7 月 3 日	絵図・地図	絵図・地図部会	〔議題〕史料編の全体構成と掲載絵図の選定　など
7 月 4 日	松江城	松江城部会建築史調査	養益舎・武家屋敷長屋門建築調査
7 月 5 日		新聞記事掲載「第 1 回市史講座　松江藩の航路図解説　京都府立大上杉准教授」	山陰中央新報
7 月 5 日	松江城	松江城部会建築史グループ会	「竹内右兵衛書つけ」の読み合わせ　など
7 月 7 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕史料編の進捗状況の確認　など
7 月 11 日	松江城	松江城部会建築史グループ会	「竹内右兵衛書つけ」の読み合わせ　など
7 月 17 日	民俗	民俗調査	大庭地区聴き取り調査
7 月 19,20 日		宮川家文書調査	
7 月 21 日	松江城	松江城部会建築史グループ会	〔議題〕「竹内右兵衛書つけ」の読み合わせ　など
7 月 23 日	民俗	民俗調査	八雲地区聴き取り調査
7 月 24 日	民俗	民俗調査	玉湯地区聴き取り調査
8 月 1 日		「市史編纂コラム第 11 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕松江藩士松原基と『消暑漫筆』
8 月 2,3 日	松江城	松江城部会城下町遺跡検討会	〔議題〕城下町遺跡の遺構間の層序や動植物相の検討　など
8 月 3 日	近世	近世史料調査	島根県立図書館史料調査 (岸本委員)
8 月 5 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕史料編の進捗状況の確認　など
8 月 7 日	自然環境	自然環境部会	〔議題〕通史編の執筆構成の検討　など
8 月 7 日	全般	松江市史部会長会議	〔議題〕 ①平成 23 年度事業経過報告、平成 24 年度事業計画について ②各部会からの報告 ③平成 23 年度市史編纂委員会での議題について ④松江市史講座について
8 月 10 日		新聞記事掲載「宍道湖畔に築かれた松江城〈山根正明〉」	山陰中央新報
8 月 12 ～ 14 日	近世	近世史料調査	島根県立図書館史料調査 (宇野田委員)
8 月 19 日	松江城	松江城部会城郭史調査	嫁が島調査
8 月 20 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕宍道湖畔に築かれた松江城 (山根正明 (松江城部会))

資料 11　松江市史編纂事業全期間における主な活動

期日	担当部会	内容	備考
8 月 21 日	民俗	民俗調査	忌部地区聴き取り調査
8 月 27,28 日	近現代	近現代史料調査・聞き取り調査	島根県立図書館史料調査・聞き取り調査 (鬼嶋委員)
8 月 29 日	近現代	近現代史部会	〔議題〕史料編の収録史料・通史編の執筆分担の検討　など
8 月 30 日	近現代	近現代史料調査	旧東出雲町役場文書調査
8 月 29 ～ 31 日	原始古代	古代専門部会	〔議題〕史料編の版面・口絵案の検討・読み合わせ、通史編の構成案の検討
9 月 1 日		「市史編纂コラム第 12 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕七類の大敷網
9 月 1 ～ 2 日	松江城	松江城調査	島根県立図書館史料調査など (堀田委員)
9 月 2 日	原始古代	考古学専門部会松江考古学のあゆみ座談会	〔議題〕松江考古学のあゆみ（田中義昭、勝部部会長、西尾委員、松本委員、丹羽野委員）
9 月 6 日		三谷家文書運搬	
9 月 7 日		新聞記事掲載「近世水運と松江　幕末の松江渡海場〈多久田友秀〉」	山陰中央新報
9 月 8 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕史料編の進捗状況の確認、通史編の執筆項目の検討　など
9 月 10 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕近世水運と松江 (多久田委員 (近世史部会))
9 月 15,16 日	絵図・地図	絵図調査	東京方面絵図調査 (大矢委員)
9 月 17,18 日	近世	近世史部会	〔議題〕史料編・通史編の構成案の検討　など
9 月 24,25 日	中世	中世史部会	〔議題〕史料編の進捗状況の確認、通史編の執筆内容の検討　など
9 月 25 日	民俗	民俗部会	〔議題〕映像・音声資料の取扱いの検討、今後の予定の確認　など
10 月 3 日		新聞広告「松江市史　史料編 5 近世Ⅰ　12 月上旬発行予定」	山陰中央新報
10 月 3 日		「市史編纂コラム第 13 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕東京出雲学生会
10 月 6 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕①史料編の進捗状況の確認、追加掲載遺跡や用語解説・用語の検討 ②通史編の執筆予定項目の検討、今後の予定の確認
10 月 7 日	全般	松江市史編纂委員会	〔議題〕①平成 23 年度事業経過報告について ② 24 年度事業計画について ③各部会からの報告 ④「近世Ⅰ」「考古資料」の出版について
10 月 10 日		新聞広告「松江市史　史料編 5 近世Ⅰ　12 月上旬発行予定」	山陰中央新報
10 月 10 日	原始古代	考古専門部会	史料編の古墳時代の原稿確認（校正）
10 月 15 日	原始古代	考古専門部会	史料編の中世・近世の原稿確認（校正）
10 月 16 日		新聞記事掲載「読書　玉木勲著『松江藩を支えた代々家老六家』〈乾隆明〉」	山陰中央新報
10 月 19 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕通史編の構成（執筆項目）の検討
10 月 21 日		新聞記事掲載「中世水運と松江ー城下町形成の前史を探る〈長谷川博史〉」	山陰中央新報
10 月 22 日	松江城	松江城関連調査	松江城関連石垣調査 (乗岡委員)
10 月 23 日		新聞広告「松江市史　史料編 5 近世Ⅰ　12 月上旬発行予定」	山陰中央新報
10 月 26 日		三谷家文書整理協議	
10 月 29 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕中世水運と松江 (長谷川委員 (中世史部会))
10 月 30 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕史料編の奈良・平安時代の原稿確認（校正）
10 月 31 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕史料編の弥生時代の原稿確認（校正）
11 月 1 日		「市史編纂だより⑦」発行（市報松江 11 月号に掲載）	〔タイトル〕『報国』―失敗に終わった改革第一弾―
11 月 1,2 日		三島家文書調査	
11 月 3 日		新聞記事掲載「「松江市史」の近世史料集刊行　藩政改革　地誌を収録〈乾隆明〉」	山陰中央新報
11 月 3 日		「市史編纂コラム第 14 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕松江城下町商家の倹約計画
11 月 4 日		新聞記事掲載「大井窯での須恵器生産と中海・宍道湖〈丹羽野裕〉」	山陰中央新報
11 月 11 日	松江城	松江城部会建築史調査	武家屋敷建築調査
11 月 12 日		新聞記事掲載「松江城研究の最前線　26 日の報告会に参加を〈山根正明〉」	山陰中央新報
11 月 12 日	原始古代	松江市史講座	〔タイトル〕古代出雲の須恵器生産と中海・宍道湖の水運（丹羽野委員 (原始古代史部会))
11 月 21 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕史料編の進捗状況の確認、目次・凡例・口絵・用語解説などの検討
11 月 25 日	松江城	松江城部会	〔議題〕①別編の掲載史料や執筆項目について ②『松江城研究』について ③松江城研究報告会について　など
11 月 26 日	松江城	松江城研究報告会	〔シンポジウム〕松江城研究の最前線－わかったこととこれからと－
11 月 29 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕史料編の進捗状況の確認、用語解説などの検討
12 月 1 日		新聞記事掲載「宍道湖漁業の変遷〈伊藤康宏〉」	山陰中央新報
12 月 1 日		「市史編纂だより⑧」発行（市報松江 12 月号に掲載）	〔タイトル〕『治国譜』―松江藩の大改革　「御立派の改革」を記す貴重な書
12 月 2 日	自然環境	自然環境部会	〔議題〕通史編の執筆構成の検討　など
12 月 3 日	絵図・地図	絵図・地図部会	〔議題〕史料編の全体構成と掲載絵図の選定　など (12 月 2 日に絵図調査)
12 月 3 日		「市史編纂コラム第 15 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕図解で知る近代化以前の山陰漁業 (伊藤委員 (近現代史部会))
12 月 5 日	近世	近世史料調査	京都大学史料調査 (岸本委員)
12 月 7 日		新聞広告「松江市史　史料編 5 近世Ⅰ　お待たせしました！ 1 月上旬発行」	山陰中央新報
12 月 10 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕宍道湖の恵みと宍道湖漁業 (伊藤委員 (近現代史部会))
12 月 10,11 日	原始古代	古代専門部会	〔議題〕史料編の目次・口絵・ルビの検討、通史編の構成の検討　など
12 月 15 日		新聞広告「松江市史　史料編 5 近世Ⅰ　お待たせしました！ 1 月上旬発行」	山陰中央新報
		チラシ「松江市史　ご予約受付中　いよいよ刊行開始 !!　第 1 回配本　史料編『近世Ⅰ』」	今井書店
		パンフレット「松江市史　購入申込書」	
12 月 20,21 日	松江城	松江城関連調査	松江城関連山城（赤穴城）調査 (中井委員)
12 月 22 日	中世	中世史料調査	三木家文書（香川県）調査 (川岡委員)

期日	担当部会	内容	備考
12 月 25 日		**『松江市史』史料編 5「近世Ⅰ」発行**	**（第 1 回配本）**

平成 24 年 (2012)

1 月 1 日		市報記事掲載「いよいよ発刊松江市史　歴史の中に地域の夢・地域の未来を見つけます」「市史編纂だより⑨」（市報松江 1 月号に掲載）	〔タイトル〕「出雲鍬」
1 月 4 日		「市史編纂コラム第 16 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕美保関町七類の「鉈盗られ物語」のこと
1 月 6 日		新聞記事掲載「龍蛇と神在祭〈品川知彦〉」	山陰中央新報
1 月 6 日	全般	松江市史部会長会議	〔議題〕 ①『松江市史 史料編 5 近世Ⅰ』の発刊について ②松江市史講座について ③各部会からの報告　など
1 月 14 日		新聞広告「松江市史いよいよ発刊！　第 1 弾 史料編「近世Ⅰ」」	山陰中央新報
1 月 14 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕龍蛇と神在祭　海への信仰 (品川委員 (民俗部会))
1 月 21 日		新聞記事掲載「明窓　「松江市史」の刊行始まる」	山陰中央新報
1 月 24 日		新聞記事掲載「松江市史第 1 弾発刊　史料編 5 近世Ⅰ「新政弁疑」など収録」	山陰中央新報
1 月 25 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕史料編の進捗状況の確認・口絵の検討、通史編の検討
1 月 28 ～ 30 日	原始古代	古代専門部会	〔議題〕史料編の進捗状況の確認、通史編の検討　など
1 月 29 日	原始古代	原始古代史部会	〔議題〕通史編の検討
2 月 1 日		「市史編纂だより⑩」発行（市報松江 2 月号に掲載）	〔タイトル〕「土工記」
2 月 1 日		「市史編纂コラム第 17 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕伊能忠敬　第八次測量隊の足跡をたどる
2 月 3 日		新聞記事掲載「宍道湖の誕生と治水・災害〈高安克己〉」	山陰中央新報
2 月 6 ～ 8 日		熊野大社文書調査	
2 月 8 日		新聞記事掲載「藩政改革語る「新政弁疑」『松江市史』掲載の新史料〈三宅正浩〉」	山陰中央新報
2 月 10 日		新聞記事掲載「松江市史第 1 弾を発刊　近世焦点「史料編 5」新市域を対象　全 18 巻刊行へ」	中国新聞
2 月 11 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕宍道湖の誕生と治水・災害 (品川委員 (民俗部会))
2 月 13 日	松江城	松江城部会建築史グループ会	〔議題〕武家屋敷調査の集約、「建物図」の取扱いの検討　など
2 月 27 日	近世	近世史部会	〔議題〕史料編の進捗状況の確認、通史編の執筆分担の検討　など
3 月 1 日		「市史編纂だより⑪」発行(市報松江 3 月号に掲載)	〔タイトル〕松江考古学 120 年のあゆみ
3 月 1 日		「市史通信№ 2」発行（市報松江 3 月号に折込）	〔内容〕 ①『松江市史』第 2 弾・史料編「考古資料」の概要紹介 ②刊行計画、市史講座、市史編纂コラムの概要紹介 ③「松江考古学 120 年の集大成について」
3 月 1 日		「市史編纂コラム第 18 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕『(竹内右兵衛書つけ)』について
3 月 2 日	松江城	松江城関連調査	松江城関連石材調査 (先山委員)
3 月 3 日	松江城	松江城部会	〔議題〕 ①別編の掲載資料や執筆項目について ②『松江城研究』について ③松江市史講座について　など
3 月 5 日		新聞記事掲載「古代律令制下の山陰と国際交流〈大日方克己〉」	山陰中央新報
3 月 5 日	近現代	近現代史料調査	日赤島根県支部所蔵文書調査 (鬼嶋委員)
3 月 6 日	原始古代	原始古代史部会（通史編作業部会）	〔議題〕通史編の検討
3 月 6 日	近現代	近現代史料調査	松江赤十字病院図書室調査、島根県公文書センター調査 (鬼嶋委員)
3 月 7 日	近現代	近現代史部会	〔議題〕史料調査状況の確認、通史編の執筆項目・分担の検討　など
3 月 8,9 日	近現代	近現代史料調査	旧東出雲町役場文書調査、島根県立図書館所蔵史料調査 (能川委員・鬼嶋委員)
3 月 10 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕シンポジウム「世界に開かれた松江」
3 月 15 日	原始古代	古代専門部会	〔議題〕史料編の進捗状況の確認、通史編の構成の検討　など
3 月 17,18 日	中世	中世史部会	〔議題〕史料編の進捗状況の確認　など
3 月 18 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕史料編の贈呈、通史編の検討　など
3 月 20 日		『ふるさと文庫』14 発行	「松江掃苔録　－松江藩を支えた家と人－」青山侑市氏
3 月 19 日		**『松江市史』史料編 2「考古資料」発行**	**（第 2 回配本）**
3 月 21 日		『松江市歴史叢書』5（松江市史研究 3 号）発行	
3 月 21 日		『松江城研究』1 号発行	
3 月 23 日	松江城	松江城関連調査	丸亀市立資料館所蔵絵図調査 (渡辺理絵委員・大矢委員)
3 月 24,25 日	松江城	松江城関連調査	三刀屋城跡調査 (中井専門委員)
3 月 25 日		新聞広告「松江市史第 2 弾発刊！　史料編 2「考古資料」好評発売中！」	山陰中央新報
3 月 25 日	全般	新聞広告掲載	『松江市史 史料編 2 考古資料』発刊
3 月 25 日	自然環境	自然環境部会	〔議題〕通史編の執筆項目の検討　など
3 月 25 日	民俗	民俗部会	〔議題〕23 年度調査状況の確認、別編の執筆項目の検討　など
3 月 26 日	全般	松江市史部会長会議	〔議題〕 ①23 年度事業報告、24 年度事業計画・予算について ②各部会からの報告 ③ 24 年度市史編纂委員会での議題と通史編の検討 ④「考古資料」の発刊と「近世Ⅰ」「考古資料」の総括　など
4 月 1 日		「市史編纂だより⑫」発行(市報松江 4 月号に掲載)	〔タイトル〕松江考古学 120 年の歩み－遺跡の保存運動－
4 月 1 日		「市史編纂コラム第 19 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕国内最古の人物埴輪セット－石屋古墳－
4 月 1 日		新聞記事掲載「ベストセラーズ　松江　①松江市史　史料編 2「考古資料」」	山陰中央新報
4 月 4 日		新聞記事掲載「気象災害からみる松江の気候〈田坂郁夫〉」	山陰中央新報
4 月 10 日		新聞記事掲載「『売布神社における住民の信仰と芸能』〈小林准士〉」	山陰中央新報
4 月 12 日		新聞記事掲載「松江の主要遺跡を網羅　市史史料編 2 発刊」	山陰中央新報
4 月 14 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕気象災害からみる松江の気候 (田坂委員 (自然環境部会)) 〔第 2 部〕神社における都市住民の信仰と芸能 (小林委員 (近世史部会))

資料 11　松江市史編纂事業全期間における主な活動

期日	担当部会	内容	備考
4 月 20 日		乾隆明編纂委員から「松江神社の棟札を調査してほしい」と史料編纂室長に依頼	松江神社宮司との日程調整により、調査日は翌 5 月 21 日午後と決まる
4 月 21 日	中世	石造物調査	洞光寺
4 月 24 日		新聞記事掲載「『松江城研究』市教委が冊子　年 1 回目標に発行」	山陰中央新報
4 月 24 日		「ふみのしるべ第 1 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕「出雲私史」
4 月 27 日	松江城	松江城部会建築史グループ会	〔議題〕別編「松江城」の項目の検討、今後の調査研究の確認　など
4 月 29 日		新聞記事掲載「青山侑市著『松江掃苔録』〈乾隆明〉」	山陰中央新報
5 月 1 日		「市史編纂だより⑬」発行(市報松江 5 月号に掲載)	〔タイトル〕松江考古学 120 年の歩み－史跡を守ったエピソード－
5 月 1 日		「市史編纂コラム第 20 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕江戸時代の中海・宍道湖水運の主役「渡海船」 (多久田委員 (近世史部会))
5 月 1,2 日	松江城	松江城関連調査	松江城関連山城（三沢城）調査 (中井委員)
5 月 9 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕通史編の項目・内容の検討　など
5 月 10 日		新聞記事掲載「松江市史　史料編 2「考古資料」の刊行に寄せて〈勝部　昭〉」	山陰中央新報
5 月 11 日		新聞記事掲載「中世の松江市域と橋〈西田友宏〉」	山陰中央新報
5 月 14 日		新聞記事掲載「出雲国風土記と松江地域　〈野々村安浩〉」	山陰中央新報
5 月 15 日	絵図・地図	絵図調査	尊経閣文庫所蔵絵図調査 (大矢委員)
5 月 16,17 日	絵図・地図	絵図調査	宮城県立図書館所蔵絵図調査 (大矢委員、渡辺 (理) 委員)
5 月 19 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕中世の松江市域と橋 (西田委員 (中世史部会)) 〔第 2 部〕『出雲国風土記』と松江地域 (野々村委員 (原始古代史部会))
5 月 19 ～ 21 日	絵図・地図	絵図調査	松江市内絵図調査 (上杉委員)
5 月 21 日		**市内寺社史料調査により松江神社で松江城天守祈祷札二枚発見**	
5 月 24,25 日	松江城	松江城部会城下町遺跡検討会	〔議題〕城下町遺跡の遺構・遺物の検討　など
5 月 25 日		祈祷札赤外線調査（島根県立古代出雲歴史博物館にて）	
5 月 26 日	中世	石造物調査	道榮寺
5 月 26,27 日	松江城	松江城関連調査	松江城石垣の調査 (乗岡委員) 松江城関連山城の調査 (山上委員)
5 月 27 日	民俗	民俗部会	〔議題〕別編「民俗」の項目の検討、今年度の調査予定の確認　など
5 月 29 日		松江城天守祈祷札二枚発見の記者発表	
5 月 30 日		新聞記事掲載「75 年ぶり祈祷札 2 枚　松江神社で見つかる」	山陰中央新報
5 月 30 日		新聞記事掲載「松江城の祈祷札見つかる　70 年近く不明　500 万円の懸賞金効果 !?」	産経新聞
5 月 30 日		新聞記事掲載「松江城創建の祈とう札発見　懸賞金付きの資料、松江神社から」	島根日日新聞
5 月 30 日		新聞記事掲載「松江城の祈祷札発見　創建年解明、国宝化へ一歩」	日本海新聞
5 月 30 日		新聞記事掲載「松江城築城の祈禱札出た　市が懸賞金 500 万円」	中国新聞
5 月 30 日		新聞記事掲載「祈禱札 2 枚を発見　松江城天守・築城年特定の鍵」	毎日新聞
5 月 30 日		新聞記事掲載「発見、松江城祈禱札　松江神社から「国宝化近づける」」	朝日新聞
5 月 30 日		新聞記事掲載「松江築城年記す木札「確保」　近くの神社で 2 枚　国宝指定へ弾み」	読売新聞
5 月 30 日		松江市内寺社史料調査検討委員会	
6 月 1 日		「市史編纂だより⑭」発行(市報松江 6 月号に掲載)	〔タイトル〕松江考古学 120 年の歩み－遺跡から見つかる古代の文字資料－
6 月 1 日		「市史編纂コラム第 21 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕気象の記録あれこれ
6 月 1 日		「ふみのしるべ第 2 回」掲載 (ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ)	〔タイトル〕「懐橘談」
6 月 3 日	全般	松江市史編集小委員会	〔議題〕　①通史編の編集スケジュールについて ②通史編の編集方針について ③各部会からの報告（松江市域の持つ歴史的特徴について）
6 月 6 日	松江城	松江城部会城郭史グループ会	〔議題〕別編「松江城」の項目の検討、今後の調査研究の確認　など
6 月 12,13 日	絵図・地図	絵図調査	松江・出雲市内絵図調査 (川村委員)
6 月 12 日		新聞記事掲載「松江の外の松江－同郷会と同郷人雑誌〈竹永三男〉」	山陰中央新報
6 月 13 日		新聞記事掲載「ニホンアシカと島根県〈佐藤仁志〉」	山陰中央新報
6 月 16 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕東京の松江、大阪の松江 (竹永三男 (近現代史部会)) 〔第 2 部〕松江市の動物たち - 過去･現在･未来 -(佐藤仁志 (自然環境部会))
6 月 16 日	自然環境	自然環境小部会	〔議題〕通史編の執筆方針・構成の確認・検討　など
6 月 23,24 日	中世	中世史部会	〔議題〕史料編の校正方法の確認、通史編の執筆内容の検討　など
6 月 23,24 日	近世	近世史部会	〔議題〕史料編の校正・掲載史料の確認、通史編の執筆内容の検討　など
6 月 23 日	近現代	近現代史料調査	松江市内史料調査 (鬼嶋委員)
6 月 24 日	近現代	近現代史部会	〔議題〕史料編の掲載史料の確認、通史編の執筆内容の検討　など
6 月 24 日	全般	松江市史編集委員会	〔議題〕　①事業報告、事業計画 ②各部会からの報告 ③通史編について
6 月 26 日	松江城	松江城部会土木史グループ会	〔議題〕別編「松江城」の項目の検討、今後の調査研究の確認　など
7 月 1 日		「市史編纂だより⑮」発行(市報松江 7 月号に掲載)	〔タイトル〕松江考古学 120 年の歩み－松江市域から出土する装飾付太刀－
7 月 2 日		「市史編纂コラム第 22 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕松江市指定文化財（建造物）武家屋敷
7 月 2 日		「ふみのしるべ第 3 回」掲載 (ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ)	〔タイトル〕松江亀田山千鳥城取立之古説
7 月 5 日		新聞記事掲載「律令国家と出雲〈佐藤信〉」	山陰中央新報
7 月 10 日	民俗	建造物調査	養益舎
7 月 15 日	原始古代	古代専門部会	〔議題〕史料編の校正作業等の確認、通史編の項目・内容の検討　など
7 月 14,15 日	松江城	松江城部会	〔議題〕別編「松江城」の項目の検討、今後の調査研究の確認　など
7 月 15 日	絵図・地図	絵図・地図部会	〔議題〕史料編「絵図・地図」の原稿の確認と出版に向けた検討　など

期日	担当部会	内容	備考
7 月 15 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕律令国家と出雲 (佐藤信 (原始古代史部会)) 〔第 2 部〕絵図にみる城下町松江 (渡辺理絵 (絵図・地図部会))
7 月 15 日	中世	石造物調査	秋鹿
7 月 17 日	民俗	建造物調査	渋谷家
7 月 24 日	民俗	建造物調査	宍道：土江家
8 月 1 日		「市史編纂コラム第 23 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕まぼろしの松江城博覧会（前編）
8 月 2 日		新聞記事掲載「松江に人が住み始めたころ〈丹羽野裕〉」	山陰中央新報
8 月 7 日		新聞記事掲載「室町時代の京極氏と出雲支配〈川岡勉〉」	山陰中央新報
8 月 7 日	民俗	建造物調査	秋鹿：香川家
8 月 11 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕通史編について
8 月 11 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕松江に人が住み始めた頃 (丹羽野裕 (原始古代史部会)) 〔第 2 部〕室町時代の京極氏と出雲支配 (川岡勉 (中世史部会))
8 月 12 日	中世	石造物調査	八雲
8 月 21 日	民俗	建造物調査	八雲：岩田家
9 月 2 日	中世	石造物調査	報恩寺
9 月 4 日	民俗	建造物調査	天倫寺
9 月 5 日		新聞記事掲載「松江市南部農村部のムラ〈喜多村　正〉」	山陰中央新報
		パンフレット「松江市史　史料編 3 古代・中世Ⅰ　史料編 6 近世Ⅱ　購入申込書」	
9 月 8 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕平安時代の出雲の受領 (大日方克己 (原始古代史部会)) 〔第 2 部〕松江市南部農村部のムラ (喜多村正 (民俗部会))
9 月 8 日	全般	松江市史部会長会議	〔議題〕①事業報告、事業計画 ②松江市史編集状況について ③編纂委員会の議題について ④来年度の市史講座の組み方について ⑤通史編編集についての編集小委員会の開催について
9 月 10 日	自然環境	自然環境部会	〔議題〕通史編の執筆方針・構成の検討、今後の予定の確認　など
9 月 10 日	絵図・地図	絵図・地図小部会	〔議題〕史料編「絵図・地図」の読み合わせ　など
9 月 16 日	民俗	民俗部会	〔議題〕別編「民俗」の執筆要領・凡例の検討、今後の予定の確認　など
9 月 17,18 日	近世	近世史料調査	福井県内史料調査 (岸本委員、小林委員)
9 月 18 日	民俗	建造物調査	三谷家
9 月 25 日	民俗	建造物調査	三谷家
10 月 1 日		「市史編纂コラム第 24 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕大庭梨について - 松江藩主から徳川将軍家への献上品 -
10 月 6,7,8 日	中世	石造物調査	高野山（西尾委員、稲田、木下）
10 月 9 日	全般	松江市史編纂委員会	〔議題〕①事業報告について ②松江市史編集状況について ③事業計画について
10 月 9 日	民俗	建造物調査	田野医院
10 月 10 日		新聞記事掲載「「ヨモツヒラサカ」を越えた神々〈森田喜久男〉」	山陰中央新報
10 月 17 日		新聞記事掲載「戦時期松江の保健衛生と医療〈鬼嶋淳〉」	山陰中央新報
10 月 19,20 日	松江城	松江城関連調査	米子城・松江城石垣の調査 (乗岡委員)
10 月 20 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕「ヨモツヒラサカ」を越えた神々 (森田喜久男 (原始古代史部会)) 〔第 2 部〕戦時期松江の保健衛生と医療 (鬼嶋淳 (近現代史部会))
10 月 20 日	近現代	近現代史部会	〔議題〕史料編の掲載史料の確認、通史編の執筆分担の確認　など
10 月 23 ～ 26 日	松江城	松江城関連調査	犬山城・松本城の調査 (和田委員)
10 月 24 日	民俗	建造物調査	清光院
10 月 27,28 日	原始古代	古代専門部会	〔議題〕史料編の校正作業等の確認、今後のスケジュールの確認　など
10 月 29 日	近現代	史料編纂室執務室移転	松江市環境センター→新松江市環境センター（本課の文化財課と別室になる）
11 月 3,4 日	松江城	松江城関連調査	浜松城・二俣城石垣の調査 (乗岡委員)
11 月 6 日		新聞記事掲載「島根県の縄文時代〈山田康弘〉」	山陰中央新報
11 月 10 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕山陰地方の縄文時代 (山田委員 (原始古代史部会)) 〔第 2 部〕松平直政書状を読む (三宅委員 (近世史部会))
11 月 18 日	自然環境・考古・中世	松江潟の内汀線調査	松江潟の内汀線調査検討会
11 月 18 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕通史編の検討、平成 25 年度の市史講座、今後の予定　など
11 月 18 日	中世	中世史部会	〔議題〕史料編Ⅰの校正の検討、Ⅱの史料の確認、通史編の検討　など
11 月 26 ～ 30 日		三谷権大夫家文書整理	
11 月 22 日	民俗	建造物調査	島根半島
12 月 1,2 日	近世	近世史部会	〔議題〕史料編Ⅱの校正状況の確認、Ⅲ・Ⅳの史料選定、通史編の検討　など
12 月 2 日	絵図・地図	絵図・地図部会	〔議題〕史料編「絵図・地図」の原稿の確認と出版に向けた検討　など
12 月 4 日		新聞記事掲載「松江の植物　市全域が照葉樹林域〈枚村喜則〉」	山陰中央新報
12 月 6 日		新聞記事掲載「江戸時代の松江の建造物〈足立正智〉」	山陰中央新報
12 月 8 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕松江市の植物 (枚村喜則 (自然環境部会)) 〔第 2 部〕江戸時代の松江の建造物 (足立正智 (松江城部会))
12 月 8,9 日	松江城	松江城部会	〔議題〕別編の項目立ての検討、今後の調査研究の確認　など
12 月 9 日	中世	石造物調査	調査成果検討会
12 月 9,10 日	松江城	松江城関連調査	富田城調査 (中井委員)
12 月 16 日	民俗	民俗部会	〔議題〕別編「民俗」の検討、今後の予定の確認　など
12 月 17,18 日	原始古代	古代専門部会	〔議題〕史料編の全体校正の確認、今後のスケジュールの確認　など
12 月 11,12 日		古文書調査	奥原家

平成 25 年 (2013)

1 月 8 日		新聞記事掲載「残されなかった史料から考える〈原　慶三〉」	山陰中央新報

資料 11　松江市史編纂事業全期間における主な活動

期日	担当部会	内容	備考
1 月 9 日		新聞記事掲載「出雲国の成立　意宇郡と出雲国〈平石　充〉」	山陰中央新報
1 月 12 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕出雲国の成立－意宇郡と出雲国－ (平石充 (原始古代史部会)) 〔第 2 部〕残らなかった史料から考える－鎌倉幕府の成立が出雲国に与えた影響－ (原慶三 (中世史部会))
1 月 15 日		「市史編纂コラム第 25 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕松江城創建に関わる祈祷札の発見
1 月 15,16 日		古文書調査	奥原家
1 月 23 日		『ふるさと文庫』15 発行	「中世水運と松江　- 城下町形成の前史を探る -」長谷川博史
1 月 25 日	民俗	民俗小部会	〔議題〕写真の検討
1 月 26 日	中世	石造物調査	調査成果検討会
1 月 28 日		新聞記事掲載「松江市域の弥生時代〈松本岩雄〉」	山陰中央新報
2 月 1 日		「3 月発刊予定の松江市史」（市報松江 2 月号に掲載）	史料編「古代・中世Ⅰ」「近世Ⅱ」の紹介
2 月 4 日		新聞記事掲載「松江藩の儒学者たちー宇佐美灊水と桃白鹿〈宇野田尚哉〉」	山陰中央新報
2 月 6 日	自然環境	松江潟の内汀線調査	ジオスライサー調査
2 月 9 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕松江の弥生時代 (松本岩雄 (原始古代史部会)) 〔第 2 部〕松江藩の儒学者たち－宇佐美灊水と桃白鹿－ (宇野田尚哉 (近世史部会))
2 月 10 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕通史編のサンプル原稿の検討　など
2 月 16 日	中世	石造物調査	調査成果検討会
2 月 20,21 日		松江市内寺社史料調査	華蔵寺
2 月 25 日		「市史編纂コラム第 26 回」掲載（ホームページ）	松江開府を成し遂げた堀尾期に関わる石塔群 - 高野山奥之院 -
2 月 26 日		新聞記事掲載「歩兵第 63 連隊の誘致と松江の都市社会〈能川泰治〉」	山陰中央新報
2 月 27 日		新聞記事掲載「『中世水運と松江』を読む〈中司健一〉」	山陰中央新報
2 月 28 日	民俗	民俗小部会	〔議題〕写真の検討
3 月 1 日		「松江市史通信№ 3」発行(市報松江 3 月号に折込)	
3 月 6 日		新聞記事掲載「山代・大庭古墳群からみる 6 世紀の東西出雲〈西尾克己〉」	山陰中央新報
		新聞広告「松江市史　史料編 3「古代・中世Ⅰ」、史料編 6「近世Ⅱ」」	山陰中央新報
3 月 9 日	近現代	近現代史部会	〔議題〕史料編の掲載史料の検討・校正分担の確認、今後の計画　など
3 月 9 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕－王家の谷－山代・大庭古墳群と横穴墓 (西尾克己 (原始古代史部会)) 〔第 2 部〕歩兵第 63 連隊の誘致と松江の都市社会 (能川泰治 (近現代史部会))
3 月 10 日	中世	石造物調査	調査成果検討会
3 月 14 日	全般	松江市史部会長会議	〔議題〕　①平成 24 年度事業報告・25 年度事業計画・25 年度予算について ②各部会からの報告 ③平成 25 年度市史編集委員会の日程、議題、通史編の検討について ④史料編「古代・中世Ⅰ」「近世Ⅱ」の発刊と編集の総括
3 月 15 日	自然環境	自然環境部会	〔議題〕通史編のサンプル原稿の検討　など
3 月 21 ～ 23 日	松江城	松江城関連調査	松江歴史館所蔵城郭図調査 (渡辺理絵委員)
3 月 23 日	自然環境	古代専門部会	〔議題〕通史編のサンプル原稿の検討　など
3 月 25 日		**『松江市史』史料編 3「古代・中世Ⅰ」発行**	**（第 3 回配本）**
3 月 25 日		**『松江市史』史料編 6「近世Ⅱ」発行**	**（第 4 回配本）**
3 月 26 日	松江城	新聞広告掲載	松江市史史料編 3「古代・中世Ⅰ」「近世Ⅱ」発刊（山陰中央新報）
3 月 26 日	松江城	松江城関連調査	松江城地盤関連大阪調査 (河原委員)
3 月 28,29 日	近世	近世史部会	〔議題〕史料編Ⅲ・Ⅳの史料選定、通史編の検討　など
3 月 29 日		祈祷札を松江市指定文化財に指定	歴史資料　松江城天守祈祷札二枚
3 月 8 日		『松江市歴史叢書』6（松江市史研究 4 号）発刊	
4 月 1 日		「市史編纂コラム第 27 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕中世 宍道湖の汀線調査見聞録
4 月 4 日		新聞記事掲載「宍道湖・中海と魚たち〈越川敏樹〉」	山陰中央新報
4 月 7 日	民俗	民俗部会	〔議題〕別編「民俗」に向けての中間発表会、本文掲載写真の取扱の検討など
4 月 8 日		新聞記事掲載「『土光記』にみる河川の維持管理と藩政改革〈東谷智〉」	山陰中央新報
4 月 13 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕宍道湖・中海と魚たち (越川敏樹 (自然環境部会)) 〔第 2 部〕『土工記』にみる河川の維持管理と藩政改革 (東谷智 (近世史部会))
4 月 26 日	全般	松江市史部会長会議	〔議題〕　①通史編作成にあたって ②史料編「絵図・地図」掲載の絵図について ③調査謝金・市史の贈呈先等について　など
5 月 2,3 日	近世	近世史料調査	津山市内史料 (岸本委員)
5 月 6 日	松江城	松江城関連調査	宇賀山丘陵
5 月 7,8 日	松江城	松江城関連調査	富田城・米子城 (山上委員)
5 月 9 日		新聞記事掲載「邪馬台国と前方後円墳時代のはじまり〈池淵俊一〉」	山陰中央新報
5 月 11 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕通史編の原稿の検討　など
5 月 11 日	民俗	民俗部会	〔議題〕別編「民俗」に向けての中間発表会、索引などの検討
5 月 12 日	中世	石造物調査	中世石造物所在確認（島根半島）
5 月 14 日		新聞記事掲載「松江市の誕生〈居石正和〉」	山陰中央新報
5 月 14 日	民俗	民俗（建物）調査	本庄庄屋屋敷
5 月 16 日	民俗	民俗（建物）調査	木実方蔵（米田酒造）
5 月 19 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕邪馬台国と前方後円墳のはじまり (池淵俊一（原始古代史部会）) 〔第 2 部〕松江市の誕生 (居石正和 (近現代史部会))
5 月 25,26 日	松江城	松江城関連調査	名古屋城 (乗岡委員)
5 月 28,29 日	松江城	松江城下町遺跡検討会	〔議題〕今後の調査・研究のあり方の検討及び城下町遺跡出土遺物調査
5 月 30 日	民俗	民俗（建物）調査	木実方蔵（米田酒造）
6 月 2 日	民俗	民俗部会	〔議題〕別編「民俗」に向けての中間発表会　など

期日	担当部会	内容	備考
6 月 4 日		新聞記事掲載「いわゆる「慶長日本総図」の誤認を解く〈川村博忠〉」	山陰中央新報
6 月 6 日	民俗	民俗（建物）調査	木実方蔵（米田酒造）
6 月 8 日	原始古代	古代専門部会	〔議題〕通史編の原稿の検討　など
6 月 8 日	中世	中世史部会	〔議題〕史料編Ⅱの内容検討・原本校正、通史編の全体構成の検討　など
6 月 8 日	近世	近世史部会	〔議題〕史料編Ⅲ・Ⅳの検討、通史編の検討　など
6 月 8 日	民俗	民俗（建物）調査	木実方蔵（米田酒造）
6 月 9 日	全般	松江市史編集委員会	〔議題〕①通史編編集のための検討会 ②平成 24 年度事業報告、平成 25 年度事業計画 ③各部会の編纂状況 ④編集体制（専門部会）、編纂計画の一部見直しについて　など
6 月 9 日	近現代	近現代史部会	〔議題〕史料編・通史編の検討　など
6 月 12 日		新聞記事掲載「神と仏の国・出雲〈森田喜久男〉」	山陰中央新報
6 月 12 日	近現代	近現代史料調査	日赤島根県支部文書
6 月 12,13 日	近世	近世史料調査	津山市内史料 (岸本委員)
6 月 13 日	民俗	民俗調査	高梁市木野山神社 (喜多村理子委員)
6 月 15 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕神と仏の国、出雲 (森田喜久男 (原始古代史部会)) 〔第 2 部〕いわゆる「慶長日本総図」の誤認を解く (川村博忠 (絵図・地図部会))
6 月 16 日	絵図・地図	絵図・地図部会	〔議題〕史料編の本図・折図・挿図、記述内容、全体構成の検討　など
6 月 23 日	松江城	文献・歴史地理・建築グループ会	〔議題〕別編の検討及び兵庫県立歴史博物館所蔵絵図調査
6 月 29 日	松江城	城郭史グループ会	〔議題〕①史料調査状況の確認 ②別編の執筆項目と執筆スケジュールの再検討 ③別編の版組の検討　など
7 月 1 日	全般	松江市史部会長会議	〔議題〕①編纂委員会の日程、議題について ②通史編粗原稿の送付方法について ③編纂体制図について ④通史編執筆にあたっての要点整理について ⑤部会間の連携、情報共有について ⑥平成 26 年度松江市史講座の部会間調整について　など
7 月 1 日	自然環境	自然環境部会	〔議題〕通史編の検討　など
7 月 3 日	全般	市内寺社史料調査検討委員会	
7 月 3 日		新聞記事掲載「中世出雲神話の世界と「意宇六社」〈井上寛司〉」	山陰中央新報
7 月 8 日		新聞記事掲載「石垣から松江城を考える〈乗岡実〉」	山陰中央新報
7 月 13 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕中世出雲神話の世界と「意宇六社」(井上寛司 (中世史部会)) 〔第 2 部〕石垣から松江城を考える (乗岡実 (松江城部会))
7 月 14 日	松江城	松江城部会	〔議題〕①事業経過と今後の予定の確認 ②各グループ・編纂室の調査状況等の報告 ③別編の執筆項目と執筆スケジュールの再検討 ④別編の版組の検討　など
7 月 20 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕通史編の原稿の検討　など
7 月 21 日		「市史編纂コラム第 28 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕松江城下町遺跡検討会が開催されました
8 月 5 日	原始古代	古代専門部会	〔議題〕通史編の原稿の検討　など
8 月 9 日		新聞記事掲載「鉈とられ物語のこと〈酒井薫美〉」	山陰中央新報
8 月 11 日	中世	石造物調査	中世石造物所在確認（八束町、東出雲町、玉湯町）
8 月 14 日		新聞記事掲載「出雲地方の地質と化石〈入月俊明〉」	山陰中央新報
8 月 17 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕出雲地方の地質と化石 (入月俊明 (自然環境部会)) 〔第 2 部〕民話（鉈盗られ物語ほか）(酒井薫美 (民俗部会))
8 月 20 日	近世	御用留掲載史料検討会	〔議題〕史料編Ⅲ・Ⅳの検討、通史編の検討　など
8 月 20,22 日	近現代	近現代史料調査	旧町村役場文書
9 月 5 日		「市史編纂コラム第 29 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕一生害記 - ある足軽の手記 -
9 月 13 日	近現代	近現代史料調査	旧町村役場文書（鹿島支所所蔵）
9 月 14 日	近現代	近現代史部会	〔議題〕史料編・通史編の検討　など
9 月 16 日		新聞記事掲載「水の都の恩恵と脅威－松江と江戸－〈渡辺浩一〉」	山陰中央新報
9 月 18 日		新聞記事掲載「松江市史「プレ出雲国」の成立～ 5・6 世紀の松江～〈松尾充晶〉」	山陰中央新報
9 月 18 ～ 20 日	松江城	松江城関連調査	隠岐の山城 (中井委員)
9 月 20 ～ 22 日	近世	近世史料調査	隠岐地内史料 (岸本委員)
9 月 21 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕“プレ出雲国”成立の背景 (松尾充晶 (原始古代史部会)) 〔第 2 部〕水の都の恩恵と脅威 (渡辺浩一 (近世史部会))
9 月 21,22 日	中世	中世史部会	〔議題〕史料編Ⅱの原本校正、通史編の全体構成の検討　など
9 月 22 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕通史編の原稿の検討　など
9 月 27 日	松江城	文献・歴史地理・建築グループ会	〔議題〕文献検討会
10 月 4 日	全般	松江市史編纂委員会	〔議題〕①事業報告について ②松江市史編集状況について ③事業計画について
10 月 4 日	全般	松江市史部会長会議	〔議題〕①執筆終了後の部会運営・経費の支出について ②松江市史講座の調整について　など
10 月 5 日	松江城	松江城関連調査	松江歴史館所蔵資料 (和田委員)
10 月 5 日	中世	石造物調査	中世石造物所在確認（東出雲町）
10 月 8 日		新聞記事掲載「戦国時代の山城～縄張りを読み解く〈中井均〉」	山陰中央新報
10 月 9 日		新聞記事掲載「外海漁業と八束郡の漁業組合〈伊藤康宏〉」	山陰中央新報
10 月 10 日		新聞記事掲載「出雲国府の実像〈佐藤信〉」	山陰中央新報
		パンフレット「松江市史　史料編 4 中世Ⅱ　購入申込書」	
10 月 11 日	自然環境	自然環境部会	〔議題〕通史編の原稿の検討　など

資料 11　松江市史編纂事業全期間における主な活動

期日	担当部会	内容	備考
10 月 13 日	絵図・地図	絵図・地図部会	〔議題〕史料編の全体校正の確認　など
10 月 19 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕出雲国府の実像 (佐藤信 (原始古代史部会)) 〔第 2 部〕外海漁業と八束郡の漁業組合 (伊藤康宏 (近現代史部会))
10 月 19 日	近現代	近現代史部会	〔議題〕史料編・通史編の検討　など
10 月 19,20 日	近世	近世史部会	〔議題〕史料編Ⅲ・Ⅳの検討、通史編の検討　など
10 月 20 日	原始古代	古代専門部会	〔議題〕通史編の原稿の検討　など
10 月 28,29 日	近現代	近現代史料調査	川辺地区文書調査
10 月 29 ～ 31 日	松江城	松江城下町出土陶磁器編年にかかる指導会	
11 月 1 日	近世	近世・近現代史料調査	島根町誌編纂関係史料調査
11 月 4 日		新聞記事掲載「戦国時代の松江地域〈長谷川博史〉」	山陰中央新報
11 月 4 日	民俗	民俗部会	〔議題〕別編「民俗」に向けての中間発表会　など
11 月 5,11,12 日	近現代	近現代史料調査	本庄公民館文書調査
11 月 6,7 日	近世	近世史料調査	島根県立図書館所蔵史料 (岸本委員)
11 月 7 日		新聞記事掲載「白潟町屋の商人と町人地の変容〈大矢幸雄〉」	山陰中央新報
11 月 9,10 日	中世	石造物調査	仏谷寺（美保関町）所在石造物実測調査
11 月 10 日	近世	近世史小部会	御用留史料選定
11 月 11 日	民俗	民俗（建物）調査	奥原家住宅調査
11 月 13,14 日	近世	近世史料調査	福井県内・京都府内史料 (岸本委員)
11 月 16 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕戦国時代の松江地域 (長谷川博史 (中世史部会)) 〔第 2 部〕白潟町屋の商人と町人地の変容 (大矢幸雄 (絵図・地図部会))
11 月 24 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕通史編の原稿の検討　など
11 月 25 ～ 29 日		三谷権大夫家文書整理	
12 月 1 日	全般	松江市史部会長会議	〔議題〕　①『松江市史』本文中の数字表記について ②松江市史出版計画の一部見直しについて　など
12 月 1 日	自然環境	自然環境部会	〔議題〕通史編の原稿の検討　など
12 月 5 日		新聞記事掲載「出雲の地震〈西田良平〉」	山陰中央新報
12 月 7 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕出雲地方の地震 (西田良平 (自然環境)) 〔第 2 部〕松江市近郊の民具 (浅沼政誌 (民俗部会))
12 月 9,10,16,17 日		近現代史料調査	本庄公民館文書調査
12 月 18 日	松江城	松江城部会文献・歴史地理・建築グループ会	〔議題〕文献検討会
12 月 21,22 日	中世	中世史部会	〔議題〕史料編Ⅱの校正、通史編の全体構成の検討　など

平成 26 年 (2014)

1 月 11 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕通史編の原稿の検討　など
1 月 13 日	原始古代	古代専門部会	〔議題〕通史編の原稿の検討　など
1 月 16 日		新聞記事掲載「科学が明かす松江平野の歴史〈渡辺正巳〉」	山陰中央新報
1 月 17 日		新聞記事掲載「出雲の人制・部民制～野見宿禰伝承をめぐって〈平石　充〉」	山陰中央新報
1 月 19 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕出雲の人制・部民制 (平石充 (原始古代史部会)) 〔第 2 部〕科学が明かす松江平野の歴史 (渡辺正巳 (松江城部会))
1 月 23,24,30,31 日		近現代史料調査	本庄公民館文書調査
1 月 22 日	近世	近世史料調査	御用留からの史料選定 (東谷委員)
1 月 22 日		「市史編纂コラム第 30 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕文献史料からみる「松江城・松江城下町」
1 月 31 日	松江城	松江城部会城郭史グループ会	西尾部会長と先山委員・松尾委員との協議
2 月 1 日	松江城	松江城部会土木史グループ会	〔議題〕次回の松江城部会に向けた協議
2 月 3 日		新聞記事掲載「おぼえ日記にみる松江城下の男と女〈沢山美果子〉」	山陰中央新報
2 月 4 日		新聞広告「松江市史　史料編 11 絵図・地図　2 ／ 22 発行」	山陰中央新報
2 月 3,4 日	松江城	松江城関連調査	地盤遺産シンポジウム参加 (河原荘一郎)
2 月 6 日	自然環境	自然環境部会	〔議題〕通史編の原稿の検討　など
2 月 7 日	原始古代	考古専門部会	通史編の原稿読合せ
2 月 7 ～ 9 日	松江城	松江城出土遺物検討会	
2 月 8 日	松江城	松江城部会	〔議題〕　①各グループ・編纂室の調査状況等の報告 ②別編の執筆項目と執筆スケジュールの再検討　など
2 月 8 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕古代出雲の交通 (勝部昭 (原始古代史部会)) 〔第 2 部〕松江城下『おぼえ日記』にみる町人の「家」と男･女･子ども (沢山未果子 (近世史部会))
2 月 9 日	近世	近世史料調査	島根県立図書館所蔵史料 (沢山委員)
2 月 17 ～ 19 日	近世	近世史料調査	御用留からの史料選定 (東谷委員)
2 月 18 日	原始古代	古代専門部会	通史編の原稿読合せ
2 月 20 日		**『松江市史』史料編 11「絵図・地図」発行**	**（第 5 回配本）**
2 月 20,21 日		近現代史料調査	本庄公民館文書調査
2 月 21,22 日	松江城	松江城関連調査	静岡県磐田市中世府中調査 (西尾委員)
2 月 27 日～ 3 月 3 日	近世	近世史料調査	島根県立図書館所蔵史料ほか (常松委員)
3 月 3 日		新聞記事掲載「武者の世の始まりと出雲国〈西田友広〉」	山陰中央新報
3 月 5 日		新聞記事掲載「近現代の松江市の人口の推移と特徴〈廣嶋清志〉」	山陰中央新報
3 月 5 日		新聞記事掲載「二つの不可能を可能にした出雲人・松村豊吉（上）〈西島太郎〉」	山陰中央新報
3 月 7 日		「市史編纂コラム第 31 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕松江藩士の幕末維新期の記録
3 月 8 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕「武者の世」のはじまりと出雲国 (西田友広 (中世史部会)) 〔第 2 部〕近現代の松江市の人口の推移とその特徴 (廣嶋清志 (近現代史部会))
3 月 9 日		新聞記事掲載「ベストセラーズ　松江③松江市史史料編 11 絵図・地図」	山陰中央新報

期日	担当部会	内容	備考
３月９日	全般	松江市史部会長会議	〔議題〕 ①松江市の組織機構の変更、市史編纂体制の変更について ②松江市史編纂状況、各部会からの状況報告 ③来年度予算について ④通史編等編集に伴う文章表記、節・項表記等の検討 ⑤松江市史編集委員会の議題、日程調整について　など
３月９日	自然環境	自然環境部会	〔議題〕通史編の原稿の検討、史料編の検討　など
３月 10 日	原始古代	古代専門部会	通史編の原稿読合せ
３月 14,15 日	松江城	松江城関連調査	中世府中調査〔鳥取県鳥取市・兵庫県豊岡市〕(西尾委員)
３月 15 ～ 17 日	松江城	松江城関連調査	武家屋敷及び近代建築物調査〔宮城県奥州市ほか〕(足立委員)
３月 19 日	松江城	松江城部会文献・歴史地理・建築グループ会	〔議題〕文献検討会
３月 20 日		新聞記事掲載「見て楽しめる松江の絵図－市史史料編 11 －〈田坂郁夫〉」	山陰中央新報
３月 20 日	近世	『松江市歴史叢書』7（松江市史研究５号）発行	
３月 20 日	近世	『松江市内寺社史料調査目録』発行	
３月 21 日	松江城	松江城調査報告会	
３月 21,22 日	原始古代	古代専門部会	通史編執筆作業 (佐藤信委員)
３月 21,22 日	近世	近世史部会	〔議題〕史料編Ⅲ・Ⅳの検討、通史編の検討　など
３月 21 ～ 23 日	松江城	松江城関連調査	城下町松江の水運・物流に関する調査〔新潟県出雲崎町ほか〕(大矢委員)
３月 24,25 日	松江城	松江城関連調査	松江城関連文献史料調査〔国立公文書・防衛省防衛研究所〕
３月 26 日	近現代	近現代史部会	〔議題〕史料編・通史編の検討　など
３月 28 日	近世	**『松江市史』史料編４「中世Ⅱ」発行**	**（第６回配本）**
４月１日		組織改編により史料編纂室は教育委員会から市長部局に移管、「歴史まちづくり部まちづくり文化財課史料編纂室」となる	松江市教育委員会文化財課は市長部局（新設の歴史まちづくり部）に移管、まちづくり文化財課と改称（文化財課内室の史料編纂室も同時に移管）
４月１日		「市史編纂コラム第 32 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕再考・まぼろしの松江城博覧会
４月７日		新聞記事掲載「近世城下町の変遷と松江城下町〈松尾信裕〉」	山陰中央新報
４月９日		新聞記事掲載「出雲地域の産物の特徴〈鳥谷智文〉」	山陰中央新報
４月 18 日	松江城	松江城伝来資料検討会	
４月 19 日	全般	松江市史講座	〔第１部〕出雲地域における産物の特徴について (鳥谷智文 (近世史部会)) 〔第２部〕近世城下町の変遷と松江城下町 (松尾信裕 (松江城部会))
４月 24 日		尾道市視察対応（松江市史編纂について）	
４月 26 日	中世	中世史関連調査	和泉府中 (西尾委員)
４月 26 日	近世	近世史小部会	郡村関係史料選定
５月５日		新聞記事掲載「松江城下町の空間設計〈安高尚毅〉」	山陰中央新報
５月５日	松江城	松江城関連調査	亀嵩城 (西尾委員・岡崎委員)
５月８日		新聞記事掲載「知行国制度と出雲国〈西田友広〉」	山陰中央新報
５月 10 日	全般	松江市史講座	〔第１部〕知行国制度と出雲 (西田友広 (中世史部会)) 〔第２部〕松江城下町の空間設計と武家地・町人地の空間について (安高尚毅 (絵図・地図部会))
５月 11,12 日	中世	中世史部会	〔議題〕通史編の内容検討　など
５月 15 日		「市史編纂コラム第 33 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕松江藩御台所を取材した明治の新聞記事
５月 16 日	松江城	松江城下町遺跡検討会	
５月 26 日		新聞記事掲載「松江の魅力広く発信　市史史料編４中世Ⅱ〈本多博之〉」	山陰中央新報
５月 31 日,６月１日	近世	近世史部会	〔議題〕史料編Ⅲ・Ⅳの検討、通史編の検討　など
６月１日	全般	松江市史編集委員会	〔議題〕 ①編纂体制、出版計画 ②平成 25 年度事業報告、平成 26 年度事業計画 ③各部会の報告 ④通史編（中世史）についての検討 ⑤松江市史編纂基本計画の実施状況と今後の課題
６月１日	中世	中世史部会	〔議題〕通史編の執筆構成・内容の検討　など
６月１日	近現代	近現代史部会	〔議題〕史料編・通史編の検討　など
６月２日	自然環境	自然環境部会	〔議題〕通史編の原稿調整　など
６月２日	松江城	松江城関連調査	松江城伝来資料調査（松江城天守、松江歴史館）
６月 10 日		「市史編纂コラム第 34 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕国内最古の警察署建築（初代松江警察署）発見のとき
６月 16 日	松江城	松江城関連調査	松江歴史館 (和田委員)
６月 16 日		新聞記事掲載「石が語る出雲国〈澤田順弘〉」	山陰中央新報
６月 17 日		新聞記事掲載「模範村とその時代〈竹永三男〉」	山陰中央新報
６月 25 日	原始古代	古代史部会	〔議題〕通史編の編集検討　など
６月 23 日	近現代	近現代史料調査	玉湯町・宍道町
６月 21 日	全般	松江市史講座	〔第１部〕「模範村」とその時代 (竹永三男 (近現代史部会)) 〔第２部〕石が語る出雲国 (澤田順弘 (自然環境部会))
６月 21,22 日	中世	石造物調査	清水寺（安来市）
７月３日		「市史編纂コラム第 35 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕堀尾氏と三つの姓
７月 4,5 日	中世	中世史関連調査	出雲府中 (西尾委員)
７月５日	民俗	民俗部会	〔議題〕別編「民俗」の内容検討　など
７月５～７日	近世	近世史料調査	(東谷委員・鳥谷委員・多久田委員)
７月９日		新聞記事掲載「朝山日乗－戦争と平和－〈原慶三〉」	山陰中央新報
７月９日	全般	松江市史部会長会議	〔議題〕 ①各部会からの報告 ②来年度の市史講座　講座の枠組みについて ③松江市史編纂委員会の議題について ④来年度事業の見込みについて ⑤市史編集委員会での提言を受けた史料集発刊について　など
７月 12,13 日	近世	近世史料調査	(東谷委員)
７月 14 日	松江城	松江城部会文献・歴史地理・建築グループ会	〔議題〕文献検討会
７月 16 日	松江城	松江城部会城郭史グループ会	〔議題〕別編「松江城」の検討
７月 19 日	全般	松江市史講座	〔第１部〕朝山日乗 (原慶三 (中世史部会)) 〔第２部〕お墓にみる縄文時代から弥生時代への移行 (山田康弘 (考古専門部会))

資料 11　松江市史編纂事業全期間における主な活動

期日	担当部会	内容	備考
7 月 20 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕通史編の原稿の検討　など
7 月 28,29 日	近世	近世史料調査	廻船関係：福山市・広島市 (大矢委員)
7 月 29 ～ 31 日	松江城	石造物調査	市内を中心とする中世石造物（狭川氏・西尾委員・岡崎委員）
8 月 1 日	全般	『松江市ふるさと文庫』16 発行	「松江城再発見－天守、城、そして城下町－」西和夫
8 月 4 日	近現代	近現代史料調査	山陰合同銀行史料
8 月 4 日	松江城	松江城関連調査	松江城伝来資料調査
8 月 5 日	近現代	近現代史料調査	忌部公民館史料
8 月 16 日	松江城	松江城部会土木史グループ会	〔議題〕別編「松江城」の検討
8 月 18 ～ 22 日		三谷権大夫家文書整理	
8 月 20 日		新聞記事掲載「松江城下町形成期の景観復元〈河原荘一郎〉」	山陰中央新報
8 月 20 ～ 22 日	近世	近世史料調査	(東谷委員・常松委員)
8 月 21 日	近世	近世史部会郡村関係小部会	〔議題〕史料編「近世Ⅳ」へ掲載する郡村関係史料の選定 (小林委員・東谷委員・常松委員・多久田委員)
8 月 21 日		「市史編纂コラム第 36 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕松江城下での不思議な話
8 月 21 日		史料調査	諸喰神社史料
8 月 23 日	全般	松江市史講座	城下町形成期の景観復元（基調報告、ﾊﾟﾈﾙﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ (松江城部会)）
8 月 24 日	松江城	松江城部会	〔議題〕別編「松江城」の検討
8 月 25 日	松江城	松江城関連調査	松江城関連瓦調査
9 月 4,5 日		三谷権大夫家文書整理	史料管理方法の指導
9 月 12 日		新聞記事掲載「平安時代前期の災害と対外意識と山陰・出雲〈大日方克己〉」	山陰中央新報
9 月 11,12 日	近現代	近現代史料調査	山陰合同銀行史料
9 月 17 日		新聞記事掲載「中世出雲における政治拠点の変遷〈川岡勉〉」	山陰中央新報
9 月 19 日		「市史編纂コラム第 37 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕松江藩凶年時にみる藩の通達そして捨子・身元不明者・乞食の実相
9 月 20 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕中世出雲における政治拠点の変遷 (川岡勉 (中世史部会)) 〔第 2 部〕9 世紀の災害と対外意識と出雲・山陰 (大日方克己 (古代専門部会))
9 月 21 日	中世	中世史部会	〔議題〕通史編の内容調整　など
9 月 24,25 日		近現代史料調査	朝酌公民館史料
9 月 27,28 日	原始古代	古代専門部会	〔議題〕通史編の編集検討　など
10 月	全般	松江市史編纂基本計画改訂（第 3 回改訂）	
10 月 4 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕　①通史編の編集について ②部会の今後などについて　など
10 月 8 日		新聞記事掲載「伝染病の大流行と信仰〈喜多村理子〉」	山陰中央新報
10 月 9 日	全般	松江市史編纂委員会	〔議題〕　①事業報告について ②松江市史編集状況について ③事業計画について ④松江市史編纂基本計画の実施状況と今後の課題
10 月 10 日	自然環境	自然環境部会	〔議題〕通史編の編集、史料編の検討　など
10 月 15 日		新聞記事掲載「松江藩の財政について〈伊藤昭弘〉」	山陰中央新報
10 月 18 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕松江藩の財政について (伊藤昭弘委員 (近世史部会)) 〔第 2 部〕伝染病の大流行と信仰 (喜多村理子委員 (民俗部会))
10 月 18,19 日	近世	近世史部会	〔議題〕史料編Ⅲの編集、史料編Ⅳ・通史編の検討　など
10 月 27 ～ 29 日	松江城	松江城出土陶磁器指導会	
10 月 29 日		新聞記事掲載「明窓　松江市史講座と市史編纂事業の紹介」	山陰中央新報
10 月 30,31 日		近現代史料調査	朝酌公民館文書調査
11 月 3 日	近世	近世史料調査	島根県立図書館等所蔵史料 (東谷委員)
11 月 9 日	中世	中世史部会	〔議題〕通史編の検討　など
11 月 11 日		新聞記事掲載「中世の経済と社会〈長谷川博史〉」	山陰中央新報
11 月 13 日		新聞記事掲載「各種地図の変遷から見る松江の近代化〈阿部志朗〉」	山陰中央新報
11 月 15 日		新聞記事掲載「明窓　松江城築城に富田城の瓦を再利用」	山陰中央新報
11 月 15 日	松江城	松江城関連調査	松江城伝来資料調査
11 月 15 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕中世の経済と社会 (長谷川博史 (中世史部会)) 〔第 2 部〕各種地図の変遷からみる松江の近代化 (阿部志朗 (絵図・地図部会))
11 月 18 日		近現代史料調査	川辺地区・朝酌公民館文書調査
11 月 23 ～ 26 日	近現代	近現代史料調査	島根県立図書館等所蔵史料 (鬼嶋委員)
11 月 24 日		新聞記事掲載「屋根瓦から考える松江城〈乗岡実〉」	山陰中央新報
11 月 24 日	松江城	松江城関連調査	松江城石垣・石材調査 (乗岡委員・先山委員)
11 月 27 日		「市史編纂コラム第 38 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕松江藩の切支丹類族の最後
11 月 28 日	自然環境	自然環境部会	〔議題〕通史編の編集、史料編の検討　など
11 月 30 日	考古	考古専門部会	〔議題〕通史編原稿読合せ　など
12 月 1 日		新聞記事掲載「「松江湖」の生い立ちと古環境〈瀬戸浩二〉」	山陰中央新報
12 月 2 ～ 4 日	松江城	松江城関連調査	亀嵩城調査 (中井委員・西尾委員)
12 月 4 日		新聞記事掲載「「中世出雲と国家的支配」を読む〈川岡勉〉」	山陰中央新報
12 月 4 日		新聞記事掲載「近世の瓦を考える～山陰と山陽を比較して〈乗岡実〉」	山陰中央新報
12 月 10 日		新聞記事掲載「松江の明治建築－発見と確認－〈足立正智〉」	山陰中央新報
12 月 11,12 日		近現代史料調査	高井家文書調査
12 月 17 日		新聞記事掲載「まぼろしの神国博〈能川泰治〉」	山陰中央新報
12 月 14 日	松江城	松江城部会	〔議題〕松江城査読検討会
12 月 20 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕神国大博覧会開催計画とその行方 (能川泰治 (近現代史部会)) 〔第 2 部〕松江の明治建築 (足立正智 (民俗部会))

期日	担当部会	内容	備考
12 月 20 日	近現代	近現代史部会	〔議題〕史料編・通史編の検討　など
12 月 24 ～ 28 日	近世	近世史料調査	島根県立図書館等所蔵史料 (東谷委員)
12 月 25 日	近世	近世史小部会	〔議題〕史料編Ⅳに掲載する史料選定、通史編の執筆分担　など
12 月 25 日	松江城	松江城関連調査	松江城瓦胎土分析調査

平成 27 年 (2015)

1 月 5 日		新聞記事掲載「肥前焼皿 1200 枚出土　松江城下町遺跡」	山陰中央新報
1 月 5 日		新聞記事掲載「藩主と深い信頼関係　松江城下町遺跡肥前焼出土」	山陰中央新報
1 月 6 日		新聞記事掲載「タイムスリップ松江発見伝 1 松江城下町遺跡の障子堀」	山陰中央新報
1 月 7 日		新聞記事掲載「タイムスリップ松江発見伝 2 松江城の祈禱札」	山陰中央新報
1 月 8 日		新聞記事掲載「タイムスリップ松江発見伝 3 初代松江署庁舎」	山陰中央新報
1 月 9 日		新聞記事掲載「タイムスリップ松江発見伝 4 旧田野医院」	山陰中央新報
1 月 10 日		新聞記事掲載「明窓　松江城下町遺跡から出土した肥前磁器の皿」	山陰中央新報
1 月 11 ～ 13 日	近世	近世史料調査	島根県立図書館等所蔵史料 (岸本委員)
1 月 19 日	松江城	松江城部会文献・歴史地理・建築グループ会	〔議題〕文献検討会
1 月 20 日		「市史編纂コラム第 39 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕亀嵩城、決死の調査隊
1 月 21 日		新聞記事掲載「松江の古寺と仏像－願主と仏師－〈的野克之〉」	山陰中央新報
1 月 22 日		新聞記事掲載「中海・宍道湖の自然環境〈三瓶良和〉」	山陰中央新報
1 月 23 日		新聞記事掲載「松江城下町遺跡出土の驚くほど優れた陶磁器〈大橋康二〉」	山陰中央新報
1 月 24 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕松江の古寺と仏像 (的野克之 (中世史部会)) 〔第 2 部〕中海・宍道湖の自然環境 (三瓶良和 (自然環境))
1 月 26 日	松江城	松江城関連調査	松江城鯱調査
1 月 26 日	松江城	松江城部会文献・歴史地理・建築グループ会	〔議題〕絵図検討会
1 月 27,28 日	近現代	近現代史料調査	山陰合同銀行史料調査
2 月 1,2 日	近世	近世史料調査	島根県立図書館等所蔵史料 (岸本委員)
2 月 6 日	松江城	松江城部会	〔議題〕松江城査読検討会
2 月 7 日	中世	中世史部会	〔議題〕通史編の検討　など
2 月 9 日	自然環境	自然環境部会	〔議題〕通史編の編集、史料編の検討　など
2 月 10 ～ 12 日	近世	近世史料調査	島根県立図書館等所蔵史料 (常松委員)
2 月 10 日		新聞記事掲載「記録・絵図史料を通してみる松江城〈和田嘉宥〉」	山陰中央新報
2 月 13 日		新聞記事掲載「江戸時代の農村ーひと・いえ・くらし〈常松隆嗣〉」	山陰中央新報
		パンフレット「松江市史　通史編自然環境･原始･古代　購入申込書」	
2 月 21 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕松江城城郭施設の特色とその推移 (和田嘉宥 (松江城部会)) 〔第 2 部〕江戸時代の農村 (常松隆嗣 (近世史部会))
2 月 22 日	松江城	松江城部会	〔議題〕別編の検討　など
2 月 23 日	全般	松江市史部会長会議	〔議題〕①松江市史編纂状況、各部会からの状況報告 ②来年度予算について ③松江市史編集委員会の議題、日程調整について　など
3 月 9 日		新聞記事掲載「中世の寺院と神社〈井上寛司〉」	山陰中央新報
3 月 9 日	近現代	近現代史小部会	〔議題〕史料編・通史編の検討　など
3 月 14 日	松江城	松江城調査報告会	
3 月 17 日		新聞記事掲載「戦後松江の公民館と新生活運動〈鬼嶋淳〉」	山陰中央新報
3 月 20 日		新聞記事掲載「『松江市史』通史編 1 が発刊〈木下誠〉」	山陰中央新報
3 月 21 日	全般	松江市史講座	〔第 1 部〕中世の寺院と神社 (井上寛司 (中世史部会)) 〔第 2 部〕戦後松江の公民館と新生活運動 (鬼嶋淳 (近現代史部会))
3 月 21 日	近現代	近現代史部会	〔議題〕史料編・通史編の検討　など
3 月 21,22 日	近世	近世史部会	〔議題〕史料編Ⅲの編集、史料編Ⅳ・通史編の検討　など
3 月 23 日		**『松江市史』史料編 7「近世Ⅲ」発行**	**（第 7 回配本）**
3 月 24,25 日	近現代	近現代史料調査	川辺地区・高井家文書調査
3 月 26 日	近現代	近現代史部会	〔議題〕史料編・通史編の検討　など
3 月 27 日	松江城	松江城部会	〔議題〕松江城査読検討会
3 月 30 日		**『松江市史』通史編 1「自然環境・原始・古代」発行**	**（第 8 回配本）**
3 月 30 日		「市史編纂コラム第 40 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕古代出雲の中心地であった松江市域の新しい歴史像とその舞台となった自然環境 -『松江市史』通史編 1 「自然環境・原始・古代」の発刊
3 月 31 日		『松江市歴史叢書 8』（松江市史研究 6 号）発行	
4 月 1 日		「市史編纂コラム第 41 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕飢饉時における食料対策について
4 月 11 日	松江城	松江城関連調査	松江城瓦・石垣調整会
4 月 13 日	松江城	松江城関連文献検討会	
4 月 15 日	民俗	民俗小部会	松江市史別編 2 「民俗」添付 DVD 映像の確認
4 月 17 日		文化審議会に松江城天守国宝指定諮問	
4 月 17 日		新聞記事掲載「寄稿　松江藩の命運握った儒者精翁〈岸本　覚〉」	山陰中央新報
4 月 17 ～ 20 日	近世	近世史料調査	岸本委員
4 月 20 日	近現代	近現代史小部会	
4 月 18 日	近世	松江市史講座	〔タイトル〕幕末松江藩と雨森謙三郎（精翁）（岸本覚（近世史））

資料 11　松江市史編纂事業全期間における主な活動

期日	担当部会	内容	備考
4 月 24 日	松江城	松江城小部会	〔議題〕別編の検討　など
5 月 7 日	中世	中世史小部会	〔議題〕通史編の検討　など
5 月 1 日	全般	松江歴史館と松江市史編纂関係者との意見交換会	〔議題〕①松江市史編纂の経過報告 ②松江歴史館の現状と今後の展望について意見交換
5 月 1 日		「市史編纂コラム第 42 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕文献史料から見る「松江城と松江城下町」その２
5 月 7 日	中世	中世史小部会	
5 月 9 日	全般	松江市史講座	「市民と語る松江の自然（シンポジウム）」 髙安克己氏・澤田順弘氏・田坂郁夫氏・佐藤仁志氏
5 月 9 日	自然環境	自然環境部会	〔議題〕史料編「自然環境」編纂計画について ①各分野の内容・頁数の原案の検討 ②スケジュールの確認
5 月 10 日	松江城	松江城査読検討会	
5 月 10 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕出雲考古学のあゆみ編集打ち合わせ（初回）
5 月 15 日		**文化審議会が松江城天守国宝指定を文部科学大臣に答申**	
5 月 16 日	松江城	松江城関連調査	松江城瓦調査（山陰中・近世瓦研究会発足）
5 月 17 日	松江城	松江城関連調査	松江城石垣調査
5 月 17 日		小野家史料調査	島根町史編纂委員であった小野啓次郎氏の関係史料
5 月 26 日		松江歴史館と松江市史編纂関係者との意見交換会	〔議題〕松江歴史館の中・長期的運営プランについて意見交換
5 月 30 日	近世	近世史部会	〔議題〕史料編「近世Ⅳ」および通史編について
5 月 30 日	松江城	松江城査読検討会	
5 月 30 ～ 31 日	近現代	近現代史部会	〔議題〕史料編、通史編について
5 月 31 日	全般	平成 27 年度松江市史編集委員会	〔議題〕①編纂体制、出版計画（一部計画変更） ②平成２６年度事業報告、平成２７年度事業計画 ③各部会の報告（事業報告、事業計画、調査・執筆・編集状況） ④『松江市史』通史編について ⑤松江市史編纂基本計画の実施状況と今後の課題 ⑥その他（松江市史研究執筆応募状況ほか）
5 月 31 日	中世	中世史部会	〔議題〕通史編について
6 月 1 日	近現代	近現代史料調査	鬼嶋委員
6 月 1 日		「市史編纂コラム第 43 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕江戸時代松江市中のゴミ捨て場
6 月 3 日		新聞記事掲載「松江裁判所事始め〈居石正和〉」	山陰中央新報
6 月 6 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕松江裁判所事始め（居石正和（近現代史部会））
6 月 8 日	松江城	松江城文献史料検討会	〔議題〕①前回の意見交換会の報告と今後の方針 ②年表について ③「松江城築城に関する史料一覧」について ④写真史料について ⑤その他
6 月 17 日	松江城	松江城小部会	
6 月 19 日	中世	中世史小部会	
6 月 24 日	松江城	松江城部会城郭史Ｇ会	〔議題〕①『松江市史』別編「松江城」の編集スケジュールの確認 ②第２次原稿提出について（6 月 17 日） ③松江城城郭呼称について ④松江城築城関係史料について ⑤その他　平成 27 年度第１回松江城部会について（8 月 30 日）等
7 月 1 日		「市史編纂コラム第 44 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕池尻家「御用留」（天明２年）-『史料編７近世３』より
7 月 2 日	自然環境	自然環境部会	〔議題〕①部会員について ②史料編の頁割について ③史料編の版組について
7 月 3 日		「市史編纂コラム第 45 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕続・中世松江の「筌」漁業
7 月 5 日	松江城	松江城査読検討会	
7 月 8 日	松江城	**松江城天守国宝指定の官報告示**、松江城関連調査	松江城天守地階鯱調査
7 月 10 日		新聞記事掲載「出雲世界のルーツ〈池淵俊一〉」	山陰中央新報
7 月 12 日	松江城	松江城関連調査	松江城瓦調査（山陰中・近世瓦研究会）
7 月 15 日		新聞記事掲載「松江城国宝化支える絵図･地図〈大矢幸雄〉」	山陰中央新報
7 月 18 日	全般	松江市史講座	「出雲世界のルーツ―五・六世紀の意宇平野―」 池淵俊一氏（埋蔵文化財調査センター課長）
7 月 24 日	松江城	「松江城築城物語」に関係する文献史料検討会	〔議題〕旧島根県史記載の「松江城築城物語」をベースに、それらの物語が他の文献史料にどれだけ記載されているかを整理
7 月 25 日	近世	近世史小部会	〔議題〕通史編３「近世Ⅰ」藩政史分野に関する打合せ
7 月 27 ～ 28 日	近現代	近現代史料調査	山陰合同銀行調査
7 月 29 日		公文書の管理にかかる協議始まる（総務課、史料編纂室）	松江市公文書の管理について（特に保存年限を過ぎだ支所所管公文書の評価・選別）
7 月 30 日	全般	松江市史部会長会議	〔議題〕①各部会からの報告 ②編集委員会、歴史館との連絡会を受けて、今後の取り組み ③平成 28 ～ 31 年度仕様書の調整について ④平成 28 年度市史講座について ⑤その他
7 月 30 日		野津篤家史料調査（野津左馬助旧蔵史料）	旧島根県史編纂史料（引継文書、原稿の下書き等）
7 月 31 日		『松江市ふるさと文庫』17 発行	「松江の碑－碑が語る松江の歴史－」安部登
8 月 1 日		「市史編纂コラム第 46 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕終戦前の松江市
8 月 3 日		「市史編纂コラム第 47 回」掲載（ホームページ）	85 年ぶりの「新・松江城築城物語」
8 月 8 日	松江城	松江城関連調査	松江城瓦調査（山陰中・近世瓦検討会）
8 月 10 日	松江城	松江城関連調査	松江城写真検討会
8 月 21 日		新聞記事掲載「城郭から見た堀尾氏の出雲支配〈中井均〉」	山陰中央新報
8 月 23 日	松江城	松江城小部会	松江歴史館展示打合せ
8 月 24 日		公文書の管理にかかる事例確認会（総務課、史料編纂室）	島根県公文書センターの事例
8 月 26 ～ 27 日	近現代	山陰合同銀行調査	近現代史料調査

期日	担当部会	内容	備考
8 月 27 日	近現代	近現代史小部会	〔議題〕史料編・通史編について
8 月 29 日	絵図・地図	松江歴史館講演会	渡辺理絵氏「18 世紀中頃の松江における屋敷と住人の関係性 ―絵図と給帳と屋敷割帳を通じて―」
8 月 30 日	松江城	松江城部会	〔議題〕①近世史部会長との意見交換 ②スケジュール確認 ③各 G 会からの報告 ④原稿提出について ⑤松江城の古写真の紹介について ⑥松江城城郭呼称について ⑦松江城築城物語に関連する文献資（史）料整理について ⑧平成 28 年度松江市史講座について ⑨その他
8 月 30 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕城郭から見た堀尾氏の出雲支配（中井均（松江城部会））
9 月 1 日	松江城	松江城関連調査	松江城天守部材調査
9 月 1 日		「市史編纂コラム第 48 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕松江の町屋住宅事情 - 大保恵日記に見る裏借屋のくらし -
9 月 3 日	近世	近世史料調査	伊藤委員（大阪大学にて山中家文書調査）
9 月 8 日		「市史編纂コラム第 49 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕松江城天守幻視考
9 月 9 日～ 10 日	近世	近世史通史編小部会	〔議題〕通史編３「近世（一）」第１・２章の内容検討
9 月 12 日	近世	中倉家古文書調査	近世古文書
9 月 13 日	松江城	松江城関連調査	松江城瓦調査（山陰中・近世瓦研究会）
9 月 14 日	全般	松江市史部会長会議	〔議題〕①各部会からの報告 ②松江市の公文書について ③平成 28 年度松江市史講座について ④松江市史編纂委員会の議題について
9 月 16 日		新聞記事掲載「『神々の国、出雲」を再考する〈森田喜久男〉」	山陰中央新報
9 月 16 日	松江城	松江城に関する文献史料検討会	
9 月 19 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕出雲的世界の形成（森田喜久男（原始古代史部会））
9 月 20 日	近世	近世史料調査	常松委員
9 月 24 日	近現代	近現代史部会	〔議題〕史料編・通史編について
9 月 25 日	近現代	近現代史料調査	能川委員・鬼嶋委員
9 月 29 日		新聞記事掲載「松江城天守　昭和初期の測量図発見」	山陰中央新報
9 月 30 日		**『松江市史』別編２「民俗」発刊**	**（第９回配本）**
10 月	全般	松江市史編纂基本計画改訂（第 4 回改訂）	
10 月 1 日		新聞記事掲載「松江歴史館の松江城天守再発見展〈木下誠〉」	山陰中央新報
10 月 5 ～ 8 日	松江城	松江城石材調査	先山委員
10 月 13 日	松江城	松江城部会建築グループ会	〔議題〕①松江城部会の経過報告 ②編纂スケジュールの確認 ③執筆内容、執筆状況等の確認調整
10 月 16 日		新聞記事掲載「松江藩松平家の女性たち〈石田俊〉」	山陰中央新報
10 月 17 日		新聞記事掲載「松江城　昭和の大修理映像　歴史館特別展で初公開」	山陰中央新報
10 月 17 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕松江藩松平家の女性たち（石田俊（近世史部会））
10 月 21 日	民俗	民俗小部会	〔議題〕『松江市史』別編２「民俗」発刊
10 月 27 ～ 30 日		三谷家文書調査	松江藩家老三谷家文書の整理
11 月 3 日	松江城	別編「松江城」査読検討会	〔議題〕①第二次締切分までの原稿査読 ②年表の検討
11 月 4 日	全体	平成 27 年度編纂委員会	〔議題〕①事業報告について ②松江市史編集状況について ③事業計画について ④松江市史編纂基本計画の実施状況と今後の課題
11 月 8 ～ 10 日	近現代	近現代史料調査	鬼嶋委員
11 月 12 日		近現代史料調査	野津左馬之助史料調査
11 月 12 日		「市史編纂コラム第 50 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕江戸時代松江の糞尿処理事情
11 月 13 日		近現代史料調査	桑原家史料調査（八雲町）
11 月 14 日		新聞記事掲載「松江城と城下町〈2〉〈松尾　寿〉」	山陰中央新報
11 月 14 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕尼子氏の滅亡と「御一家再興」戦争（中野賢治（中世史部会））
11 月 15 日		新聞記事掲載「注目の一冊　西尾克己監修『国宝松江城　美しき天守』〈安部登〉」	山陰中央新報
11 月 16 ～ 17 日		近世・近現代史料調査	中倉家史料調査（環境センター会議室）
11 月 29 ～ 30 日	近世	近世史料調査	岸本委員
12 月 8 日	近現代	近現代史料調査	山陰合同銀行史料調査
12 月 9 日		新聞記事掲載「松江藩から松江県・島根県へ〈竹永三男〉」	山陰中央新報
12 月 12 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕明治維新後の松江市域－『島根県歴史（府県史料島根県）』に見る近代初頭の松江市域の変容－（竹永三男（近現代史部会））
12 月 19 日	近現代	近現代史部会	〔議題〕①史料編Ⅰについて 1. 竹永部会長作業状況の報告 2. 編纂室作業状況の報告 ②史料編Ⅱについて 1. 現在の状況・課題 ③通史編について 1. 現在の状況 2. サンプル原稿の検討
12 月 19・20 日	近世	近世史部会	〔議題〕①史料編「近世Ⅳ」について ②通史編「近世Ⅰ・Ⅱ」について（スケジュール確認、執筆内容確認、執筆要領、執筆者への依頼）

資料 11　松江市史編纂事業全期間における主な活動

期日	担当部会	内容	備考
12 月 21 日	松江城	松江城文献史料検討会	〔議題〕 ①掲載史料の現在の状況について ②掲載史料の翻刻編集の今後の進め方について ③年表について ④その他
12 月 23 日	松江城	別編「松江城」査読検討会	〔議題〕 ①査読についての検討 ②凡例（案）について ③その他について
12 月 24 日		「市史編纂コラム第 51 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕「瀧川家代々記録」にみえる新屋（あたらしや）の一面
12 月 24 ～ 25 日		近世・近現代史料調査	中倉家史料調査

平成 28 年 (2016)

1 月 1 日		新聞記事掲載「堀尾吉晴ゆかり 3 市町トップ対談」	山陰中央新報
1 月 1 日		新聞記事掲載「世界に誇る山陰の技」	山陰中央新報
1 月 5 日	松江城	天守用材樹種調査	
1 月 7 日		新聞記事掲載「地図から読み解く近世の松江市域〈上杉和央〉」	山陰中央新報
1 月 9 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕地図から読み解く近世の松江市域（上杉和央（絵図･地図部会））
1 月 11 日	松江城	別編「松江城」査読検討会	〔議題〕 ①査読についての検討 ②凡例（案）について ③その他について
1 月 15 日	自然環境	自然環境部会	〔議題〕 ①各分野の新項目表について ②見本をもとにした本の構成検討 ③サンプル原稿について ④ DVD に入れる内容の検討
1 月 25 日		「市史編纂コラム第 52 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕編纂室のもう一つの仕事ー古文書調査ー
1 月 31 日		新聞記事掲載「高城権八家過去帳を発見　謎の人物像「貴重史料」」	山陰中央新報
2 月 17 日		新聞記事掲載「堀尾氏の城郭普請〈山上雅弘〉」	山陰中央新報
2 月 18 日		新聞記事掲載「松江城　世界遺産目指す　他の国宝と「城郭郡」構成」	山陰中央新報
2 月 20 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕堀尾氏の城郭普請（山上雅弘（松江城部会））
2 月 21 日	松江城	松江城部会	〔議題〕 ①別編「松江城」の編集項目・全体スケジュールの確認 ②各 G 会からの報告 ③原稿提出について ④施設（建物）呼称について ⑤口絵等写真について ⑥執筆に伴う追加調査について ⑦今後の編纂スケジュールについて ⑧その他
2 月 22 日	近世	近世史小部会	〔議題〕通史編「近世Ⅰ」藩政改革担当打合せ
3 月 1 日		「市史編纂コラム第 53 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕野津左馬之助先生と『松江市史』
3 月 3 日	全般	松江市史部会長会議	〔議題〕 ①各部会からの報告 ②来年度予算（内示）と出版計画・組織機構・部会担当者等について ③松江市史編纂体制について ④松江市史編集委員会の議題と日程について ⑤今後の予定とその他報告
3 月 3 日	松江城	別編「松江城」査読検討会	〔議題〕 ①査読についての検討 ②凡例（案）について ③その他について
3 月 5 日	近現代	近現代史部会	〔議題〕 ①進捗状況について（史料編Ⅰ、史料編Ⅱ、通史編） ②平成 28 年度の部会について
3 月 8 日		新聞記事掲載「松江城下の盆踊り〈永井　猛〉」	山陰中央新報
3 月 8 日	松江城	「歴史遺産としての松江城」検討会	〔議題〕 ①「史跡松江城保存活用計画」の説明 ②松江市公文書の状況説明 ③松江市史別編「松江城」第 7 章の章立ての変更について
3 月 12 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕松江の芸能―神楽と盆踊り―（永井猛（民俗部会））
3 月 14・15 日	近世	近世史部会	〔議題〕 ①通史編「近世Ⅰ・Ⅱ」スケジュールについて ②通史編執筆要領 ③執筆内容確認 ④執筆者への依頼について ⑤平成 28 年度編集委員会への通史編「近世Ⅰ」の内容報告 ⑥平成 28 年度部会の開催予定について ⑦その他
3 月 22 ～ 23 日		近世・近現代史料調査	中倉家史料調査
3 月 24 日		文書館関係:松江市公文書にかかる協議（総務課、史料編纂室）	支所所管文書を中心とする松江市公文書の管理について
3 月 25 日		『松江市歴史叢書』9（松江市史研究 7 号）発刊	
3 月 25 日		新聞記事掲載「史料編纂室を課に格上げ」	山陰中央新報
3 月 25 日		**『松江市史』通史編 2「中世」発刊**	**（第 10 回配本）**
3 月 28 日	松江城	松江城文献史料検討会	〔議題〕 ①掲載史料の現在の状況について ②追加史料について ③その他
3 月 28 ～ 30 日	近現代	近現代史料調査	能川委員
3 月 29 日		**『松江市史』史料編 8「近世Ⅳ」発刊**	**（第 11 回配本）**
4 月 1 日		**組織改編によりまちづくり文化財課より独立し史料編纂課設置、松江城調査研究室が内室となる**	松江城調査研究室は国宝化推進から調査研究を中心とする組織名に改称。松江城調査研究委員会は平成 31 年 3 月に委員構成を改編、市史松江城部会を発展的に引き継ぐ
4 月 1 日		「市史編纂コラム第 54 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕初期松江城天守と千鳥破風
4 月 2 日		新聞記事掲載「島根半島の海岸地形－日本海側地域を代表する鬼の洗濯－〈小暮哲也〉」	山陰中央新報
4 月 9 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕松江市の海岸地形―日本海側地域を代表する鬼の洗濯板―（小暮哲也（自然環境部会））
4 月 14 日	松江城	新聞記事掲載「松江城に幻の破風　千鳥城の別称　装飾の証拠か」	毎日新聞

期日	担当部会	内容	備考
4 月 15 日	松江城	新聞記事掲載「本当に松江城？　新発見　絵図の疑問から」	毎日新聞
4 月 15 日	松江城	新聞記事掲載「松江城　千鳥破風あった？」	読売新聞
4 月 15 日	松江城	新聞記事掲載「松江城に千鳥破風痕跡か　築城 40 年後絵図と一致」	山陰中央新報
4 月 19 日		史料調査	野津左馬之助史料調査
4 月 22 日		新聞記事掲載「「松江市史」通史編・中世の刊行にあたって〈井上寛司〉」	山陰中央新報
4 月 26 日		新聞記事掲載「地名の謎を追う　「ニマ」「タキ」同音　字は多岐に」	朝日新聞
5 月 6 日	松江城	別編「松江城」査読検討会	
		パンフレット「松江市史　購入申込書」	
5 月 10 日		新聞記事掲載「新しい松江の中世史像〈井上寛司〉」	山陰中央新報
5 月 11 日		新聞記事掲載「松平不昧の茶室〈和田嘉宥〉」	山陰中央新報
5 月 12 日		第 1 回近世城郭群世界遺産登録推進会議準備会に松江市からも参加	於 松本市立博物館（松本市、犬山市、松江市参加）
5 月 13 日		新聞記事掲載「松江城　国宝 5 城で世界遺産に　3 市が準備会」	山陰中央新報
5 月 13 日		新聞記事掲載「3 城　世界遺産へ準備会　近世城郭群登録目指す」	信濃毎日新聞
5 月 14 日	全般	松江市史講座	〔シンポジウム〕新しい松江の中世史像（井上寛司･長谷川博史･原慶三（中世史部会））
5 月 16 日		新聞記事掲載「松江城など国宝 5 城で世界遺産に」	山陰中央新報
5 月 16 日		新聞記事掲載「国宝効果　51 万人登閣　松江城天守指定答申 1 年」	山陰中央新報
5 月 17 日		新聞記事掲載「「松江市歴史叢書 9」発刊に寄せて〈西尾克己〉」	山陰中央新報
5 月 19 日		「市史編纂コラム第 55 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕松江藩のお家騒動・その 1
5 月 21 日	全般	平成 28 年度松江市史編集委員会	〔議題〕①編纂体制、出版計画 ②平成 27 年度事業報告、平成 28 年度事業計画 ③各部会の報告（事業報告、事業計画、調査・執筆・編集状況） ④『松江市史』通史編について ⑤松江市史編纂基本計画の実施状況と今後の課題 ⑥その他（松江市史研究執筆応募状況ほか）
5 月 21 日	自然環境	自然環境部会打ち合わせ	〔議題〕①原稿版組サンプルについて ② DVD 掲載データについて ③今後の編纂スケジュールについて
5 月 21 日	原始古代	原始古代史部会	
5 月 21 日	中世	中世史部会	〔議題〕通史 2「中世」刊行後の活動について
5 月 21 日	近現代	近現代史部会	〔議題〕①編集委員会協議・確認事項を承けて ②スケジュールの確認・及び進捗状況 ③通史編の編集方針、編集計画の検討――編集委員会の報告・討論をふまえて
5 月 22 日	近世	近世史部会	〔議題〕①執筆原稿の検討 ②執筆要領について協議・決定 ③その他
5 月 23 日		新聞記事掲載「記者リポート　松江城に千鳥破風はあったか」	山陰中央新報
5 月 26・27 日		近世・近現代史料調査	中倉家史料調査
6 月 7・8 日		近世・近現代史料調査	中倉家史料調査
6 月 7 日		新聞記事掲載「松江藩政と家老〈三宅正浩〉」	山陰中央新報
6 月 7 日	松江城	松江城小部会	
6 月 8 日		新聞記事掲載「しまねの人　島根大教授　大日方克己さん」	朝日新聞
6 月 9 日		新聞記事掲載「「授業化計画」スタート　市内全小学校の 6 年生対象　天守の特徴など学ぶ」	山陰中央新報
6 月 11 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕松江藩政と家老（三宅正浩（近世史部会））
6 月 14 日		「市史編纂コラム第 56 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕新発見の出雲名物番付
6 月 16 日	松江城	別編「松江城」査読検討会	
6 月 21 日	松江城	松江城文献史料検討会	
6 月 25・26 日	松江城	松江城部会城郭史グループ会	
6 月 24 日		文書館関係：鳥取県立公文書館へ視察	公文書管理について先進事例視察（和田、高橋）
6 月 29 日	松江城	別編「松江城」査読検討会	
6 月 30 日・7 月 1 日		近世・近現代史料調査	中倉家史料調査・野津左馬之助史料調査
7 月 1 日	松江城	松江城小部会	
7 月 3 日	自然環境	自然環境部会 DVD 打ち合わせ	〔議題〕DVD 掲載内容について ①松江市内の地質柱状図集 ②中海・宍道湖の湖底ボーリング資料および古環境解析用ボーリング資料 ③中海・宍道湖の水質経年変化 ④気象関連のデータ
7 月 4 日		新聞記事掲載「松江城飛躍のために　天守国宝化から 1 年〈1〉登閣者 5 割超える増加」	山陰中央新報
7 月 5 日		新聞記事掲載「松江城飛躍のために　天守国宝化から 1 年〈2〉観光客滞在いかに長く」	山陰中央新報
7 月 5 日		新聞記事掲載「松江城廃城の危機救う　旧藩士らの活躍　小説に」	山陰中央新報
7 月 6 日		新聞記事掲載「松江城飛躍のために　天守国宝化から 1 年〈3〉史実積み重ね城活用を」	山陰中央新報
7 月 6 日		新聞記事掲載「堀尾忠氏顕彰する学習会」	山陰中央新報
7 月 7 日		新聞記事掲載「松江城飛躍のために　天守国宝化から 1 年〈4〉吉晴が縁　他市町と結ぶ」	山陰中央新報

資料 11　松江市史編纂事業全期間における主な活動

期日	担当部会	内容	備考
7 月 7 日		文書館関係：松江市の公文書管理にかかる協議（総務課、史料編纂室）	総務課より、松江市でも「公文書等の管理に関する法律」に倣いたく、歴史公文書の選別と保管管理、活用等は史料編纂課に協力依頼できるか打診
7 月 8 日		新聞記事掲載「松江城飛躍のために　天守国宝化から 1 年〈5〉市民の愛着、誇り育んで」	山陰中央新報
7 月 8 日	松江城	建物調査	武家屋敷調査
7 月 9 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕出雲考古学のあゆみ編集打ち合わせ
7 月 15 日	松江城	建物調査	清原家
7 月 20 日		新聞記事掲載「堀尾氏の出雲・隠岐支配〈佐々木倫朗〉」	山陰中央新報
7 月 22 日	松江城	建物調査	小泉八雲旧居
7 月 23 日	全般	松江市史講座	「堀尾氏の出雲・隠岐支配」 講師　佐々木　倫朗　委員（近世史部会）
7 月 24 日	松江城	松江城小部会	第 9 章打ち合わせ
7 月 25 日	絵図・地図	正保年間松江城下町絵図調査	川村博忠先生、和田嘉宥先生、大矢幸雄先生
7 月 28・29 日		近世・近現代史料調査	野津左馬之助史料調査
8 月 1 日	自然環境	自然環境部会	〔議題〕　①各章（分野）の原稿提出状況および議題 ②原稿版組サンプルについて ③ DVD 掲載内容について ④今後の編纂スケジュールについて ⑤その他（来年度松江市史講座について）
8 月 1 日	近現代	近現代史小部会	
8 月 2 日	全般	松江市史部会長会議	〔議題〕　①進捗状況、市史講座、編纂委員会等について ②市職員長期休暇に伴う編纂室体制について
8 月 7 日	松江城	松江城小部会	第 9 章打ち合わせ
8 月 9 日		「市史編纂コラム第 57 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕一枚の写真から始まった宍道氏研究
8 月 18 日		新聞記事掲載「近世城郭と城下の空間設計を考える〈堀田浩之〉」	山陰中央新報
8 月 19 日	近現代	近現代史部会執筆者会議	
8 月 20 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕近世城郭と城下の空間設計を考える―松江城と姫路城の事例から―（堀田浩之（松江城部会））
8 月 21 日	松江城	松江城部会	
8 月 28 日		新聞記事掲載「国宝「玉石」は島根半島産　松江城築城時の鎮め物」	山陰中央新報
9 月 1 日		「市史編纂コラム第 58 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕大名茶人・松平治郷と茶入「残月」
9 月 3 日・4 日	近世	近世史部会巡検	
9 月 6 日		新聞記事掲載「国宝松江城天守鎮め物の玉石上　〈沢田順弘〉」	山陰中央新報
9 月 7 日		新聞記事掲載「国宝松江城天守鎮め物の玉石下　〈沢田順弘〉」	山陰中央新報
9 月 10 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕出雲考古学のあゆみ編集打ち合わせ
9 月 14 日		新聞記事掲載「ハーンをキーワードとした松観法〈工藤泰子〉」	山陰中央新報
9 月 16 日		新聞記事掲載「松江城下町遺跡　進む陶磁器発掘調査 (上)〈小山泰生〉」	山陰中央新報
9 月 17 日		新聞記事掲載「松江城下町遺跡　進む陶磁器発掘調査 (下)〈小山泰生〉」	山陰中央新報
9 月 17 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕戦後復興期における松江城観光振興―「松江国際文化観光都市建設法」成立を中心に―工藤泰子（近現代史部会））
9 月 25 日		新聞記事掲載「松平直政ゆかりの両市長対談　手を携え国宝天守を後世に」	山陰中央新報
9 月 29 日	松江城	松江城部会小部会	
10 月 6 日	全般	松江市史編纂委員会	〔議題〕　①事業報告について ②松江市史編集状況について ③事業計画について ④松江市史編纂基本計画の実施状況と今後の課題
10 月 10 日	松江城	松江城査読検討会	
10 月 13 日		「市史編纂コラム第 59 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕松江藩のお家騒動・その 2 ＜殿様斎貴＞
10 月 18 日		新聞記事掲載「写真でたどる松江城とその周辺〈和田嘉宥〉」	山陰中央新報
10 月 19 日～ 22 日	自然環境	松江城石垣調査	澤田委員
10 月 22 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕写真でたどる松江城とその周辺（和田嘉宥・伊藤孝一（松江城部会））
11 月 3 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕出雲考古学のあゆみ編集打ち合わせ
11 月 7 日・8 日	近世	近世史部会史料調査	沢山委員
11 月 17 日		新聞記事掲載「近世の海運と松江〈中安恵一〉」	山陰中央新報
11 月 19 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕近世の海運と松江（中安恵一（近世史部会））
11 月 20 日	松江城	松江城査読検討会	
11 月 22 日		新聞記事掲載「一枚の写真から始まった宍道氏研究〈稲田　信〉」	山陰中央新報
11 月 22 日		新聞記事掲載「潮流　市史の裾野」	中国新聞
11 月 25 日		「市史編纂コラム第 60 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕今この時も松江市の歴史の中のほんの一瞬
11 月 29 日・30 日		近世・近現代史料調査	桑原家史料調査
12 月 3 日・4 日	近世	近世史部会史料調査	岸本委員
12 月 10 日・11 日	近世	近世史部会	
12 月 13 日	近現代	近現代史部会	
12 月 13 日	自然環境	自然環境部会	
12 月 13 日～ 15 日	自然環境	松江城石垣調査	澤田委員
12 月 14 日		新聞記事掲載「松江市の歴史を地方行財政の視点から読み解く〈関耕平〉」	山陰中央新報

期日	担当部会	内容	備考
12 月 17 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕財政運営と行政組織からみる松江市のあゆみ（関耕平（近現代史部会））
12 月 18 日	松江城	松江城査読検討会	
12 月 19 日・20 日	近世・近現代	史料調査	米村家史料調査
12 月 20 日	松江城	松江城部会小部会	
12 月 24 日	松江城	松江城査読検討会	
12 月 26 日		文書館関係：地域の歴史史料（古文書等）の収集・保管について歴史まちづくり部内協議	松江歴史館での受け入れが滞り、史料編纂課の調査に伴う古文書等の寄贈、寄託に対応できない状況が生じたため
12 月 28 日		「市史編纂コラム第 61 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕第１次松江市総合計画はどこ？

平成 29 年 (2017)

1 月 4 日		文書館関係：地域の歴史史料（古文書等）の収集・保管について	史料編纂課の調査に伴う地域の歴史史料（古文書等）の寄贈申し出に対し、史料編纂課でも独自に受け入れを始める（保管場所　宍道蒐古館）
1 月 13 日	松江城	松江城部会執筆原稿協議	岡崎委員、松尾委員
1 月 14 日～ 16 日	自然環境	松江城石垣調査	澤田委員
1 月 14 日・15 日	松江城	松江城石垣調査	乗岡委員
1 月 14 日～ 16 日	近世	近世史部会史料調査	岸本委員
1 月 15 日	松江城	松江城査読検討会	
1 月 17 日		新聞記事掲載「忘れられた民権家　高橋基一〈竹永三男〉」	山陰中央新報
1 月 17 日		堀尾吉晴公共同研究会発足	松江市、安来市、大口町（後に浜松市がオブザーバー参加）
1 月 18 日		新聞記事掲載「松江市　安来市　愛知・大口町　吉晴共同研究会立ち上げ」	山陰中央新報
1 月 18 日	松江城	松江城部会小部会	
1 月 20 日		『ふるさと文庫』18 発行	「古墳時代史にみる古代出雲成立の起源」池淵俊一
1 月 21 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕「松江市域の自由民権運動とその時代」竹永三男（近現代史部会））
1 月 23 日		新聞記事掲載「ニュースのひと　福井将介さん」	山陰中央新報
1 月 31 日		新聞記事掲載「しまねのひと　福井将介さん」	毎日新聞
2 月 1 日		「市史編纂コラム第 62 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕ふるさと文庫 40 号の発刊にあたって
2 月 4 日～ 6 日	近世	近世史部会史料調査	岸本委員
2 月 7 日	松江城	松江城部会小部会	
2 月 11 日～ 13 日	近世	近世史部会史料調査	岸本委員
2 月 13 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕出雲考古学のあゆみ編集打ち合わせ
2 月 14 日		新聞記事掲載「松江城の耐震化着手　市が 17 年度」	山陰中央新報
2 月 15 日		新聞記事掲載「史跡松江城を掘る－地下に眠る松江城の歴史〈岡崎雄二郎〉」	山陰中央新報
2 月 18 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕松江城を掘る―地下に眠る松江城の歴史―（岡崎雄二郎（松江城部会））
2 月 19 日	松江城	松江城部会	
3 月 1 日		『ふるさと文庫』19 発行	「石垣と瓦から読み解く松江城」乗岡実
3 月 1 日		『松江市歴史叢書』10（松江市史研究 8 号）発刊	
3 月 3 日		「市史編纂コラム第 63 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕お殿様は松江城のどこに住んでいたのか？
3 月 4 日・5 日	近世史	近世史部会	
3 月 5 日～ 8 日	自然環境	松江城石垣調査	澤田委員
3 月 6 日	自然環境	自然環境小部会	高安委員、澤田委員、横田委員
3 月 9 日	近現代史	近現代史部会	
3 月 13 日・14 日	近世史	近世史部会史料調査	東谷委員
3 月 14 日・15 日		史料調査	菅田庵史料調査
3 月 15 日		新聞記事掲載「天皇に捧げられた品々と古代出雲〈吉松大志〉」	山陰中央新報
3 月 16 日	全般	松江市史部会長会議	〔議題〕進捗状況と松江市史編集委員会等について
3 月 18 日	原始・古代史	松江市史講座	〔タイトル〕松江市史から古代の出雲を考える（吉松大志（原始古代史部会））
3 月 22 日	全体	**公文書館・文書管理に関する意見交換会（松江市、松江市史編集委員会）**	井上編集委員長、竹永部会長、吉山副市長、三島総務部長、黒田総務次長、藤原歴史まちづくり部長、花形歴史館事務局長、稲田課長
3 月 25 日	原始古代	考古専門部会	〔議題〕出雲考古学のあゆみ編集打ち合わせ
3 月 26 日	松江城	松江城石垣調査	乗岡委員、先山委員
3 月 27 日	絵図・地図	絵図調査	島根大学堀尾期松江城下町絵図調査
3 月 28 日	近現代	**『松江市史』史料編 9「近現代Ⅰ」発刊**	**（第 12 回配本）**
4 月 2 日～ 4 日	近世	近世史料調査	東谷委員
4 月 4 日		新聞記事掲載「創建当初の松江城天守　復元図めぐり研究者らバトル」	産経新聞
4 月 5 日		新聞記事掲載「堀尾期松江城下町の新たな知見〈大矢幸雄〉」	山陰中央新報
4 月 6 日		新聞記事掲載「松江城展示　各階にテーマ　市が基本計画」	山陰中央新報
4 月 8 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕堀尾期松江城下町の新たな知見～ＧＩＳ分析による家臣団と雑賀衆・伊賀衆の配置～（大矢幸雄（絵図・地図部会））
4 月 14 日		「市史編纂コラム第 64 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕「駅々御本陣御間取絵図」
4 月 14 日・15 日	自然環境	松江城石垣調査	澤田委員
4 月 18 日	松江城	別編「松江城」第 9 章検討会	
4 月 18 日・19 日		近世史料調査	米村家史料調査
4 月 20 日	近世	近世史料調査	多久田委員
5 月 11 日		「市史編纂コラム第 65 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕出雲地方の喫茶習慣についての一試論
5 月 16 日		新聞記事掲載「江戸時代の玉造温泉〈渡辺浩一〉」	山陰中央新報
5 月 18 日・19 日	自然環境	松江城石垣調査	澤田委員
5 月 20 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕玉造温泉の近世（渡辺浩一（近世史部会））

資料 11　松江市史編纂事業全期間における主な活動

期日	担当部会	内容	備考
5 月 20 日・21 日	近世	近世史部会	〔議題〕 ①原稿完成後のスケジュール ②執筆原稿の検討 ③近世Ⅱ「節・項・見出し」内容等詳細案の検討
5 月 21 日	全般	平成 29 年度松江市史編集委員会	〔議題〕 ①編纂体制、出版計画 ②平成 28 年度事業報告、平成 29 年度事業計画 ③各部会の報告（事業報告、事業計画、調査・執筆・編集状況） ④『松江市史』通史編について ⑤松江市史編纂基本計画の実施状況と今後の課題 ⑥その他（松江市史研究執筆応募状況ほか）
5 月 21 日	中世史	中世史部会	〔議題〕 ①松江市史史料編の補遺について ②松江市史の正誤表について ③その他
5 月 22 日	近世	近世史料調査	東谷委員
5 月 22 日	近現代	近現代史部会	
6 月 8 日		「市史編纂コラム第 66 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕『松江市史』別編 1「松江城」編集日記
6 月 10 日～ 12 日	近世	近世史料調査	東谷委員
6 月 14 日	松江城	松江城査読検討会	〔議題〕 ①進捗状況 ②校正原稿の査読について ③第 1 回松江城部会の議題について ④岡崎先生提案のブックレットシリーズについて
6 月 14 日		新聞記事掲載「松江商業会議所と商工業の展開〈伊藤康宏〉」	山陰中央新報
6 月 17 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕松江商工会議所と商工業（伊藤康宏（近現代史部会））
6 月 20 日・21 日		史料調査	米村家・酒井家史料調査
6 月 23 日	自然環境	松江城石垣調査	澤田委員
6 月 24 日～ 26 日	近世	近世史料調査	東谷委員
7 月 10 日		「市史編纂コラム第 67 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕女流俳人石橋秀野の松江疎開
7 月 11 日		新聞記事掲載「初期松江城天守　形態と千鳥破風〈稲田　信〉」	山陰中央新報
7 月 13 日～ 14 日	近世・近現代	史料調査	野津左馬之助史料調査
7 月 15 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕初期松江城天守の形態と千鳥破風（和田嘉宥・稲田信（松江城部会））
7 月 16 日	松江城	松江城部会	〔議題〕 ①別編「松江城」配布資料について ②各 G 会からの報告 ③入校・初校の進捗状況と今後の校正スケジュールについて ④協議事項（口絵・序章第 1 節・用語解説） ⑤今後のスケジュールについて
7 月 25 日～ 26 日	自然環境	松江城石垣調査	澤田委員
7 月 25 日	自然環境	自然環境部会	〔議題〕 ①編纂スケジュールの確認　旅費の変更について ②部門進捗説明 ③版組・口絵カラー割り付けなど ④参考文献 ⑤第 2 章 6　半島における風の名称
7 月 29 日・30 日	近世	近世Ⅱ小部会	〔議題〕 ①通史編スケジュール ②「通史編Ⅱ」執筆原稿の検討 ③その他
8 月 7 日～ 8 日	近世	近世部会史料調査	石田委員
8 月 9 日	松江城	松江城小部会	
8 月 16 日		新聞記事掲載「原始・古代から見る松江成立の基盤〈丹羽野裕〉」	山陰中央新報
8 月 19 日	原始古代	松江市史講座	〔タイトル〕原始・古代から見る松江城成立の基盤（丹羽野裕（原始古代史部会））
8 月 24 日		「市史編纂コラム第 68 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕歴史史料と郷土愛
8 月 21 日	近世	史料調査	山口薬局
9 月 4 ～ 5 日	自然環境	松江城石垣調査	澤田委員
9 月 6 ～ 7 日	近世	近世史料調査	東谷委員
9 月 7 ～ 8 日	近現代	史料調査	野津左馬之助史料調査
9 月 8 日		新聞記事掲載「山城の縄張り調査からみえるもの〈山根正明〉」	山陰中央新報
9 月 8 日	全体	松江市史部会長会議	〔議題〕進捗状況と松江市史編纂委員会等について
9 月 11 ～ 15 日	近現代	史料調査	鬼嶋委員
9 月 12 ～ 15 日	近現代	史料調査	能川委員
9 月 13 日	近現代	松江市史近現代史部会	〔議題〕 ①史料編「近現代Ⅱ」について ②通史編「近現代」について
9 月 16 日	松江城	松江市史講座	〔タイトル〕特色ある松江市内中世城館（山根正明（中世史部会））
9 月 23 日～ 25 日	近世	史料調査	東谷委員
9 月 27 日～ 29 日		堀尾公共同研究視察	
9 月 30 日		『松江市ふるさと文庫』20 発行	「松平不昧の茶室」和田嘉宥
10 月 5 ～ 6 日		史料調査	川津公民館史料調査
10 月 6 日		新聞記事掲載「水都松江の橋巡り①　北惣門橋（殿町）」	山陰中央新報
10 月 10 日	全般	平成 29 年度松江市史編纂委員会	〔議題〕 ①事業報告について ②松江市史編集状況について ③事業計画について ④松江市史編纂基本計画の実施状況と今後の課題
10 月 16 日		「市史編纂コラム第 69 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕江戸中期、商人のお友達 - 人物画と俳句
10 月 20 日	自然環境	自然環境部会	〔議題〕 ①編纂スケジュールについて ②各章（分野）の原稿相互照合（すべての原稿の確認） ③各章間のページ割り振りの確定 ④参考文献の執筆基準について ⑤その他（来年度松江市史講座について）
10 月 25 日		新聞記事掲載「松江の気象特性〈谷永守〉」	山陰中央新報

期日	担当部会	内容	備考
10 月 28 ～ 30 日	近世	史料調査	東谷委員
10 月 28 日	自然環境	松江市史講座	〔タイトル〕島根県（松江）の気象特性について（谷永守（自然環境部会））
11 月 9 ～ 10 日	近現代	史料調査	川津公民館史料調査
11 月 9 ～ 10 日		大口町視察受入（松江市史編纂事業について）	
11 月 18 ～ 19 日	近世	近世史部会	〔議題〕 ①通史編Ⅰスケジュール ②通史編Ⅱ 「節・項・見出し」原稿内容等の検討
11 月 25 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕松江市域の集落名称－本郷と口－（喜多村正（民俗部会））
12 月 1 日	松江城	別編「松江城」査読検討会	
12 月 2 日	松江城	第 7 回白潟地域歴史再発見楽習会	〔タイトル〕須田主殿と松江城研究－『松江市史』別編「松江城」の編集をとおして－
12 月 5 日		新聞記事掲載「宍道湖・中海の水環境〈清家泰〉」	山陰中央新報
12 月 16 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕宍道湖・中海の水環境（清家泰（自然環境部会））
12 月 18 日		「市史編纂コラム第 70 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕バートン・ホームズの見た 1922 年の松江
平成 30 年 (2018)			
1 月 5・6 日	松江城	別編「松江城」査読検討会	
1 月 11・12 日		史料調査	川津公民館史料調査
1 月 18 日		新聞記事掲載「唯一神道の普及と意宇六社の成立〈小林准士〉」	山陰中央新報
1 月 20 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕仏と神から見た近世（小林准士（近世史部会））
1 月 22 日		「市史編纂コラム第 71 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕松江城初代藩主・堀尾忠氏の発給文書について
2 月 6・7 日		文書館関係：山口県文書館・山口市史編さん室へ視察	公文書管理について先進事例視察（小山、村角）
2 月 7・8 日		文書館関係：松本市文書館へ視察	公文書管理について先進事例視察（稲田）
2 月 8・9 日		史料調査	川津公民館史料調査
2 月 13 日		新聞記事掲載「敗戦直後の松江における人びとの暮らし〈鬼嶋淳〉」	山陰中央新報
2 月 17 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕敗戦直後の松江における人々の暮らし（鬼嶋淳（近現代史部会））
2 月 18 日	近現代	近現代史部会	〔議題〕 ①史料編「近現代Ⅱ」について ②通史編「近現代」について ③来年度部会について
2 月 20・21 日		史料調査	野津左馬之助史料調査
3 月 1 日		『松江市歴史叢書』11（松江市史研究 9 号）発刊	
3 月 3・4 日	近世	近世史部会	〔議題〕 ①通史編近世Ⅰについて ②通史編近世Ⅱについて
3 月 5 日		「市史編纂コラム第 72 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕松江城天守創建に関わる祈祷札の発見（パート２）
3 月 8 日	全般	松江市史部会長会議	〔議題〕 ①松江市史編纂状況について ②来年度予算（内示）と出版計画、事務局体制について ③松江市史編集委員会の日程、議案等について ④通史編「近現代」「終章」について ⑤公文書館について ⑥その他
3 月 12・13 日		史料調査	川津公民館史料調査
3 月 16 日	自然環境	自然環境部会	〔議題〕 ①編纂スケジュールについて【資料　編纂スケジュール表】 ②各章（分野）の原稿確認及び検討事項【資料　提出原稿】 ③各章のページ確定について ④その他
3 月 16 日		「市史編纂コラム第 73 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕松江の「隠れ茶室」
3 月 20 日		新聞記事掲載「松江城の調査・研究の現況と今後の展望〈西尾克己〉」	山陰中央新報
3 月 24 日		**『松江市史』別編 1「松江城」発刊**	**（第 13 回配本）**
3 月 24 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕松江城をめぐる諸問題と今後の展望―松江市史別編「松江城」の出版に併せて―（西尾克己・中井均・和田嘉宥・河原荘一郎（松江城部会））
3 月 25 日		新聞広告「3 月 27 日発売　松江市史　別編 1 松江城」	山陰中央新報
3 月 25 日	松江城	松江城部会	〔議題〕別編「松江城」発刊について
3 月 25 日	松江城	松江城調査報告会	〔タイトル〕石垣から考える松江城（乗岡実（松江城部会））
3 月 26 日		新聞記事掲載「明窓　「松江市史　松江城」刊行」	山陰中央新報
3 月 26 日		新聞記事掲載「謎が残る松江城「塩札」　市研究室専門官が解説」	山陰中央新報
3 月 30 日		新聞記事掲載「" 空っぽ " 松江城　創建時体感を　６月まで展示品なし」	山陰中央新報
4 月 6 日		新聞記事掲載「展示品搬出された松江城　狭市が内覧会　狭間など見どころ説明」	山陰中央新報
4 月 11 日		新聞記事掲載「松江市周辺の自然災害史〈横田修一郎〉」	山陰中央新報
4 月 14 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕松江市と周辺の自然災害史（横田修一郎（自然環境））
4 月 20 日		文書館関係：歴史まちづくり部内協議	公文書と地域の歴史史料（古文書等）の調査・保存・管理、文書館について
4 月 21 日	近世	近世史小部会（大阪）	〔議題〕 ①執筆に関する基本事項 ②常松・東谷委員原稿の査読及び内容調整、意見交換 ③出席先生方の原稿素読と意見交換 ④その他 ⑤次回部会　など
4 月 26 日		文書館関係：歴史まちづくり部内協議	公文書と地域の歴史史料（古文書等）の調査・保存・管理、文書館について
4 月 27 日		文書館関係：総務課、史料編纂課協議	公文書と地域の歴史史料（古文書等）の調査・保存・管理、文書館について
5 月 7 日	自然環境	自然環境部会	〔議題〕 ①編纂スケジュールについて ②各章（分野）原稿の内校前最終確認及び検討事項 ③その他
5 月 10 日	原始古代	考古専門部会	『出雲考古学のあゆみ』発刊
5 月 10 日		文書館関係：総務部、歴史まちづくり部両部長協議	公文書と地域の歴史史料（古文書等）の調査・保存・管理、文書館について
5 月 14 日	全般	松江市史部会長会	〔議題〕 ①４月１日からの体制変更 ②松江市史編纂状況について ③通史編「近現代」「終章」について ④文書館について ⑤その他

資料 11　松江市史編纂事業全期間における主な活動

期日	担当部会	内容	備考
5 月 19 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕松江藩主松平宗衍・治郷二代の寵愛を受けた江戸詰藩士・萩野信敏 ―天愚孔平伝―（西島太郎（近世史部会））
5 月 22・23 日		史料調査	北辰堂（旧・松江警察署）史料、野津左馬之助史料調査
6 月		広告掲載「新刊のご案内　松江市史 別編 1 松江城　絶賛発売中」	今井書店の会員送付ハガキ
6 月 2 ～ 3 日	近世	近世史部会	〔議題〕①執筆に関する基本事項 ②近世Ⅰ原稿の査読・及び内容調整、意見交換 ③近世Ⅱ原稿の査読・及び内容調整、意見交換 ④近世Ⅰ付録 ⑤その他　次回部会
6 月 3 日	全般	平成 30 年度松江市史編集委員会	〔議題〕①編纂体制、出版計画 ②平成 29 年度事業報告、平成 30 年度事業計画 ③各部会の報告（事業報告、事業計画、調査・執筆・編集状況） ④『松江市史』通史編について ⑤松江市史編纂基本計画の実施状況と今後の課題 ⑥その他（松江市史研究執筆応募状況ほか）
6 月 3 日	中世史	中世史部会	〔議題〕①「中世史料集補遺」の原稿作成について ②今後の部会活動について
6 月 3 ～ 4 日	近現代	近現代史部会	〔議題〕①史料編「近現代Ⅱ」について ②通史編「近現代」について ③今年度の部会等について ④その他
6 月 6 日		新聞記事掲載「「世界遺産暫定リスト記載を」3 市が文化庁に要望」	山陰中央新報
6 月 6 日		新聞記事掲載「暫定リスト　国主導で　松江城などの世界遺産要望」	山陰中央新報
6 月 7 日		新聞記事掲載「明窓　文化財保護行政のありかたについて」	山陰中央新報
6 月 7 日		新聞記事掲載「松江市域における民芸運動の展開〈吉儀和平〉」	山陰中央新報
6 月 8 日		文書館関係：総務部、財政部、歴史まちづくり部各次長協議	公文書と地域の歴史史料（古文書等）の調査・保存・管理、文書館について
6 月 11 日		文書館関係：両副市長協議（総務部長、歴史まちづくり部長）	公文書と地域の歴史史料（古文書等）の調査・保存・管理、文書館について
6 月 11 ～ 12 日		史料調査	北辰堂（旧・松江警察署）史料調査
6 月 16 ～ 17 日	近世	近世史料調査	岸本委員
6 月 16 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕松江市域における民芸運動の展開とその担い手－出雲民芸紙と布志名焼を中心に－（吉儀和平（近現代史部会））
6 月 21 日		文書館関係：市長協議（総務部長、歴史まちづくり部長）	公文書と地域の歴史史料（古文書等）の調査・保存・管理、文書館について
6 月 24 日	自然環境	自然環境部会 DVD 打ち合わせ	〔議題〕①テスト版 DVD 最終チェックについて ② DVD データの将来のあり方について ③その他
6 月 29 日		文書館関係：総務部、歴史まちづくり部両次長協議	松江市文書館検討委員会設置についての協議
7 月 4 日		「市史編纂コラム第 74 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕松江市域における気象観測と物産陳列所
7 月 9 日		史料調査	山口薬局史料調査
7 月 9 日		「市史編纂コラム第 75 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕松江城の桐の階段
7 月 13 日		著作権セミナー（鳥取市）	高橋専門調査員受講
7 月 14 日		新聞記事掲載「出雲考古学のあゆみ　3 年がかりで出版　県内考古学関係有志」	山陰中央新報
7 月 15 日	近世	近世史部会	〔議題〕①執筆に関する基本事項 ②執筆者交代による頁割り ③近世Ⅱ原稿調整 ④近世Ⅱの口絵案 ⑤近世Ⅱのコラムテーマ案 ⑥前回 6 月 2・3 日　近世Ⅱ原稿の素読・及び内容調整、意見交換 ⑦次回部会
7 月 16 日		新聞記事掲載「明窓　島根県の文化財行政について」	山陰中央新報
7 月 17 日		新聞記事掲載「武家屋敷修復〈足立正智〉」	山陰中央新報
7 月 18 日		文書館関係：総務課、史料編纂課協議	（総務部）文書管理改善スケジュール （歴まち部）公文書と地域に所在する歴史史料（古文書等）の数量的現状、専門的職員の配置場所と所管文書の仕分け、ｱｰｷﾋﾞｽﾄの職務と遂行要件、松江市文書館検討委員会設置準備について
7 月 18 ～ 19 日		史料調査	普門院文書・北辰堂（旧・松江警察署）史料調査
7 月 20 ～ 21 日	自然環境	松江城石材調査	澤田委員
7 月 21 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕武家屋敷の修理と復原（足立正智（松江城部会））
7 月 27 日		新聞記事掲載「「出雲考古学のあゆみ」を読む〈岡部康幸〉」	山陰中央新報
8 月 8 日		文書館関係：総務部、歴史まちづくり部両次長協議	（総務部）文書管理改善スケジュール （歴まち部）公文書と地域に所在する歴史史料（古文書等）の数量的現状、専門的職員の配置場所と所管文書の仕分け、ｱｰｷﾋﾞｽﾄの職務と遂行要件、松江市文書館検討委員会設置準備について
8 月 9 日		史料調査	雑賀公民館史料調査
8 月 16 日		新聞記事掲載「弥生時代史に見る東アジアとの交流〈松本岩雄〉」	山陰中央新報
8 月 18 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕弥生時代史にみる東アジアとの交流（松本岩雄（原始古代史部会））
8 月 22 日		「市史編纂コラム第 76 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕松江に暮らす庶民の記録「大保恵日記」紹介
8 月 23 日		史料調査	雑賀公民館史料調査
8 月 24 日		文書館関係：総務部、歴史まちづくり部両部長協議	（総務部）文書管理改善スケジュール （歴まち部）スケジュール表､公文書と地域に所在する歴史史料（古文書等）の数量的現状、 専門的職員の配置場所と所管文書の仕分け、ｱｰｷﾋﾞｽﾄの職務と遂行要件、松江市文書館検討委員会設置準備について
8 月 27 ～ 31 日		国立公文書館研修（アーカイブズ研修Ⅰ）	小山副主任受講

期日	担当部会	内容	備考
8 月 30 日		新聞記事掲載「企画展「松江藩主松平治郷の藩政改革」上〈西島太郎〉」	山陰中央新報
8 月 31 日		新聞記事掲載「企画展「松江藩主松平治郷の藩政改革」下〈西島太郎〉」	山陰中央新報
9 月 2 日	松江城	松江城部会	〔議題〕 ①はじめに ②各 G 会からの報告・・・（各 G 長） ③協議事項 ④その他
9 月 4 日		新聞記事掲載「荘園のしくみと下地中分〈西田友広〉」	山陰中央新報
9 月 4 日		文書館関係：総務課、史料編纂課協議	文書管理改善スケジュールについて
9 月 11 日		松江市議会で公文書館についての質問（吉儀敬子議員）	総務部長より公文書館の整備構想を今年度中に策定したい等答弁
9 月 12 日		新聞記事掲載「松江市　公文書館新設へ　管理適正化　年度内に整備構想」	山陰中央新報
9 月 13 日		史料調査	雑賀公民館史料調査
9 月 15 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕荘園のしくみと下地中分（西田友広（中世史部会））
9 月 18 日		文書館関係：総務課、史料編纂課協議	文書管理改善スケジュール、第 1 回文書館検討委員会資料について
9 月 19 日		「市史編纂コラム第 77 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕「松江城部会」ミニレポート
9 月 20 日		史料調査	雑賀公民館史料調査
9 月 20 日		文書館関係：総務部、歴史まちづくり部両部長協議	文書管理改善スケジュール、第 1 回文書館検討委員会資料について
9 月 21 日		新聞記事掲載「御立派改革期の松江藩経済政策〈伊藤昭弘〉」	山陰中央新報
9 月 23 日		機関誌記事掲載「公文書の「文書館」設置を」	新しい松江
9 月 29 日	近世	松江歴史館講演会	〔タイトル〕御立派改革期の松江藩経済政策（伊藤昭弘（近世史部会））
9 月 29 ～ 30 日	近世	近世史部会	〔議題〕 ①執筆に関する基本事項 ②近世Ⅰ ③近世Ⅱ ④次回部会
10 月 3 ～ 5 日	松江城	支城調査	赤名城調査　中井委員、松尾委員、乗岡委員
10 月 4 日		新聞記事掲載「星上寺大餅行事の編成～中世から近現代まで〈喜多村理子〉」	山陰中央新報
10 月 8 日		新聞記事掲載「活躍マルチな桑原羊次郎　研究者ら市内 2 カ所で企画展」	山陰中央新報
10 月 11 日		新聞記事掲載「山陰中央新報社地域開発賞 2018 年受賞者 6 人決まる（井上寛司さん）」	山陰中央新報
10 月 11 日		新聞記事掲載「古代国府の実像－出雲国府の調査成果から〈佐藤信〉」	山陰中央新報
10 月 17 ～ 18 日		史料調査	雑賀公民館史料調査
10 月 19 日	全般	**第 1 回松江市文書館（仮称）検討委員会**	〔議題〕 ①松江市における公文書と地域に所在する歴史史料（古文書等）の数量的現状 ②公文書管理と文書館のイメージ ③文書管理改善スケジュール（案） ④意見交換
10 月 20 日	民俗	松江市史講座	〔タイトル〕星上山大餅行事の変遷～近世から近現代へ（喜多村理子（民俗部会））
10 月 23 日		新聞記事掲載「山陰中央新報社地域開発賞　きょう表彰式」	山陰中央新報
10 月 23 日		新聞記事掲載「受賞者の横顔」（井上寛司市史編集委員長）	山陰中央新報
10 月 24 日		新聞記事掲載「地域貢献活動　決意新た　地域開発賞表彰式」	山陰中央新報
10 月 24 日		史料調査	山口薬局文書
10 月 25 日		第 1 回松平治郷（不昧公）研究会	
10 月 26 日		新聞記事掲載「藩主・治郷の功績に光を　松江市研究会が発足」	山陰中央新報
10 月 28 日		新聞記事掲載「松江市新設方針の文書館　規模や基準など検討へ」	山陰中央新報
10 月 31 日		新聞広告掲載「国宝松江城を守り、伝えるキャンペーン」	山陰中央新報
11 月 3 日		新聞記事掲載「松江城下町遺跡の発掘調査〈小山泰生〉」	山陰中央新報
11 月 3 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕松江城下町の考古学－地面の下の松江城下町遺跡－（小山泰生（松江城部会））
11 月 9 日	自然環境	自然環境部会	〔議題〕 ①編纂スケジュールについて ②添付 DVD について ③凡例について ④執筆分担一覧等について ⑤その他検討事項 ⑥その他
11 月 12 日	全般	平成 30 年度松江市史編纂委員会	〔議題〕 ①事業報告について ②松江市史編集状況について ③事業計画について ④松江市史編纂基本計画の実施状況と今後の課題について
11 月 26 日	全般	鳥取県立公文書館へ視察	公文書管理について先進事例視察（総務部総務課、史料編纂課職員）
12 月 6 日		史料調査	山口薬局文書
12 月 10 日～ 11 日	松江城	支城（城下）調査	広瀬（富田）、三刀屋、三沢調査　松尾委員
12 月 12 日		新聞記事掲載「明らかになった松江市の生物相〈佐藤仁志〉」	山陰中央新報
12 月 15 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕松江の自然～見どころあれこれ～（佐藤仁志（自然環境））
12 月 20 日	全般	第 2 回松江市文書館（仮称）検討委員会	〔議題〕 ①研修会「鳥取県立公文書館の取り組み」 ②第 1 回の論点整理と新庁舎建設計画について ③「松江市文書館（仮称）整備構想（案）」の審議

資料 11　松江市史編纂事業全期間における主な活動

期日	担当部会	内容	備考
12 月 20 日		『松江市ふるさと文庫』21 発行	「郷土のエンサイクロペディア　桑原羊次郎」桑原羊次郎・相見香雨研究会編
12 月 26 ～ 27 日	松江城	大名墓調査	月照寺調査　中井委員ほか（松江城部会）
12 月 30 日		新聞記事掲載「年間ベストセラーズ　③松江市史別編 1 松江城」	山陰中央新報

平成 31 年 (2019)

1 月 5 日		新聞記事掲載「家康拠点に秀吉方築城か　駿府、浜松城に天守や櫓遺構」	山陰中央新報
1 月 5 ～ 6 日	近世	近世史部会	〔議題〕 ①執筆に関する基本事項 ②近世Ⅰ ③近世Ⅱ ④次回部会
1 月 15 日		新聞記事掲載「松江藩の年貢収納と行政機構〈東谷智〉」	山陰中央新報
1 月 19 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕江戸時代中後期の郡・村政 -「殿 (しま) り合い」「御勝手御任せ」をめぐって - 東谷智（近世史部会））
1 月 25 日		新聞記事掲載「松江藩財務　民間にお任せ　市史部会が調査」	山陰中央新報
1 月 28 日		新聞記事掲載「近代の礎築いた「歩く市長」福岡世徳　地元 NPO が講演会」	山陰中央新報
1 月 29 日		新聞記事掲載「島根町誌関連資料 2 千点　県立大生がデジタル化」	山陰中央新報
2 月 4 日		第 3 回松江市文書館（仮称）検討委員会	〔議題〕「松江市文書館（仮称）整備構想（案）」の審議、答申案決定
2 月 8 日		「市史編纂コラム第 78 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕松江の水上飛行機
2 月 6 ～ 7 日		史料調査	雑賀公民館史料調査
2 月 13 日		新聞記事掲載「50 年かかった中海干拓淡水化事業〈徳岡隆夫〉」	山陰中央新報
2 月 16 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕中海・宍道湖の干拓・淡水化事業の歴史的回顧（徳岡隆夫（自然環境））
2 月 18 日		第 2 回松平治郷（不昧公）研究会	
2 月 19 日		新聞記事掲載「松江城築城時の石垣発見　堀尾氏の工法手掛かり」	山陰中央新報
2 月 21 ～ 22 日	近現代	近現代史部会	〔議題〕 ①通史編について ②史料編について
3 月 1 日		松江市議会で公文書館についての質問（三島伸夫議員）	総務部長より、平成 31 年度中の公文書管理条例作成等答弁
3 月 13 日～ 14 日		史料調査	雑賀公民館史料調査
3 月 15 日	自然環境	自然環境小部会	〔議題〕史料編「自然環境」第 3 校について
3 月 15 日		『松江市歴史叢書』12（松江市史研究 10 号）発刊	
3 月 16 日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕松江城下絵図とデジタルマップ - その構築･分析･活用まで -（渡辺理絵（絵図・地図部会））
3 月 19 日		新聞記事掲載「市史講座　4 月 13 日プラバホールで開講」	山陰中央新報
3 月 20 日		『松江市ふるさと文庫』22 発行	「出雲に来た渤海人－東アジア世界のなかの古代山陰と日本海域－」大日方克己
3 月 23 日		松江城調査報告会	
3 月 24 ～ 26 日	松江城	堀尾家石塔調査	高野山調査　西尾部会長、岡崎委員
3 月 25 日		**『松江市史』通史編 3「近世Ⅰ」発刊**	**（第 14 回配本）**
3 月 25 日		『松江市ふるさと文庫』23 発刊	「石が語る松江城の物語」澤田順弘
3 月 28 日	全般	**松江市文書館（仮称）整備構想答申**	松江市文書館（仮称）検討委員会井上寛司委員長より松浦正敬松江市長へ答申（同日付で松江市は行政計画として策定）
3 月 29 日		新聞記事掲載「島根県立図書館「古文書を読む会」　郷土史の魅力伝えて半世紀」	山陰中央新報
3 月 30 ～ 31 日	近世	近世史部会	〔議題〕 ①執筆に関する基本事項 ②近世Ⅱ ③（付録）年表　掲載項目の選定 ④その他　次回部会
4 月 1 日		「市史編纂コラム㊿」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕第 79 回：『松江市史』から読み解く「大橋川」と「大橋」の名称由来 (1) 大橋川の名称由来編 (2) 推論：「大橋」の名称起源と斐伊川東流について
4 月 3 日		新聞記事掲載「松江市の文書館整備構想　「利便性よい場所に」検討委答申」	山陰中央新報
4 月 13 日	自然環境	松江市史講座	〔タイトル〕縄文～弥生時代の景観と遺跡（会下和宏（自然環境））
4 月 25 日		新聞記事掲載「天皇陛下とハゼ談義　研究通し親交　元県職員・佐藤さん」	山陰中央新報

令和元年

5 月 10 日	近世	近世史小部会・史料調査	〔議題〕通史編「近世Ⅱ」原稿調整、今後の予定について 史料調査：沢山委員
5 月 11 日	近世	松江市史講座	〔タイトル〕近世松江の女・男・子ども（沢山美果子（近世史部会））
5 月 18 日	全般	令和元年度松江市史編集委員会	〔議題〕 ①編纂体制、出版計画 ②平成 30 年度事業報告、令和元年度事業計画 ③各部会の報告（事業報告、事業計画、調査・執筆・編集状況） ④松江市史編纂基本計画の実施状況と今後の課題 ⑤その他（松江市史研究執筆応募状況ほか）
5 月 18 日	自然環境	自然環境小部会	〔議題〕史料編「自然環境」第 4 校について
5 月 18 日・19 日	近世	近世史部会	〔議題〕 ①執筆に関する基本事項 ②近世Ⅱ ③（付録）年表について ④その他　次回予定
5 月 18 日・19 日	近現代	近現代史部会	〔議題〕 ①史料編「近現代Ⅱ」について ②通史編「近現代」について ③その他
5 月 20 日		菅田庵襖史料調査	
5 月 30 日		「市史編纂コラム第 80 回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕富田城下の寺院について

期日	担当部会	内容	備考
6月2日		新聞記事掲載「出雲地方の喫茶習慣の歴史学ぶ　安来で講座」	山陰中央新報
6月5日		新聞記事掲載「松江城南側の石垣下　防空壕跡　全長35メートル」	山陰中央新報
6月5日	近世	近世史小部会	〔議題〕通史編「近世Ⅱ」原稿調整、今後の予定について
6月6日・7日	近現代	史料調査	雑賀公民館史料調査
6月15日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕昭和恐慌と畜産業の展開 -「米と繭」から「有畜農業」へ -（板垣貴志（近現代史））
6月25日		「市史編纂コラム第81回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕「『松江城を掘る』の刊行について」
6月		『松江市歴史史料集』4「御産献立控帳」発刊	
7月1日		**『松江市史』史料編10「近現代Ⅱ」発刊**	**（第15回配本）**
7月1日		**『松江市史』史料編1「自然環境」発刊**	**（第16回配本）**
7月20日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕出雲に来た渤海人－東アジア世界のなかの古代山陰と日本海域－（大日方克己（原始古代史部会））
7月27日・28日	近世	近世史部会	〔議題〕①執筆に関する基本事項 ②今後の予定 ③近世Ⅱ原稿の調整　（資料2） ④執筆原稿により協議 ⑤初校校正について ⑥その他　次回部会予定
7月29日		第3回松平治郷（不昧公）研究会	
7月		『松江市歴史史料集』2-4「大保恵日記Ⅳ」発刊	
8月17日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕松江藩の支城城下町―広瀬・三刀屋・赤名（松尾信裕（松江城部会））
8月20日		「市史編纂コラム第82回」掲載（ホームページ）	〔タイトル〕「藩主治郷（不昧公）と女性たち、その明暗 -『御産献立控帳』に見る」
8月23日	自然環境	自然環境部会	〔議題〕①史料編「自然環境」発刊について ②今後の活動・研究テーマ等
8月26日～30日		国立公文書館研修（アーカイブズ研修Ⅰ）	村角専門調査員受講
9月14日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕続・源頼朝と出雲国（原慶三（中世史部会））
9月26～27日	近現代	史料調査	雑賀公民館史料調査
10月19日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕松江城跡の築城経緯と縄張り（山上雅弘（松江城部会））
10月20日	松江城	松江城部会	
11月3日・4日	近現代	近現代史部会	〔議題〕①原稿の調整 ②口絵について ③ルビ、参考文献、索引について
11月16日	自然環境	松江市史講座	〔タイトル〕島根半島の大地は日本海の底から引き上げられた : 地層が記録する別の「くにびき」（酒井哲弥（自然環境部会））
11月24日	近世	近世史部会	〔議題〕通史編「近世Ⅱ」原稿の調整
12月20日		和泉市教育委員会視察（文書館整備構想について）	
12月21日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕松江藩の縁組と相続戦略（石田俊（近世史部会））

令和2年(2020)

1月15日～17日		国立公文書館研修（アーカイブズ研修Ⅱ）	小山副主任受講
1月18日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕女たちの行商－恵曇の魚商人と大根島の花売りさん－（山本志乃（民俗部会））
2月14日	全般	松江市史編纂委員会	
2月15日	全般	松江市史講座	〔タイトル〕松江の水道敷設と水環境（大矢幸雄（絵図・地図部会））
2月21日		第4回松平治郷（不昧公）研究会	
3月3日	全般	松江市史部会長会	①松江市史完結シンポジウムについて ②編纂事業後の取り組みと協力依頼
3月14日	自然環境・考古・中世・近世・絵図地図	斐伊川東流問題検討会	松江市歴史叢書14に特集
3月20日		『松江市ふるさと文庫』24発刊	「西洋医学受容から衛生思想普及までの道のり―南蛮流医学からオランダ医学、そしてドイツ医学へ―」田野俊平、梶谷光弘
3月20日		『松江市ふるさと文庫』25発刊	「松江藩主松平家墓所―松江・月照寺に守り伝えられる近世大名墓―」大名墓研究会編著
3月21日	全般	松江市史講座（完結シンポジウム）	〔タイトル〕松江市史の完成と松江の未来へ（各部会長）（受講中止により録画のみ）
3月31日		『松江市歴史叢書』13（松江市史研究11号）発刊	
3月31日		**『松江市史』通史編4「近世Ⅱ」発刊**	**（第17回配本）**
3月31日		**『松江市史』通史編5「近現代」発刊**	**（第18回配本）**
6月3日		**松江市長へ『松江市史』完結の報告**	藤岡編纂委員長、井上編集委員長、小林編集副委員長

（敬称略）

松江市史編纂関係者

松江市史編纂検討委員会

藤岡大拙(委員長)、井上寛司(副委員長)、友森　勉(副委員長)、安部　登、乾　隆明、岡部康幸、木幡修介、髙安克巳、勝部　昭、小林准士、竹永三男、川原良一、杉谷充久、原　厚、森　秀雄

松江市史編纂委員会

藤岡大拙(委員長)、井上寛司(副委員長)、安部己図枝、安部　登、川島芙美子、蔦谷典子、仁田玲江、引野道生、田坂郁夫、小林准士、竹永三男、大矢幸雄、西尾克己、喜多村　正〔木幡修介〕〔岡部康幸〕〔高安克己〕〔勝部　昭〕

松江市史編集委員会

井上寛司(委員長)、小林准士(副委員長)、田坂郁夫、高安克己、勝部　昭、大日方克己、佐藤　信、西尾克己、川岡　勉、西田友広、長谷川博史、岸本　覚、鳥谷智文、東谷　智、三宅正浩、渡辺浩一、竹永三男、伊藤康宏、居石正和、鬼嶋　淳、能川泰治、大矢幸雄、渡辺理絵、喜多村　正、喜多村理子

専門部会（専門委員）

【自然環境】田坂郁夫(部会長)《地形・地質Ｇ》澤田順弘、高安克己、小暮哲也《気候・気象Ｇ》田坂郁夫《生物Ｇ》佐藤仁志〔枚村喜則〕〔浜田周作〕〔越川敏樹〕

【原始古代史】勝部　昭(部会長)《考古専門部会》西尾克己、丹羽野　裕、平石　充、松本岩雄、山田康弘《古代専門部会》大日方克己、佐藤　信、野々村安浩、平石　充、森田喜久男

【中世史】井上寛司(部会長)、川岡　勉、西田友広、長谷川博史、原　慶三

【近世史】小林准士(部会長)、岸本　覚、鳥谷智文、東谷　智、三宅正浩、渡辺浩一、石田　俊、伊藤昭弘、宇野田尚哉、佐々木倫朗、沢山美果子、多久田友秀、西島太郎

【近現代史】竹永三男(部会長)、伊藤康宏、居石正和、鬼嶋　淳、能川泰治

【絵図・地図】大矢幸雄(部会長)、安髙尚毅、阿部志朗、乾　隆明、上杉和央、内田　融、川村博忠、高安克己、渡辺理絵

【松江城】西尾克己《城郭史Ｇ》中井　均、岡崎雄二郎、先山　徹、乗岡　実、堀田浩之、松尾信裕、山上雅弘《文献･歴史地理･建築Ｇ》和田嘉宥、足立正智、堀田浩之、渡辺理絵《土木史Ｇ》河原荘一郎、渡邉正巳《写真Ｇ》伊藤孝一〔山根正明〕

【民俗】喜多村　正(部会長)、浅沼政誌、足立正智、喜多村理子、酒井董美、品川知彦、永井　猛、中上明、中村幹雄、藤原宏夫、山﨑節枝、山﨑　亮〔成相脩〕

執筆者（通史編・史料編・別編）

【自然環境】《地形･地質Ｇ》入月俊明、会下和宏、河原荘一郎、酒井哲弥、三瓶良和、新宮敦弘、菅井降吉、管原庄吾、清家　泰、瀬戸浩二、田中秀典、徳岡隆夫、乗岡　実、林　広樹、古川寛子、横田修一郎、渡邉正巳《気候･気象Ｇ》内田文恵、谷永　守、山根克彦《生物Ｇ》井上雅仁、岩田貴之、大浜祥治、尾原和夫、金森弘樹、桑原弘道、桑原正樹、田中秀典、戸田顕史、冨川康之、野津貴章、林　成多、筆谷憲一、前田泰生、松田隆嗣、宮崎惠子、森　茂晃、柳浦正夫、山口勝秀、淀江賢一郎　【原始古代史】(通史編)池淵俊一、松尾充晶(史料編)赤澤秀則、飯塚康行、池淵俊一、石井　悠、稲田　信、内川隆志、江川幸子、会下和宏、大谷晃二、岡崎雄二郎、落合昭久、角田徳幸、片岡詩子、加藤里美、加藤元康、勝部　衛、川上昭一、木下　誠、昌子寛光、宍道正年、新原佑典、瀬古諒子、高屋茂男、徳永　隆、中尾秀信、錦織慶樹、花谷　浩、林　健亮、廣江耕史、廣濱貴子、深澤太郎、深田　浩、松尾充晶、松山智弘、間野大丞、三宅博士、柳浦俊一　【中世史】永井　猛、中野賢治、西尾克己、的野克之、山根正明　【近世史】伊藤康宏、常松隆嗣、仲野義文、中安恵一、原　豊二、藤原雄高、森本幾子、要木純一　【近現代史】板垣貴志、井口隆史、内田和義、内田文恵、内田　融、大矢幸雄、勝部　昭、喜多村理子、工藤泰子、関　耕平、谷口憲治、徳岡隆夫、中野茂夫、中間由紀子、廣嶋清志、福井将介、松下孝昭、村角紀子、保永展利、矢野健太郎、山本志乃、吉儀和平　【絵図･地図】面谷明俊　【松江城】安髙尚毅、飯塚康行、伊藤孝一、稲田　信、卜部吉博、大矢幸雄、川上昭一、古藤博昭、小山泰生、狭川真一、佐々木倫朗、園山　薫、徳永　隆、徳永桃代、中野茂夫、西島太郎、秦　愛子、花谷　浩

協力者

青砥英子、青砥久美子、青砥武一、青戸良臣、青山　昭、青山明美、青山菊代、青山健二、青山幸子、青山純二、青山昭吉、青山親次、青山八郎、青山フミエ、秋上裕美、秋永智宥、朝山芳圀、芦田耕一、小豆沢幸男、足立チカ、足立知治子、足立ひとみ、足立峯子、安達稲子、安達和久、安達　茂、安達真也、安達春舒、安達英之、安達文子、安達弥寿子、阿部志朗、安部アキ子、安部静子、安部信一郎、安部　伝、安部　通、安部　登、安部博之、安部昌次、安部真由美、安部百子、安部吉弘、安部義郎、天野賀子、荒川　巌、荒川英里、荒川清美、荒木文之助、有澤一男、有田定義、飯田奈美子、飯塚幸夫、飯分　徹、井川喜美代、井川　仁、井川怜子、池内重子、池内英喜、池内ゆみ子、池田清蔵、池田咲楽、池渕高史、石井　悠、石川定吉、石川　広、石倉　勇、石倉英治、石倉吉郎、石倉敬子、石倉幸二、石倉幸代、石倉隆夫、石倉敬真、石倉知樹、石倉久夫、石倉　宏、石倉雅幸、石倉睦雄、石倉要一、石倉芳江、石橋澄子、石橋　勉、石橋洋男、石橋宏志、石橋真喜子、石原幸雄、石村英一、井尻常吉、泉　米子、磯野多津子、板倉吉彦・好子、市後崎長昭、市橋知美、伊藤孝一、伊藤重行、伊藤　勉、伊藤利治、伊藤友子、伊藤　昇、稲垣智恵子、乾　隆明、乾　宏美、井上克己、井上けい子、井上春雄、イブ･ペイレ（フランス国）、今井敦子、今井隆良、今岡定雄、今岡利江、今岡弘延、今瀬敬子、入月俊明、岩坂静一、岩田渥男、岩田貴之、岩津啓太、岩根栄子、上野尊康、上村博子、上山富三、上山寿子、宇佐美倫太郎、内田一平、内田恵美子、内田公樹、内田てるこ、内田文雄、内田道子、内田　融、内田優子、内田祐介、内村市夫、内村多恵子、内村令子、内野恵佑、宇野　至、宇野仲子、宇野浜子、宇野律子、梅木一郎、梅木京子、梅木為子、梅木伝三郎、梅木みちはる、梅木芳子、永久利男、会下和弘、江戸恵子、戎谷迪子、大北勝圓、大北哲哉、太田美春、大高広和、大谷令子、大津　瞳、大西幸吉、大西ユリ子、大橋康二、大浜祥治、大原俊二、大矢幸雄、大山定朝、岡崎雄二郎、岡田　泉、緒方梨乃、岡本久美子、岡本晋一、小川英二、小川シナ、小川隆敏、小川敏子、奥谷松雄、奥原篤子、奥原啓三、奥村　健、奥村久雄、奥山英徳、尾古沙也加、小笹　寛、鷲海智佳、小田　恵、乙部正人、尾野晋也、小野篤彦、小野泰道、小野理恵、尾原和夫、面谷明俊、小村　勉、小室房子、居石由樹子、恩田幸太、音田博路、香川博人、柏木利徳、柏木　豊、梶畠聡太、加島行雄、加田友太郎、片岡詩子、勝部功人、勝部秀昭、勝部恭雄、加藤幸夫、加藤　保、門田真美子、門脇明子、門脇亜矢子、門脇　勇、門脇今次、門脇和也、門脇喜恵子、門脇熊次郎、門脇貞子、門脇末子、門脇千蔵、門脇ソノ、門脇竜也、門脇稔亨、門脇まゆみ、門脇幹夫、門脇義明、門脇義一、門脇良子、金澤雄記、金津克一、金津竹夫、金津　緑、金森加代子、金森弘樹、金坂武一郎、金子義明、加納善子、神谷昭孝、亀井伸雄、亀城幸平、川上文男、川口成人、川崎康弘、川島　巌、川島賢治、川谷寿恵、川谷直久、川谷芳弘、川那部浩哉、川村博忠、川本君代、川本弘幸、川本文夫、神田忠興、神田容士夫、岸　宏、岸本　功、岸本富江、岸本　肇、北浦康孝、北垣頼光、北村憲二、北村安裕、北山　拓、吉城聖顕、木村更生、木村晴吉、木村玉枝、木村範子、客野　肇、工藤瑞剣、国谷武夫、久保田浩司、倉敷愛美、来間芳章、黒澤保夫、桑垣弘一、桑垣兵次、桑原　崇、桑原弘道、桑原正樹、桑原益則、劔持康弘、小泉家、郷右近勝夫、河野重範、河野保博、小暮哲也、小坂友枝、小須賀君江、小杉紗友美、小谷圭一郎、小谷美智子、古藤恭子、後藤裕樹、小西賢治、小林恵津子、小林恵美子、小林可奈、小林敏雄、古林敏彦、小松香帆子、小松恭子、小松久壽夫、小松　聡、小松泰夫、小山　忠、権田喜作、木幡　均、斎藤　一、斎藤文紀、佐伯智子、佐伯久子、佐伯満三、酒井重礼、酒井哲弥、酒井淑子、酒井禮男、坂本研次、坂本茂吉、作野貞利、作野佐美子、作野正嗣、作野ヨリ、鷦鷯修一、佐藤一孝、佐藤年秀、佐藤仁志、佐藤博志、佐藤　信、佐藤雄一、澤田順弘、三瓶良和、渋谷　修、渋谷やす子、島　重稔、島村美紗子、清水英子、清水利美、清水より子、昌子幸由、上祐佐智子、章　立、白石　純、白鹿力生、新宮敦弘、周防豊子、杉谷直哉、杉村伸二、杉山ゆかり、鈴木弘人、鈴木　緑、周藤幸樹、周藤　実、陶山大志、関　耕平、関　龍太郎、瀬戸浩二、千家尊祐、仙田隆幸、曽田誠、外谷成雄、園山照子、園山礼子、高井敏文、高井美保子、高木利章、高木義徳、高橋宏忠、高見澄子、高見雅章、高屋茂夫、高安克己、多久和耕吉、竹谷亨祐、竹貫友佳子、竹本耕一、立花光子、伊達　章、伊達絹代、伊達善夫、田中榮一、田中和美、田中豊昭、田中雅美、田中　実、田中盛雄、田中裕司、田中義昭、田部長右衛門、谷口啓子、玉木　勲、田村清三郎、団野　清、土屋幹雄、角田タケ、角田フサコ、坪倉菜水、津森　準、手銭白三郎、寺井康矩、寺本修己、寺本勝彦、寺本邦夫、寺本修一、寺本静治、寺本恒子、寺本敏夫、寺本正幸、寺本　幹、寺本ユキ、道祖尾卓哉、藤間　亨、徳岡隆夫、戸田顕史、冨川康之、友森　勉、豊田　暁、豊増雄大、内藤　守、永井純子、長岡啓子、長岡　航、長岡住右衛門、長岡憲夫、中島　栄、永島亮三、永瀬宣治、永田亀助、永田公夫、永田常江、永田豊則、永田　弘、中谷　平、永野　公、永野公平、永野忠志、永海飛鳥、永見真一、中村秋美、中村海百美、中村善一、中村花江、中村博義、中山英男、成相吉堯、西　和夫、西尾郁子、西尾俊也、西尾ふく子、錦織伸治、錦織慶樹、仁島ゆかり、仁田玲江、仁宮キヨ、仁宮久美子、仁宮　一、丹羽野　裕、沼本　龍、根岸タカ子、野田益子、野津勝正、野津公男、野津貴章、野津立秋、野津敏夫、野津登美子、野津幸夫、野村泰久、蓮岡法暲、長谷

川博史、長谷川正矩、長谷川　優、秦　郁彦、花本哲郎、浜崎博子、林　成多、林　広樹、林　正久、林　道生、林　友里江、原　洋二、原田敬一、原田　勇、原田和子、原田浩爾、春木　務、東谷直子、引野幾子、引野博巳、比津勇夫、樋野温迪、樋野俊晴、樋原甲一、平野大地、平野　稔、広江朝夫、広江澄子、福井修二、福井正樹、福岡千恵子・茂明、福島正一郎、福島祥二、福島　隆、福島晴美、福島律子、福田　潔、福田純二、福庭佐枝子、福原啓介、福間金子、福間健司、福間敬明、福間　基、福村嘉十郎、福山良雄、藤井賢治、藤井廣志、藤井幸男、藤井至治、藤井芳延、藤井良治、藤岡大拙、藤岡太作、藤木　敦、藤田彰浩、藤田利子、藤原晴乃、筆谷憲一、舩越佐一、舟越隆明、舟越憲雄、船越　亮、舩杉力修、船津洋平、古瀬　篤、古川寛子、古谷　毅、星野春雄、細井利美、細田秀雄、北国惠久、堀　昭夫、堀尾秀樹、前田泰生、松浦愛子、松浦薫子、松浦一義、松浦譲治、松浦高子、松浦久義、松尾勝義、松尾重樹、松尾澄美、松尾節子、松尾健生、松尾知樹、松尾　寿、松尾守男、松蔭　実、松崎吉江、松田隆嗣、松林民弘、松原尚志、松本行雄、松本今子、松本岩雄、松本和代、松本賀光、松本静香、松本茂信、松本シナ、松本敏雄、松本雅子、松本美和子、松本幸雄、丸山貴久、丸山裕之、三木康夫、三木佳之、三嶋尚久、三島和子、三島京子、三島隆一、三代暢実、三谷健司、宮川麻紀、宮川康秀、三宅博士、宮崎惠子、宮崎敏良、宮廻　勇、宮廻松代、宮本義夫、三好英樹、宗村知加子、持田朝光、本井新吉、木綿善平、木綿利子、森茂晃、森田ルミ、森山　健、森脇脩夫、森脇キク、森脇隆男、森脇武夫、森脇恒善、森脇房雄、森脇光彦、森脇玲子、矢田益美、安河内　孝、安高尚毅、柳浦正夫、山久瀬恵美子、山久瀬正樹、山口邦子、山口研二、山崎　滋、山崎忠男、山崎治滋、山崎富佐義、山田昭男、山田ミチ子、山田　倭、山田由香里、山根克彦、山根　清、山根重徳、山根博行、山根正明、山根康代、山根由美子、山根百合子、山根美子、山本栄子、山本和夫、山本和豊、山本清澄、山本さとる、山本　繁、山本澄江、山本妙子、山本建夫、山本武志、山本忠三、山本利忠、山本　弘、山本正利、山本美枝子、山本安見子、山本　豊、山本祥隆、山本好延、山本令子、湯浅もと、湯畑秀子、湯原　章、要木純一、横木里沙、横田修一郎、横山静江、吉岡郁郎、吉岡悦市、吉岡悦雄、吉岡右亘、吉岡　瑩、吉岡鶴之助、吉岡正夫、吉岡正至、吉岡睦夫、吉岡弘行、吉田康治、吉野蕃人、吉水　博、米田則雄、余村敏彦、余村利文、余村善訓、淀江賢一郎、若月恭子、渡部映子、渡部栄子、渡部　修、渡部清市、渡部清子、渡部幸一、渡部二郎、渡部タマエ、渡辺民江、渡部太郎、渡部ツネ、渡部英雄、渡部　局、渡部百合子、渡部礼子、渡邉正巳、和田統彦、和田美幸、和田嘉宥

協力機関

NPO 法人松江ツーリズム研究会、安芸高田市教育委員会、朝酌公民館、朝日新聞社、海士町教育委員会、アメリカ議会図書館、阿羅波比神社、安国寺、飯南町教育委員会、飯野八幡宮、生馬公民館、石川武美記念図書館、出雲市、出雲市教育委員会、出雲大社、出雲文化伝承館、一畑寺、出光美術館、絲原記念館、犬山市、今井書店、今岡ガクブチ店、伊万里市、揖夜神社、石清水八幡宮、忌部公民館、内神社、宇宙航空研究開発機構、雲南市教育委員会、恵曇神社、江戸東京博物館、圓成寺、延暦寺、大垣市立図書館、大口町、大阪市立大学学術情報総合センター、大阪大学大学院文学研究科日本史研究室、大阪歴史博物館、大洲市立博物館、大原神社、大庭公民館、大本島根本苑、岡山市立中央図書館、岡山大学附属図書館、隠岐の島町教育委員会、奥出雲町教育委員会、開星高等学校、鰐淵寺、覚融寺、柏書房、片江公民館、片江ふれあい会館、角川文化振興財団、神奈川大学日本常民文化研究所、株式会社江友、株式会社かげやま呉服店松江店、株式会社すいれん舎、株式会社ぺりかん社、上講武公会堂、亀尾神能保存会、亀山市博物館、神魂神社、川津公民館、環境省生物多様性センター、気象業務支援センター、岐阜県図書館、来海石灯ろう協同組合、来待ストーンミュージアム、京都国立博物館、京都大学経済学部図書館、京都大学大学院法学研究科、京都大学文学研究科図書館、漁業協同組合 JF しまね、清滝寺徳源院、清水寺、草津宿街道交流館、宮内庁書陵部、宮内庁正倉院事務所、熊野神社（西川津町）、熊野大社（八雲町）、熊本県立図書館、栗原市教育委員会、黒住教松江大教会所、黒羽芭蕉の館、慶應義塾図書館、華蔵寺、月照寺、小泉八雲記念館、公益財団法人前田育徳会尊経閣文庫、公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団、迎接寺、弘長寺、甲南大学、神戸市立博物館、古浦自治会、國学院大学、国土交通省、国土交通省出雲河川事務所、国土交通省斐伊川・神門川総合開発工事事務所、国土地理院、国文学研究資料館、国立研究開発法人産業技術総合研究所地質調査総合センター、国立研究開発法人水産研究・教育機構、国立公文書館、国立国会図書館、国立歴史民俗博物館、こだいじ保存会、雑賀公民館、西光寺、西大寺、境港市教育委員会、佐賀県立図書館、酒田市立光丘文庫、佐太神社、山陰合同銀行、山陰中央新報社、山陰民俗学会、三佛寺、篠山市教育委員会、島根県、島根県議会事務局、島根県教育委員会、島根県教育庁文化財課、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター、島根県公文書センター、島根県古代文化センター、島根県住宅供給公社、島根県商工労働部企業立地課、島根県地域振興部地域政策課、島根県地質図説明書編集委員会、島根県土木部河川課、島根県土木部用地対策課、島根県農業協同組合くにびき地区本部、島根県立古代出雲歴史博物館、島根県立宍道湖自然館、

島根県立図書館、島根県立美術館、島根県立八雲立つ風土記の丘、しまね産業振興財団、島根大学、島根大学総合博物館、島根大学附属図書館、島根大学法文学部考古学研究室、島根大学法文学部山陰研究センター、島根大学ミュージアム、島根歴史民俗資料館、ジャパンデジタルアーカイブズセンター、春光院、浄音寺、乗光寺、城山稲荷神社、清浄光寺（遊行寺）、成相寺、松徳学院高等学校、勝楽寺、白潟天満宮、信楽寺、神宮文庫、宍道湖漁業協同組合、宍道蒐古館、新編島根県地質図編集委員会、須衛都久神社、清安寺、清光院、善光寺、全国和牛登録協会、専念寺、袖師窯、大霞会、大徳寺孤蓬庵、田部美術館、ダルマ堂、竹矢公民館、中央団地自治会、朝護孫子寺、対馬市教育委員会、津山郷土博物館、手銭記念館、天真寺、天理大学附属天理図書館、東京海洋大学附属図書館、東京大学駒場図書館、東京大学出版会、東京大学史料編纂所、東京大学総合図書館、東京大学法学部附属明治新聞雑誌文庫、東京都公文書館、東京都港区郷土歴史館、東大寺、独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、土佐山内家宝物資料館、鳥取県立図書館、鳥取県立博物館、豊岡市教育委員会、長崎歴史文化博物館、名古屋市蓬左文庫、奈良県立橿原考古学研究所、奈良国立博物館、奈良市観光協会、西菅田町内会、二宮書店、日本写真印刷株式会社、日本相撲協会、日本赤十字社島根県支部、農林水産省農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター、野波地区自治会、浜田市教育委員会、浜松市、原書房、比布智神社、東出雲民具展示庫、日御碕神社、兵庫県立歴史博物館、兵庫部落問題研究所、広島県立文書館、広島市立中央図書館、広島大学大学院文学研究科日本史学研究室、広島大学図書館、福井県立図書館、福井市立郷土歴史博物館、福岡市、福島県文化財センター白河館、福山市立福山城博物館、佛谷寺、舩木窯、普門院、文化財調査コンサルタント株式会社、平凡社、報恩寺、寶厳寺、防災科学技術研究所、芳春院、法政大学大原社会問題研究所、法政大学能学研究所、豊龍寺、本庄公民館、松江北高等学校、松江護国神社、松江市上下水道局、松江市文化協会、松江市民劇場、松江商工会議所、松江城山公園管理事務所、松江市立出雲玉作資料館、松江市立鹿島歴史民俗資料館、松江市立中央図書館、松江市立病院、松江神社、松江先人記念館・雑賀教育資料館、松江地方気象台、松江鼓行列保存会、松江洞光寺、松江西高等学校、松江歴史館、松本市、眞名井神社、真庭市教育委員会、丸亀市立資料館、水無瀬神宮、美保神社、妙岩寺、妙法院、明治大学図書館、明治大学博物館、賣布神社、メリーランド大学図書館 (ゴードン･W･ブランゲ文庫)、八重垣神社、八雲郷土文化保存伝習施設、八雲公民館、安来市教育委員会、山口県史編さん室、山口県文書館、山口県立山口博物館、八女市教育委員会、有限会社日本庭園由志園、郵政博物館、湯町窯、陽明文庫、米子市立山陰歴史館、読売新聞社、立正大学湘南高等学校、立命館大学図書館、龍福寺、臨水亭、霊感寺、歴代知事編纂会、六所神社、和歌山大学紀州経済史文化史研究所、早稲田大学図書館

松江市史編纂事務局

【松江市】市長：松浦正敬、副市長：能海広明、星野芳伸　【松江市教育委員会】教育長：清水伸夫

【歴史まちづくり部】部長：須山敏之　次長：稲田　信

【史料編纂課】課長：稲田　信、副主任：小山祥子、嘱託：白名悦子、臨時職員：岩根栄子、主任編纂官：内田文恵、専門調査員：北村久美子、石塚晶子、村角紀子、高橋真千子　〔赤星　亨〕〔石井　悠〕〔岩橋康子〕〔岩町紀子〕〔上田正己〕〔小田　恵〕〔居石由樹子〕〔影山恭彦〕〔木下　誠〕〔宍道正年〕〔西村裕美〕〔沼本　龍〕〔福井将介〕〔山根正明〕〔吉岡弘行〕〔若杉　愛〕〔和田美幸〕

【松江城調査研究室】室長：稲田　信、専門企画員：藤井　一、松江城部会長：西尾克己、専門調査員：佐藤綾子　〔卜部吉博〕〔山本盛治〕

＊〔　〕は元委員･旧職員。執筆分担は各巻末に掲載。協力者･協力機関(史料提供含む)は各巻を集成。令和2年3月31日現在

表紙　松江四季眺望図（陶山勝寂筆）荒木文之助氏所蔵
デザイン　STUDIO ALDENTE

松江市史編纂事業記録集

松江市史編纂のあゆみ

令和２年(2020) ８月 31 日　発行

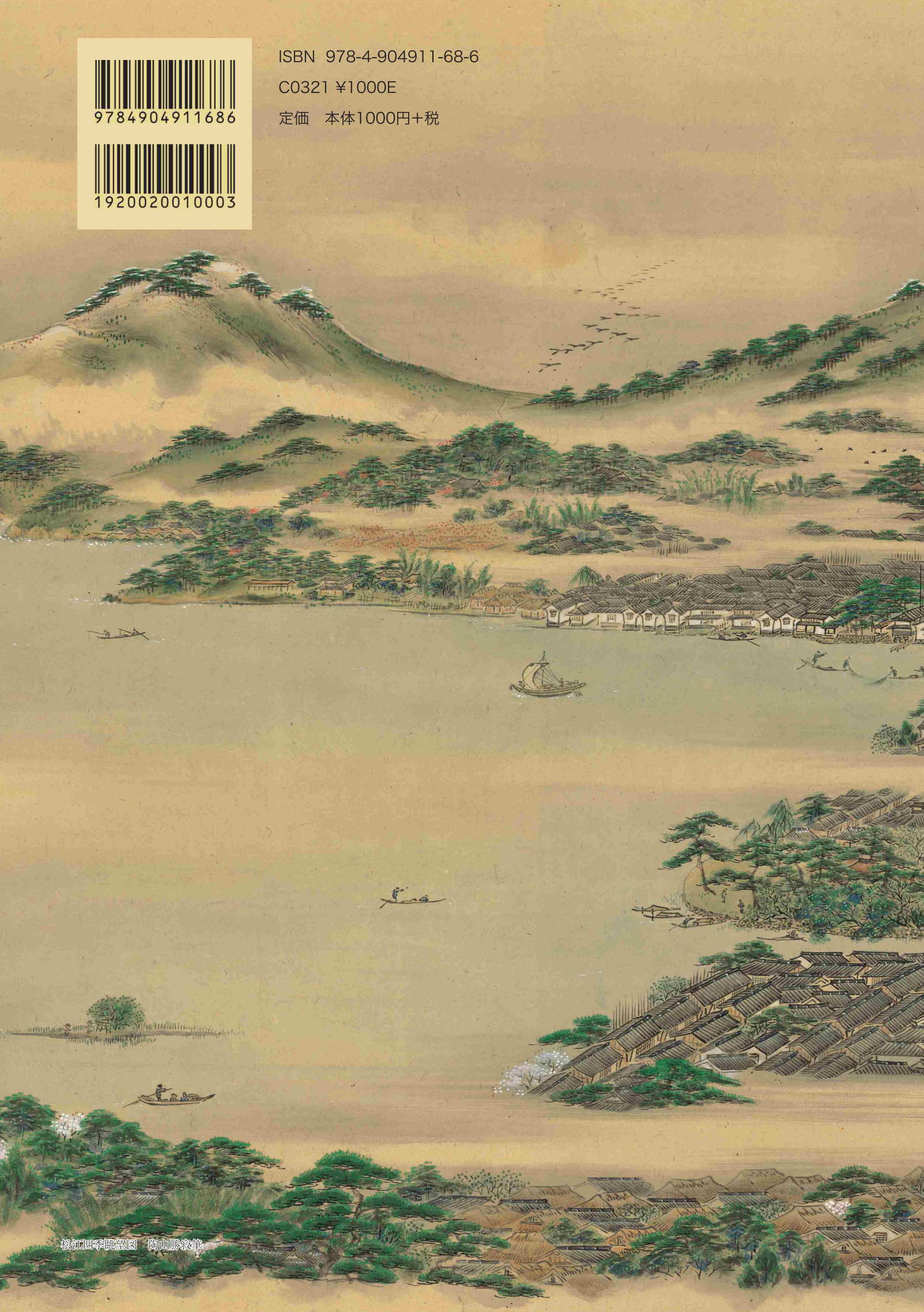
編　集　松江市歴史まちづくり部史料調査課

発　行　松　江　市
島根県松江市末次町 86 番地

印　刷　株式会社　江　友

ISBN 978-4-904911-68-6

9784904911686
1920020010003
ISBN 978-4-904911-68-6
C0321 ¥1000E
定価　本体1000円+税



松江四季眺望図　陶山勝寂筆